鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48)

一般国道２２０号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書(Ⅱ)

中ノ原遺跡(Ⅰ)

(第４分冊)

1989．3

鹿児島県教育委員会

例　　言

1．　この報告書は、一般国道２２０号鹿屋バイパス建設に伴う大浦・郷之原地区の発掘調査の「中ノ原遺跡」の調査報告書である。

2．　この報告書は、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（48）の第４分冊「中ノ原遺跡（１）」である。

3．　中ノ原遺跡は、鹿屋市大浦町（旧字名中ノ原）に所在する。

4．　発掘調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所からの受託事業として鹿児島県教育委員会が実施した。

5．　発掘調査は、昭和60年10月７日～昭和61年３月17日間と昭和61年６月22日～昭和63年３月４日に実施した。調査は、確認調査に引き続き本調査を実施した。整理作業は、昭和62年度と昭和63年度に実施した。

6．　発掘調査において、鹿屋市教育委員会や大浦町振興会の協力・援助を得た。

7．　本書で用いたレベル数値は、すべて海抜高である。

8．　現地調査に関する実測及び写真撮影は、調査担当者（新東晃一・前迫亮一・上田耕）で行った。

　本書の執筆は、主として新東がこれにあたり、一部を前迫亮一（第Ⅱ章第３節１・第４節・第Ⅲ章）と梅北浩一（第Ⅱ章第３節石器Ⅰ～Ⅳ）八木澤一郎（第Ⅱ章第３節石器Ⅴ～Ⅶ）が担当した。

9．　本書の編集は、鹿児島県教育庁文化課で行い、新東が担当した。

本　文　目　次

第Ⅰ章　中ノ原遺跡の調査……1

第1節　発掘調査の概要……1
第2節　遺跡の層位……3

第Ⅱ章　縄文時代の調査……14

第1節　調査の概要……14
第2節　Ⅹ層の調査……19
1　Ⅹ層の概要……19
2　出土遺物……21
第3節　Ⅵ層の調査……22
1　遺構……22
2　出土遺物……24
第4節　Ⅴ層の調査……120
1　遺構……120
2　出土遺物……136

第Ⅲ章　発掘調査のまとめ……146

挿　図　目　次

第１図　中ノ原遺跡の地形図とグリッド配置図…… 2
第２図　中ノ原遺跡の層位と基本的層序との比較…… 4
第３図　中ノ原遺跡断面実測図（１）…… 5～6
第４図　中ノ原遺跡断面実測図（２）…… 7～8
第５図　中ノ原遺跡断面実測図（３）…… 9～10
第６図　中ノ原遺跡断面実測図（４）……11～12
第７図　中ノ原遺跡断面図作成指示図……13
第８図　遺構・遺物出土分布図……15～16
第９図　Ⅹ層遺物出土分布図（１）……18
第10図　Ⅹ層遺物出土分布図（２）……19
第11図　Ⅰ類土器実測図（１）……20
第12図　Ⅰ類土器実測図（２）……21
第13図　集石２号出土遺物……22
第14図　集石１号実測図……23
第15図　集石２号実測図……23
第16図　土器出土状況（１）……25
第17図　土器出土状況（２）……26
第18図　Ⅱ～Ⅴ類土器出土分布図……27～28
第19図　Ⅱ類土器実測図……29
第20図　Ⅲ類土器実測図（１）……30
第21図　Ⅲ類土器実測図（２）……31
第22図　Ⅲ類土器実測図（３）……32
第23図　Ⅲ類土器実測図（４）……33
第24図　Ⅳ類土器実測図（１）……34
第25図　Ⅳ類土器実測図（２）……35
第26図　Ⅳ類土器実測図（３）……36
第27図　Ⅴ類土器実測図……37
第28図　Ⅵ類土器実測図（１）……38
第29図　Ⅵ～Ⅷ類土器出土分布図……39～40
第30図　Ⅵ類土器実測図（２）……41
第31図　Ⅶ類土器実測図……43
第32図　Ⅷ類土器実測図（１）……45
第33図　Ⅷ類土器実測図（２）……46

第34図　Ⅷ類土器実測図（３）……47
第35図　Ⅸ類土器出土分布図……49～50
第36図　Ⅸ類土器実測図（１）……51
第37図　Ⅸ類土器実測図（２）……52
第38図　Ⅸ類土器実測図（３）……53
第39図　Ⅸ類土器実測図（４）……54
第40図　Ⅸ類土器実測図（５）……55
第41図　Ⅸ類土器実測図（６）……56
第42図　Ⅸ類土器実測図（７）……57
第43図　Ⅸ類土器実測図（８）……58
第44図　Ⅹ類土器実測図（１）……60
第45図　Ⅹ類土器実測図（２）……61
第46図　Ⅹ類土器実測図（３）……62
第47図　Ⅹ類土器実測図（４）……63
第48図　Ⅹ類土器実測図（５）……64
第49図　Ⅹ類土器実測図（６）……65
第50図　Ⅺ類土器実測図（１）……66
第51図　Ⅺ類土器実測図（２）……67
第52図　Ⅺ類土器実測図（３）……68
第53図　Ⅺ類土器実測図（４）……69
第54図　Ⅻ類土器実測図（１）……71
第55図　Ⅻ類土器実測図（２）……72
第56図　Ⅻ類土器実測図（３）……73
第57図　Ⅻ類土器実測図（４）……74
第58図　Ⅻ類土器実測図（５）……75
第59図　Ⅻ類土器実測図（６）……77
第60図　Ⅻ類土器実測図（７）……78
第61図　ⅧⅧ類土器実測図（１）……80
第62図　ⅧⅧ類土器実測図（２）……81
第63図　ⅧⅧ類土器実測図（３）……82
第64図　ⅧⅧ類土器実測図（４）……83
第65図　石器Ⅰ（石鏃）実測図……94
第66図　石器Ⅱ（磨製石斧）実測図……96
第67図　石器Ⅱ～Ⅳ（磨製石斧・石匙・スクレィパー）実測図……97
第68図　石器Ⅴ（礫石器）実測図（１）……103

第69図　石器Ⅴ（礫石器）実測図（２）…… 105
第70図　石器Ⅴ（礫石器）実測図（３）…… 107
第71図　石器Ⅴ（礫石器）実測図（４）…… 109
第72図　石器Ⅴ（礫石器）実測図（５）…… 110
第73図　石器Ⅵ（石皿）実測図（１）…… 111
第74図　石器Ⅵ（石皿）実測図（２）…… 112
第75図　石器Ⅵ（石皿）実測図（３）…… 113
第76図　石器Ⅶ（砥石）実測図…… 114
第77図　加工品（土製加工品）実測図…… 118
第78図　Ⅴ層（晩期）遺構・遺物出土分布図…… 121～122
第79図　住居址１号実測図（１）…… 123
第80図　住居址１号実測図（２）…… 124
第81図　住居址１号実測図（３）…… 125
第82図　住居址１号内出土状況（深鉢）…… 126
第83図　住居址１号内出土状況（中鉢・浅鉢）…… 127
第84図　住居址１号内出土状況（浅鉢・浅鉢）…… 128
第85図　住居址１号内出土土器（１）…… 129
第86図　住居址１号内出土土器（２）…… 130
第87図　住居址１号内出土土製品…… 132
第88図　住居址１号内出土石器…… 133
第89図　土壙１号実測図…… 134
第90図　土壙１号出土遺物…… 135
第91図　集石３号実測図…… 135
第92図　縄文晩期深鉢Ⅰ実測図…… 137
第93図　縄文晩期深鉢Ⅱ実測図…… 139
第94図　縄文晩期深鉢底部実測図…… 140
第95図　縄文晩期浅鉢他実測図…… 141
第96図　石器実測図（１）…… 143
第97図　石器実測図（２）…… 144
第98図　石器実測図（３）…… 145

表　目　次

第１表　土器一覧表（１）……84
第２表　土器一覧表（２）……85
第３表　土器一覧表（３）……86
第４表　土器一覧表（４）……87
第５表　土器一覧表（５）……88
第６表　土器一覧表（６）……89
第７表　土器一覧表（７）……90
第８表　土器一覧表（８）……91
第９表　土器一覧表（９）……92
第10表　土器一覧表（10）……93
第11表　石器Ⅰ～Ⅳ一覧表……99
第12表　石器Ⅴ・Ⅵ各類の折損……101
第13表　石器Ⅴと重量の関係……101
第14表　厚／長の平均値……101
第15表　石器Ⅴ・Ⅵ・Ⅶと石材との関係……102
第16表　石器Ⅴ～Ⅶ一覧表（１）……115
第17表　石器Ⅴ～Ⅶ一覧表（２）……116
第18表　石器一覧表……119

図　版　目　次

図版１　１．遺跡遠景　２．中ノ原遺跡の層位……153
図版２　１．ＤＥ18区・19区のⅩ層遺物出土状況（西から）……154
　２．Ⅰ類土器出土状況　３．Ⅰ類土器（10・11）　４．Ⅰ類土器（１・２）
図版３　１．Ⅵ層の検出状況　２．集石１号検出状況……155
図版４　１．集石２号検出状況　２．石斧（356）出土状況……156
　３．土器（273）出土状況　２．底部（316）出土状況
図版５　１．石皿（429）出土状況　２．土器（173等）出土状況……157
　３．土器（222）出土状況　４．土器（192）出土状況
　５．石斧（538）出土状況　６．土器（76等）出土状況
図版６　１．Ⅱ類（15～17）・Ⅲ類（19～27）土器……158
　２．Ⅲ～Ⅳ類土器（18・44～46・63・64）
図版７　１．Ⅲ類土器（28～43）　２．Ⅳ類土器（47～62）……159
図版８　１．Ⅵ類土器（65～73）　２．Ⅵ類土器（74～80）……160

図版９　１．Ⅶ類土器（81～92）　２．Ⅷ類土器（93～101）…… 161
図版10　１．Ⅷ類土器（102～119）　２．Ⅷ類土器（120～134）…… 162
図版11　１．Ⅸ類土器（135～143）　２．Ⅸ類土器（147・150）…… 163
図版12　１．Ⅸ類土器（144～146）　２．Ⅸ類土器（165）…… 164
　　３．Ⅸ類土器（148・149・151～157）
図版13　１．Ⅸ類土器（158～172）　２．Ⅹ類土器（173～185）…… 165
図版14　１．Ⅹ類土器（186～195）　２．Ⅹ類土器（196）　３．Ⅸ類土器（197）…… 166
図版15　１．Ⅹ類土器（198～213）　２．Ⅹ類土器（214～221）…… 167
図版16　１．Ⅹ類土器（222－Ａ）　２．Ⅹ類土器（223～233）…… 168
図版17　１．Ⅹ類土器（234～243）　２．Ⅺ類土器（244～249）…… 169
図版18　１．Ⅺ類土器（250～254）　２．Ⅺ類土器（255）…… 170
図版19　１．Ⅺ類土器（256～263）　２．Ⅺ類土器（264～268）…… 171
図版20　１．Ⅺ類土器（269）２．Ⅺ類土器（270）３．Ⅻ類土器（273）…… 172
　　４．Ⅺ類土器（271・272）Ⅻ類土器（274～277）
図版21　１．Ⅻ類土器（278～282）　２．Ⅻ類土器（283～286）　３．Ⅻ類土器（287）… 173
図版22　１．Ⅻ類土器（288～292・294～297）　２．Ⅻ類土器（293）…… 174
図版23　１．Ⅻ類土器（298～306）　２．Ⅻ類土器（308・307）…… 175
図版24　１．ⅩⅢ類土器（底部１）…… 176
図版25　１．ⅩⅢ類土器（底部２）…… 177
図版26　１．石器Ⅰ（347～355）　２．石器Ⅱ（356～365）…… 178
図版27　１．石器Ⅱ（366～375）　２．石器Ⅲ～Ⅳ（376～378）…… 179
図版28　１．石器Ⅴ（379～389）　２．石器Ⅴ（390～399）…… 180
図版29　１．石器Ⅴ（400～419）…… 181
図版30　１．石器Ⅴ（420～424）　２．石器Ⅵ（425～428）…… 182
図版31　１．石器Ⅵ（429～432）…… 183
図版32　１．石器Ⅵ（435～439）　２．加工品（円盤形土製加工品440～458）…… 184
図版33　１．住居址１号（縄文時代）全景　２．遺物出土状況（南から）…… 185
　　３．住居址埋土状況　４．床面検出状況　５．住居址掘り上げ状況
図版34　１．住居址１号出土遺物　土製品出土状況　土器出土状況…… 186
図版35　１．土壙１号　２．土壙１号出土遺物…… 187
図版36　１．集石３号　２．縄文土器（１）…… 188
図版37　１．縄文土器（２）　２．縄文土器（３）…… 189
図版38　１．縄文土器（４）　２．縄文土器（５）…… 190
図版39　１．縄文土器（６）　２．石器（１）…… 191
図版40　１．石器（２）…… 192

第Ⅰ章　中ノ原遺跡の調査

第１節　発掘調査の概要

１　調査の経緯

中ノ原遺跡は、大浦町のほぼ中央の台地にあたり、この台地上に遺物が広く散布している。昭和59年の分布調査の結果に基づき、この中ノ原台地の西方寄りを第３地点とし、中央付近を第７地点とした。建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議の結果、昭和60年４月に確認調査を実施し、その後昭和60年10月以降本調査を実施することになった。確認調査の結果、第３地点は分布調査地域のほぼ全域に遺跡の存在が確認された。第７地点は、第３地点寄りは遺跡が存在する可能性はあるが、東方に向けては谷状の凹地となり遺跡の存在の可能性は無いことが判明した。第３地点と第７地点は、確認調査の結果や遺物の散布状況や地形からみて一連の遺跡であることが考えられ、後には二地点併せて中ノ原遺跡とすることになった。

２　発掘調査の経過

発掘調査は、昭和60年度と昭和61年度の二年度にわたって実施した。

昭和60年度は、昭和60年10月７日から昭和61年３月17日の間に実施した。昭和60年度の発掘調査は、橋梁部分の工事が早く発注されるため、その部分にあたる台地西側部分を中心に行った。

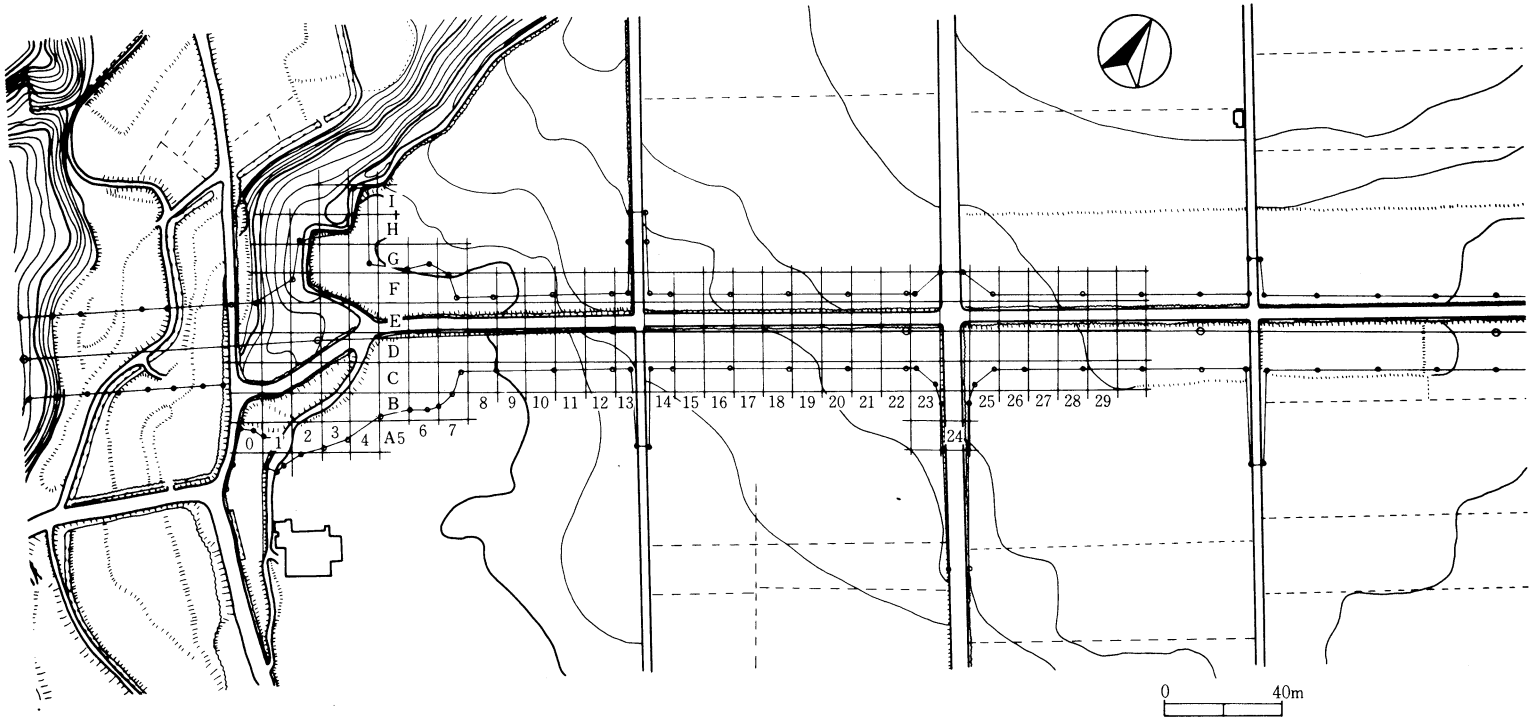
昭和61年度は、他の地点の発掘調査の関係で昭和61年６月22日から７月17日間と昭和61年10月３日から昭和62年３月４日間の二期にわたって実施した。昭和61年度の発掘調査は、昭和60年度の残りと第３地点から第７地点までを実施し、中ノ原遺跡の調査は完了した。

発掘調査は、工事用センター杭No 354 とNo 360 を基準に10ｍ×10ｍのグリッド網を調査対象区域に被せ実施した。そして、グリッドは西端から１～44区と南からＡ～Ｉ区として、各グリッドはＡ１区，―――Ａ44区，Ｄ１区―――Ｄ10区などと呼称することにした。

３　発掘調査の成果

昭和60年度の発掘調査は、台地西端部のＡ～Ｉ１～７区を行った。その結果、近世～中世、弥生時代中期、縄文時代晩期～前期の数時期の遺構・遺物が出土した。

近世～中世の遺構は、古道・溝状遺構・掘立柱建物跡等がある。古道は、Ｆ～Ｇ５区に南北方向に検出され、幅 1.5ｍを測る比較的しっかりした道路跡である。おそらく、この時期のこの地域の幹線道と考えられる。そのほか断片的に溝状遺構が確認されている。農地整備や開畑のため途中が削平を受けているが、道として使用されていたものと考えられる。掘立柱建物跡は、Ｃ５区・Ｄ５区・Ｃ６区にかけて検出された。略東西方向に２間×４間の掘立柱建物跡であるが、東西に延びる桁行は南側は一つ飛びの２間となっている。車庫状の特殊な柱間を持つ



第１図　中ノ原遺跡の地形図とグリッド配置図

掘立柱建物跡である。

弥生時代の遺構は、竪穴住居址が３基検出された。緑地帯保存部分と現道によって削平され全体像の把握は困難であるが、まとまりのある集落の存在が想定される。住居址の時期は、いずれも弥生時代中期から後期初頭の山ノ口式土器系の土器を伴なう。住居址１号は、Ｄ７区に検出され、約５ｍ× 4.5ｍの方形プランを呈し東南隅に張り出しを付した形態のものである。中央部が一段低くなりその四隅に四本柱を持つタイプである。住居址２号は、Ｉ４区の用地内に住居址の４分の１が検出されている。住居址の形態は不明である。住居址３号は、１Ｇ区・２Ｇ区に検出され直径約 4.5ｍの円形を基調とする住居址である。住居址内には四ケ所の花弁状の間仕切りを持ち、中央が一段低くなるタイプの住居址である。ＣＤ１～３区は凹地となり、この部分に弥生土器を大量に含む包含層が形成されている。

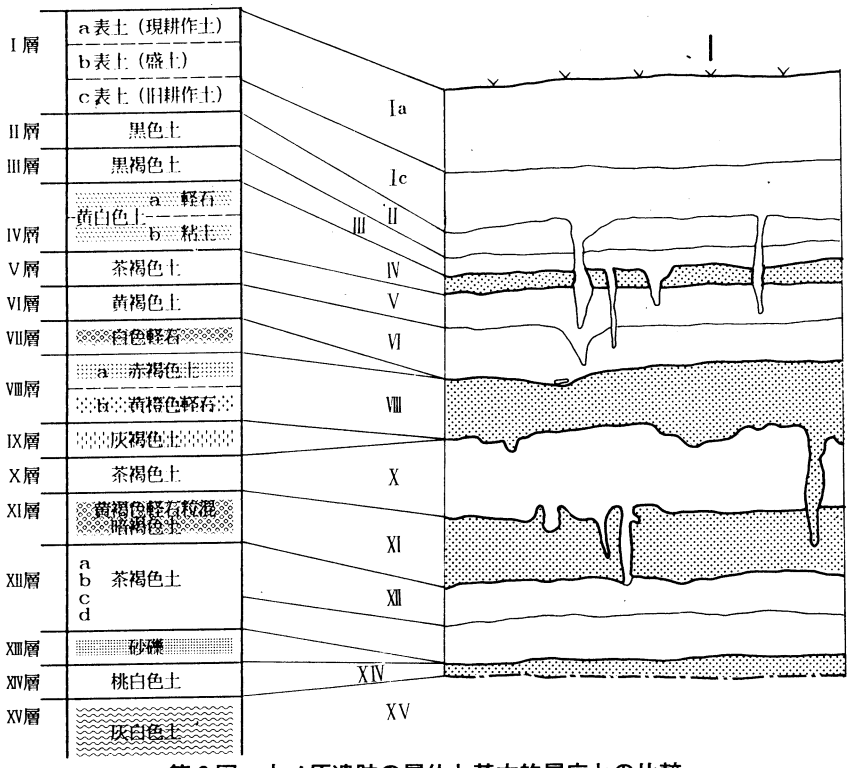
縄文時代の遺構としては、住居址と集石遺構が検出された。住居址は、Ｆ２区に検出され直径 2.7ｍの円形を呈するタイプである。住居址は縄文時代晩期前半期の入佐式土器を伴なう時期である。集石遺構は、３基検出された。１号集石はＡ２区、２号集石はＡ４区、３号集石はＦ２区のいずれも台地の先端近くに検出されている。確実な年代は不明であるが、１号集石・２号集石近辺は前期の条痕文土器の轟式土器系統の土器が出土しており、ほぼ、この時期に属することが想定される。

昭和61年度の発掘調査は、昭和60年度の残部と第７地点にかけての確認調査と本調査を実施した。Ｅ～Ｇ６区付近からＡＢ29区にかけてが本調査であり、ＡＢ30区からＡＢ44区にかけての確認調査である。その結果、中世・弥生時代中期・縄文時代晩期～前期及び早期の遺構・遺物が出土した。中世では、ＥＦ６区付近に２棟の掘立柱建物跡が検出された。建物跡は重複しており、１棟の柱穴には土師器の坏の完形品が２個埋納されていた。そのほか、弥生時代中期の遺物包含層、縄文時代後期を中心として晩期から前期の遺物包含層を調査した。さらに、ＤＥ６区付近とＤＥ18区付近には、Ⅹ層中から縄文時代早期の土器片が検出された。

第２節　中ノ原遺跡の層位

中ノ原遺跡の層位は、発掘調査対象区が約 300ｍにも及ぶため大きな変化がみられる。先に記載（概要編・第Ⅲ章第１節）した大浦・郷之原地区の基本的層序と比較すると、欠落する層位や若干変容した層位もかなりある。そのためここでは、中ノ原遺跡の最も安定したと考えられるＤ12区・Ｄ13区付近の層位から中ノ原遺跡の層位的特徴を説明する。

挿図の第３図から第６図は、中ノ原遺跡の層位断面図である。層位断面図は、基本的には発掘調査対象区が道路建設で横に長く延びるため地形を輪切りしにした形でＢ区列の北側断面を１本通した。それが、第３図①～第４図⑨である。この中には、例えばＤ４区、Ｄ５区のように、現道などによって削平された部分もある。これらの部分は、第５図⑬のように他のグリッドの層位断面図で補うように努めた。



第２図　中ノ原遺跡の層位と基本的層序との比較

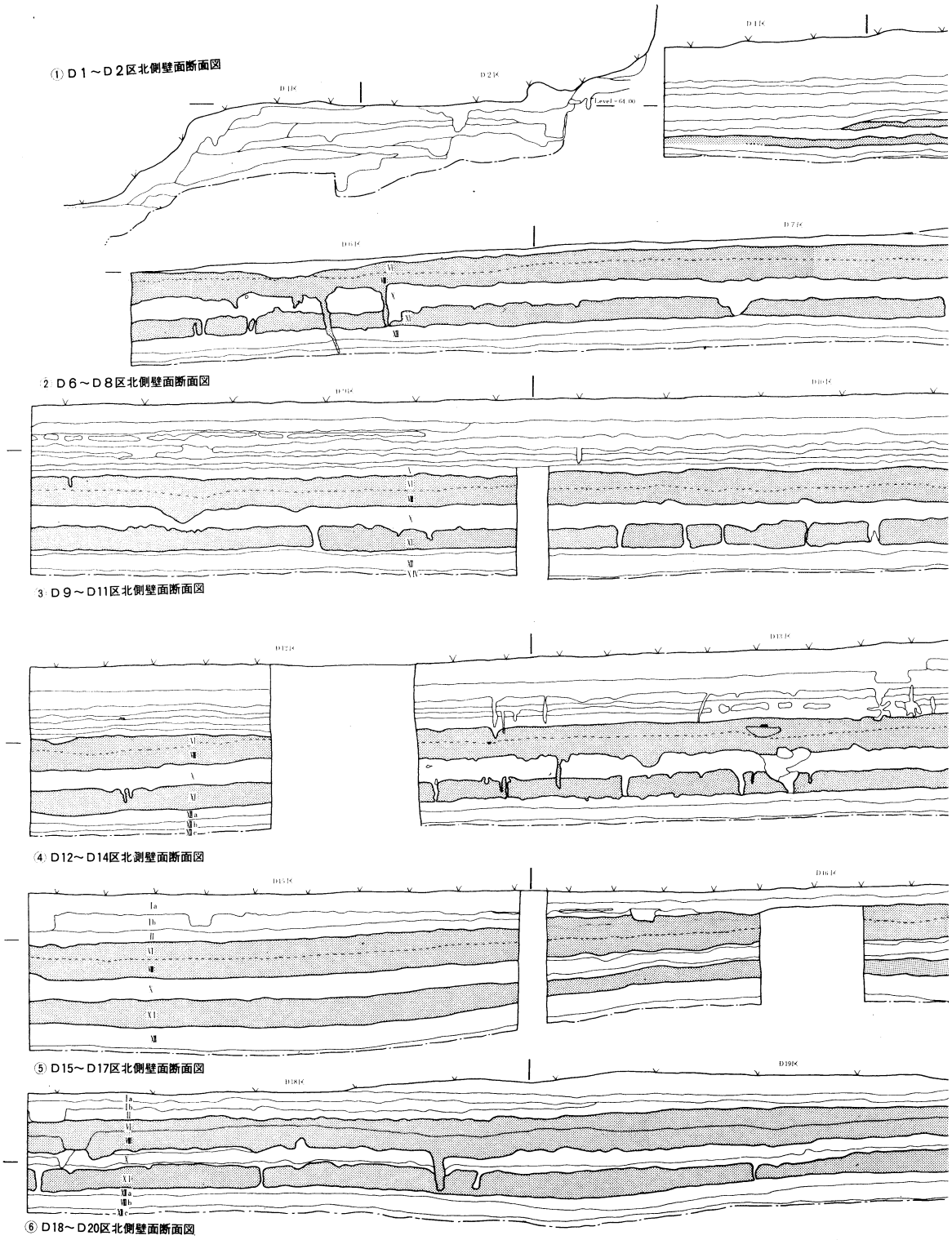
中ノ原遺跡の層位をみると、ほぼ基本的層序に準じている。このなかで欠落すると考えられる層はⅩⅢ層の砂礫層であるが，この砂礫層は入戸火砕流堆積後の自然現象による部分的形成が考えられるものであり、地域的に欠落するのは当然の現象である。

Ⅰ層は、提示したＤ12区・Ｄ13区付近にはＩｂ層はみられなかったが、他の区で確認されている。特に、ＩＣ層には、１㎜～２㎜の乳白色の軽石状の小石を含み耕作土の特徴を示している。

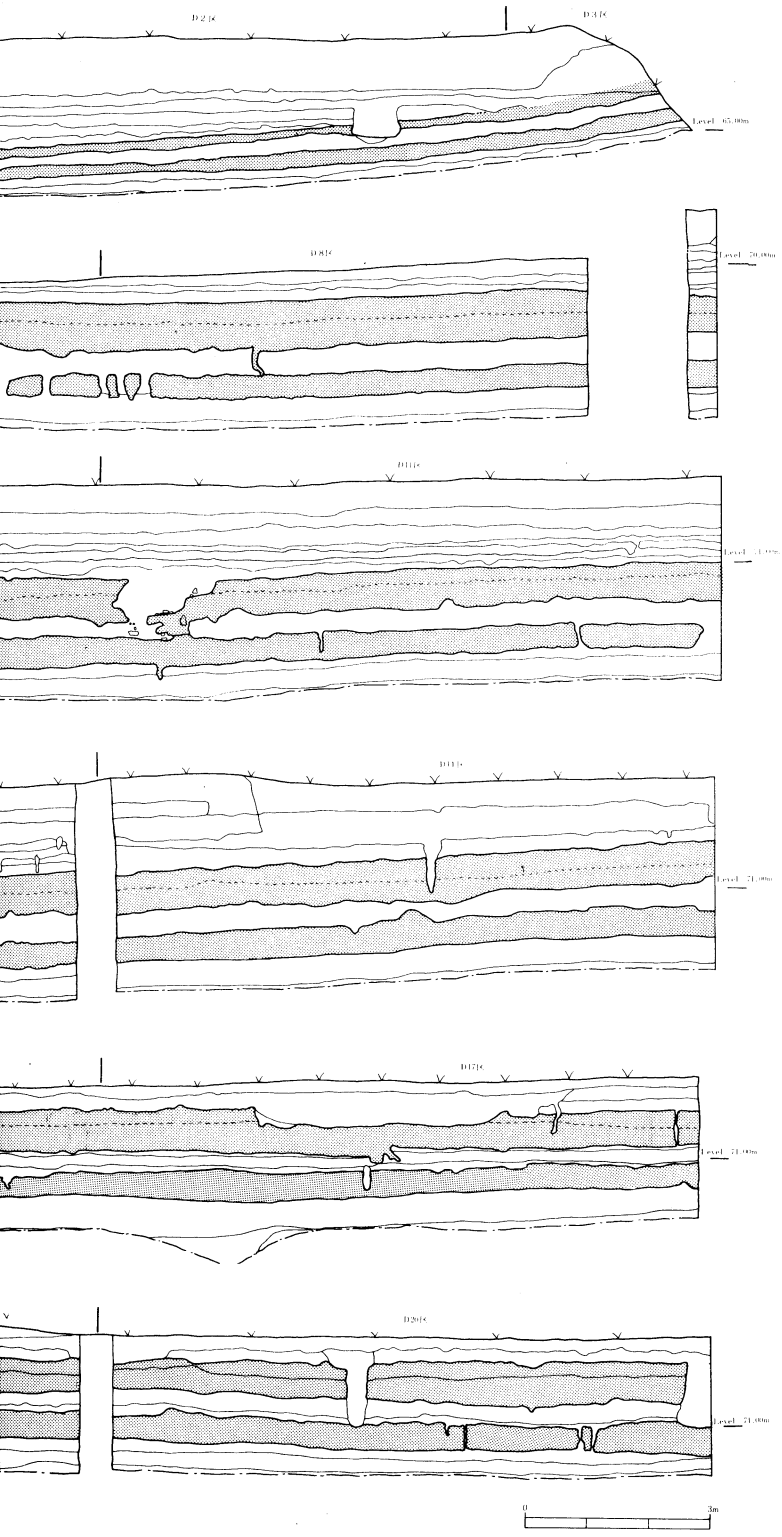
Ⅱ層は、黒色のきれいな土層である。13区以西の傾斜地ではほとんど確認され、そのほかにおいては削平を受けて確認されない。掘立柱建物跡や溝状遺構・古道などがこの時期に検出されている。

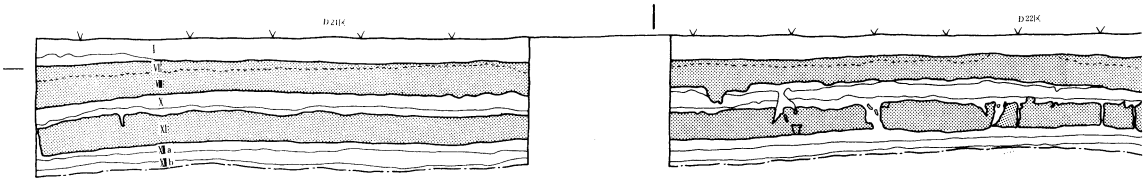
Ⅲ層は、黒褐色土層で弥生時代中期末～後期初頭の包含層である。竪穴住居址３基の遺構をはじめ多くの遺物が出土している。特に、ＣＤ１～３区の谷状の傾斜地には大量の土器を含んだ遺物包含層が確認された。

Ⅳ層は、この付近では暗茶褐色土層を呈する。暗茶褐色土層に黄色の微粒子を含んで火山灰状を呈している。全遺跡の踏査の結果、この層は中原山野遺跡の黄白色土層に対比されるものであることが判明した。しかもこの層は火山灰層ではなく、下層のⅪ層にあたる薩摩降下軽石の二次堆積の可能性が高い。中原山野遺跡では黄白色の独立層を形成するが、縁辺部ではこの

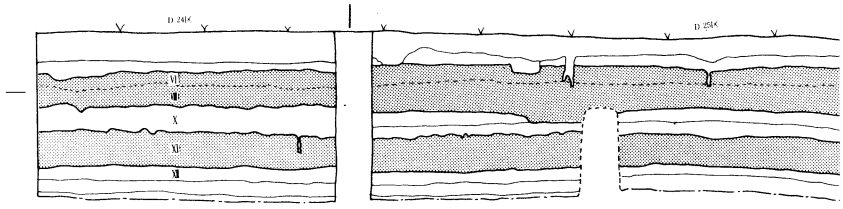


第3図　中ノ原遺跡断面実測図（1）

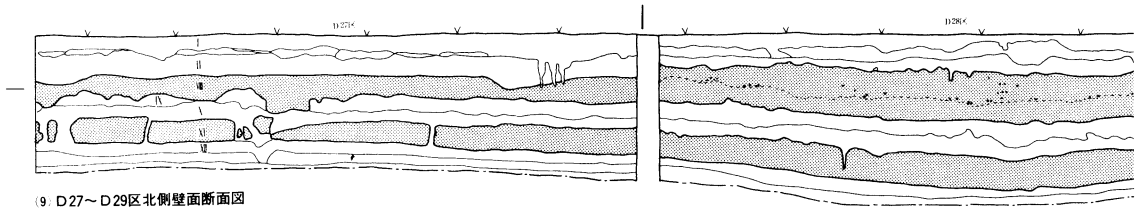

D2K
D3K
Level 65.00m
D8K
Level 70.00m
D11K
D13K
Level 71.00m
D17K
Level 71.00m
D20K
Level 71.00m
0
3m



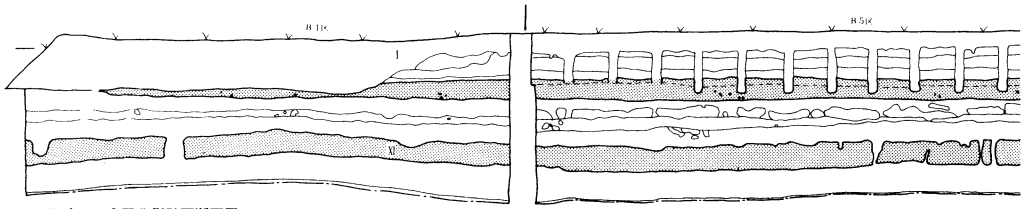
⑦ D21～D23区北側壁面断面図



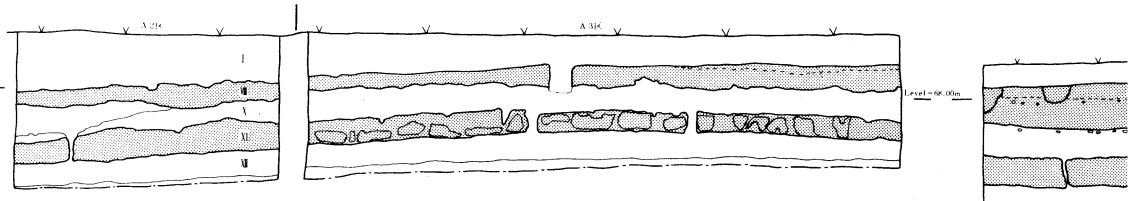
⑧ D24～D26区北側壁面断面図



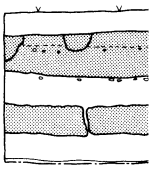
⑨ D27～D29区北側壁面断面図



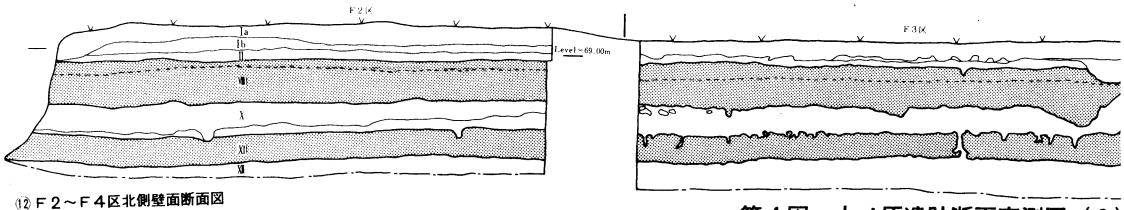
⑩ B4～B6区北側壁面断面図



⑪ A2～A3区北側壁面断面図

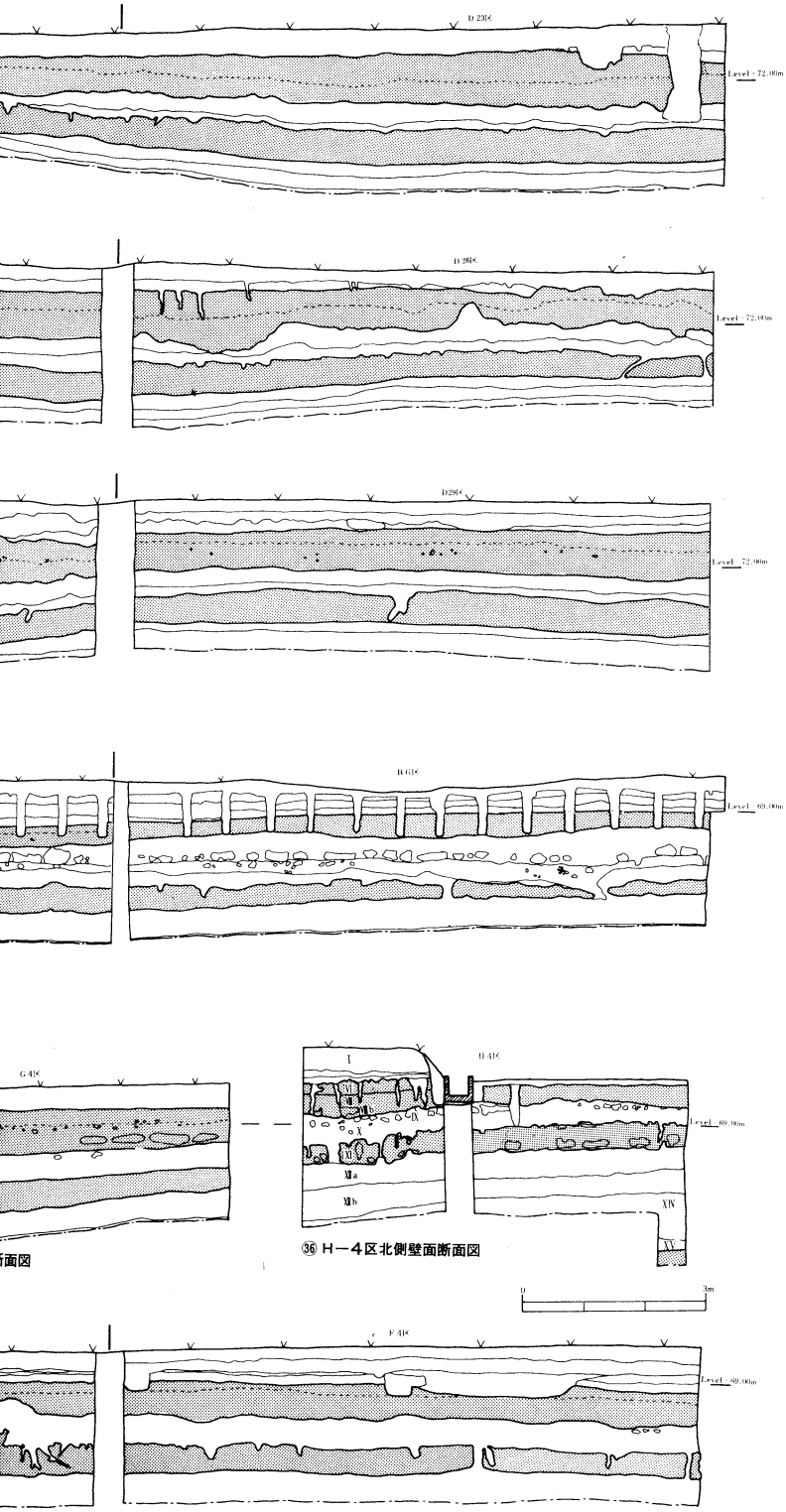


㉟ G－4区北側壁面



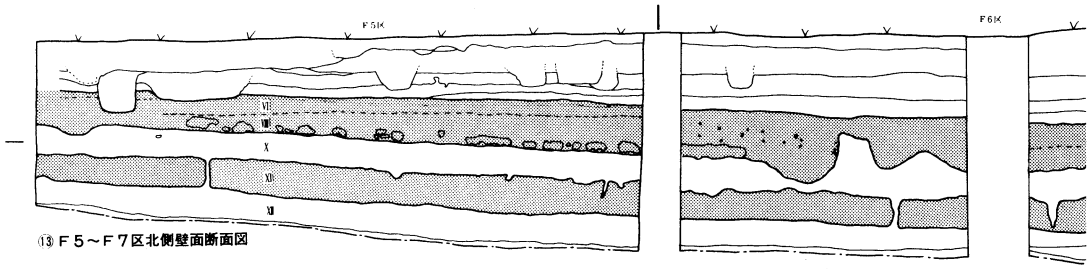
⑫ F2～F4区北側壁面断面図

第4図　中ノ原遺跡断面実測図（2）

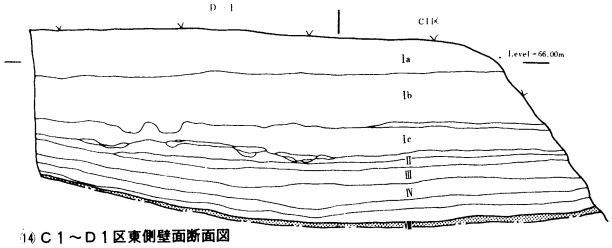


断面図

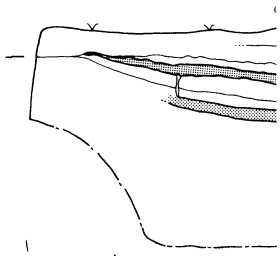
㊱ H－4区北側壁面断面図

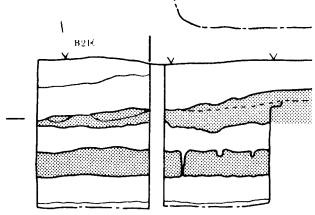


⑬ F５～F７区北側壁面断面図

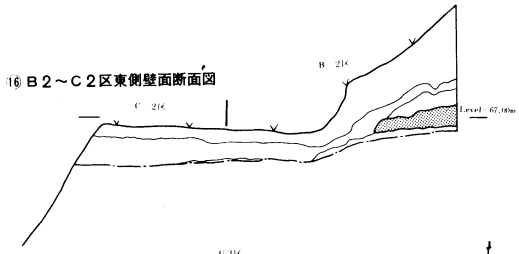


⑭ C１～D１区東側壁面断面図

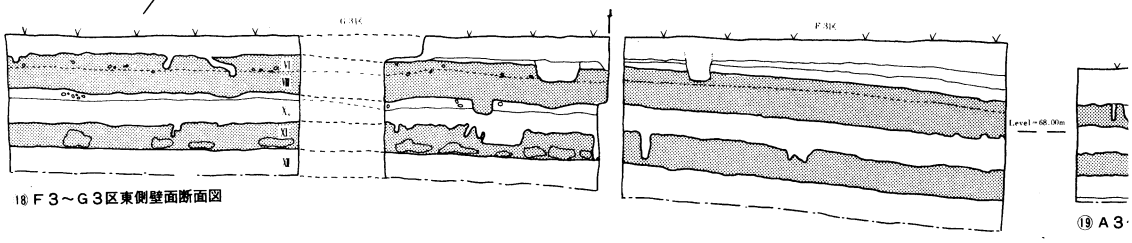




⑰ A２～B２区東側壁面断面図

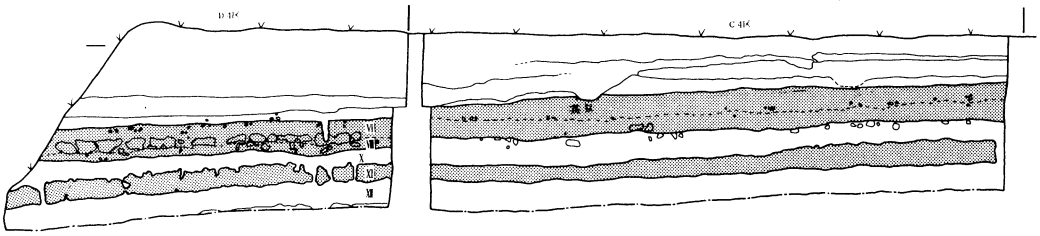


⑯ B２～C２区東側壁面断面図

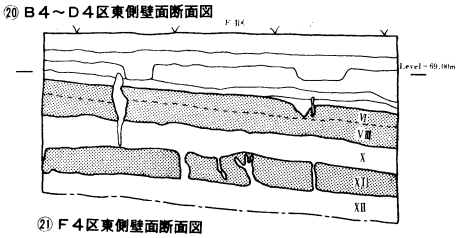


⑱ F３～G３区東側壁面断面図

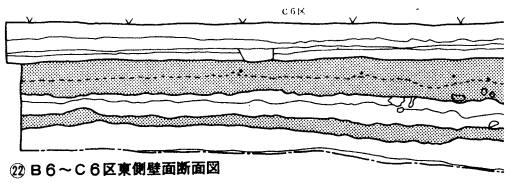
⑲ A３



⑳ B４～D４区東側壁面断面図

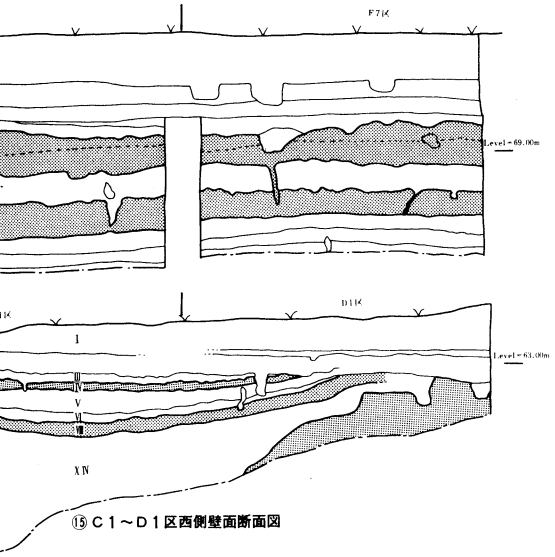


㉑ F４区東側壁面断面図

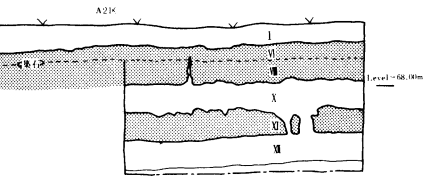


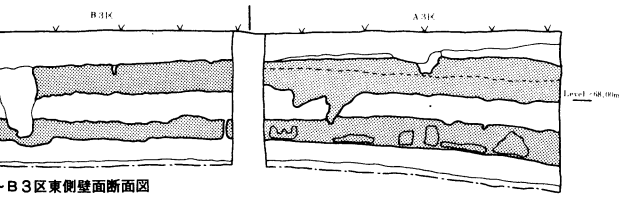
㉒ B６～C６区東側壁面断面図

第５図　中ノ原遺跡断面実測図（３）

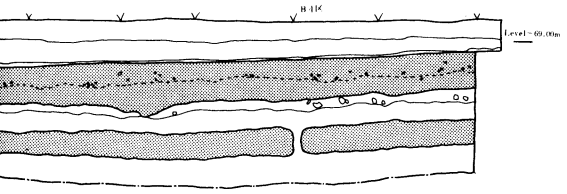


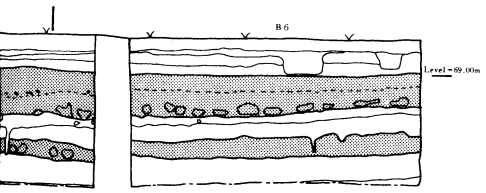
⑮ C１～D１区西側壁面断面図

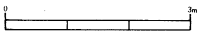


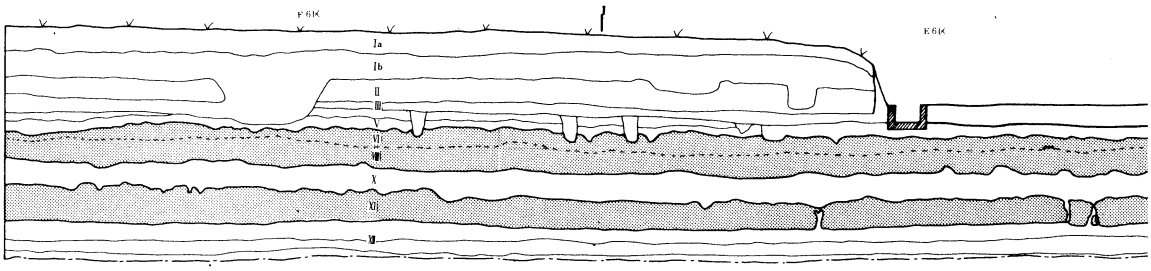


～B３区東側壁面断面図

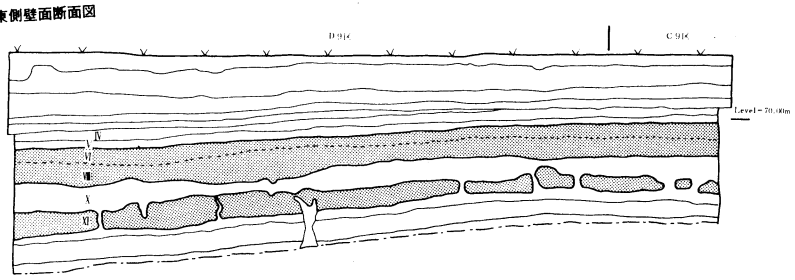




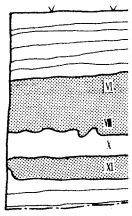




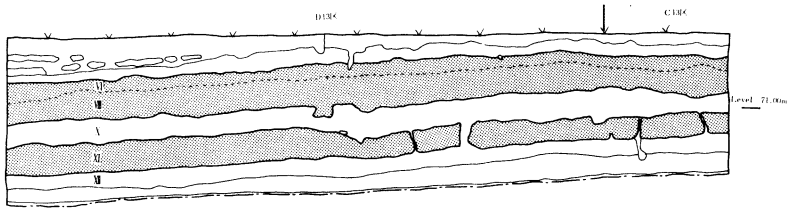
㉓ D6～F6区東側壁面断面図



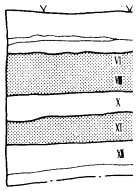
㉔ C9～D9区東側壁面断面図



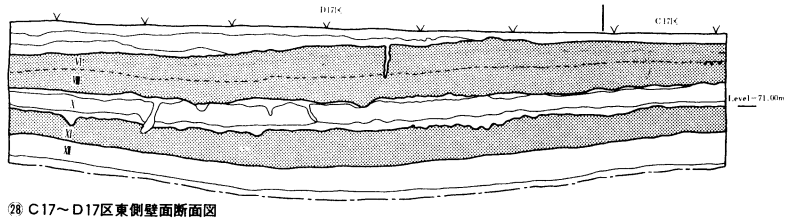
㉕ C11～D11区東



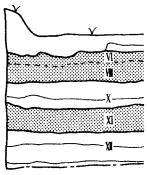
㉖ C13～D13区東側壁面断面図



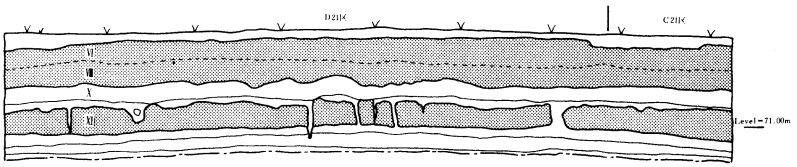
㉗ C15～D15区東



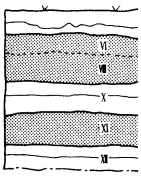
㉘ C17～D17区東側壁面断面図



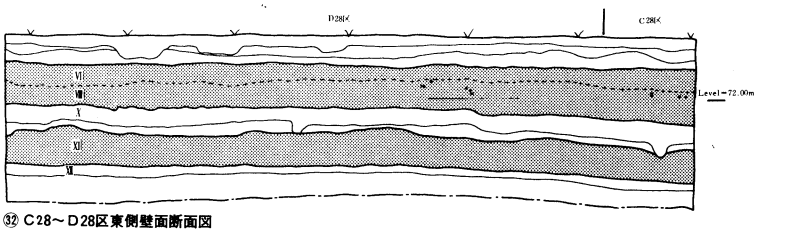
㉙ C19～D19区東側



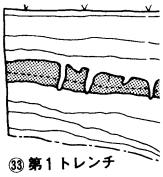
㉚ C21～D21区東側壁面断面図



㉛ C25～D25区東側

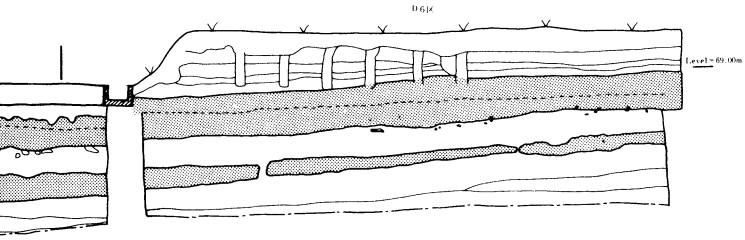


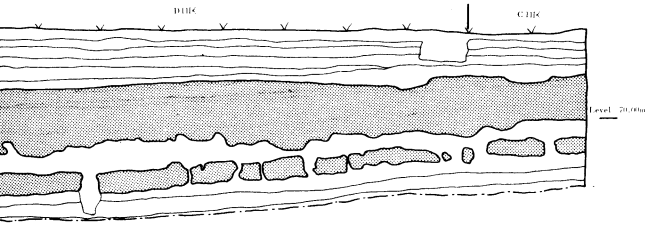
㉜ C28～D28区東側壁面断面図



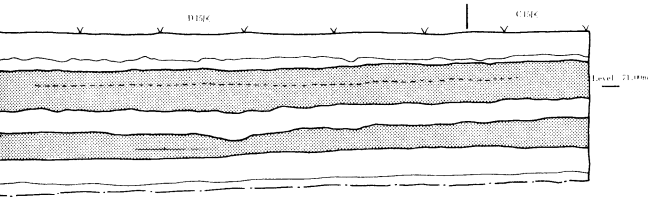
㉝ 第1トレンチ

第6図　中ノ原遺跡断面実測図（4）

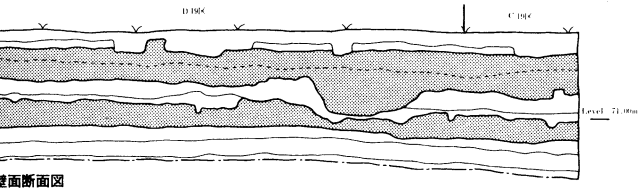




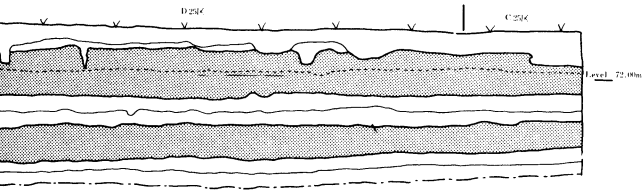
側壁面断面図



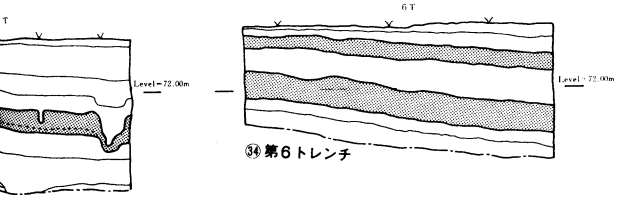
側壁面断面図



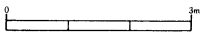
壁面断面図



壁面断面図



㉞ 第6トレンチ



ような形状の堆積層となる。

Ⅴ層は、茶褐色土層で縄文時代晩期の包含層を形成している。中ノ原遺跡ではこの層下に竪穴住居址が検出された。台地の平坦面では、Ⅲ層～Ⅴ層が混層したり、削平されたりしている部分が多い。

Ⅵ層は、黄褐色土層であり、一般的にはアカホヤ火山灰層の二次堆積層である。中ノ原遺跡では、下層にⅦ層にあたる池田降下軽石が浮遊した状態で堆積しており、この軽石層より上面がⅥ層になる。Ⅵ層は、縄文時代前期から後期の包含層を形成している。

Ⅶ層は、この付近では池田降下軽石が浮遊した状態で観察される層は形成されていない。

Ⅷ層は、アカホヤ火山灰に相当する。Ⅷ層はⅧａ層の赤褐色土層が大部分を占めるが、これは幸屋火砕流に比定されるものである。これまで幸屋火砕流下の炭化木から得られた^{14}C測定年代値は約6,400B.P.yで、これがアカホヤ火山灰の降灰年代とされている。

Ⅸ層は、中ノ原遺跡においては傾斜地などで部分的に確認され、全体的にはみられない。権現山火山灰と呼ばれるものに相当する。

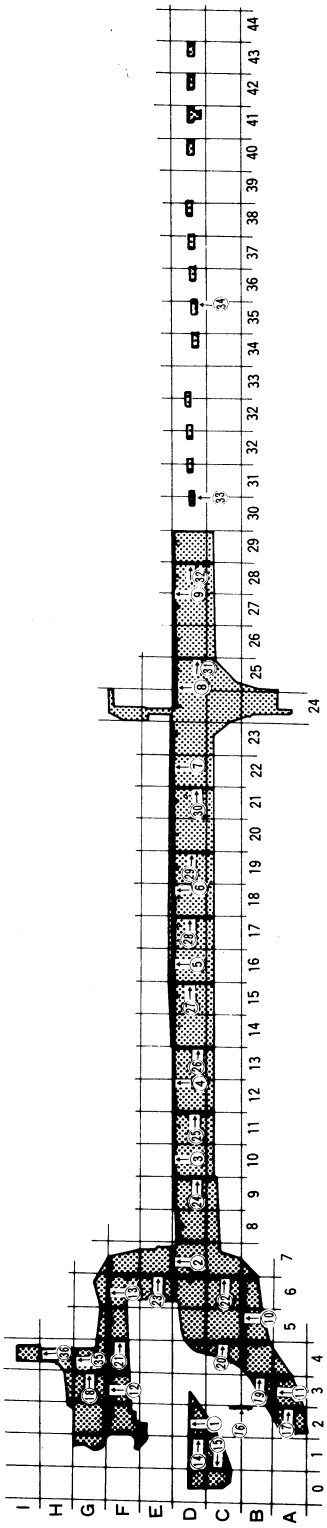
Ⅹ層は、茶褐色土の粘土層で一般的に縄文時代早期の包含層を形成する。中ノ原遺跡でもＥ６～７区とＤ～Ｅ18～19区に早期の遺物包含層が確認された。

Ⅺ層は、黄褐色軽石粒混暗褐色土層でいわゆる薩摩火山灰と呼ばれる火山灰堆積物から成っている。中ノ原遺跡では、部分的にブロック状に止切れる部分もあるがほとんどの地点で層を形成している。この薩摩火山灰は、^{14}C測定年代値によって約11,000B.P.y の降灰とされている。

Ⅻ層は、茶褐色土層の粘質土層で一般的には細石器文化が包含されるが本遺跡では確認されなかった。

XIV層は、桃白色土層の通称ヌレシラスと呼ばれる入戸火砕流の二次堆積物である。

XV層は、入戸火砕流堆積物で通称シラスと呼ばれている。通常本県では数ｍ～数十ｍの厚い堆積がみられる。本遺跡の基盤層となっている。



第７図　中ノ原遺跡断面図作成指示図

第 Ⅱ 章　縄文時代の調査

第１節　調査の概要

１．調査の概要と調査の方法

縄文時代の調査は、確認調査の結果を基に上層の中・近世～弥生時代の調査の後に行なったが、建設工事の進行と年度毎の調査の進捗状況によって各区の調査行程は若干異っている。

中ノ原遺跡の縄文時代は、Ⅹ層（アカホヤ火山灰層下）の早期に該当する時期（ＤＥ６区～ＤＥ７区とＤＥ18区～ＤＥ19区付近）やⅥ層に前期と後期に該当する時期（調査区のほとんど全域）が、さらにⅤ層には晩期に該当する時期（Ａ～Ｆ７区付近から以西）の包含層が検出され、中ノ原遺跡の縄文時代には３時期が存在していることになる。

調査は、該当層の遺物包含層の掘り下げ作業後、遺物の検出作業、出土状態の写真撮影・実測作業の後、遺構検出作業の順の行程で進行した。

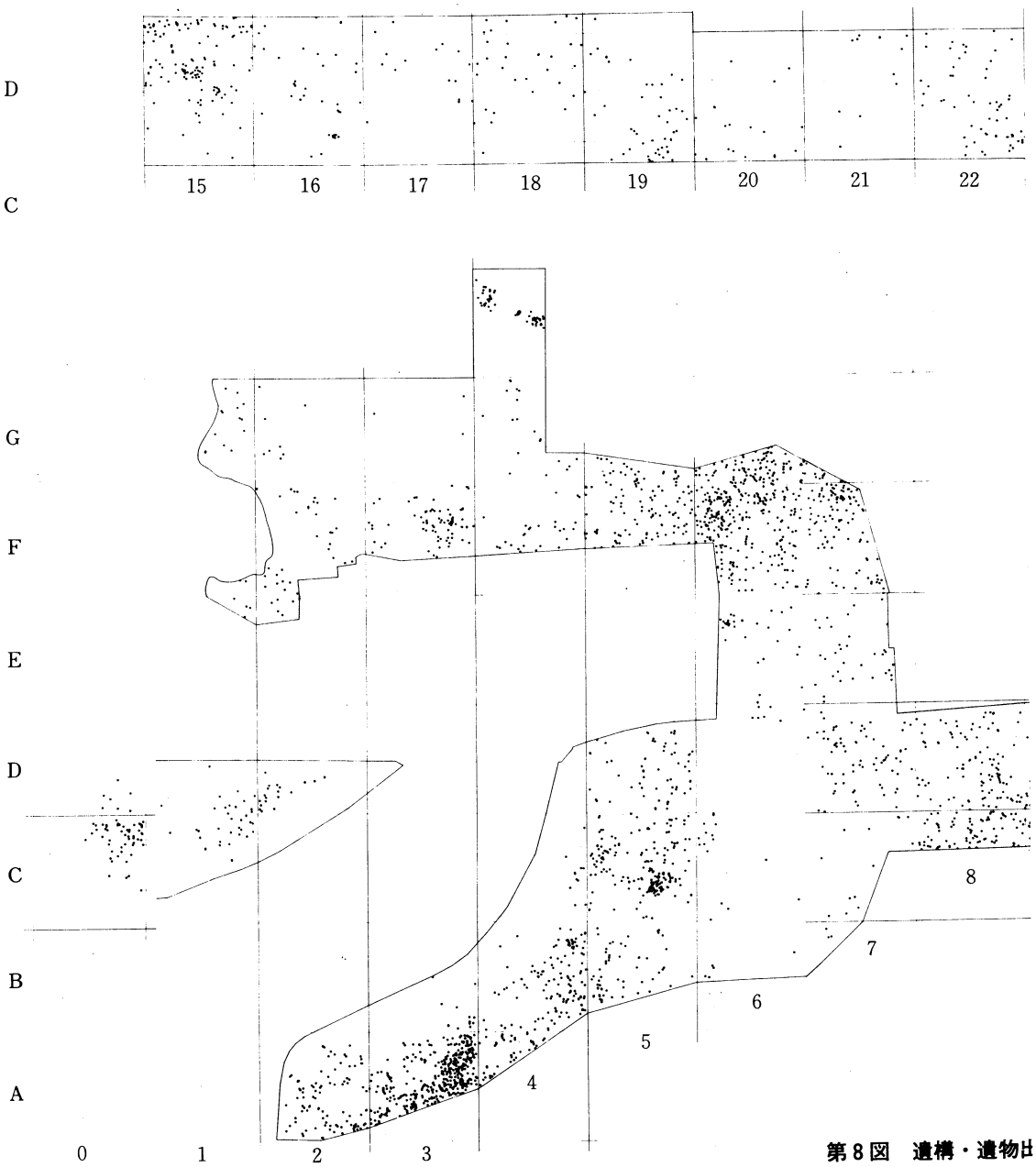
早期については、調査区全体のＢ区の北側壁の２ｍをトレンチ調査で実施し、さらに２グリッド毎（20ｍ間隔）に東側でトレンチの確認調査を行なった。早期は、Ｄ19区の確認調査のトレンチ２で遺物が確認調査されていたので、上層の調査終了後、グリッドのＢ区の北側トレンチとＡＢ区の東側トレンチを精査して早期包含層の分布範囲を限定する方法をとった。平面調査の結果、ＤＥ18区～ＤＥ19区に早期包含層の範囲が確認され、２個体の貝殻文円筒系土器が出土している。さらに、ＤＥ６区～ＤＥ７区にも早期包含層が確認され、同様な調査方法の結果、土器細片ではあったが早期土器の散布状況を検出することができた。今回の調査区域においては、２箇所の狭い範囲に遺物包含層が確認されたが、おそらく調査用地外に早期遺跡の主体は存在することが考えられた。

前期は、調査区のほぼ全域に確認されるがＡＢ７区以西に中心は存在している。前期と後期の出土範囲はほぼ重なるが、前期は比較的にⅥ層の下位にみられ後期は上位に出土する傾向にあり、確実な層位的分離は難しい。前期は多量出土遺物のほか、集石遺構２基が検出されている。後期は、遺物が全調査区に渡って万遍なく出土する傾向にある。しかし多量の出土遺物以外は、遺構等は検出されていない。

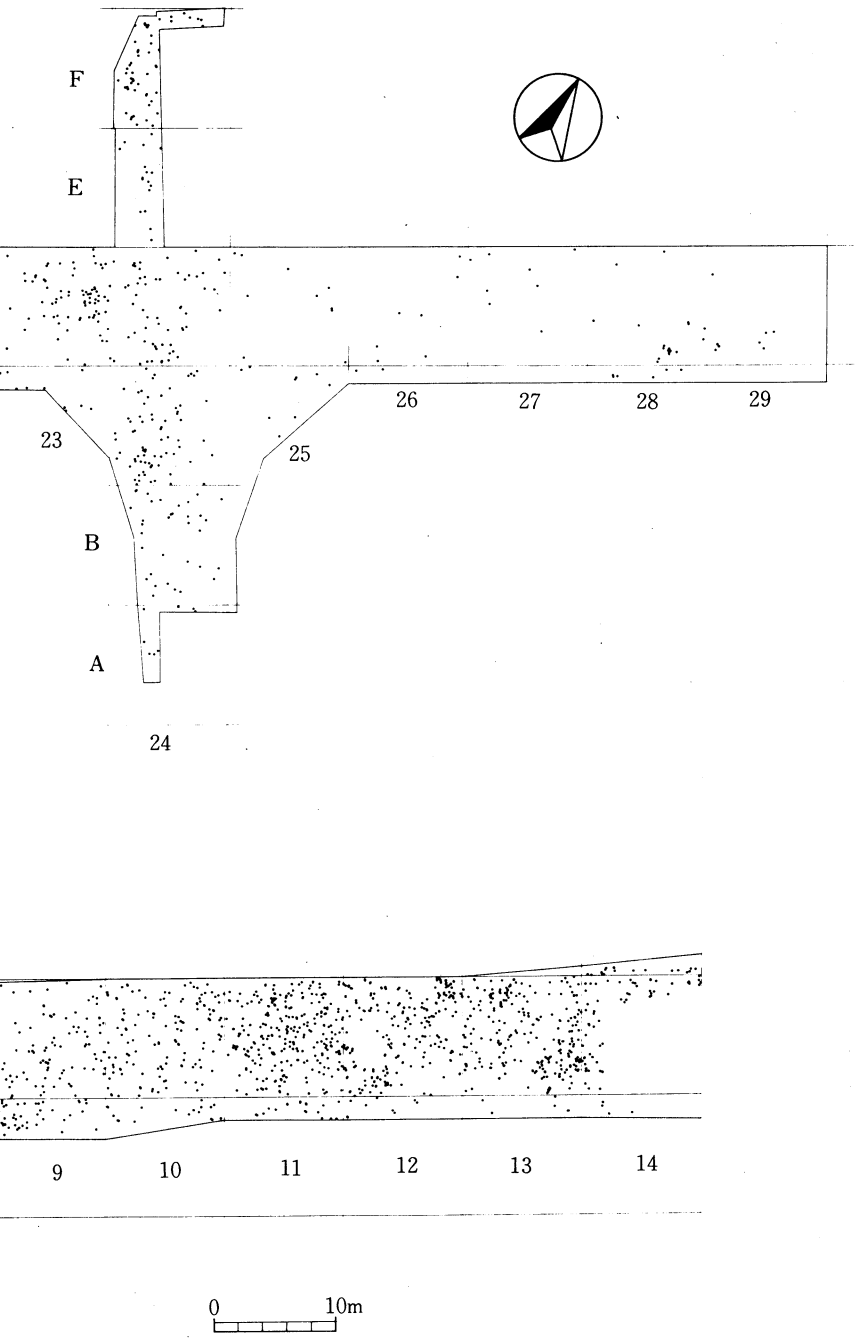
晩期は、Ｄ～Ｆ４区以西の台地西端に検出されている。住居址１基と集石遺構１基が検出されている。特に、この時期の住居址の検出例は少なく、注目される遺構の一つとなった。

２．出土遺物の類別

縄文時代の出土遺物は、Ⅹ層の早期からⅤ層の晩期の時期にわたり、それぞれ土器・石器・加工品などに分かれる。遺物の分類においては、土器は形態状において系統区分が比較的平易であり、Ⅹ層からⅤ層までの土器をⅠ類土器からⅩⅢ土器に類別した。石器や加工品については、時期的区分が不明瞭であり各層において説明している



第8図　遺構・遺物出



土分布図

1）土器

土器については、次の様に類別した。

アカホヤ火山灰下層のⅩ層出土の土器は、貝殻文円筒系土器でその形態からほぼ1型式と考えられⅠ類土器とした。

アカホヤ火山灰の上層のⅥ層出土の土器は、前期と後期に該当する土器が出土しⅡ類土器からⅤ類土器を前期該当土器とし、Ⅵ類土器からⅩⅢ類土器を後期該当土器として説明する。ただし、ⅩⅡ類土器は型式不明土器を一括し、ⅩⅢ類土器は各種の底部を一括している。　Ⅴ層出土の土器は、晩期に該当し、ほぼ1型式で括られるためⅩⅢ類土器として一括した。各類別土器の特徴は、次のようである。

Ⅹ層出土の土器（早期）

Ⅰ類土器 ――― 貝殻文円筒系土器

Ⅵ層出土の土器（前期）

Ⅱ類土器 ――― 隆帯文系土器（隆帯文を貼付する系統）

Ⅲ類土器 ――― 条痕文系土器（条痕文で器面全体を整形する系統）

Ⅳ類土器 ――― 押引条線文系土器（数条の押引状の条線文帯で文様帯を作る系統）

Ⅴ類土器 ――― 沈線文系土器（沈線文を幾何学的に施文し文様構成する系統）

Ⅵ層出土の土器（後期）

Ⅵ類土器 ――― 貝殻刺突文＋凹線文系土器

Ⅶ類土器 ――― 凹線文＋貝殻刺突文充塡系土器

Ⅷ類土器 ――― 細形平行凹線文系土器

Ⅸ類土器 ――― 肥厚口縁＋磨消縄文系土器

Ⅹ類土器 ――― 肥厚口縁部屈曲系土器

Ⅺ類土器 ――― 口縁部屈曲系土器

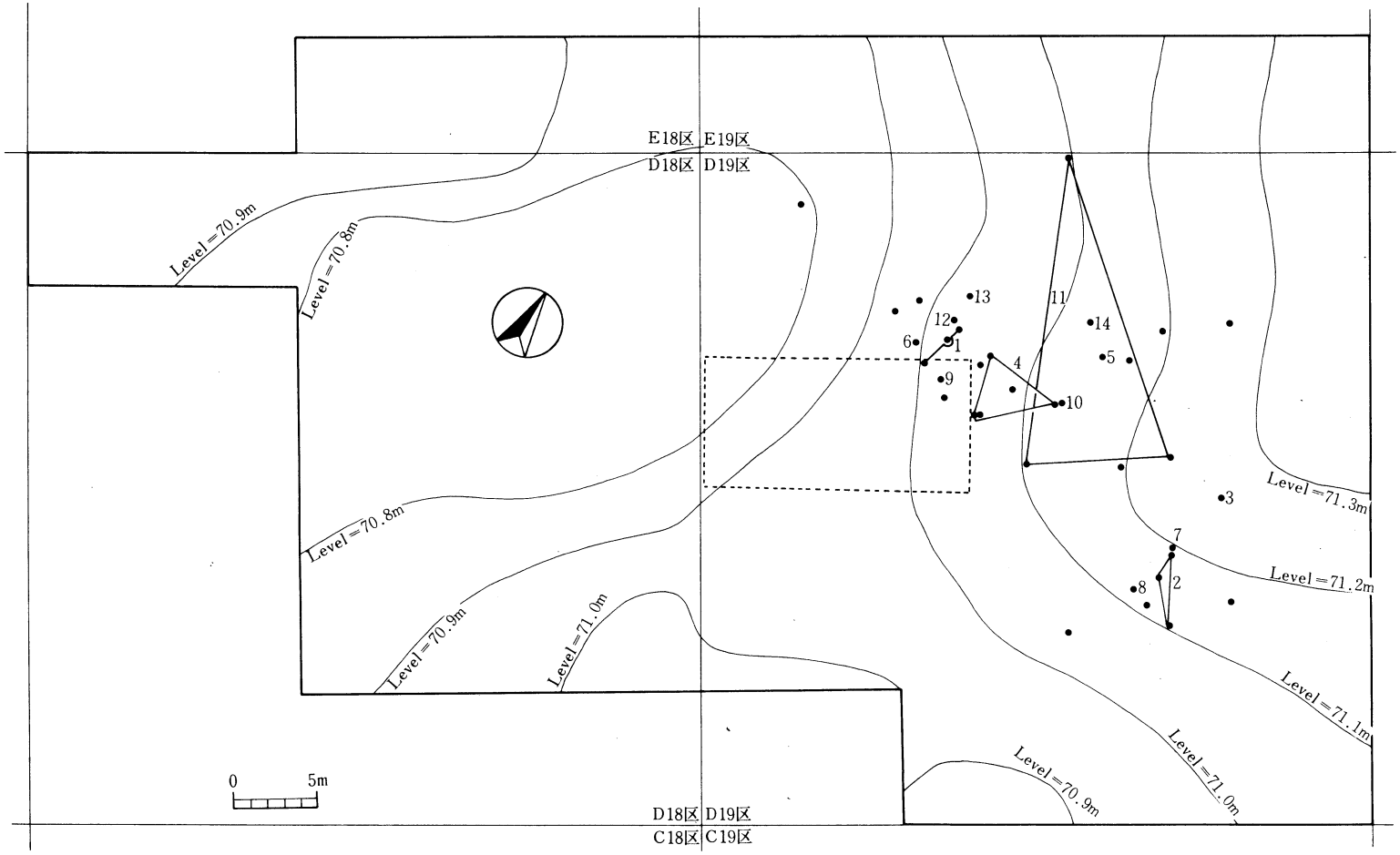
ⅩⅡ類土器 ――― 型式不明土器

ⅩⅢ類土器 ――― 各種底部

Ⅴ層出土の土器（晩期）

ⅩⅣ類土器 ――― 黒色研磨土器

以上のように、中ノ原遺跡出土の縄文土器は、便宜的に14類に類別したが、このなかでⅩⅡ類土器は型式不明の土器を一括し、ⅩⅢ類土器は各種の底部を一括した。このように、各々の類別は、一型式を示すものではない。



第９図　Ｘ層遺物出土分布図（１）

2）石器

石器は、Ⅹ層には出土していない。Ⅵ層においては多量に出土しているが、前期と後期の区別は層位的にも形態的にも困難であった。そのため、器種ごとに石器Ⅰ～石器Ⅶとしてそれぞれ説明する。なお、Ⅴ層の晩期の石器についてもその項において器種ごとに説明することにする。

3）加工品

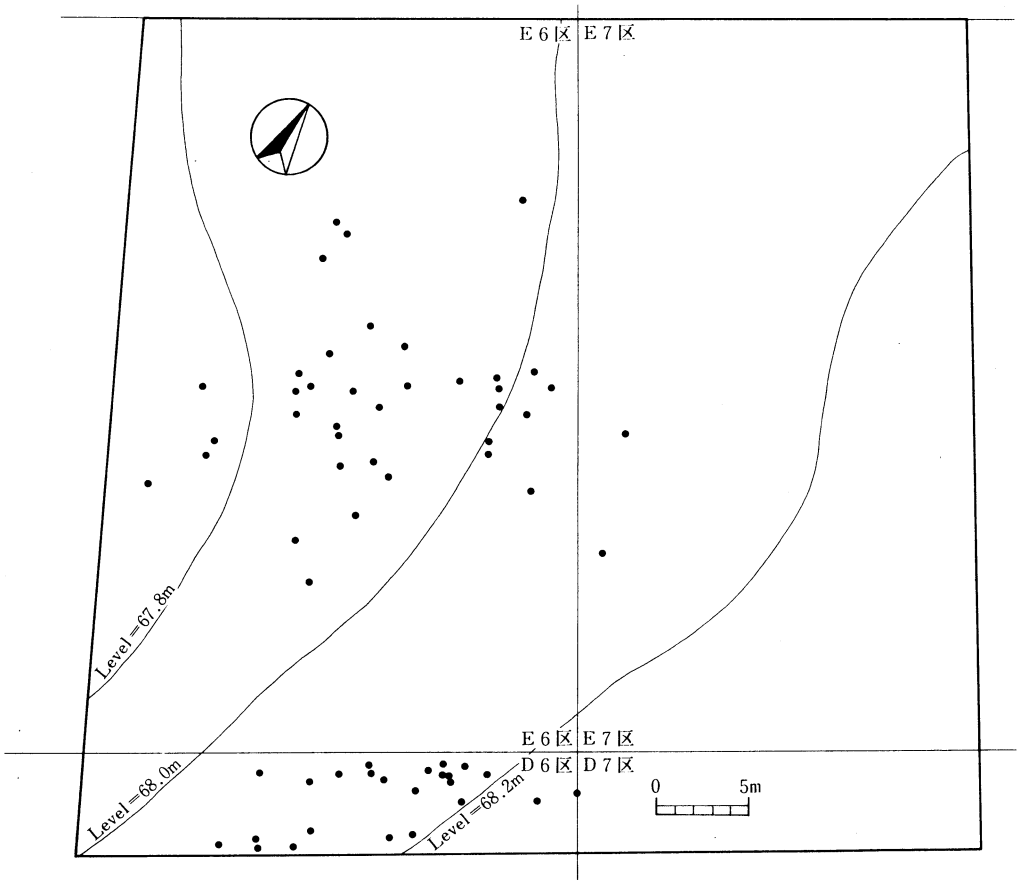
加工品は、円盤型土製加工品が出土している。

第２節　Ⅹ層の調査

１．Ⅹ層の概要

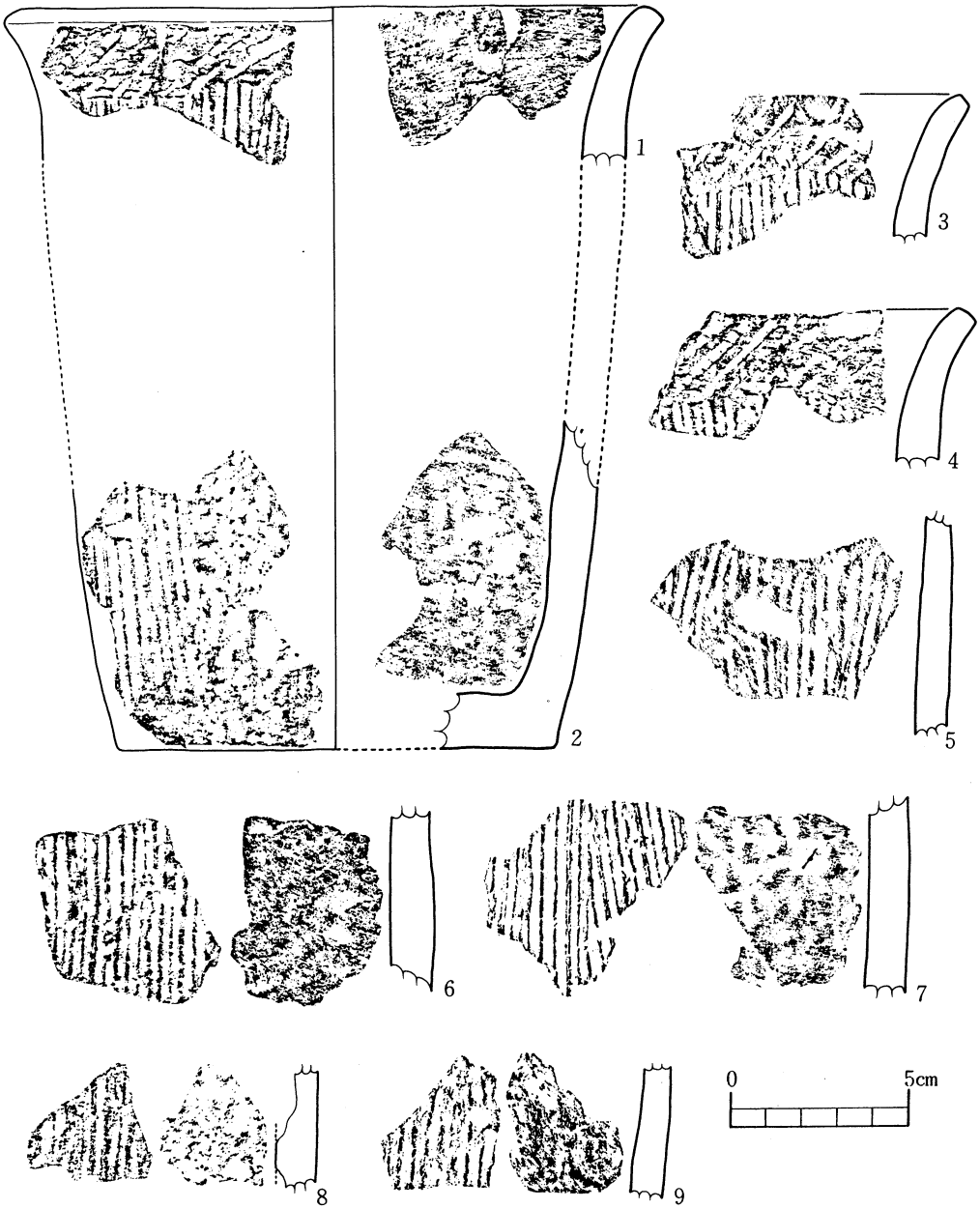
早期包含層が確認されたのは、ＤＥ18区～ＤＥ19区とＤＥ６区～ＤＥ７区の比較的狭い範囲である。そのうちＤＥ６区～ＤＥ７区では、ほとんどが土器粒で図化できるものはなかった。

ＤＥ18区～ＤＥ19区については、第11図・第12図のようなⅠ類土器が出土している。この地



第10図　Ⅹ層遺物出土分布図（２）

点は、Ⅷ層のアカホヤ火山灰の直下にⅩ層の茶褐色土層が存在し、この層が包含層となっている。包含層の地形は、東から西（D19区からD18区へ）へ50cm程度のの傾斜がみられる。レベルは標高71.3m～70.8mを測る。出土遺物は、D19区に集中し、2個体のⅠ類土器とした貝殻文円筒系土器が出土している。土器以外は、石器など他の遺物は出土していない。



第11図　Ⅰ類土器実測図（1）

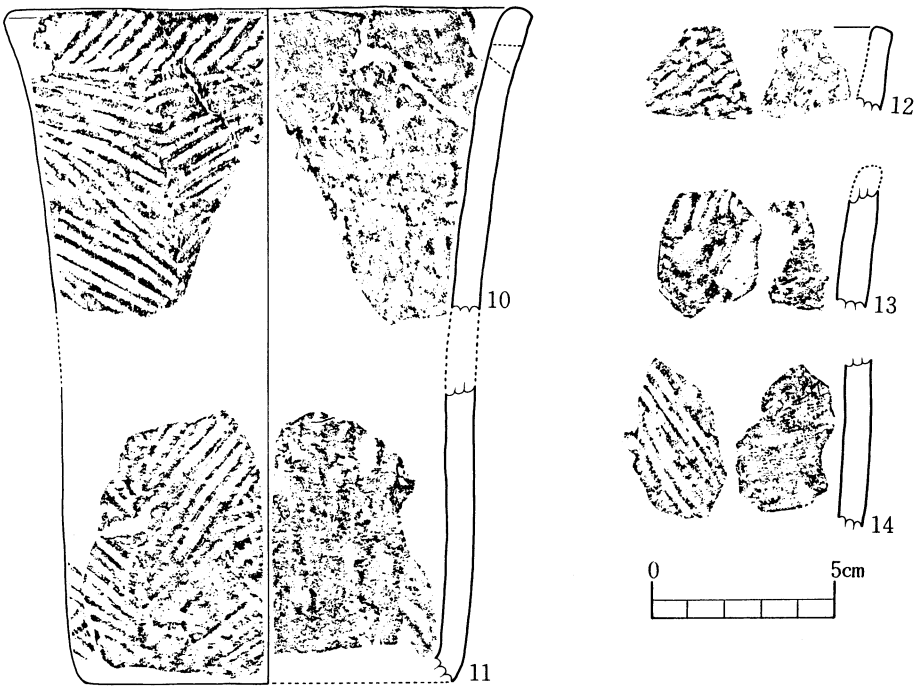
2．出土遺物

1）土器（第11図・第12図－1～14）

ＤＥ19区のⅩ層からは、総数35点の土器片のみが出土している。これらはすべて同形態で、Ⅰ類土器と類別した土器である。そのうち第11図～第12図の１～14の土器が図化可能な土器片であるが、１～９までと10～14までの２個体に分別することができる。

１～９は、その形態から同一個体の破片とすることが可能である。１・３・４は口縁部片であり、口縁部は外反し、口唇部は平坦に納める。１の口縁部片では18.5cm程度の口径が復元できる。口縁部外面には長さ３cm程度の斜位の貝殻刺突文線が巡っている。そして以下胴部には縦位の比較的丁寧な条痕文が施文されている。５～９は胴部片で縦位の条痕文を施文する。２は底部片で、底部側面近くまで縦位の条痕文が施文され下端は側面整形によって条痕文はナデ消されている。底径は12cm程度に復元できる。内面はナデ整形の丁寧な仕上げで、焼成は良好である。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石細粒を含む。

10～14もその形態から同一個体の破片とすることが可能である。10～13は口縁部片であり、口縁部は僅かに外反し、口唇部は平坦に納める。口縁部には外測７mm、内測４mm程度の補修孔が存在する。10の口縁部片では14.5cm程度の口径が復元できる。口縁部外面には長さ２cm程度の斜位の貝殻刺突文線が巡っている。胴部以下には若干荒い綾杉状の条痕文が、底部側面まで施文される。11は底部片で、底径は10.5cm程度に復元できる。内面は若干荒いナデ整形の仕上げで、焼成は良好である。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石細粒を含む。



第12図　Ⅰ類土器実測図（２）

第３節　Ⅵ層の調査

１　遺構

Ⅵ層からは、集石遺構２基が検出された。いずれも縄文時代前期の所産と考えられる。

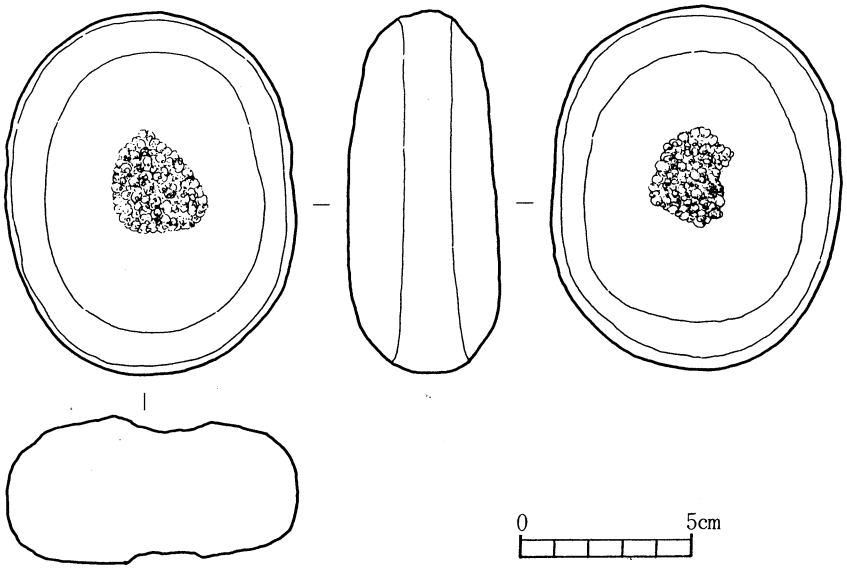
①　集石遺構１号　（第14図）

集石遺構１号は、Ｂ－４区の南西隅で検出された。径65cmを測る円形の浅い掘り込み状の窪みをもち、約100個の礫からなっている。礫は角礫が中心で、加熱のためか細かく砕かれたものもある。これらの礫とともに、若干の炭化物も点状に分布していた。遺構内から、時期を特定できるような遺物の伴出はなかったが、遺構周辺における同層出土の土器は、縄文時代前期該当の土器であることから、同時代の所産の可能性が高い。

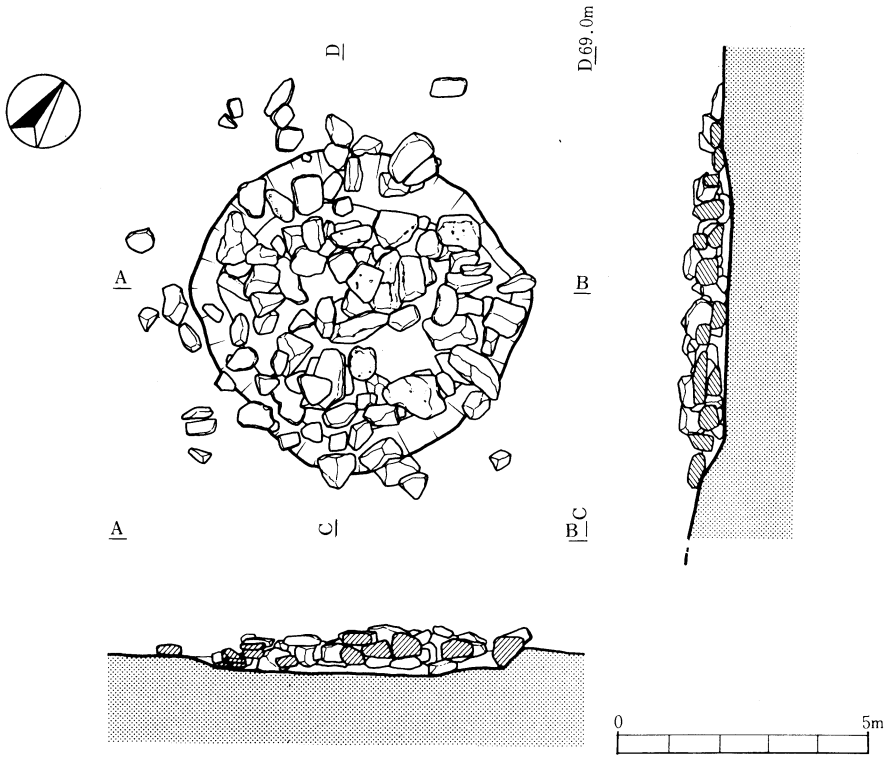
②　集石遺構２号　（第15図）

集石遺構２号は、Ａ－２区の北西隅で検出された。平面形が長径70cm、短径55cmの楕円形を呈している。長さ５～15cmの礫約55個からなっている。１号のような掘り込み状の窪みはみられなかった。また１号に比べると円礫の使用が目立っている。さらに１号が細かく砕かれた礫が多数存在するのに対し、２号は原形を保っているものが多く、炭化物もみられなかった。これらのことから、１号と２号とでは、礫が集中しているということでは共通しているものの、その機能については、違いを考えなければならない。時期については、１号と同様な理由で、縄文時代前期該当と考えられる。

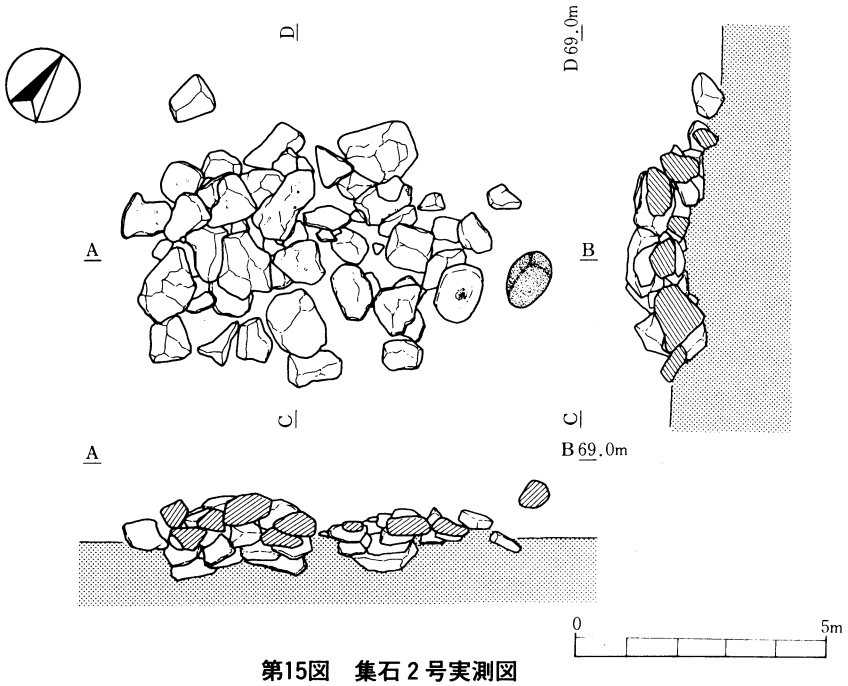
第13図は、２号内から出土した凹石で、磨石を転用したものである。石質は安山岩である。最大長10.8cm、最大幅8.5cm、最大厚4.6cmを測る。側面には敲打痕も見られる。



第13図　集石２号出土遺物



第14図　集石１号実測図



第15図　集石２号実測図

2　出土遺物

1）Ⅵ層出土の土器

Ⅵ層からは、前期と後期に該当する土器型式が出土している。そのうち前期に該当する系統は、Ⅱ類土器～Ⅴ類土器の４系統の土器群が出土している。後期に該当する系統は、Ⅵ類土器～Ⅻ類土器の７系統の土器群が出土し、他にⅩⅢ類土器の底部の一群がある。この類別に従って順次説明する。

①　Ⅱ類土器　（第18図－15～17）

Ⅱ類土器は、15～17で隆帯文系土器である。15・16はいずれもＦ２区から出土している。形態上から同一個体と考えられ、細い隆帯文のいわゆる微隆突帯文を貼付するタイプである。微隆突帯文は、15は縦位及び横位に貼付して途中で交叉し、16は斜位に貼付している。この微隆突帯文は、文字通り細い突帯文を貼付するもので途中で剝落している部分もある。器壁は、７㎜～９㎜の比較的薄手である。内外面とも丁寧なナデ整形で仕上げられ、焼成は良好で堅緻である。色調は暗茶褐色を呈し、長石を含む。

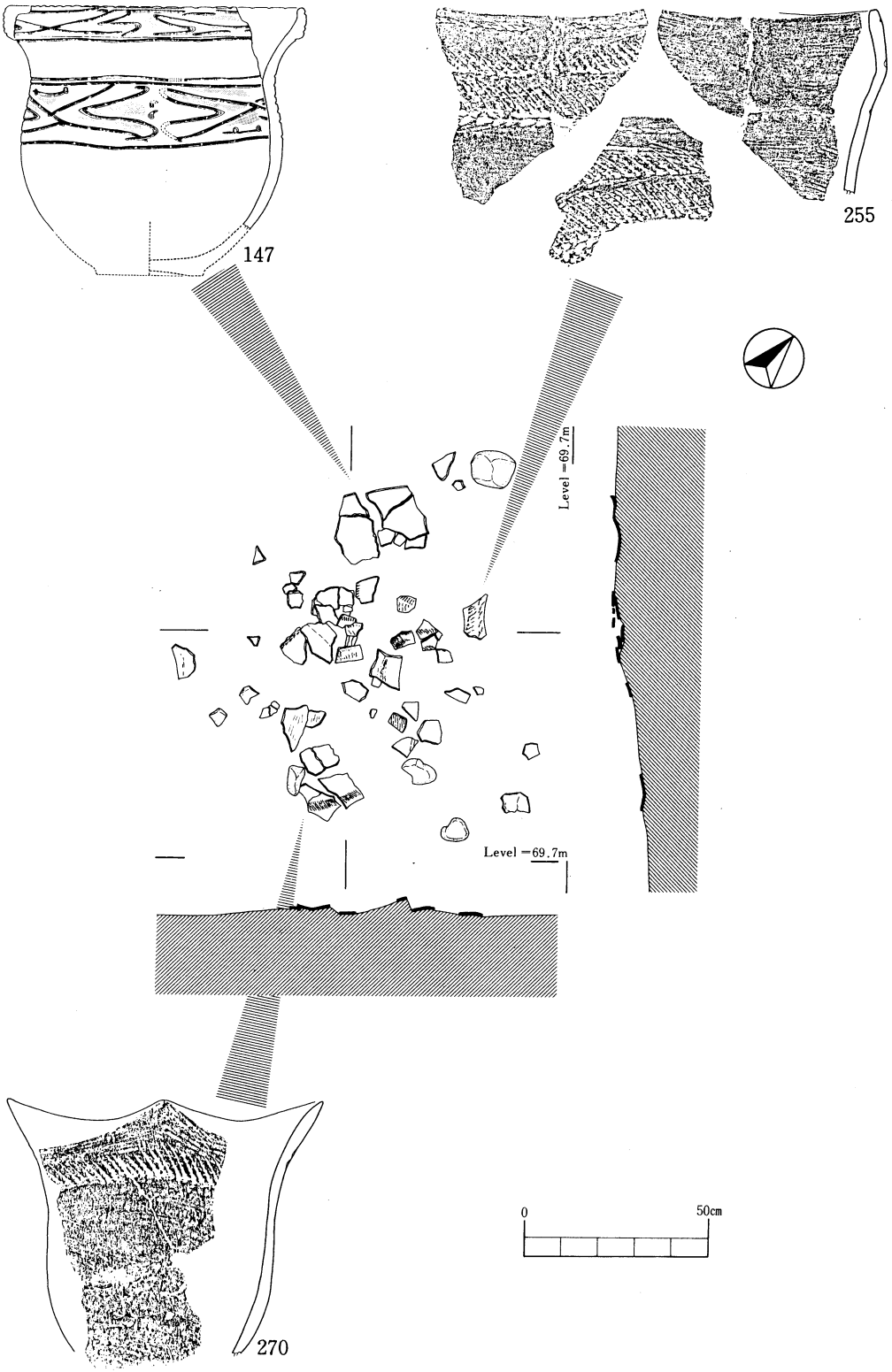
17は、７㎜程度の幅広の突帯文を貼付するものである。そして突帯文の上から無造作に刺突文が施文されている。Ｇ５区の出土である。器壁は、６㎜程度の薄手である。内面は条痕調整後、ナデ整形で仕上げられている。外面も比較的荒いナデ整形である。焼成は普通である。色調は茶褐色を呈し、長石粒や金雲母を比較的多量に含む。

②　Ⅲ類土器　（第20図～第23図－18～43）

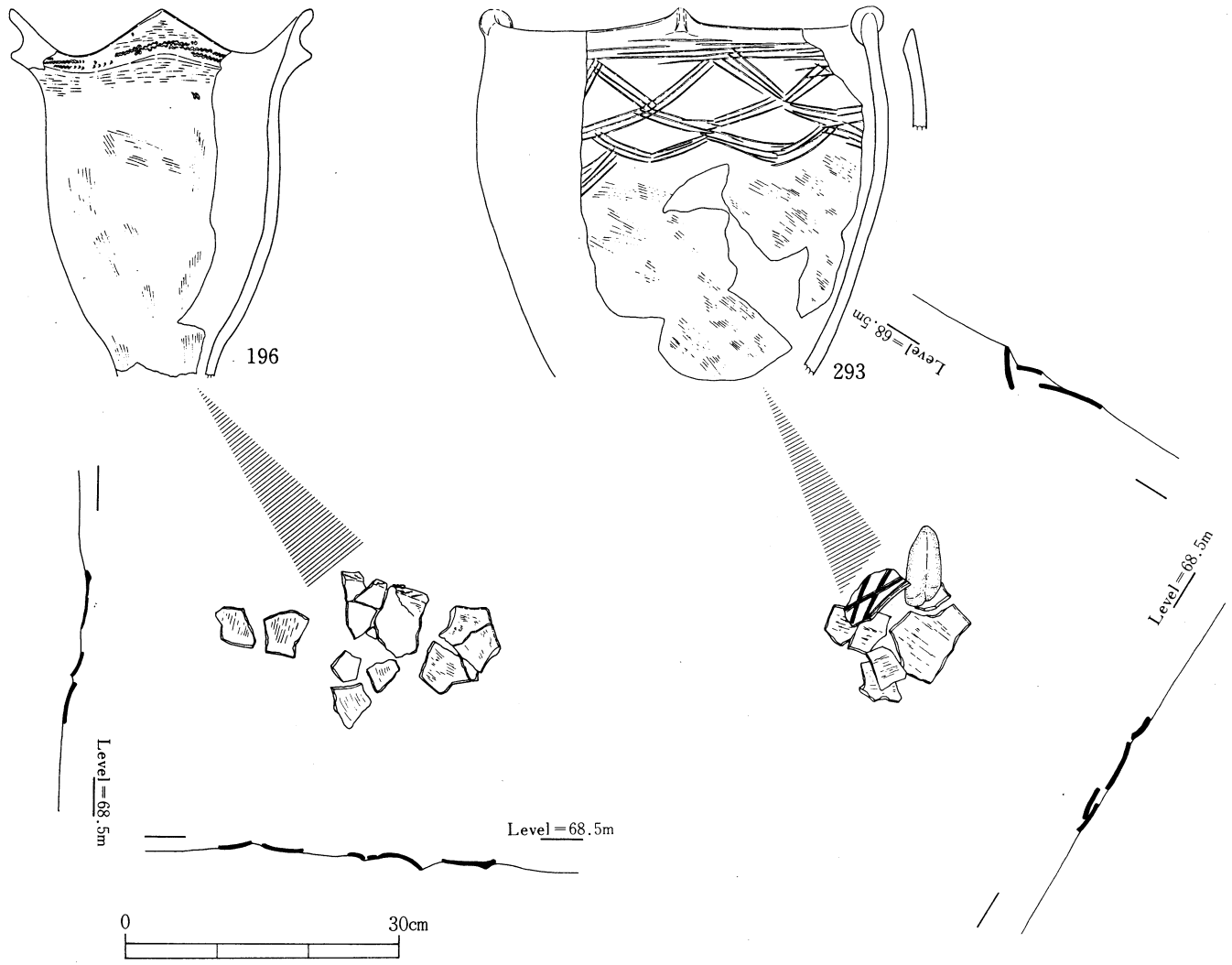
Ⅲ類土器は、18～43で条痕文系土器である。Ⅲ類土器は、基本的には逆三角錐の器形を呈し尖底及び丸底に近い底部をもつタイプで、器内外面に縦位・横位・斜位の条痕文を施文するものである。口唇部に刻目を施すものと施さないものがある。40～43は、形態上若干の違いがみられるが、Ⅲ類土器に含めて説明する。

18は、Ｆ３区に総数43点が集中的に出土し、底部を除きほぼ完形品に接合し復元された条痕文系土器である。口径約38㎝、復元高約37㎝（現存高33㎝）を測る大形の器形を呈し、逆三角錐で尖底の底部が想定されるものである。口縁部は平縁口縁を呈し、口唇部は丸く納め、器壁は１㎝程度に均厚に仕上げている。口唇部には、貝殻状施文具で部分的に刻目を施す。器内面は、整然とした横位の条痕文で整形されている。器外面は横位・斜位の条痕で整形された後、ナデ整形が施され、その上から縦位・横位・斜位の条痕文を施文している。上位の条痕文は文様効果も兼ね備えているようである。胴部上半は暗褐色を呈し、若干煤状の付着物も観察される。胴部下半は黄褐色を呈し、二次焼成を受けている。これは、煮沸容器としての使用頻度を現わしていることが考えられる。胎土には、長石粒や角閃石等を若干含む。焼成は、良好で堅緻である。

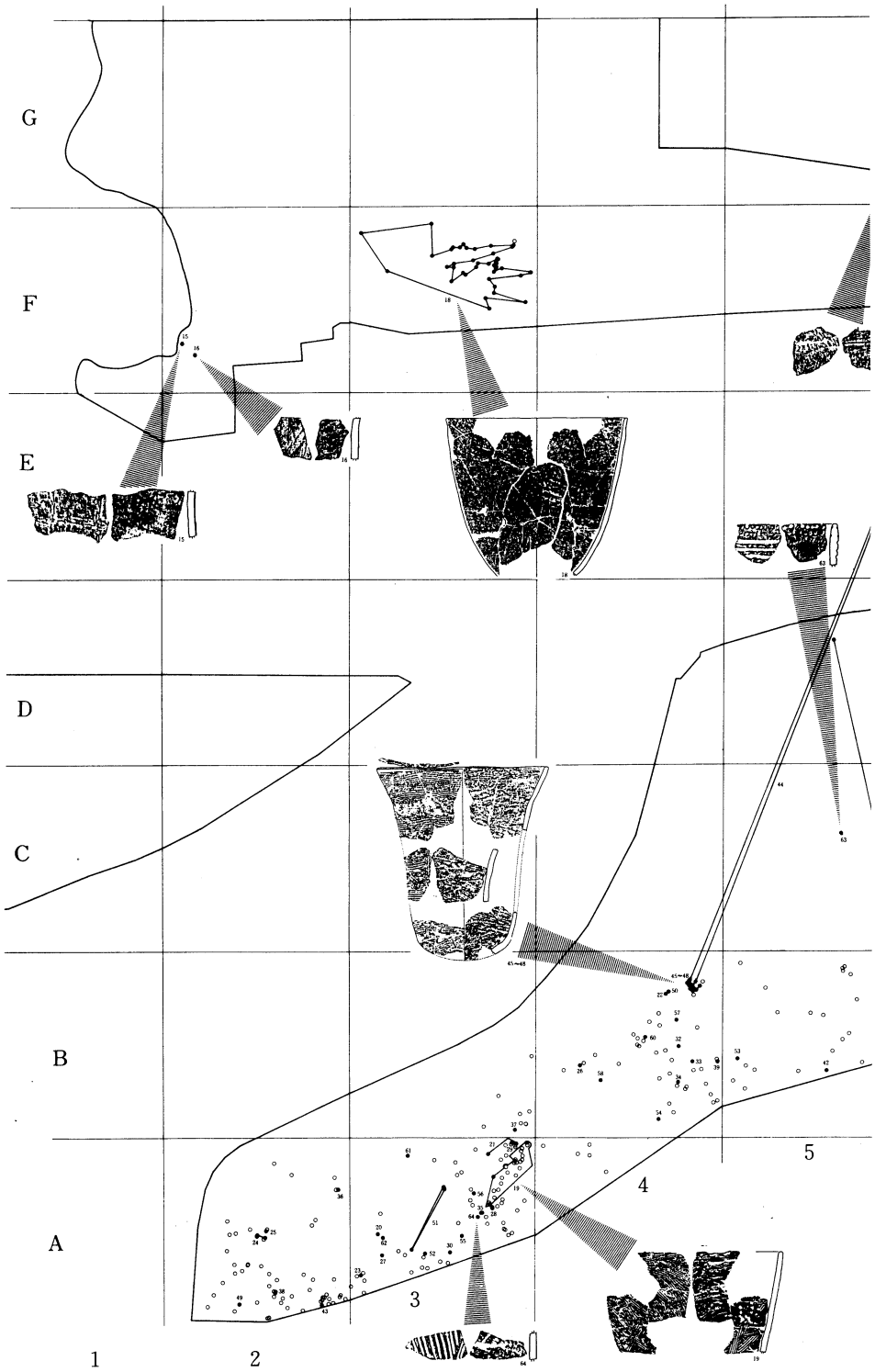
19～37は、条痕文土器の口縁部片と胴部片である。器内外面の整形は18にほとんど類似する



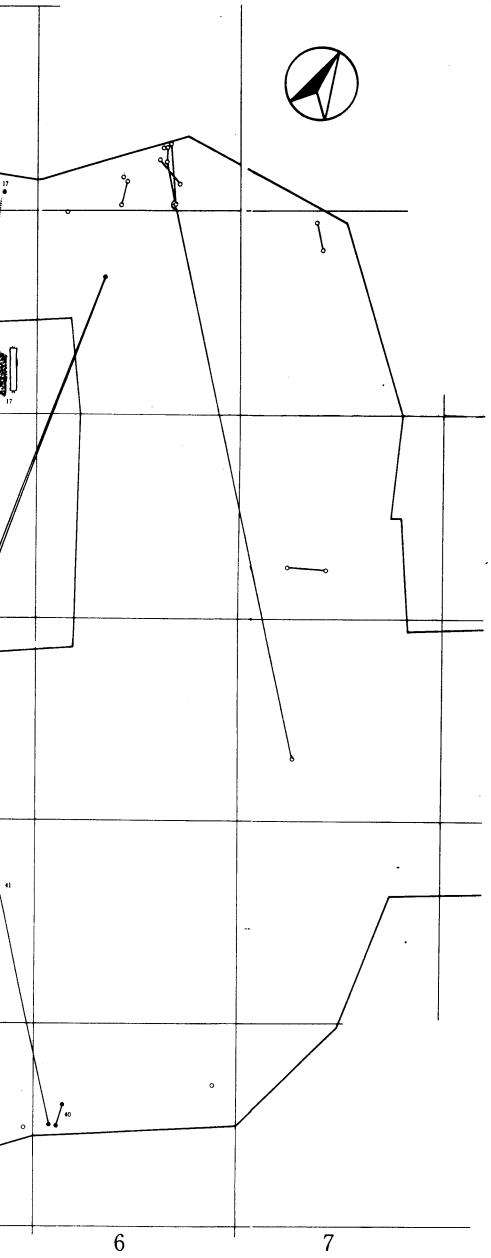
第16図　土器出土状況（1）



第17図　土器出土状況（2）



第19図　Ⅱ～Ⅴ類土器出土分布図



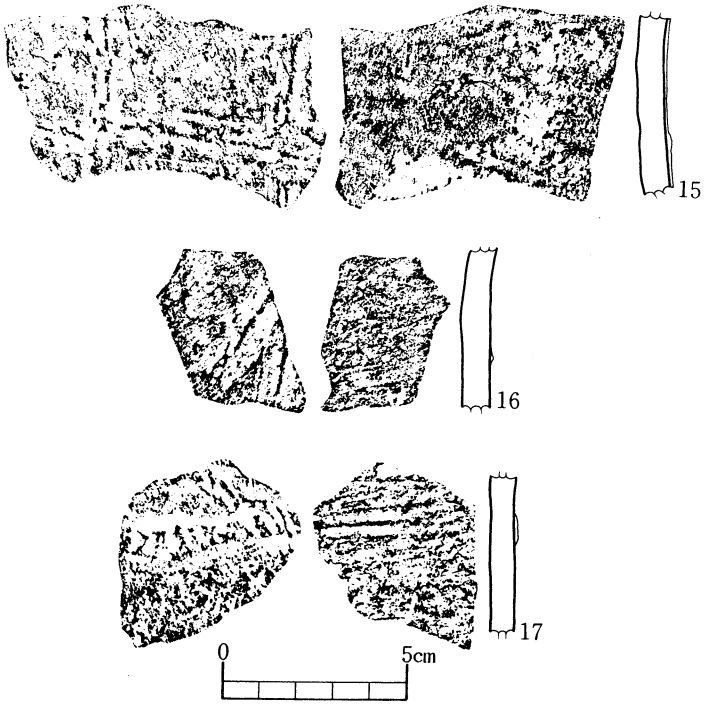
0 10m

が、口唇部の施文に若干の違いが認められる。櫛歯状の施文具（貝殻腹縁かも？）で浅く丁寧に刻目が施文されるものに、19・35などがある。20・24・25には、円形の連続刺突文が施文されている。また、23には、浅い刻目の上から円形の刺突文が重ねて施文されている。24には、半截竹管状の刺突文が施文されている。明らかに貝殻腹縁の肋筋が確認される施文具を使用した刺突文を施すものは、26～28・31である。また、31は、刺突文間の間隔を若干開けて施文されている。29・30・32～34・36は無文である。しかし、このⅢ類土器は、18の様に刺突文部と無文部が繰り返され、小破片においては無文部だけが確認される場合が考えられる。口縁部はほとんど平縁で、口唇部は平坦状に仕上げるもの（29・31・33・35）もあるが丸味をもって納める。22の口縁部の様に外反気味のものや30の様に肥厚するものがあるが、これは部位の部分的な状況と考えられ、基本的には18の器形に類似することが考えられる。色調は、黄褐色・茶褐色・暗茶褐色など色々である。焼成は、比較的良好で堅緻である。

37は、胴部片であるが、補修孔がみられる。焼成後、外から穿たれた径 1.2cmの丁寧な円形の円孔である。内面の円周は、外面からの穿孔のため若干剝落している。

38・39は、底部付近と底部片である。38は丸底状の器形が看取され、39は丸底状の平底を呈する。底部側面まで縦位の条痕が施され、内面は丁寧なナデ整形である。

40・41は、若干異なった条痕を施すものである。形態から同一個体と考えられるが、内外面の条痕の施しが良好に看取できる。口縁部は若干内湾気味な口縁部を呈し、口唇部は丸味をもって納める。口唇部には部分的に刻目が施されている。器外面は丁寧なナデ整形の後、荒い縦位の条痕が施されている。胴部下半に行くに従って条痕は荒く施文されるようである。器内面は、丁寧なナデ整形で仕上げられている。41をみると、下半には荒い条痕が施文されている。意図的に荒く掻き揚げた状況が窺える。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好



第19図　Ⅱ類土器実測図

で堅緻である。胎土には長石や石英の細粒を含む。

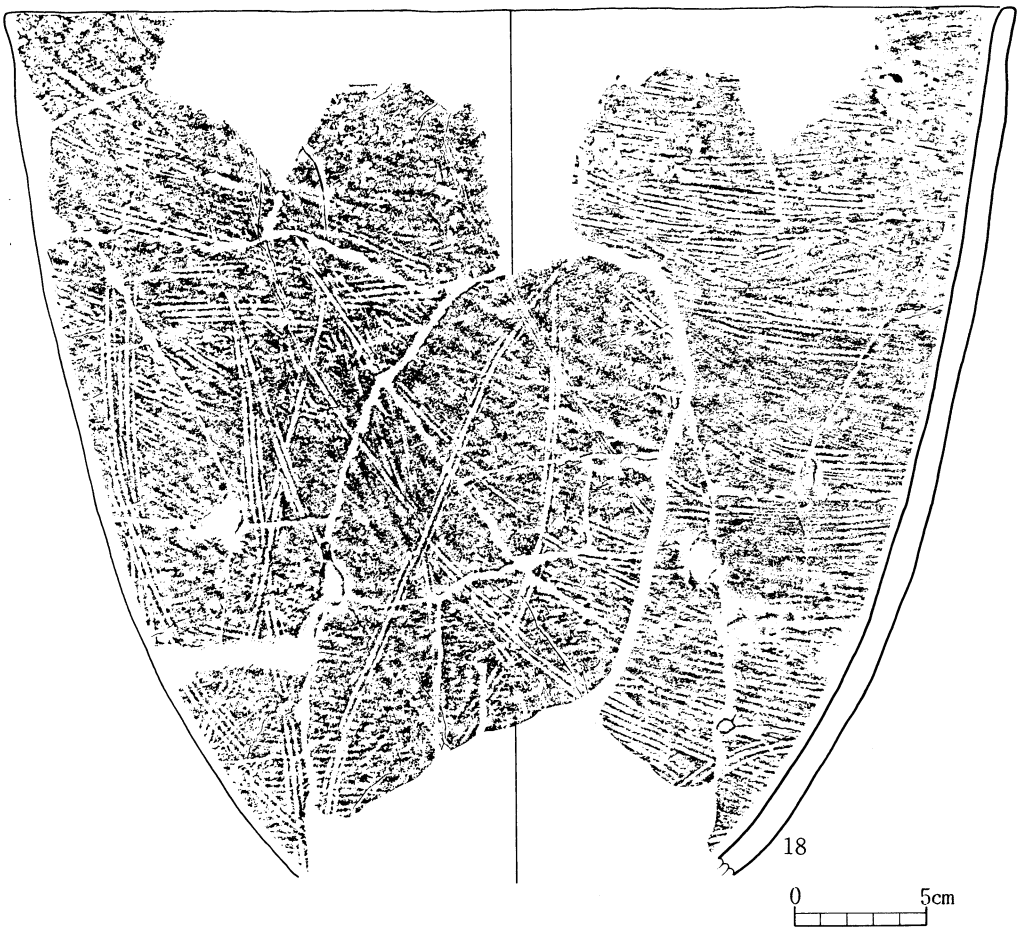
42は口縁部片で、内外面とも条痕仕上げがみられる。外面はさらにその上から斜位の荒い条痕を施文している。

43は胴部片である。器外面には無造作な沈線文が縦位に施文され、内面はナデ整形である。形態から後期の可能性もある。

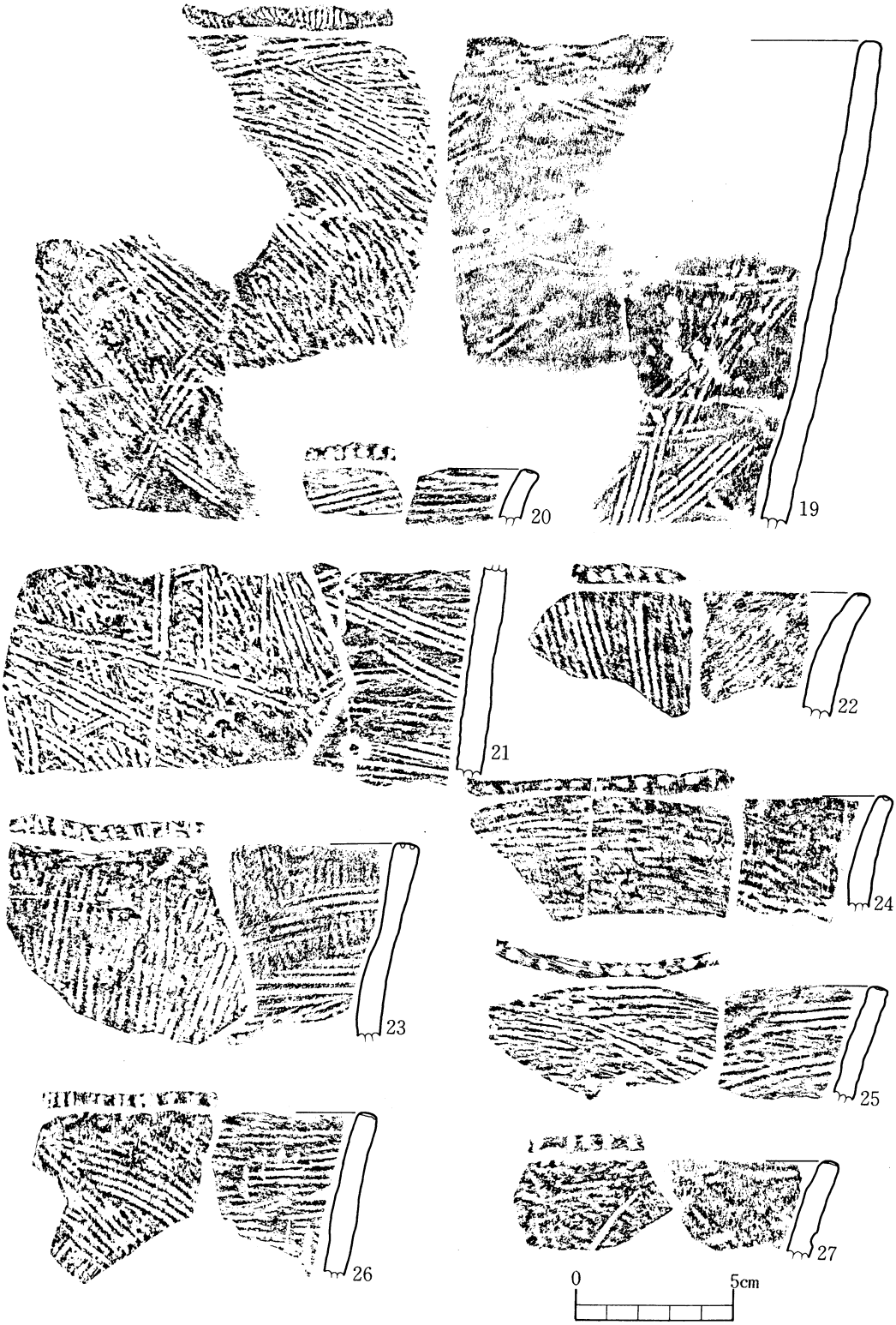
③ **Ⅳ類土器**　（第24図～第26図－44～62）

Ⅳ類土器は、44～62で押引条線文系土器としたものである。押引条線文系土器とは、押引条線文帯を縦位と横位に組み合して文様を構成しているタイプである。注目されることは、同文様が口縁部内面にも施文される点である。

44～50は、その形態から同一個体と考えられる。44は口縁部片で、口径は約26cmに復元できる。口縁部は大きく外反し、口唇部は丸味をもって平坦に納める。口唇部平坦面には、貝殻腹

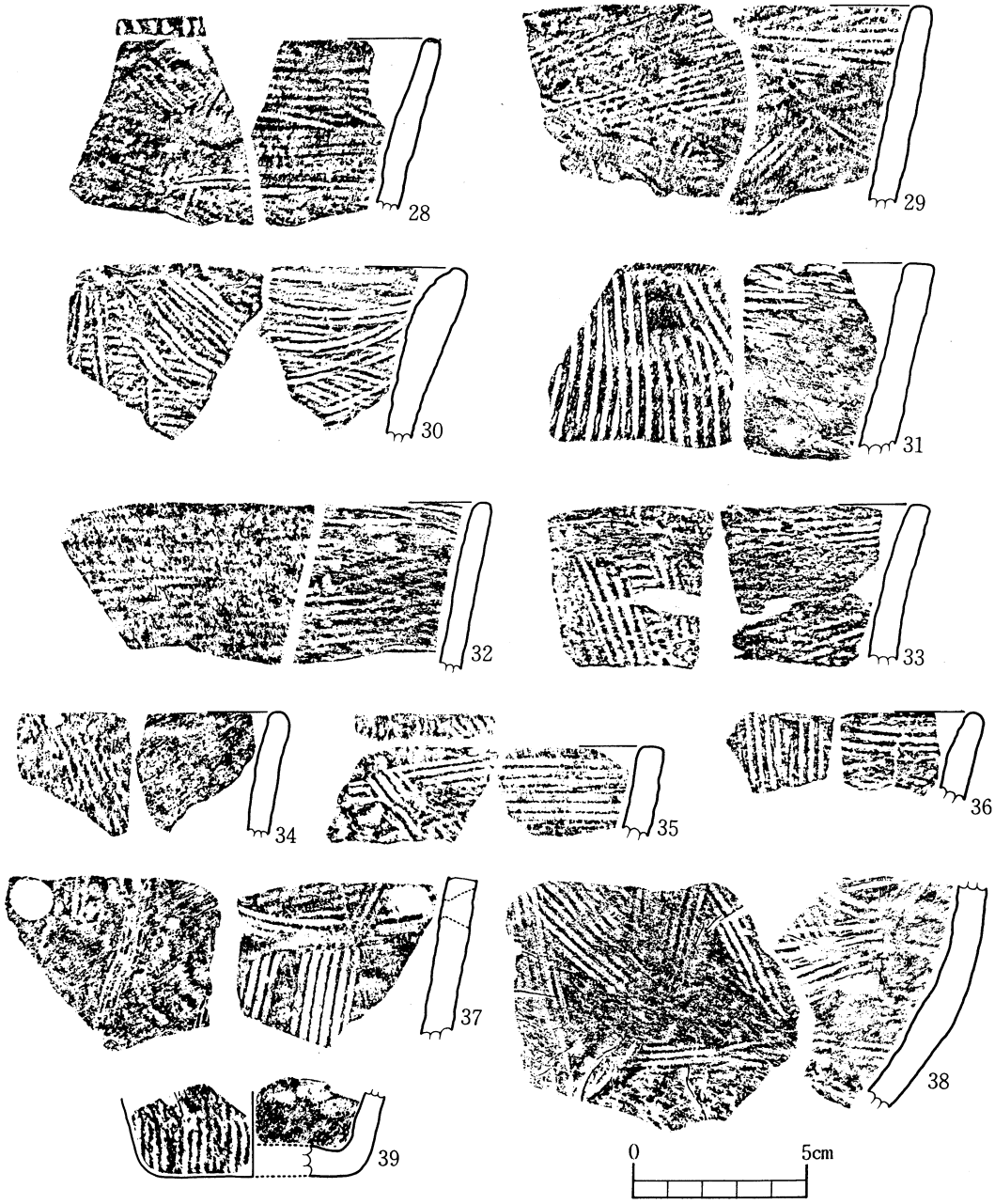


第20図　Ⅲ類土器実測図（1）



第21図　Ⅲ類土器実測図（2）

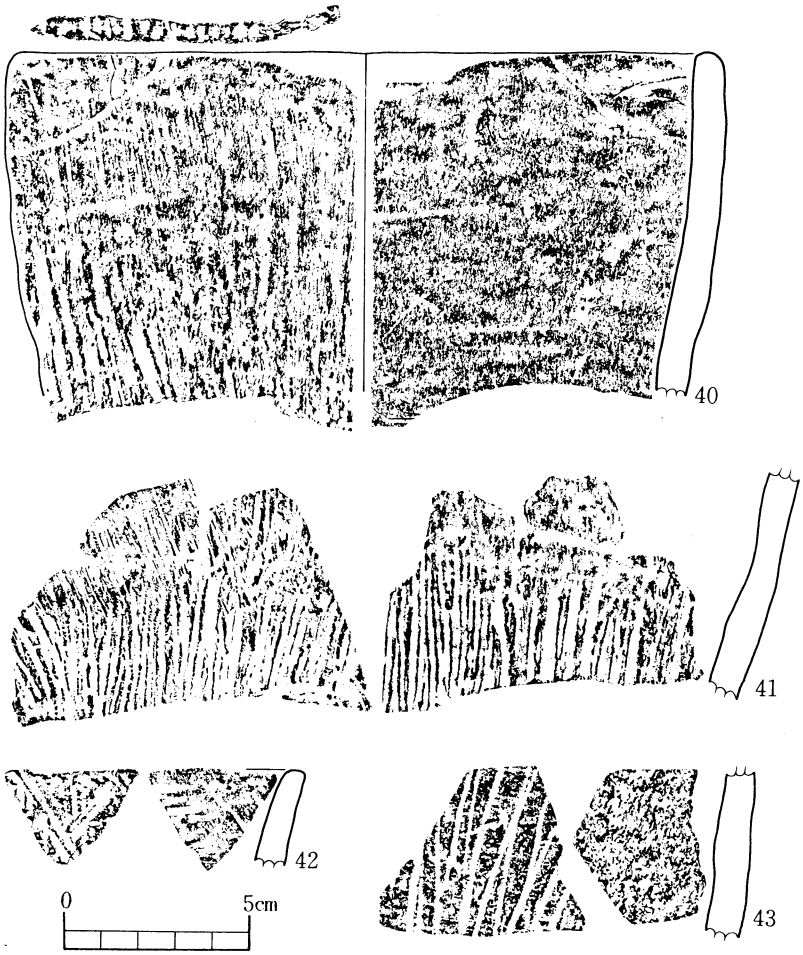
縁の肋筋が確認できる刻目が４～５個単位で施文されている。約７～８cm毎に無文部を残しこの刻目が施文されている。口縁部外面は、押引条線文帯と丁寧なナデ整形で仕上げられた無文部で構成されている。まず、口縁に沿って横位の８条程度の押引条線文帯が二列巡り、その下は無文帯をつくり、さらにその下に一条の押引条線文帯を巡らせている。押引条線文帯は８本



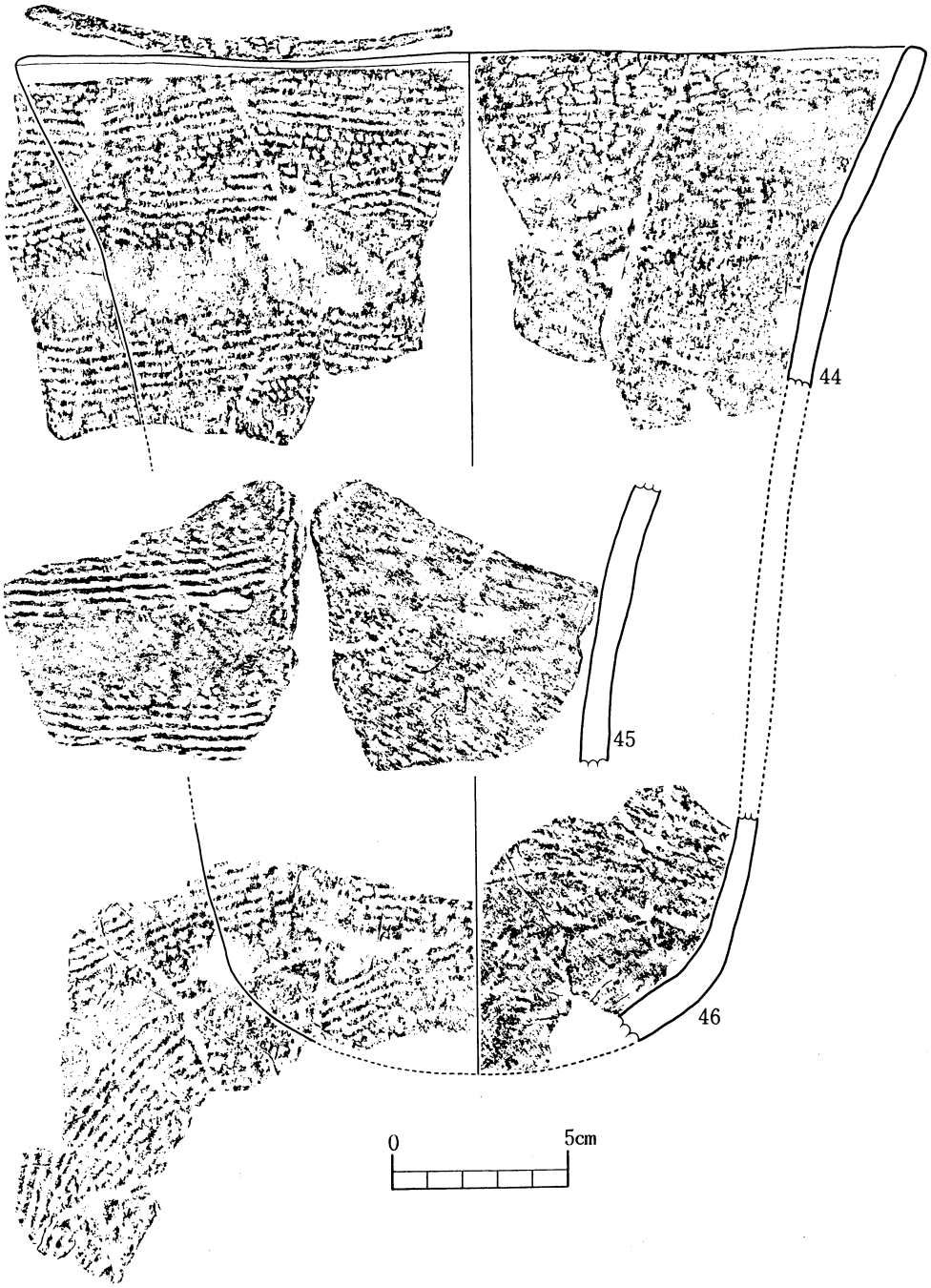
第22図　Ⅲ類土器実測図（３）

組で構成される。中央付近は凹線文状に施文されるが、良く観察すると押し引き文状になっている。両側の２～３本は連点文状に施文されているが、これは押圧の時の施文が残り、引きの時は施文具が宙に浮いて施文されないことによる。これは施文具が弧状の貝殻腹縁によるものであり、８条程度の貝殻腹縁の肋筋が確認できる。口縁内面は、僅かな無文部の間に二条の押引条線文帯が施文されている。口縁内面の施文は明瞭に施文されていないが、内面での施文という技術上の問題の可能性が強い。45・47・48は胴部破片である。縦位の押引条線文帯に横位の条線文帯を組合せて施文している。内面は、上半が丁寧なナデ整形で仕上げ、下半は比較的荒いナデ整形とケズリ整形がみられる。46・49・50は、底部付近の破片である。底部は安定した丸底を呈し、側面まで押引条線文帯が施文されている。底部の底面は無文で、丁寧なナデ整形で仕上げられている。色調は黄褐色を呈し、胎土には長石や石英の細粒を混入する。焼成は普通である。

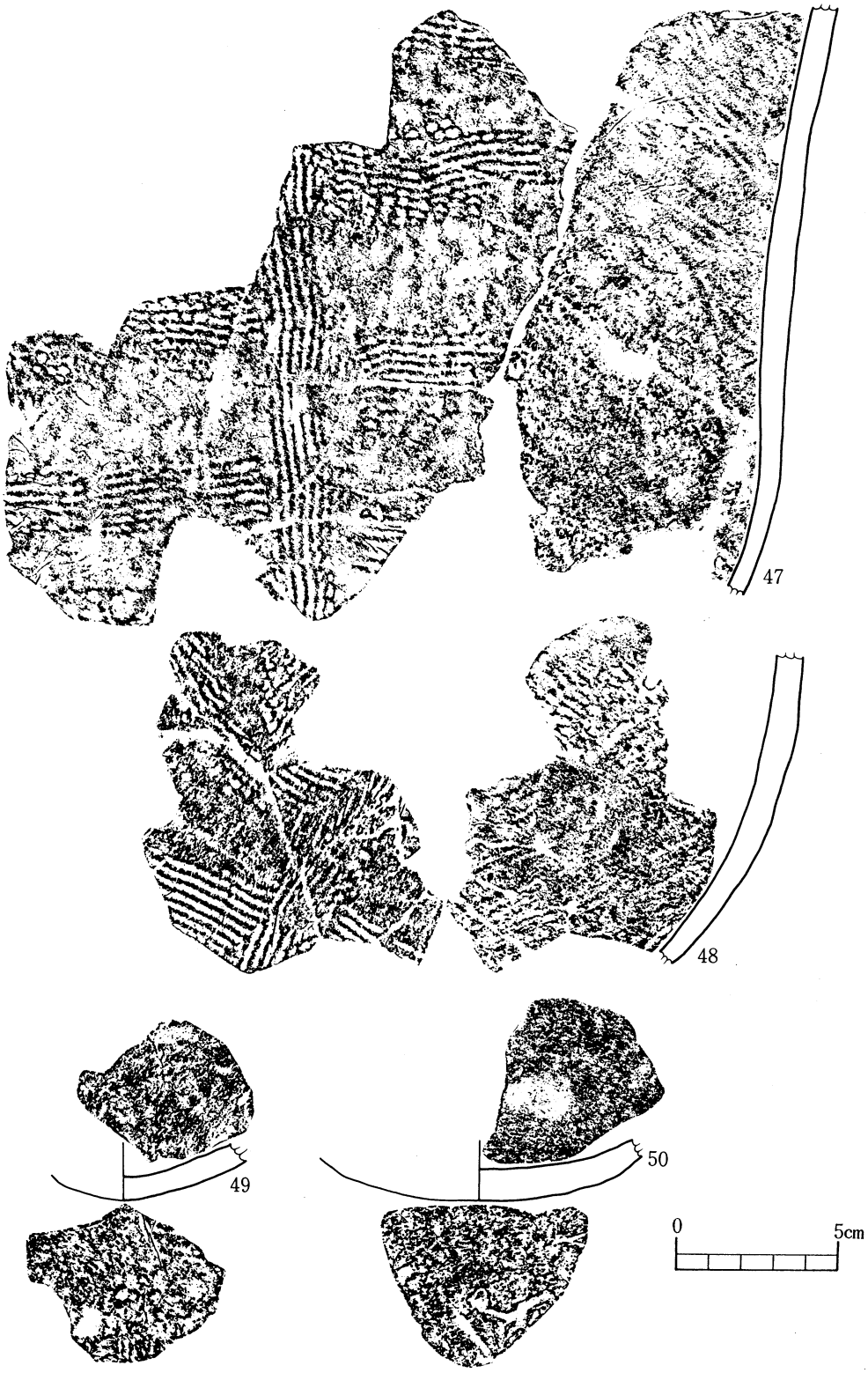
51～62は、直接の接合はみられず部分的には異質な施文も確認されるが、形態が類似し同一個体の可能性もある。51は、波状の山形をなす口縁部である。内外面とも、口縁上端から横位と縦位の押引条線文帯を組合せ施文する。特に、内面の地文の整形は条痕仕上げがみられ、その上から押引条線文帯が施文されている。色調は暗褐色を呈する。52は口縁部片で横位の押引条線文帯が施文されるが、その上から縦位に半截竹管状の刺突文が施文されている。この刺突文は初見であり、55には横位の刺突文が確認



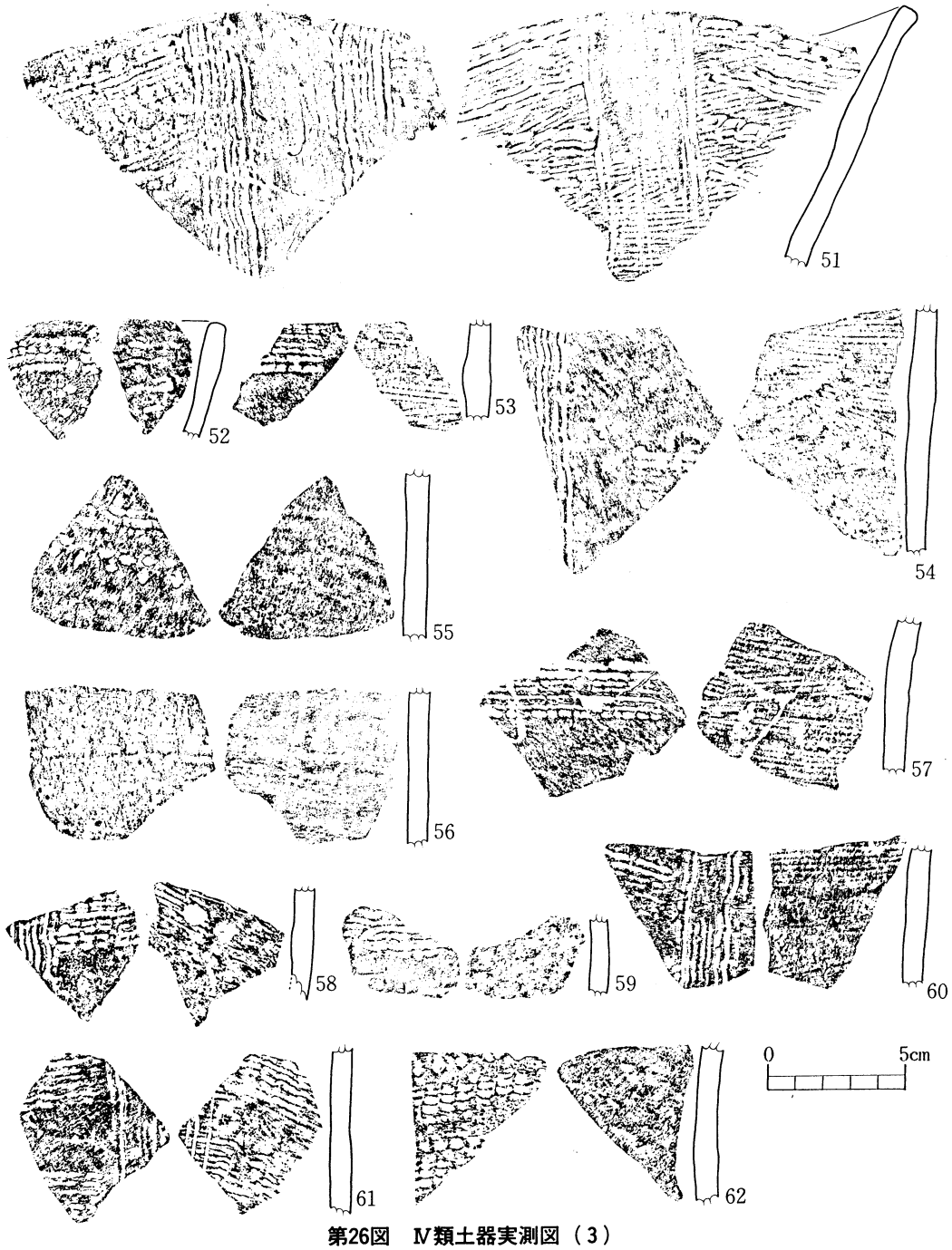
第23図　Ⅲ類土器実測図（４）



第24図　Ⅳ類土器実測図（1）



第25図　Ⅳ類土器実測図（2）



第26図　Ⅳ類土器実測図（3）

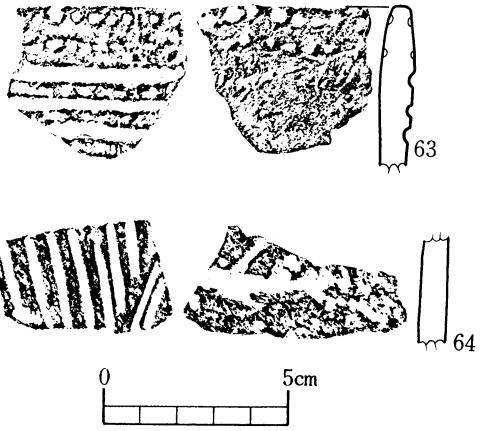
認される。53～62は、胴部片である。器外面は、縦位或は横位の押引条線文帯のいずれかが施文されている。しかし、器内面の整形には、条痕仕上げとナデ整形仕上げの二通りみられる。51・52の口縁部片の内面は条痕仕上げが確認されたが、同様な条痕仕上げは53・54・57・58・60・61にみられる。また、55・56・59・62は比較的丁寧なナデ整形の仕上げである。さらに、55・56・59・62の器表面は二次焼成を受けた感じが看取される。このことから、胴部上半部は条痕整形が施され、胴部下半部はナデ整形が施されたことが察知される。

④　Ⅴ類土器　（第27図－63・64）

Ⅴ類土器は、63・64で沈線文系土器で、わずか２点の出土である。

63は、Ｃ６区出土で口縁部片である。口縁部はほぼ直行し、口唇部は若干薄くなり平坦に納める。器壁は、７～９㎜の厚さを測る。口唇部平坦部には不明瞭ではあるが刺突文を施文した痕跡がみえる。口縁部外面は、上端に２条の刺突文を巡らし、それ以下は横位の沈線文が施文されている。無文部の地文はナデ整形である。器内面には横位に２条の刺突文を施文している。整形は丁寧なナデ整形で仕上げている。色調は、赤褐色から暗褐色を呈し、長石や石英の細粒と金雲母を混入している。滑石は含まない。焼成は良好で堅緻である。

64は、Ａ３区出土で胴部破片である。器壁は、７㎜程度と薄い。器外面には、沈線文が幾何学的に交差している。色調は、黄褐色から赤褐色を呈し、胎土には長石・石英・角閃石等を混入する。滑石は含まない。焼成は良好で堅緻である。



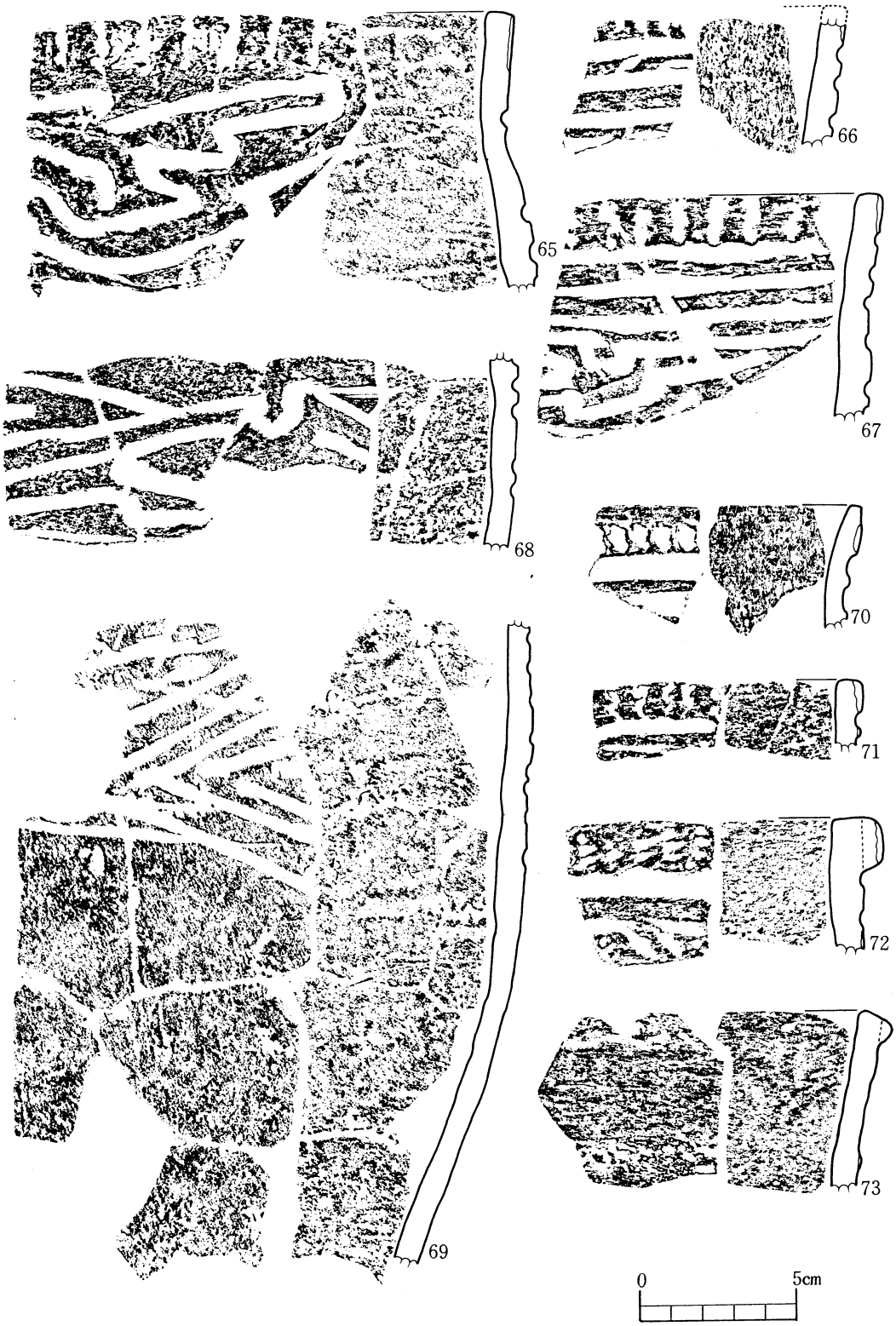
第27図　Ⅴ類土器実測図

⑤　Ⅵ類土器　（第29図・第30図－65～80）

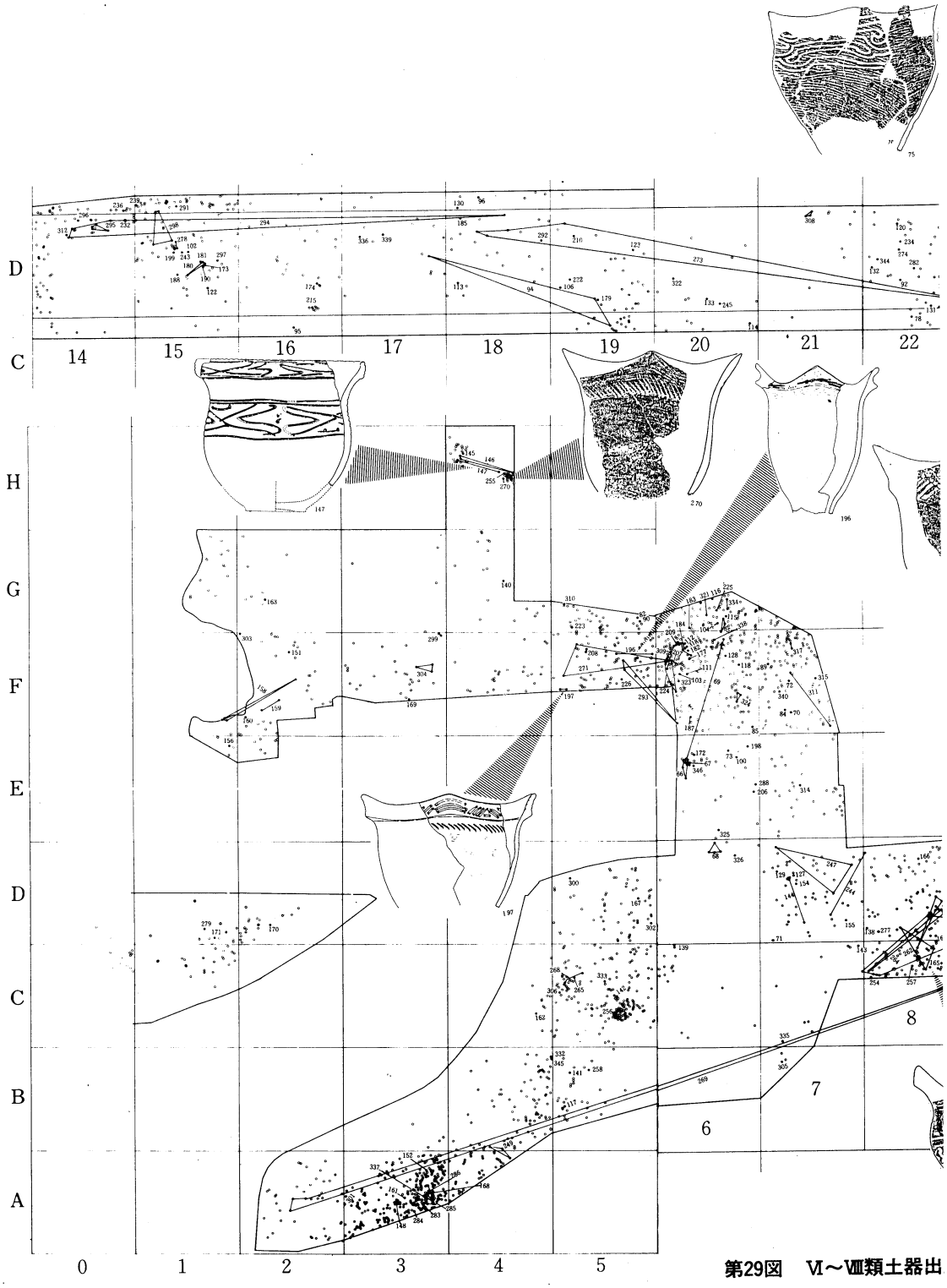
Ⅵ類土器は、65～80で貝殻刺突文＋凹線文系土器とした系統の土器である。貝殻刺突文を口縁部の上端に１条巡らせその下位には凹線文を展開するタイプである。

65～71と74～77まではこのタイプに該当するが、次の若干異なるタイプもこの系統に加えて説明することにした。72は突帯文上に貝殻刺突文が施され、73は口縁部上端に突帯文が巡りその下位に貝殻刺突文が巡るタイプである。78～80は貝殻刺突文に代って竹管状の刺突文を口縁上端に施文するタイプである。

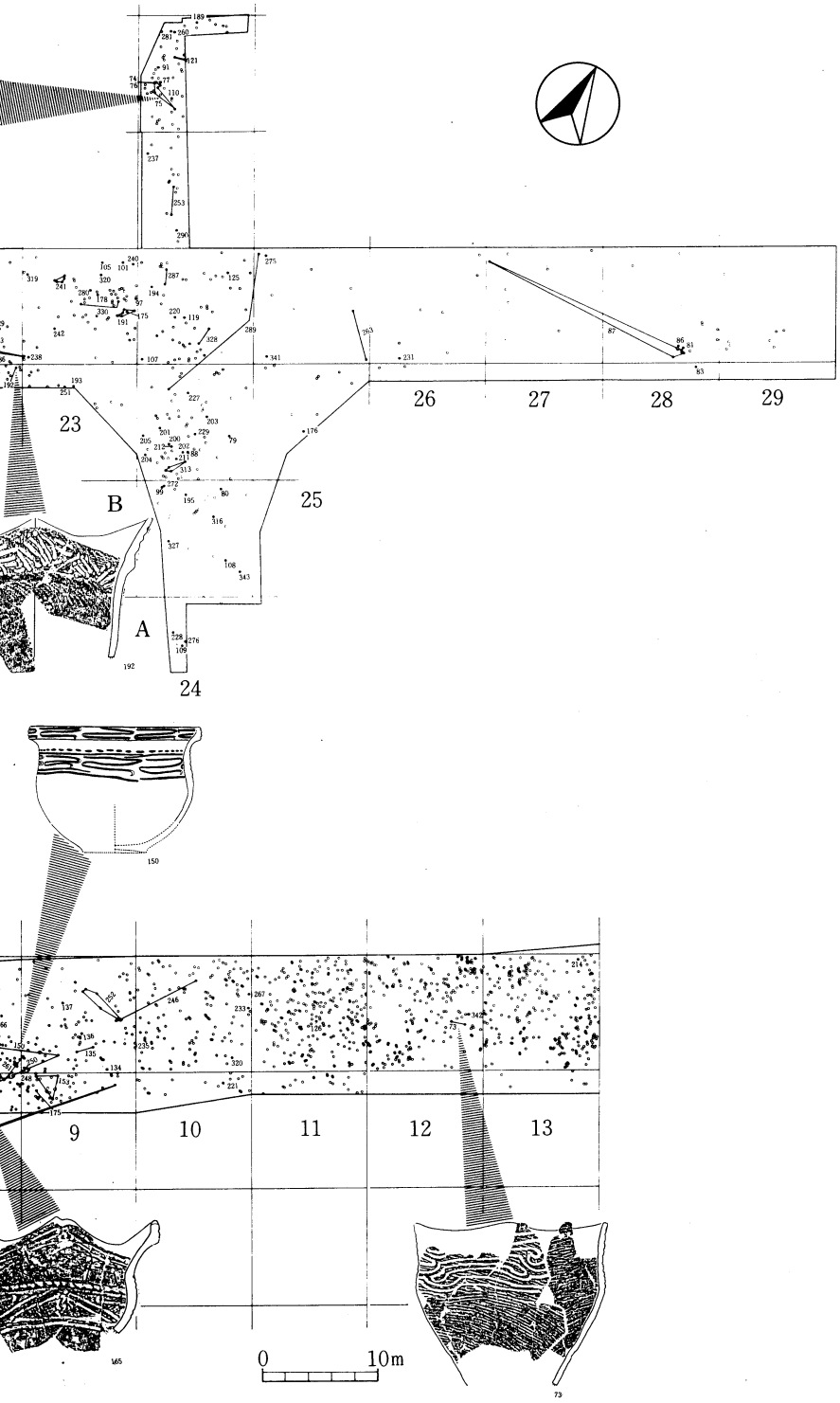
65～69は、その形態から同一個体と考えられるものである。65～67は口縁部片である。頸部付近から若干内湾気味に立ち上がる器形の口縁部で、口縁上端には貝殻刺突文を巡らせそれ以



第28図　Ⅵ類土器実測図（1）



第29図　Ⅵ～Ⅷ類土器出



土分布図

下は凹線文を施文するものである。凹線文は5㎜程度の比較的細いもので、平行線や曲線文や垂下渦文などを展開している。器壁は1㎝程度で比較的厚い。68・69は胴部片である。69には菱形文を重ねた文様も存在する。内外面の器面調整は、比較的荒い凹凸面が確認される。内外面とも、ケズリ整形ののちにナデ整形で仕上げている。色調は赤褐色から暗赤褐色を呈し、胎

第30図　Ⅵ類土器実測図（2）

土には多量の長石粒のほか石英粒を混入する。焼成は普通である。

70は、外反気味の口縁部である。凹線文は8㎜程度と太く丁寧で、貝殻刺突文も整然と施文されている。器面調整も丁寧なナデ整形で均厚な仕上げがみられる。色調は黄褐色を呈し、胎土には長石などの細粒をを混入する。焼成は、このタイプでは最も良好で堅緻である。

71は、65などに形態等は類似する。貝殻刺突文は直上から刺突し、貝殻腹縁の肋筋が明瞭に表現されている。

72は、口縁部上端に突帯を貼付け、その突帯文の上に貝殻刺突文を施文している。突帯文の下位には横位の凹線文が平行に2本巡り、さらにその下位には貝殻刺突文が施文されている。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石や石英や角閃石を混入する。

73は、口縁部上端に細い突帯を貼付け、下位には貝殻刺突文を巡らせるが、この細片では凹線文はみられない。胎土には、長石や石英の細粒のほか多量の金雲母が混入されるのが特徴的である。このタイプは、このⅥ類土器の系統とは別系統の可能性がある。

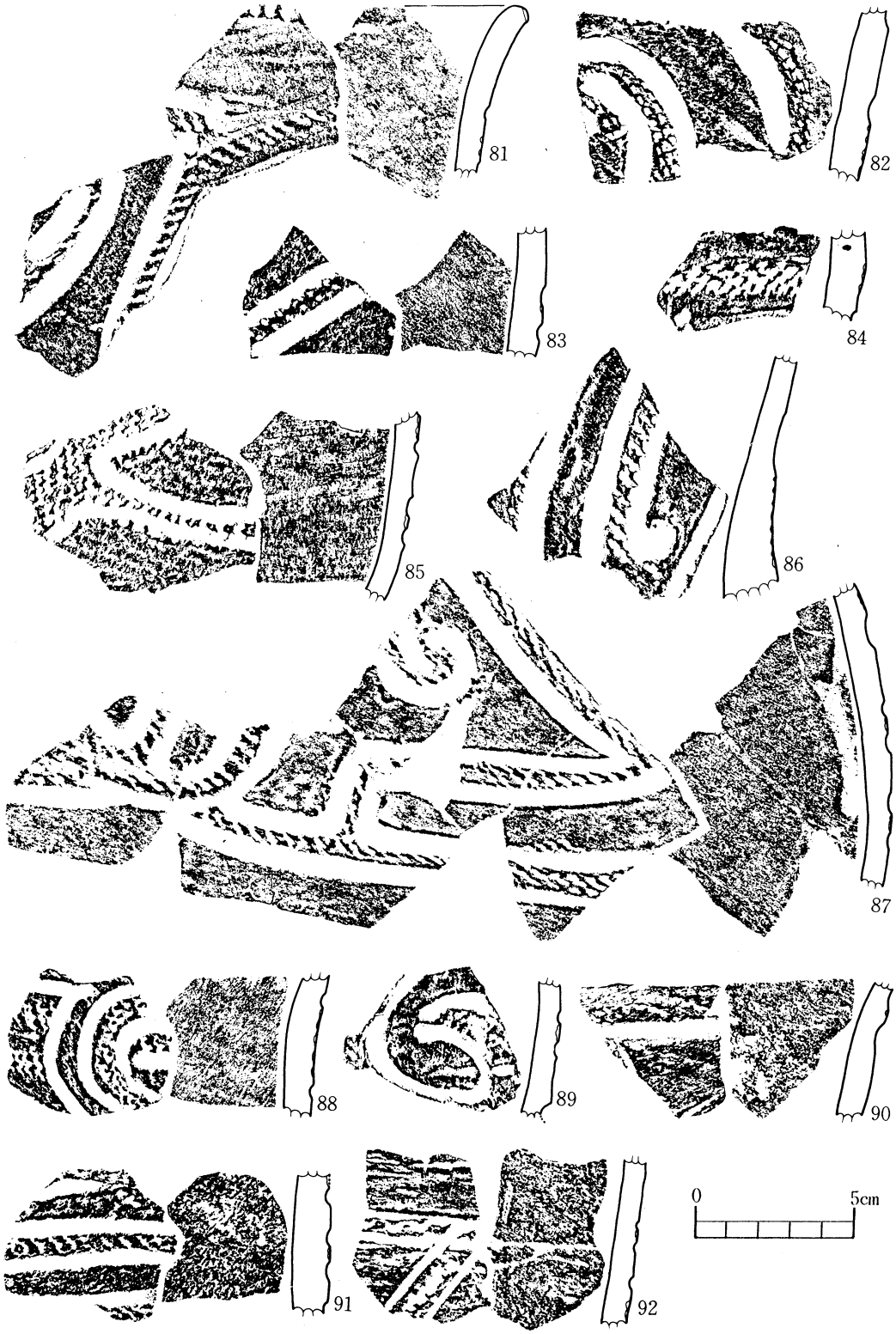
74～77は、同一個体と考えられる。胴部は若干張り、頸部から口縁部は内湾気味にしまり外反して立ち上がる。口縁部は波状の山形口縁を呈し、口唇部は丸味をもって納める。器壁は、0.9～1.0㎝の厚さを測る。器内外面は条痕整形の仕上げで、特に口縁付近は大きなうねりの条痕文が施されている。文様は、口縁部上端に貝殻刺突文が巡り、その下位から胴部上半まで凹線文が施文される。凹線文は、5㎝程度の比較的細い凹線文で平行線や曲線文を描いている。色調は暗茶褐色から茶褐色を呈し、胎土には長石や石英の細粒のほか金雲母が混入される。焼成は良好で堅緻である。

78～80は、貝殻刺突文に代って竹管状の施文具の刺突文が施文されるタイプである。口唇部は、平坦に納めるもの（78・79）と細く仕上げ丸く納めるもの（80）がある。刺突文は、78・79は斜めに打ち込み若干長く施文し、80はこの細片では円形の刺突文で凹線文を挟んで2列に施文されているのが確認される。内外面とも丁寧なナデ整形で仕上げている。

⑥ Ⅶ類土器　（第31図－81～92）

Ⅶ類土器は、81～92で二本平行の凹線文間に貝殻刺突文を施文充塡させるタイプで、これまで擬縄文などとも呼ばれていた。

81～89・91は、貝殻腹縁の2肋程度の短い施文具で平行凹線文間に縦位或は若干斜位に刺突充塡させるものである。81～87は、直接の接合はみられないが形態的特徴から同一個体であることが考えられる。81は、口縁部破片である。口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸味をもって納めその稜部には刻目文が施される。82～87は胴部破片であるが、85・87のように胴部は僅かに球状に張る。また、87には、装飾突起文か把手状のものを貼り付けた痕跡を示す肥厚部分が残る。文様は、貝殻刺突文を充塡した二本平行の凹線文帯をもって三角文や渦文や蕨手文等を描く。凹線文の幅は0.8㎝程度と比較的太く、器壁は0.8～1.0㎝程度の厚さを測る。器内外は丁寧なナデ整形で仕上げ、焼成は良好で堅緻である。色調は赤～黄褐色を呈し、胎土には長



第31図　Ⅶ類土器実測図

石粒や金雲母を混入する。

90は、平行凹線文間に比較的長い施文具（貝殻腹縁が6肋）で斜位に刺突充填させる珍しいタイプである。92は、平行凹線文間には1条の横位の貝殻刺突文を施文するタイプである。

⑦ **Ⅷ類土器**　（第32図―93～134）

Ⅷ類土器は、93～ 134で細形平行凹線文系土器である。この中でこの系統に相応しく無いものも存在する。それは 118・123・126・130～134などであるが、取敢えず凹線文を所持するということでここで説明することにする。

93～ 129のⅧ類土器とした細形平行凹線文系土器は、細形の二本の平行凹線文様で飾る土器を基本的には示している。この二本平行凹線文土器に該当する土器は、本遺跡では比較的多くみられるが、形態上、同一系統に括れても同一型式とするには特徴の違いが大きいものも多い。そのため個々に特徴を説明する。

93は，胴上半部から口縁部を知るかなり大きな破片である。胴部は球状に張り、頸部で締まり口縁部は外反する。器壁は、胴部付近では0.8mm程度の均厚で凹凸の少ない安定した器形をつくる。外反する口縁部は肥厚し、口唇部は丸味をもって納める。器内外面は、ヘラナデの丁寧な整形が看取される。器面の文様は、4mm程度の細形の二本平行の凹線文で構成されている。二本凹線文の端部は蕨手状に曲がり、端部では強く刺突してアクセントをつける。色調は黄褐色から暗黄褐色を呈し、胎土には長石や石英の細粒を含む。焼成は、非常に堅緻で良好である。

94は短く外反する口縁部片であるが、頸部内面に二本の凹線文が施文された珍しいタイプである。95～97は口縁部片であるが、器外面は直線的に口唇部に達するが器内面は頸部付近に稜をつくり外反する。口唇部は、細くなり丸く納める。

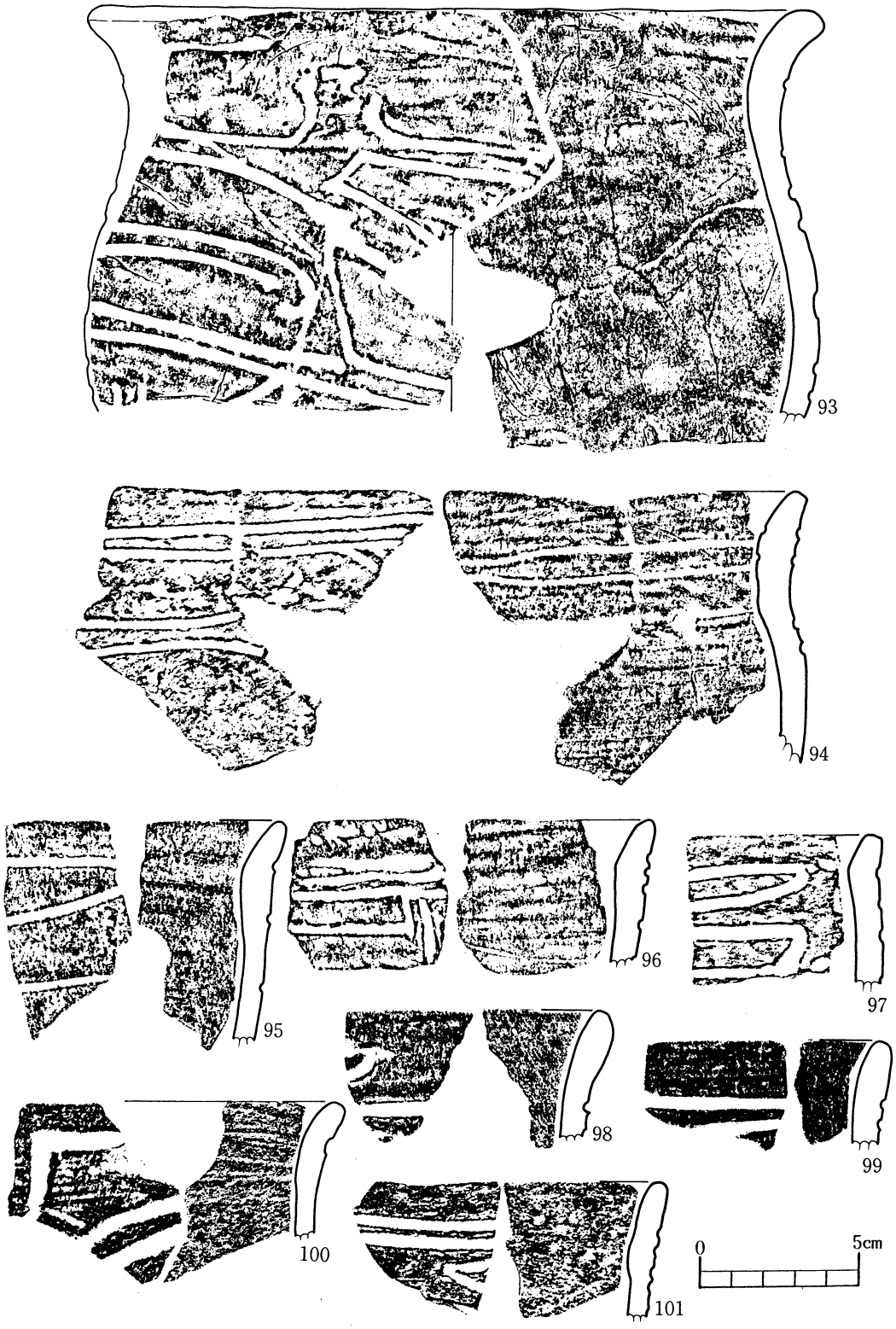
98～ 101は口縁部が僅かに肥厚して丸味をもって納めるもので、このタイプの一般的な口縁部である。器面には二本凹線文が施文される。

104・111などには、三本平行の特異な凹線文がみられる。

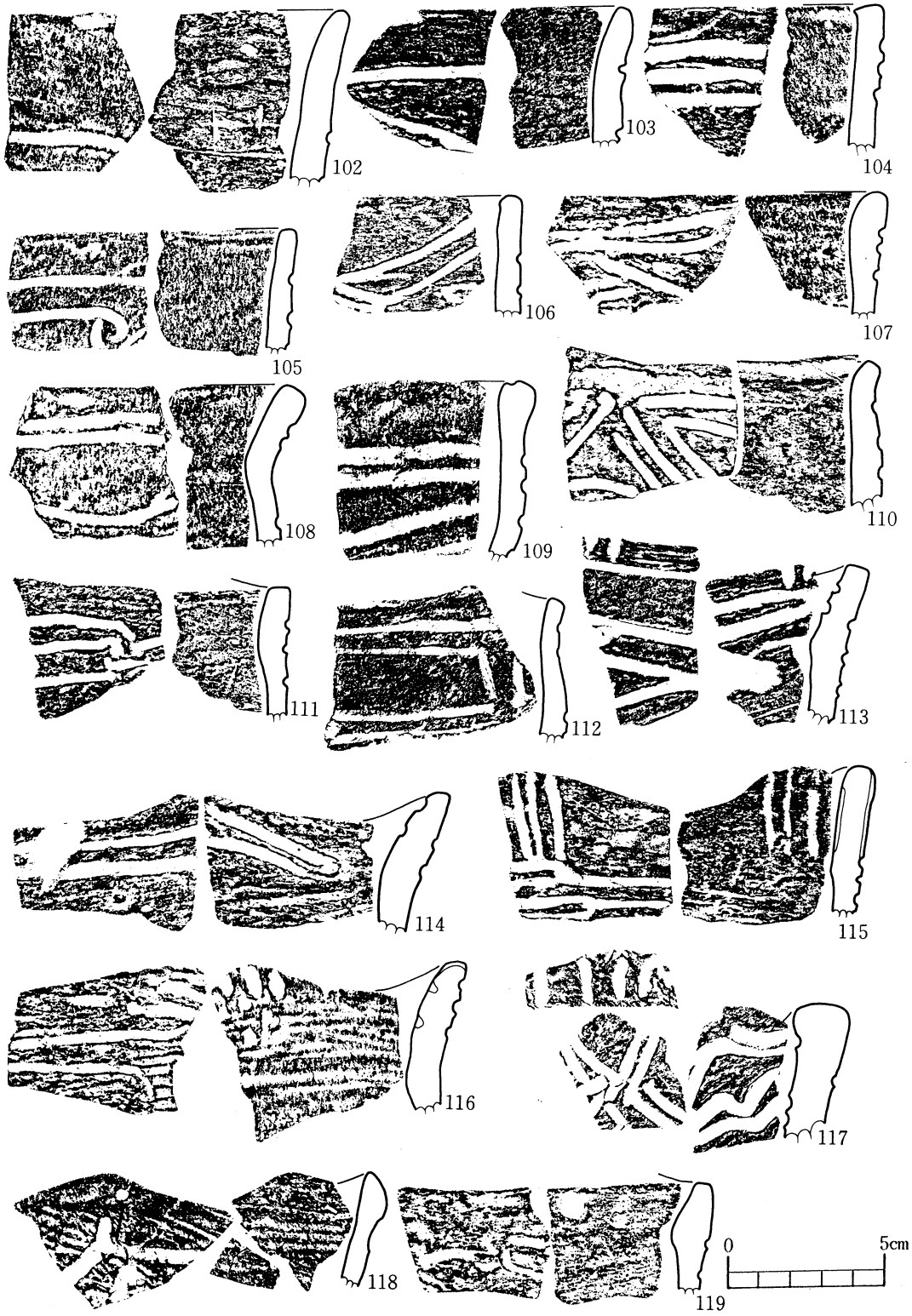
105・111の凹線文には、磨消縄文土器等に頻繁にみられる鉤手状の繋ぎ文が使用されている。

113～117・122・128には、口縁部内側にも文様が施文される。これらの文様は、波状口縁の山形に高くなった部分に施文されている。ほとんどが外面と同様な凹線文が施文されるが、116には山形の頂部に刻目が施され内面には刺突文が施文される。122の内面には、貝殻刺突線が施文されている。このように、外面とは全然異なる文様を施文する場合もある。

118は、内外面の地文には荒い条痕文が施され、その上から凹線文が施文されるタイプである。口縁部は波状の山形を呈する。123は、口唇部に二条の凹線文を巡らすタイプである。126は、口縁部が若干内湾する形で立ち上がり僅かに肥厚する。そして口縁部外面には五条の凹線文を巡らすタイプである。いずれも形態上、これらの土器は、このⅧ類土器とは別系統と考えられるタイプである。



第32図　Ⅷ類土器実測図（1）



第33図　Ⅷ類土器実測図（2）

第34図　Ⅷ類土器実測図（3）

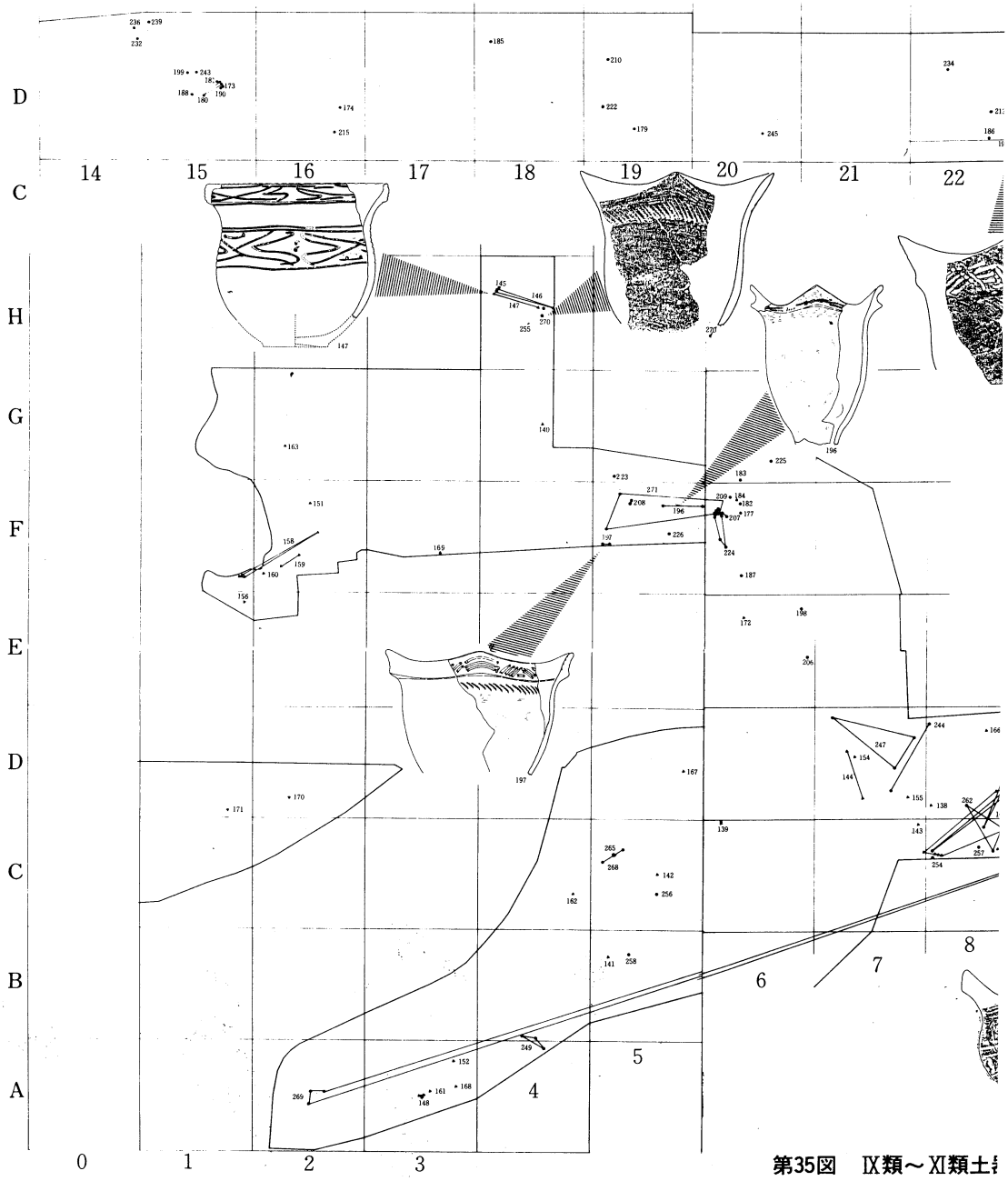
130～134もⅧ類土器の中では特異なものであり、なかには別系統のものも存在する。130は、波状口縁部の頂部に、先の尖った半截竹管のヘラ状施文具で比較的大きな孔を開けて装飾化している。この施文具での刺突孔は、山形口縁部の外面にも縦位に連点状に施文さる。さらに口縁部上端にも横位に施文されるようである。131は頸部から口縁部の破片であるが、下端の凹線文の下に沿って密なヘラ刺突文が巡っている。さらに上部の凹線文間にも同様な刺突文が施文されている。132は、口縁部は大きく外反して口唇部を丸く納める。口縁部には、横位の凹線文が巡り、凹線文間には横位の貝殻刺突文（線）が施文される。貝殻刺突文（線）は、二段に弧状に施文される。133の口縁部は、内面が上を向くほど大きく外反している。そして上を向いた内面には、途中で止る三本の平行する凹線文が施文される。凹線文は、端部で刺突されてアクセントをつけて止める。丸味をもった口唇部には刻目が施され、下を向く外面は無文である。一見曽畑式土器にもみえるが、形態上は後期土器である。134は、胴部破片であるが、凹線文の渦文の下に貝殻刺突文を施文するタイプである。

⑧ Ⅸ類土器　（第36図～第43図－135～172）

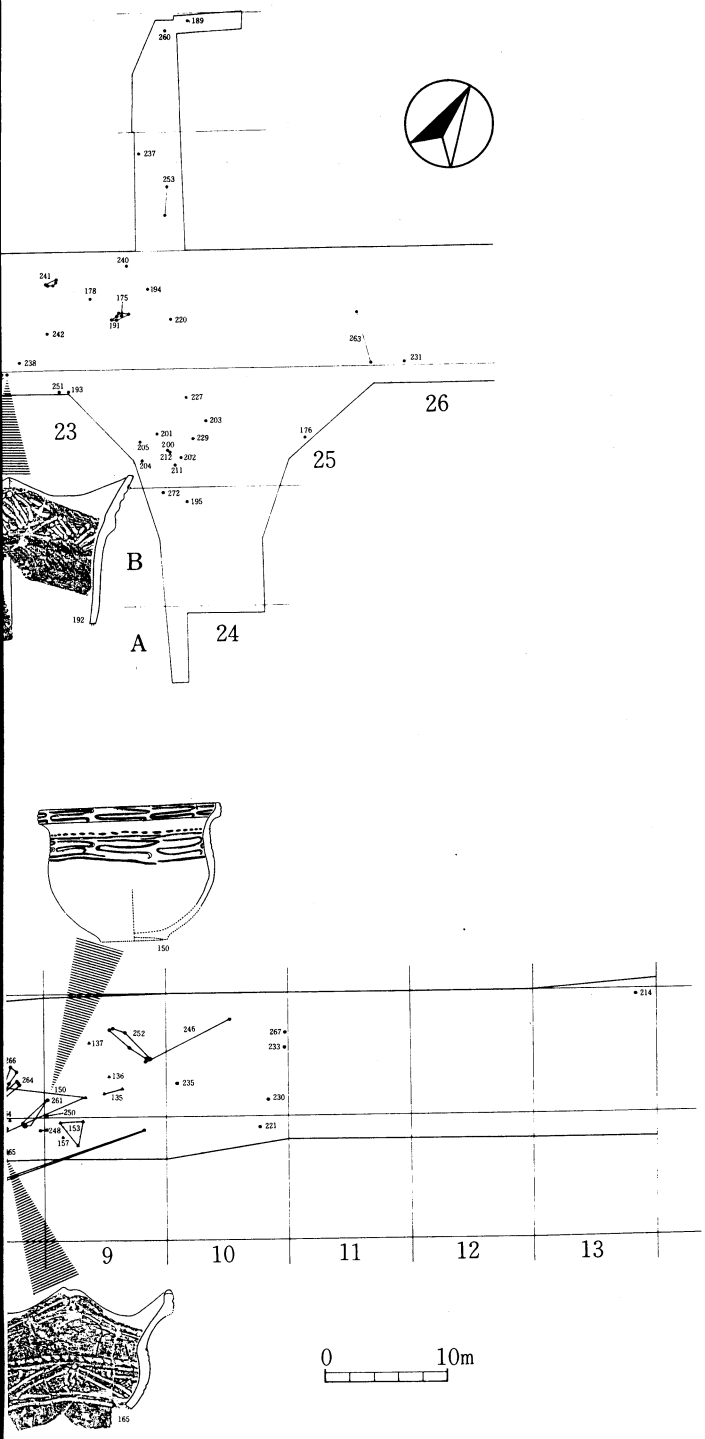
Ⅸ類土器は、肥厚口縁を呈した磨消縄文系土器である。そのなかで164は、形態からみて磨消縄文系ではあるが、別型式に属する土器と考えられる。

135～172(164を除く）は、胴部は球状に張り、口縁部は外反して立ち上がり、内湾して肥厚する。このタイプは、135～147・150 のグループとその他のグループに、形態上、大きく二つに分けられる。

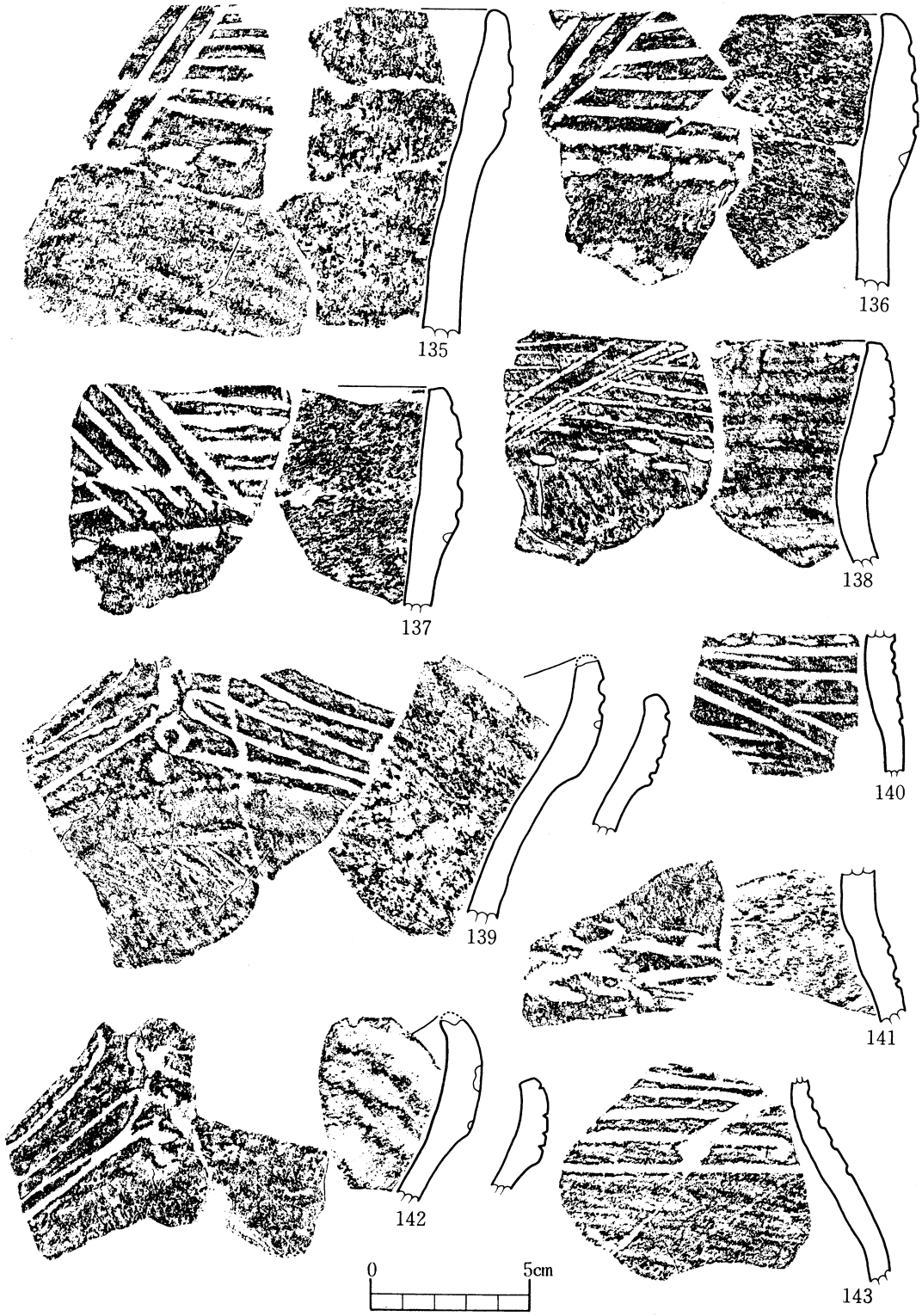
135～147・150には、147・150のように底部を除いてほぼ完形に復元される大形の破片が存在し、その形態が看取できる。147は、胴部は球状に張って頸部は僅かに締まり、口縁部は大きく外反して内湾し、肥厚した口縁をつくる。口縁は平縁で、口径は23cmを測る。丸味をもった口唇部には、比較的雑に刺突文が施文されている。肥厚口縁部分には、上下端に直線文を横走させ、その間に直線文を交差させた「X」字状文と曲線文の「S」字状文を組合せて文様帯を描く。頸部から胴部上半部には、口縁部同様の直線文や曲線文の組合せ文が描かれる。そして、短線や刺突文で空間部を埋めている。短線の両端には、刺突文状に突いてアクセントをつけている。特に注目すべきは、口縁部と頸部から胴部上半部の沈線文間に部分的に縄文が確認されることである。縄文は部分的な施文で明瞭ではないが、無節のRの撚りが看取される。器内外面は比較的丁寧なナデ整形が確認されるが、磨消縄文土器に一般にみられる精巧なナデ整形ではなく、焼成も普通である。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石などの細粒を含む。 150は口縁は平縁で口径は21cmを測り、147とほぼ同じ器形を呈する。口唇部は平坦におさめるが、文様は施文されない。文様は、肥厚口縁部と頸部から胴部上半部にかけて同じ構成の文様が施文されている。一本の沈線で逆「S」字の流水文状の文様を、横位に連続して施文している。沈線の端部は、部分的に刺突文状に突いてアクセントを付ける場合がある。頸部には、1cm弱の短沈線文が横位に連続して施文されている。そして、その下の頸部から胴部上半部の文様帯



第35図　Ⅸ類～Ⅺ類土



器出土分布図



第36図　Ⅸ類土器実測図（1）

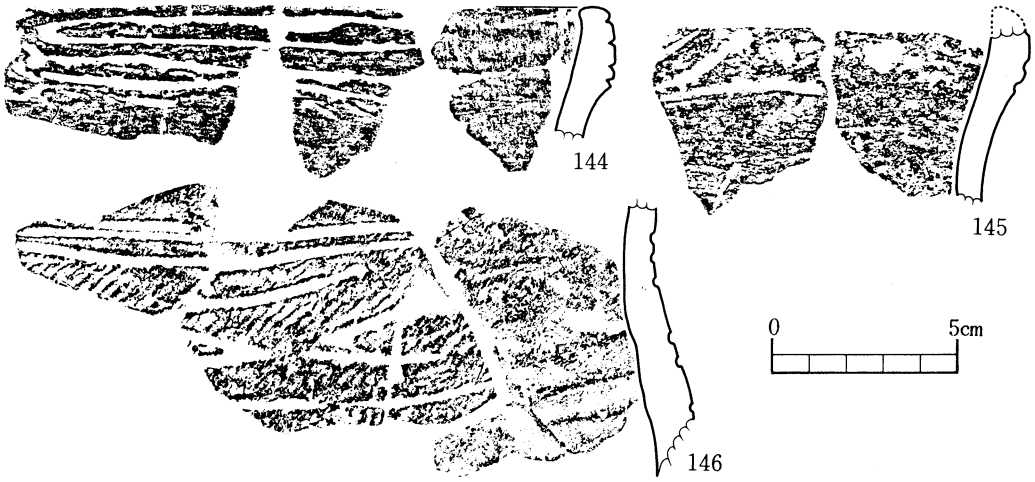
には、上下に横位の直線文を巡らせ、その間に肥厚口縁部に描かれた逆「S」字の流水文状の文様を横位に連続して施文している。150の場合は縄文は確認されていない。整形、焼成、色調、胎土は、147 とほぼ同様である。

135～138は同一個体の口縁部である。平縁の比較的幅広の肥厚口縁部をもつ。そして、この肥厚口縁部に直線文と短沈線文で文様が施文されている。3～5条の斜位の直線文と5～6条の横位の直線文を組合せた文様で、その下位に連点文状の短沈線文を巡らせている。

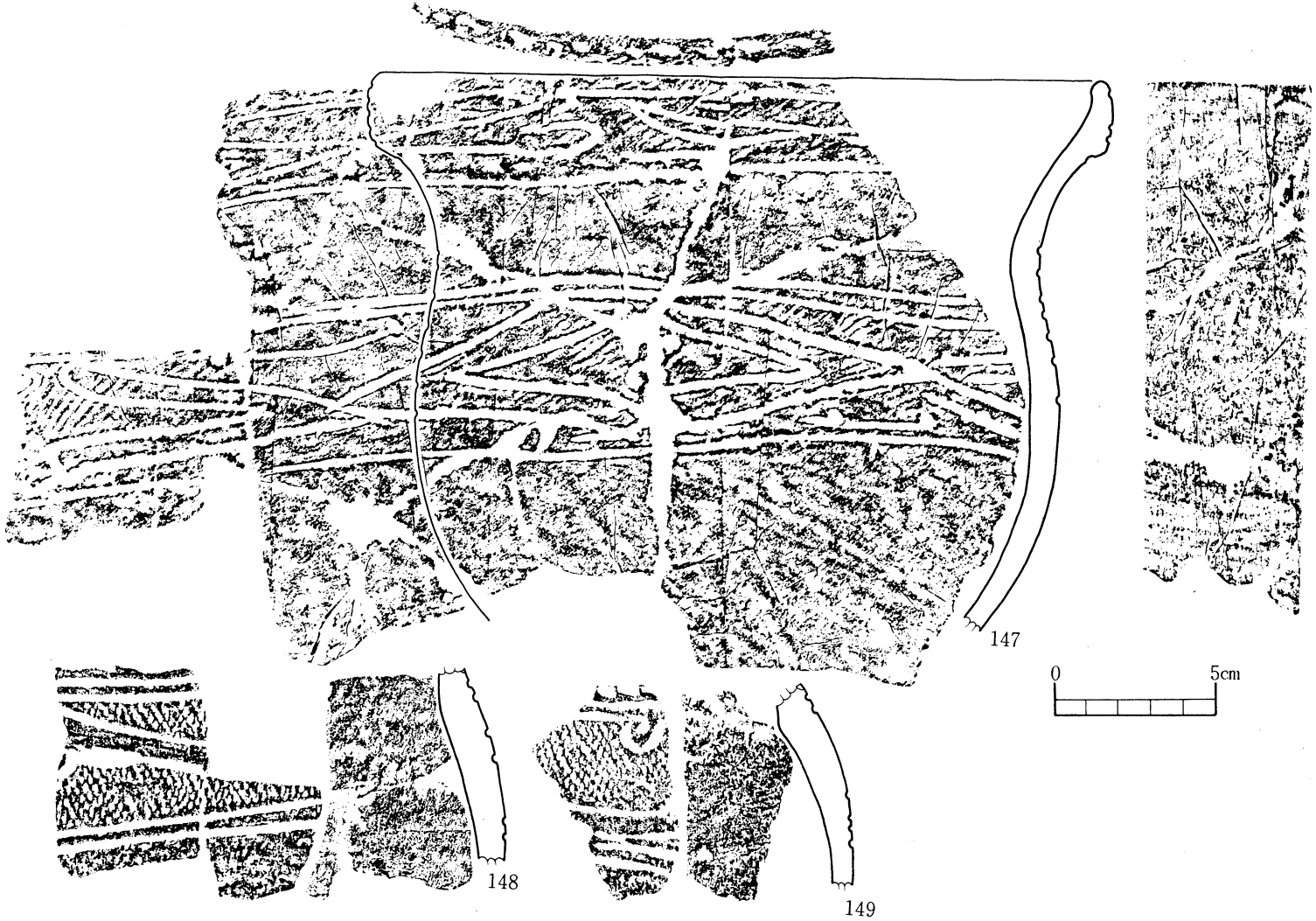
139・142は、同タイプの波状の山形口縁であり、144・145も同類と考えられる。波状の山形口縁部の頂部には、刺突文状の刻目が施文されている。肥厚口縁部には、横位の平行沈線文が施文されるが、波状部分ではカーブして下の沈線文に続く。これらの沈線は、器面に深く描かれて若干稚拙な施文である。波状部分の沈線文がカーブしてできた無文部には、半截竹管状の施文具で「C」字状と逆「C」字状を組合せた刺突文を縦位に施文している。

140・141・143は、頸部から胴部にかけての破片である。140・143は、横位の或は斜位の平行する直線文が施文されるもので135の口縁部破片と推定される。146は胴部破片で「X」字状に構成された沈線文間に縄文が施文されており、147と同一個体と考えられる。

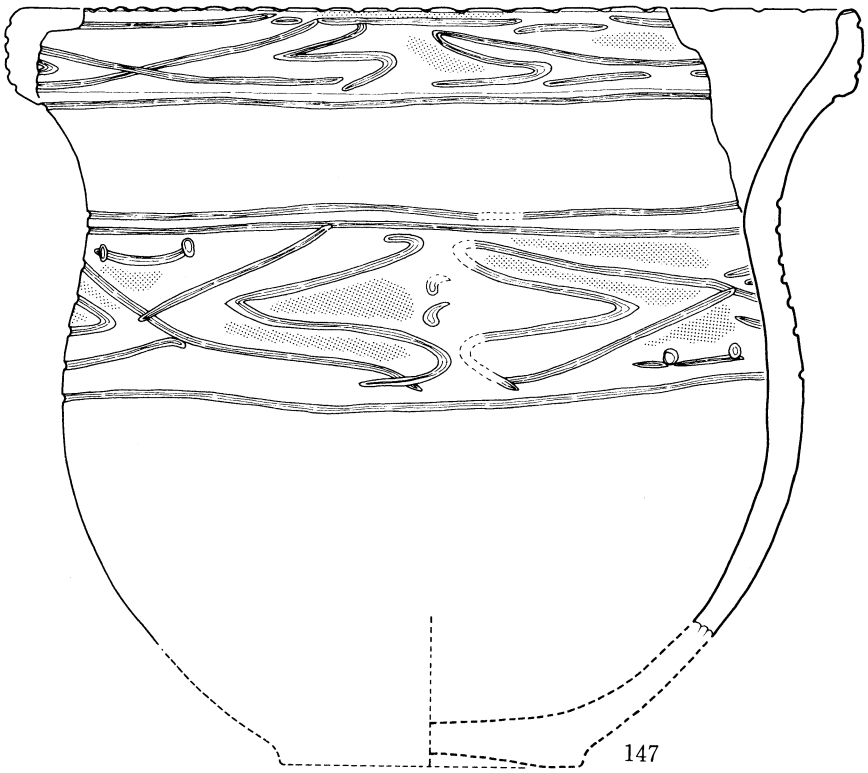
148・149・151～172（164 を除く）は、その形態から同一グループの型式に属すると考えられるものである。158・159は、このグループのかなり大きな胴部から口縁部の破片である。胴部は球状に張り、頸部は締まり、口縁部は大きく外反して内湾し肥厚した口縁をつくる。口縁の肥厚帯は比較的幅狭く、大きく波状の山形口縁となる。口縁肥厚帯には、平行する三本の沈線文が巡らされ、その間に縄文を施す。頸部には、連点文状の刺突文が横位に巡らされている。その下の頸部から胴部上半には、二本平行の横走する沈線文間に二本平行沈線文で三角文を描き、その中央部には「C」字及び逆「C」字状の半弧文の組み合せ文を施文したり半弧文を直

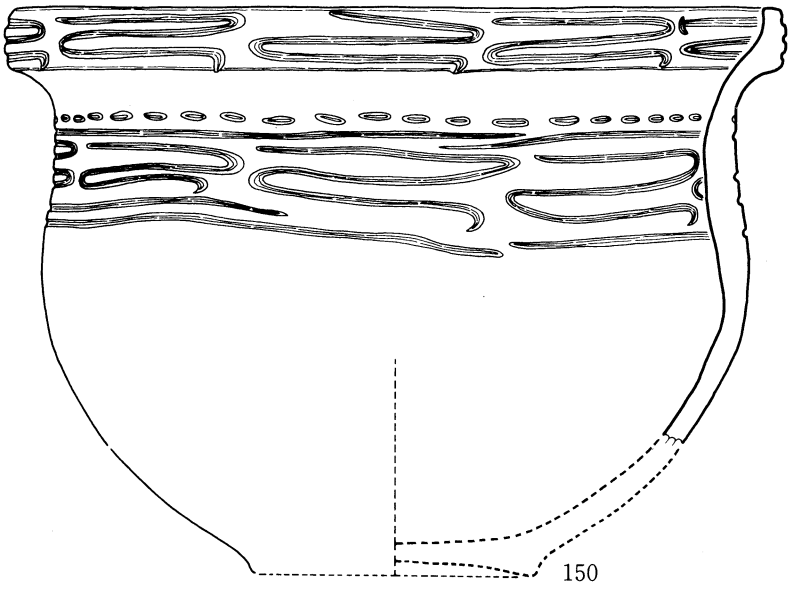


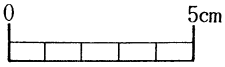
第37図　Ⅸ類土器実測図（2）



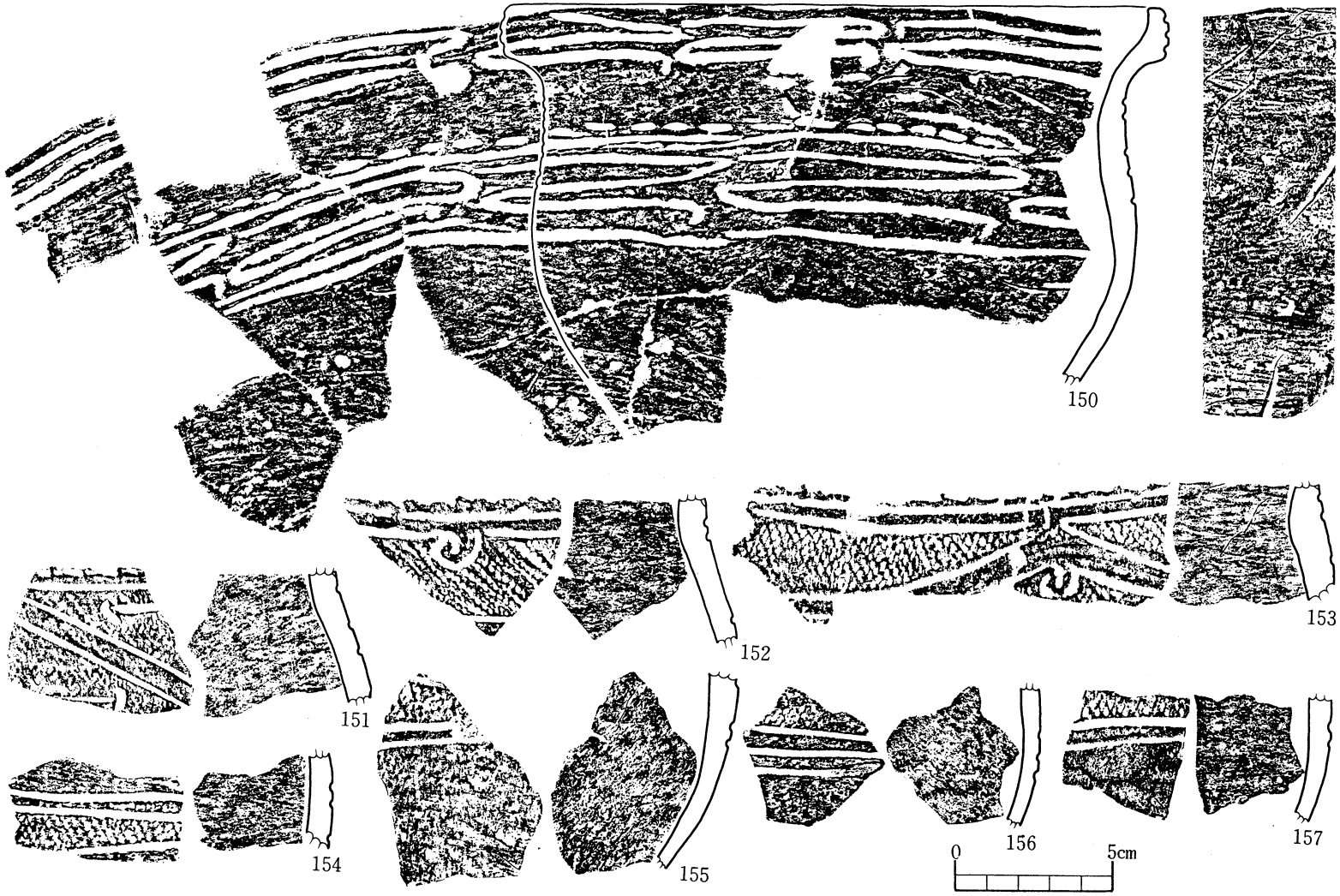
第38図　Ⅸ類土器実測図（3）



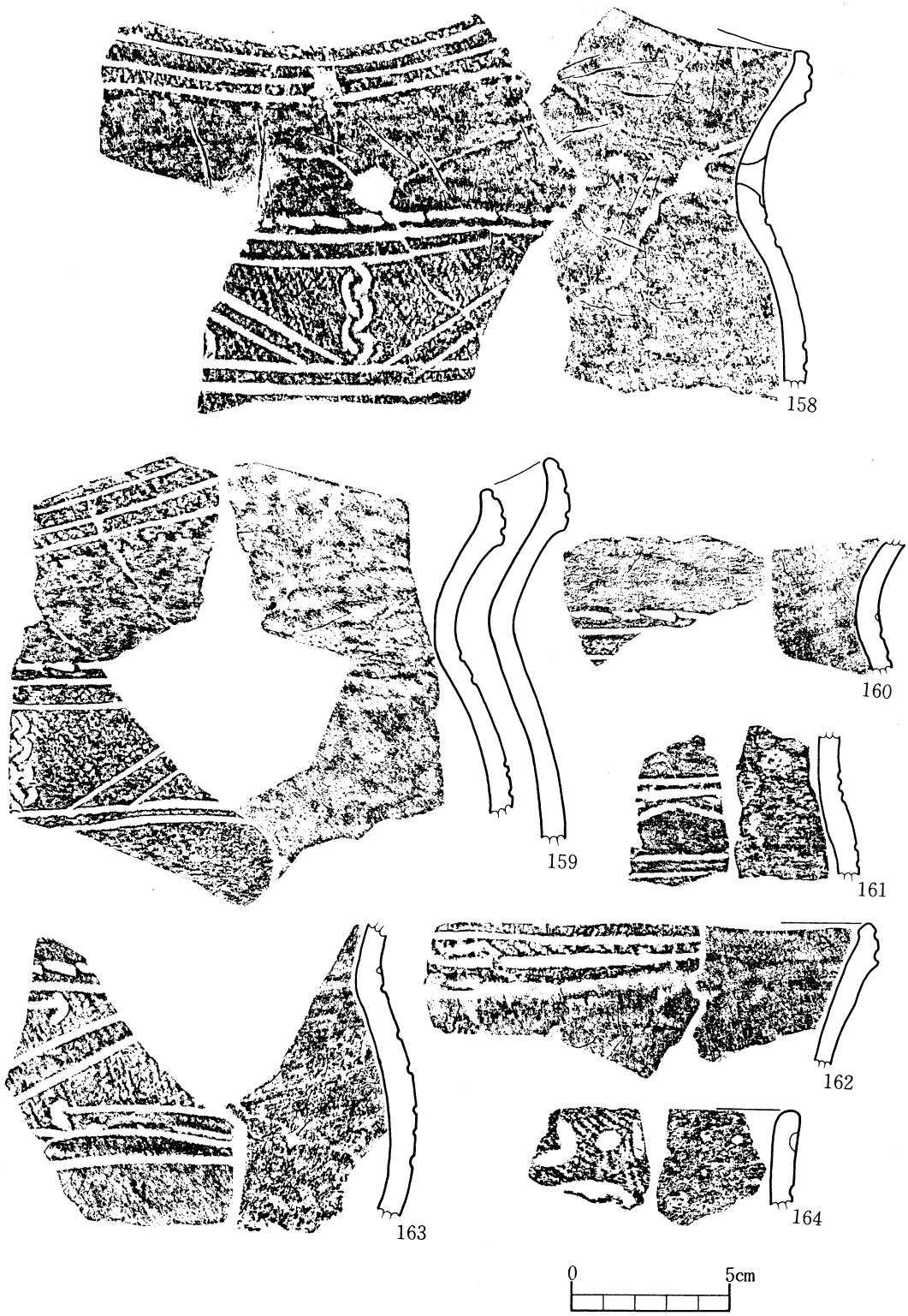




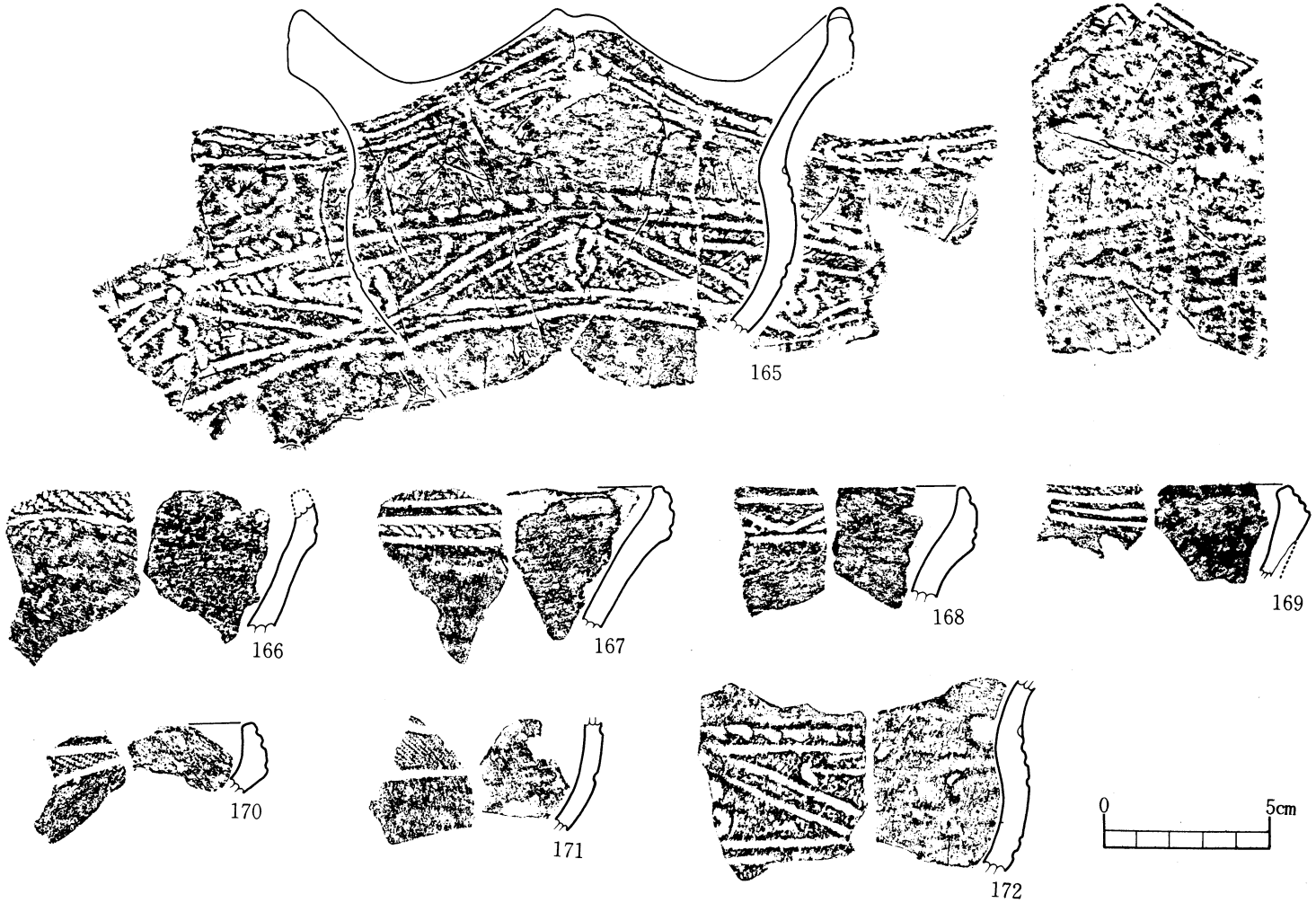
第39図　Ⅸ類土器実測図（4）



第40図　Ⅸ類土器実測図（5）

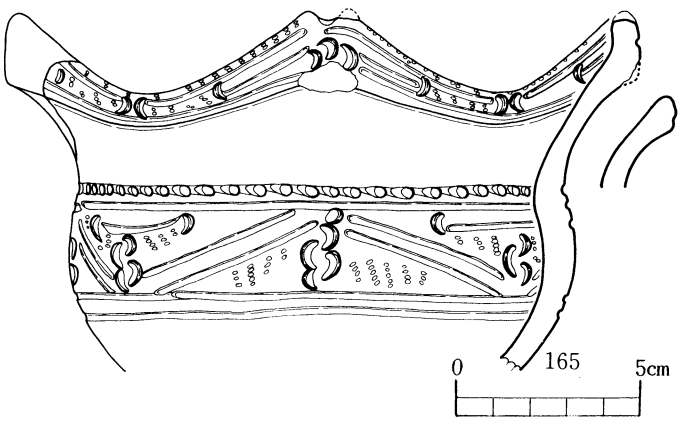


第41図　Ⅸ類土器実測図（6）



第42図　Ⅸ類土器実測図（7）

線文の端部に施文する。そして、無文部には縄文を施すいわゆる磨消縄文土器である。縄文は、148・149・152～154・156・158・163・166 などの比較的施文の明確なものをみると、ほとんどが単節のＲＬ撚りが観察される。また、164は同じ単節のＲＬの撚りであるが原体は若干小さく、171も同じ単節のＲＬの撚りであるが原体は固く撚った極小の原体であり、この２破片については別原体と考えられる。器内外は丁寧なナデ整形の精巧な仕上げがみられ焼成は良好で堅緻である。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石や角閃石等を含む。165は、底部を除いてほぼ完形に復元されるものである。胴部は球状に張り、頸部は僅かに締まり、口縁部は大きく外反して内湾肥厚した口縁をもつ形態である。口縁部は波状の山形口縁を呈し、口径約17cm、胴径約14.5cmの比較的小型の鉢形土器である。口縁部から胴部文様は、158・159と同様の構成であり、同じ文様の範型によるものと考えられる。山形口縁の頂部には刻目が施され、山形口縁の幅広くなった肥厚帯には直線文に半弧文を組合せて主文様部をつくっている。口縁部と胴部の沈線文間の無文部には縄文が施文され、器形・整形・文様とも精練された華麗な形態に仕上げられている。なお、158には、頸部に径７mm程度の焼成後の穿孔が存在する。穿孔の左側には紐ずれ痕跡が確認され、補修孔であることが看取される。



第43図　Ⅸ類土器実測図（８）

148・149・151～172（164 を除く）は、このグループの口縁部と胴部破片である。そのうち168の肥厚口縁の文様には、直線文で三角文が描かれている。他の口縁部にはみられない構図であるが、胴部文様の構図とは一致する。152には、二本平行線の下線から垂下した鉤手状繋ぎ文様の弧文が描かれている。その他の破片は、158・159・165などの大形の破片の文様に一致する。また、整形、焼成、色調、胎土もほとんど類似する。

164は、直行の口縁部で磨消縄文である。口唇部は丸味をもち、口縁外面には曲線文や刺突文が施文され、無文部には縄文が施されている。色調は黄褐色を呈し、胎土には長石粒を混入する。焼成は良好である。

⑨　Ｘ類土器　（第45図～第50図－173～243）

Ｘ類土器は、173～243で口縁部が肥厚して屈曲するタイプである。196や197はこのタイプで完形に復元されるものである。このタイプは、口縁部に特徴がみられる。口縁部を肥厚させて断面三角形あるいは「く」の字形に形づくり、口縁外面下端には強い稜ができる。口縁部は波状の山形口縁を呈するものが多いが、本遺跡出土のもので平縁口縁状に表現したものは細片の

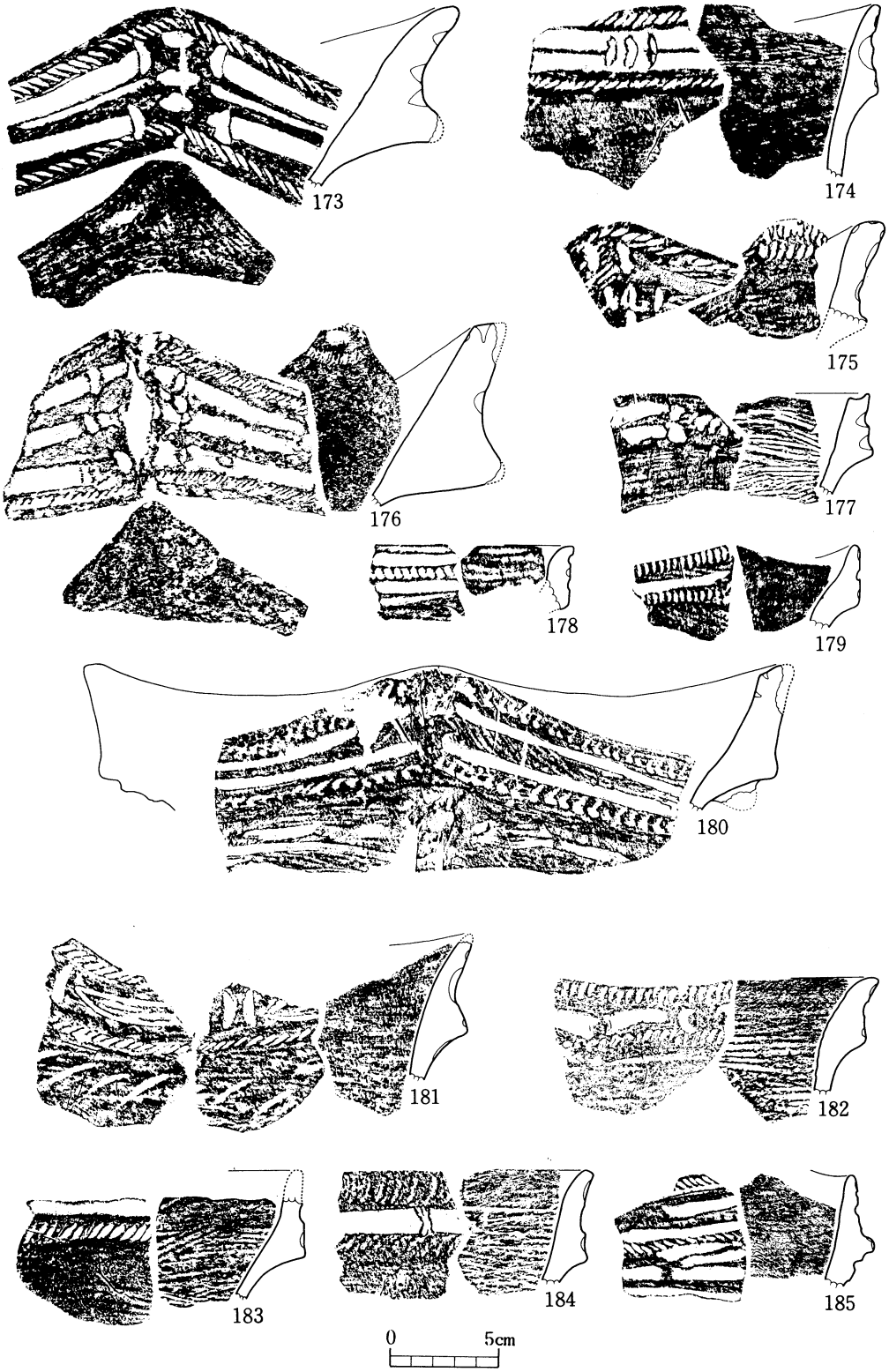
ためであり、山形口縁の可能性も強い。このタイプは、この口縁部を中心に文様帯がつくられる。文様には、半截竹管状の連続ヘラ刺突文（爪形文）、同施文具での凹線文と凹線文端部の刺突文（爪形文）、貝殻刺突（線）文などがある。一般的には、文様帯上下端に連続する刺突文（爪形文）を横走させ、その間に上記文様を施文している。主文様の特徴で次の様に区分して説明する。

〔**太形の凹線文のタイプ**〕173～177・182～184・187は、この連続刺突文間に幅広で太形の凹線文と刺突文を施文するタイプである。凹線文と刺突文は同一のヘラ状施文具で施文されており、施文具の幅は1.5～1.0cmと太い。凹線文の幅は、施文具の押え具合で若干細くなる。凹線文の端部、つまり波状口縁の山形部分には、刺突文を多用しアクセントをつけ主文様部を形成している。また、177などのように、凹線文の途中にも刺突文を施文する。これに類似するタイプに198～205がある。このタイプは、上記の太形凹線文と刺突文の施文の他に貝殻刺突文（線）を加え施文するものである。貝殻刺突文（線）は、凹線文間の無文部に貝殻腹縁を横位に刺突し施文するもので、直線と弧状になるものがある。整形は、条痕整形の後に丁寧なナデ整形で仕上げるものと地文の条痕が残る程度にナデ仕上げするものとがある。色調は、暗褐色から茶褐色、そして赤褐色のものまで色々である。胎土には全般に長石粒を含むが、金雲母を含むもの（174・175・177・181・182・184・187）と含まないものがある。焼成は、一般的に良好である。181は、刺突文（爪形文）は同様の太形のヘラ状施文具の使用がみられるものである。しかし太形凹線文は描かれず、文様は細沈線文で描かれている。口縁部文様帯外の稜部の下端に貝殻腹縁での刺突文（線）が施文されるタイプである。

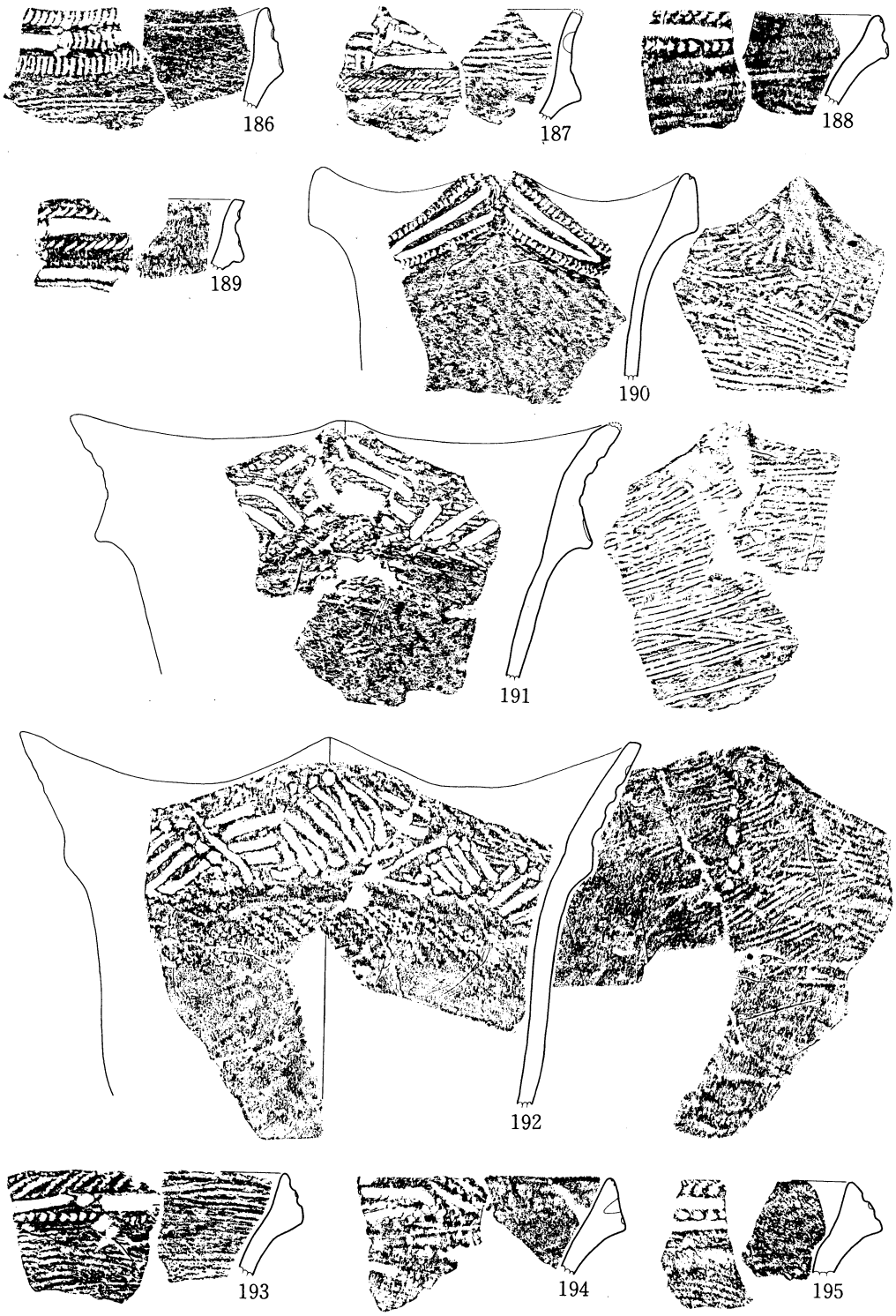
〔**細形の凹線文のタイプ**〕　178・179・180・185・186・188～190・193・195は同様の文様構成で、細形の凹線文を施文するタイプである。0.7～0.4cm幅の細形の半截竹管のヘラ状施文具が使用されている。一般的に口縁部文様帯は、2～3cm程度の幅狭のものが普通である。

191・192は、細形凹線文の短直線文を4・5本組合せた文様である。短直線文の端部には刺突文が施されるが、これは凹線文の施文具と同一のもので文様にアクセントを付けたものである。凹線文の施文の場合は必ず端部には同施文具の刺突文が施されている。191は、口縁部の上下端の刺突文が貝殻腹縁の刺突文（線）で施文されるものである。192は、口縁部は191と同様な文様が施文され、さらに稜部下端の頸部付近に貝殻腹縁の斜位の刺突文（線）を施文するタイプである。197は、口縁上下端の刺突文は施文されず、凹線文の短直線文だけがみられるものである。191と同様、稜部下端の頸部付近に貝殻腹縁の斜位の刺突文（線）が施文されている。稜部下端の頸部付近には貝殻腹縁の斜位の刺突文（線）を施文している。194は、凹線文の直線文と曲線文を組合せたもので凹線文間に貝殻腹縁の刺突文を施文する。ただし、口縁部の上下端には刺突文は施文されないものである。

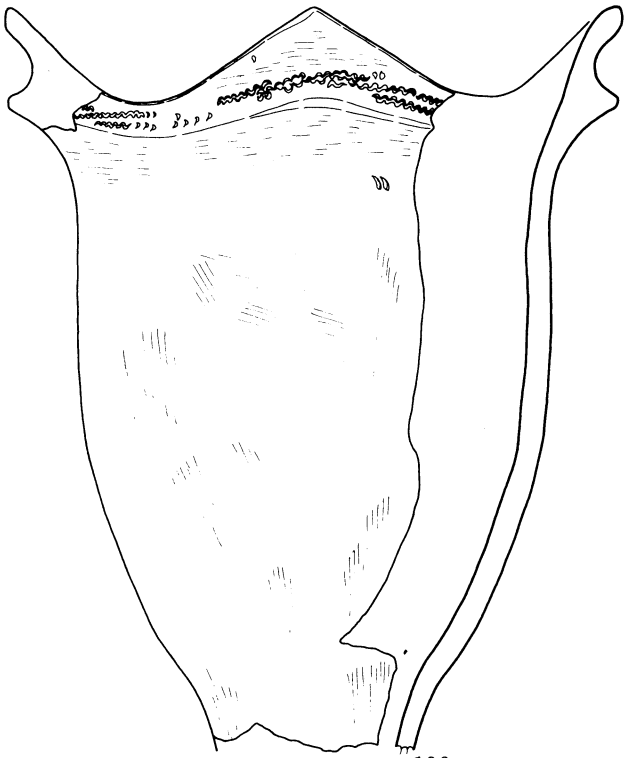
〔**連続刺突文のタイプ**〕　207～213は、口縁部文様帯には刺突文が1列巡らせるだけのものである。刺突文は、すべてヘラ状施文具である。そのなかで、208・213には稜部下端の頸部付近にも施文がみられる。208は、山形口縁の頂部とその下の稜部には棒状の装飾突起が付けら

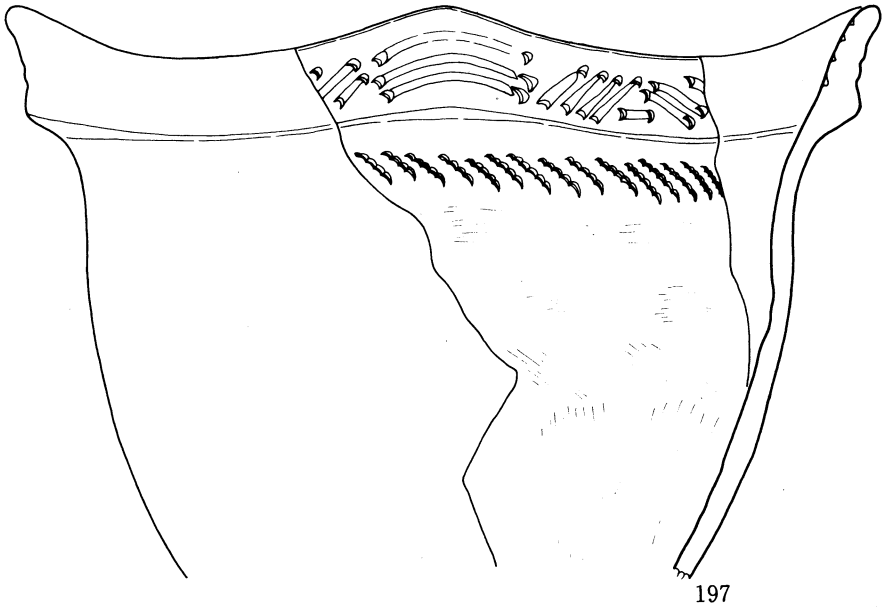


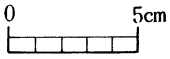
第44図　X類土器実測図（1）



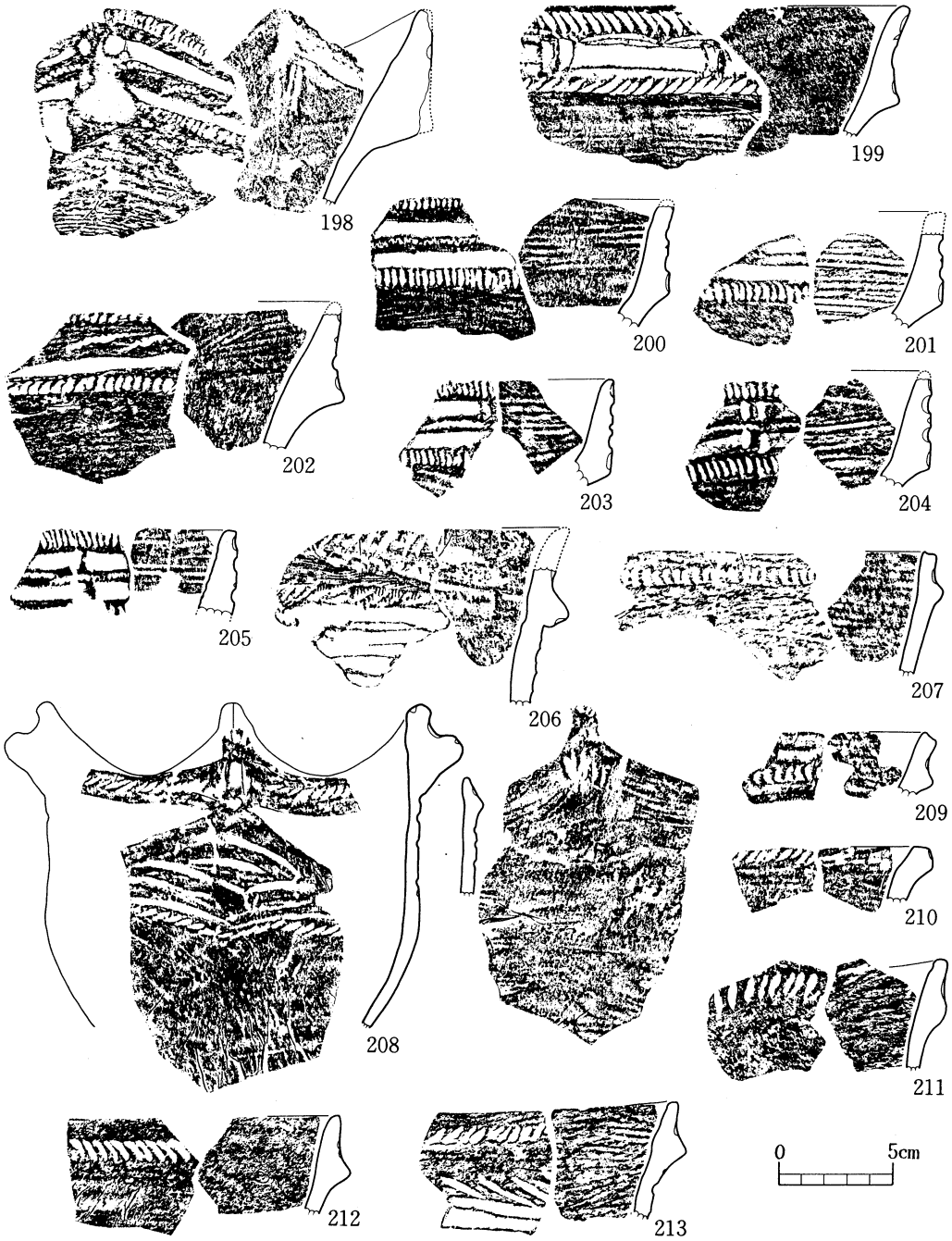
第45図　X類土器実測図（2）







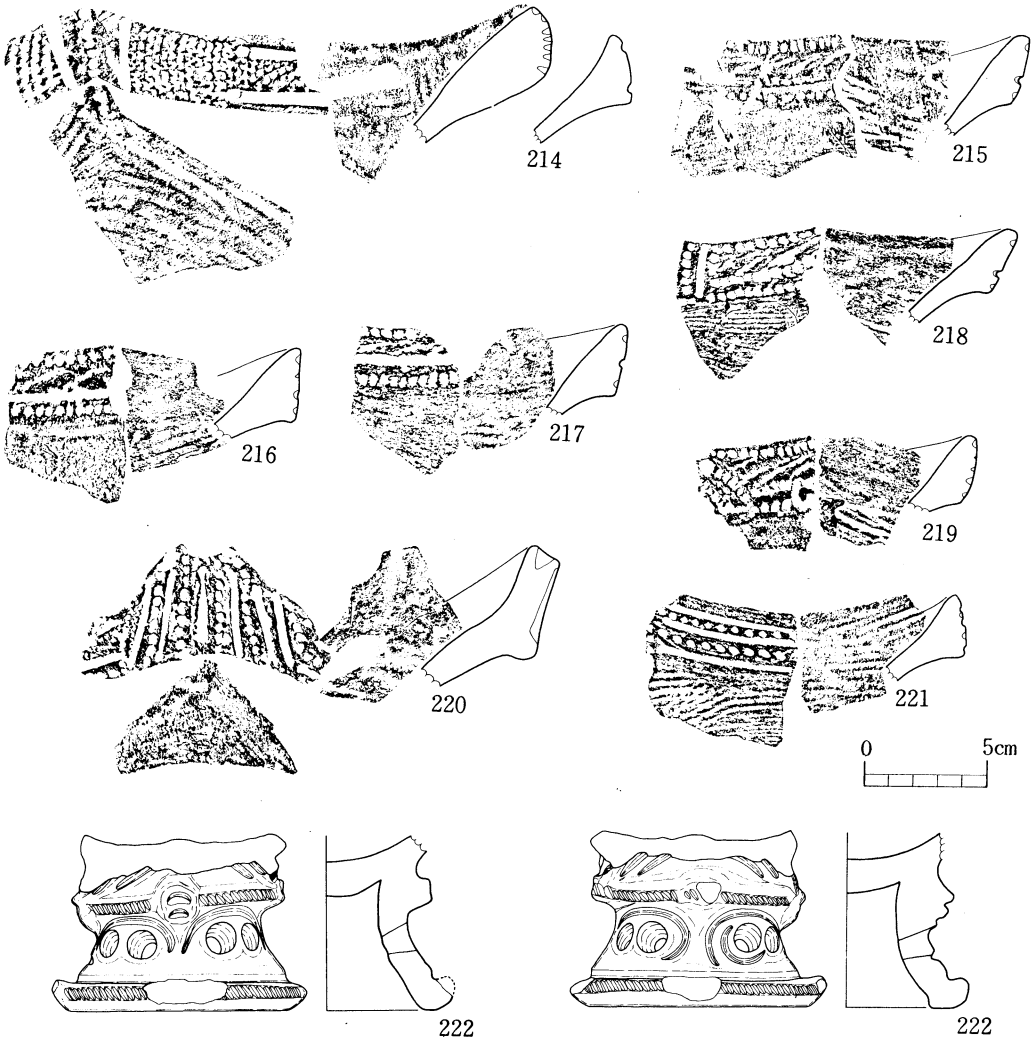
第46図　X類土器実測図（3）



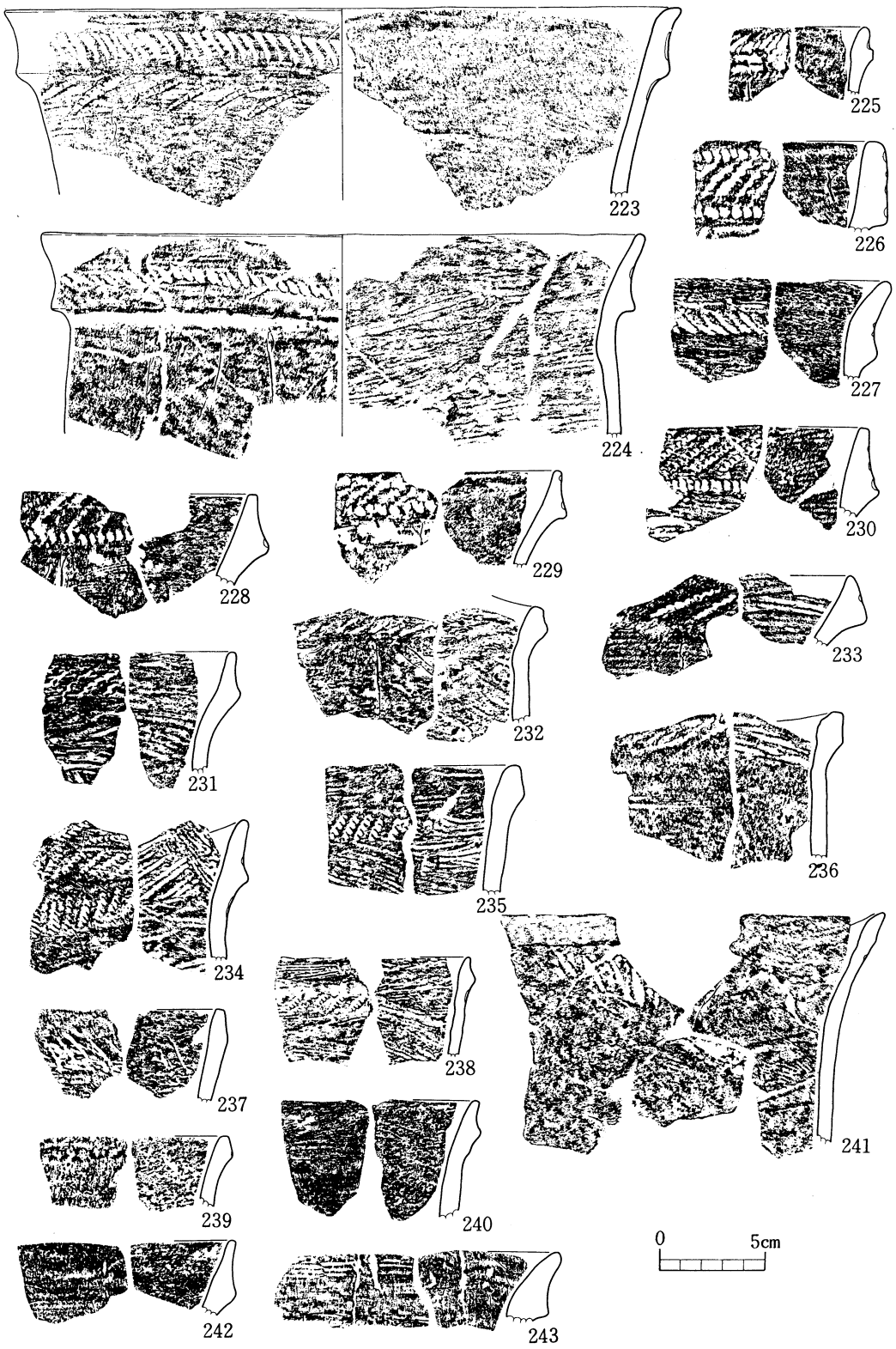
第47図　X類土器実測図（4）

れている。そして、稜部下端の頸部から胴部上半にかけてヘラ状凹線文と刺突文が施文されている。この稜部下端の文様帯は、山形口縁の下であるところから文様帯の幅が若干広くなって主文様帯を形成している。213は平口縁状に表現されるが、波状口縁の最も低いところに想定される。これにも稜部下端に斜位の若干長い刺突文とその下には2本以上の凹線文が巡らされている。

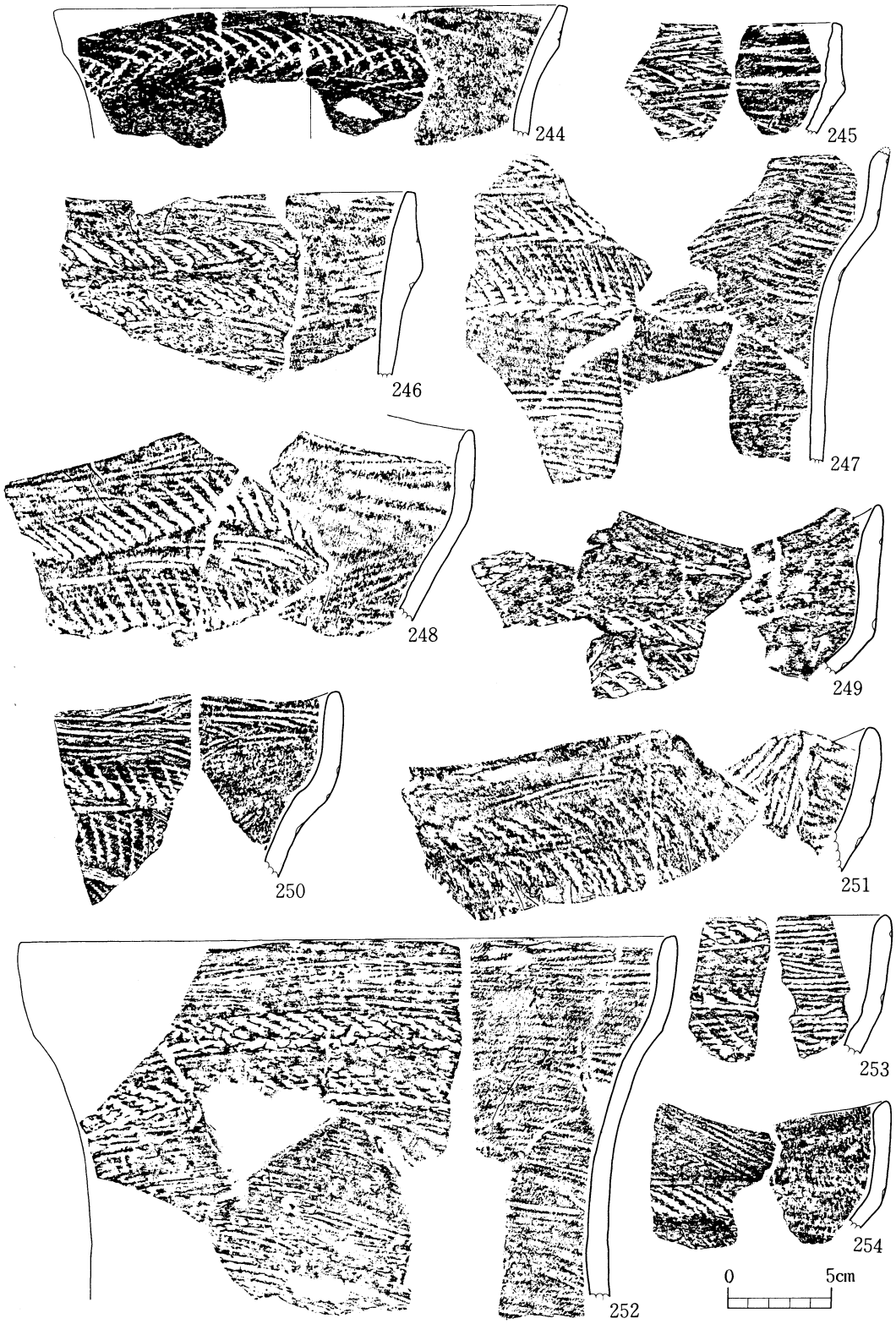
223～243は、肥厚口縁部が若干薄くなり、下端の稜部だけが強調されるタイプである。刺突文は、ヘラ状刺突文に代って貝殻腹縁刺突文が多用されている。223は口縁文様帯に連続ヘラ状刺突文が施文され、稜部下端の頸部付近には斜位の貝殻腹縁刺突文が施文されるタイプである。224は口縁文様帯の中央に連続ヘラ状刺突文が施文され、その上から弧状の貝殻腹縁刺突文が施文される珍しいタイプである。231～239は、貝殻腹縁刺突文だけが施文されるタイプである。このタイプは、肥厚口縁部が比較的狭くなる。240・241・243などのように、肥厚口縁



第48図　X類土器実測図（5）



第49図　Ⅹ類土器実測図（6）



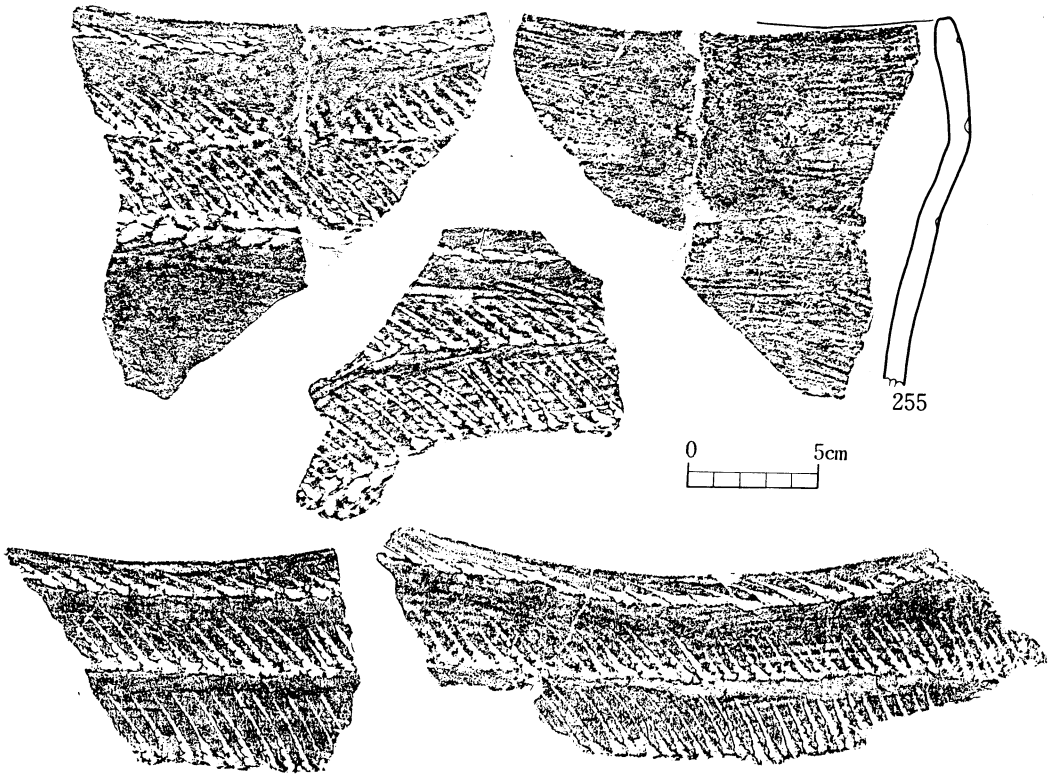
第50図　XI類土器実測図（1）

部の文様帯部分や頸部付近には文様が施文されない無文のタイプである。

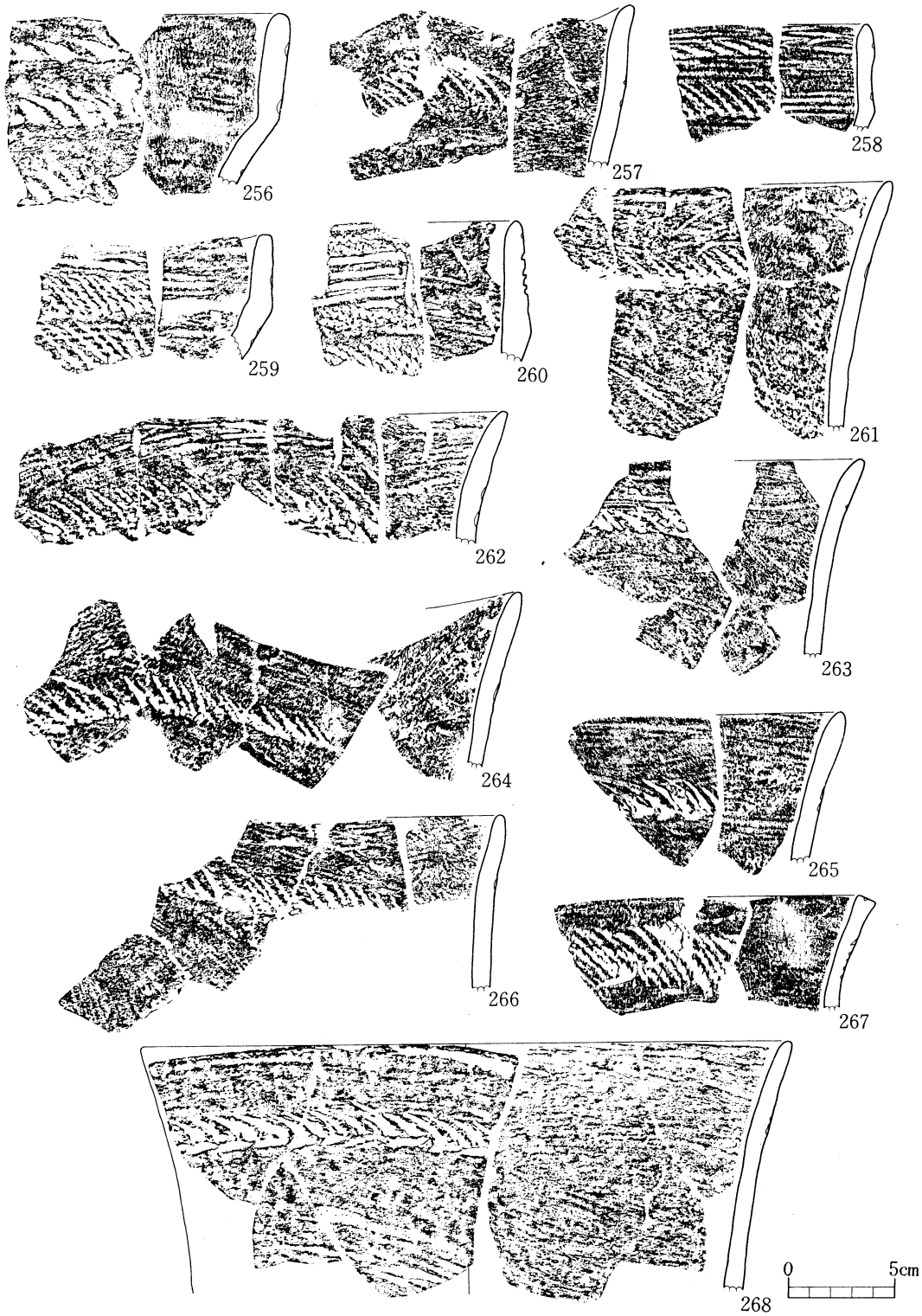
〔**特殊なタイプ**〕　214～222は、非常に丁寧な整形で仕上げ、精巧で華麗な文様を施すものである。214～221は口縁部片であり、222は器台である。

214と220は山形口縁の頂部片で、最も装飾的な文様が施文されている。214は、山形口縁部の頂部の文様帯に縦位の連続刺突文が施文される。その両側には、縦位の凹線文が施文され山形口縁部を引立てている。縦位の凹線文から低い口縁部に向かっては、口縁部文様帯一杯を使って縦位の貝殻腹縁刺突文（線）が密に丁寧に施文されている。続いて口縁部は、文様帯上下端に横位の凹線文を施文し、その間には斜位の貝殻腹縁刺突文（線）を密に充填している。上下の凹線文の端部には円形の丁寧な刺突文が施文され、特徴的な文様を作り出している。220は、山形口縁の頂部には径5㎜程度の円孔が穿たれている。そして外面の文様帯には、まず、中央に縦位の凹線文が施文され、それから両側は縦位の連続刺突文と凹線文が交互に施文されている。凹線文の上下端部は、強く刺突されアクセントをつけて文様効果を上げている。続いて左側には縦位の貝殻腹縁刺突文（線）が施文されている。

215～219は波状口縁部の低い部分の口縁部で、文様帯上下端の刺突文間には斜位の貝殻腹縁刺突文が施文されている。221の文様帯上下端には凹線文が横位に巡り、その間には横位の連続刺突文で埋められている。器面は丁寧なナデ整形で、色調は赤褐色に近い。焼成は堅緻で良



第51図　Ⅺ類土器実測図（2）



第52図　XI類土器実測図（3）

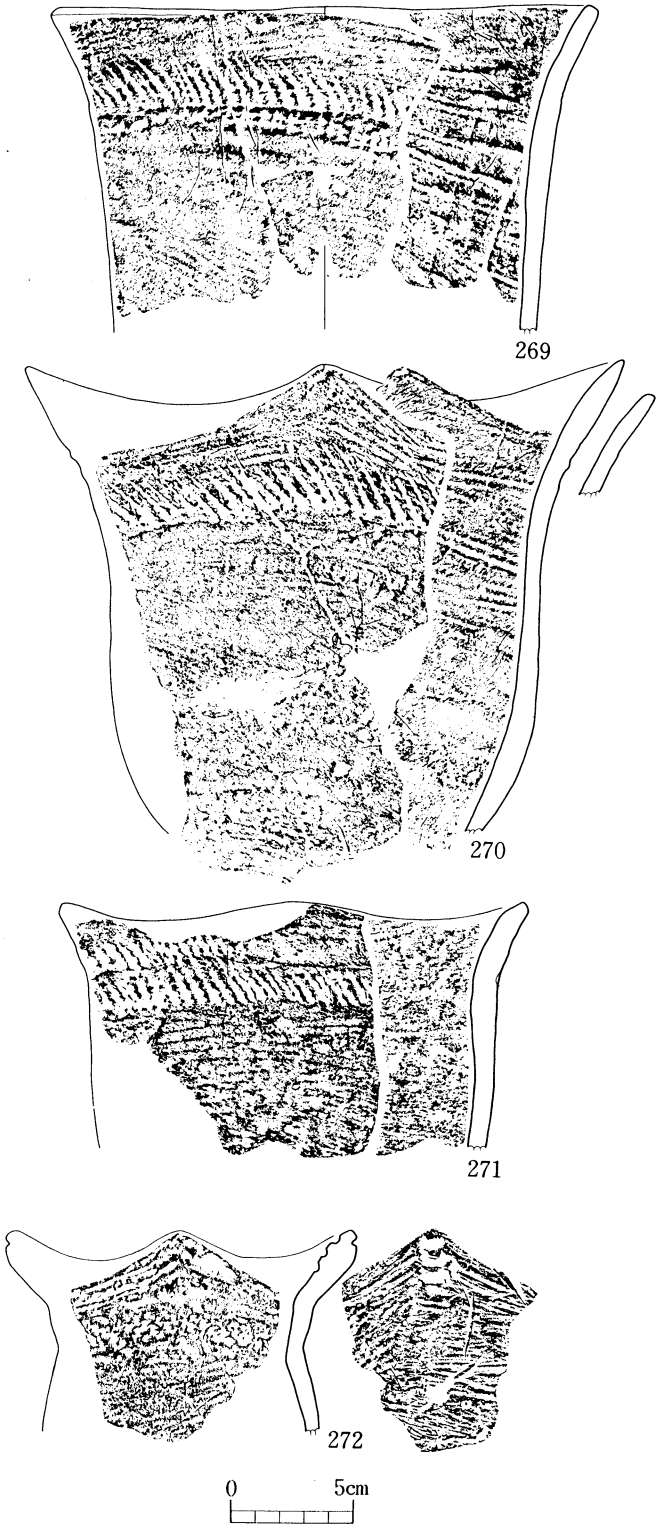
好である。胎土には、長石や石英粒の他に金雲母も含まれる。

222は中空の器台で、接地面は径10cmを測る。器台の中位には、外側から８個の円孔が２個単位に４か所に穿たれている。円孔の上下には凹線文が施文されている。下端の凹線文は、器台裾部を巡り、器台脚部の文様帯を強調している。この文様帯には丁寧な斜位の刺突文が施文され、四方に僅かの突起をつくる。円孔の上の凹線文は、２個の円孔を半弧状の曲線文で囲んでいる。その上部の頸部にあたる部分には、削り出しの突帯を作り、その頂部に裾部同様の斜位の刺突文を施文している。さらに、この突帯の四方には突起を付けている。この突起は、下端の突起と対応している。器面は丁寧なナデ整形である。焼成は堅緻で良好である。色調は黄褐色を呈し、胎土には長石や石英粒を混入する。

⑩ Ⅺ類土器

（第51図～第54図－244～272）

Ⅺ類土器は、外反する口縁部が内湾して屈曲し、口縁外面に稜をつくるをタイプである。口縁部は、頸部から外反し途中で稜をつくって屈曲し、内湾気味に立ち上がる。口縁外面には、屈曲部の上下に貝殻腹縁の連続刺突文を施文する。このタイプには、平縁口縁と波状の山形口縁がある。さらに、同様



第53図　Ⅺ類土器実測図（４）

の施文で屈曲せずに外反するだけのものも存在し、このタイペもXI類土器に含め説明することにする。そのため、屈曲するタイプをXI－A類土器とし、外反するタイプをXI－B類土器に細分する。

244～260は、XI－A類土器に該当するものである。244～246は平縁口縁で、屈曲部分が僅かに肥厚して、先のX類土器とは区別は困難なものである。口縁外面の文様は、稜部を境に上下に比較的長い貝殻腹縁の連続刺突文が施文される。244は、貝殻腹縁の上下の刺突文が逆斜位に施文され、そのため交差している。247～260はXI－A類土器に属するもので、口縁部の器壁は肥厚せず胴部壁とほぼ同じ厚さである。口縁部の形態は、波状の山形口縁と平縁口縁がある。口縁外面の文様は、屈曲部の稜部の上下に比較的長い貝殻腹縁の連続刺突文を二列に同斜位に施文するのが一般的なタイプである。しかし、247には、口唇部直下に短い貝殻腹縁刺突文が施文され、また、稜部下位の貝殻腹縁刺突文の下端にはヘラ状刺突文が巡っている。253や255も同様な文様構成である。248や252は、稜部下位の貝殻腹縁刺突文の下端にヘラ状刺突文が巡らされている。色調は全般に茶褐色を呈するが、244や246のように若干暗茶褐色を呈するものも存在する。整形は、内外面とも地文に比較的荒い条痕整形がみられるが、その上からナデ整形で仕上げるものもある。胎土には長石や石英粒を混入するが、244・246・247・251・254 ～257・259・260 には金雲母も混入している。焼成は普通である。

261～272は、XI－B類土器に該当するものである。このタイプは口縁部は屈曲せずに外反するだけのもので、平縁口縁と波状の山形口縁とがある。文様の施文は、口縁部が外反する頸部付近に1条の貝殻腹縁の連続刺突文を巡らせている。その中で、271のように2条の貝殻腹縁の刺突文が施文されるものや262・268・269のように貝殻腹縁刺突文の下位にヘラ状刺突文や短い貝殻腹縁刺突文を巡らせているものもある。整形は条痕整形がみられるが、外面はその上からナデ整形で仕上げるものもある。色調は、茶褐色から暗茶褐色を呈する。胎土には長石や石英粒を混入し、262と263以外は金雲母が含まれる。

⑪ **XII類土器**　（第55図～第60図－273～308）

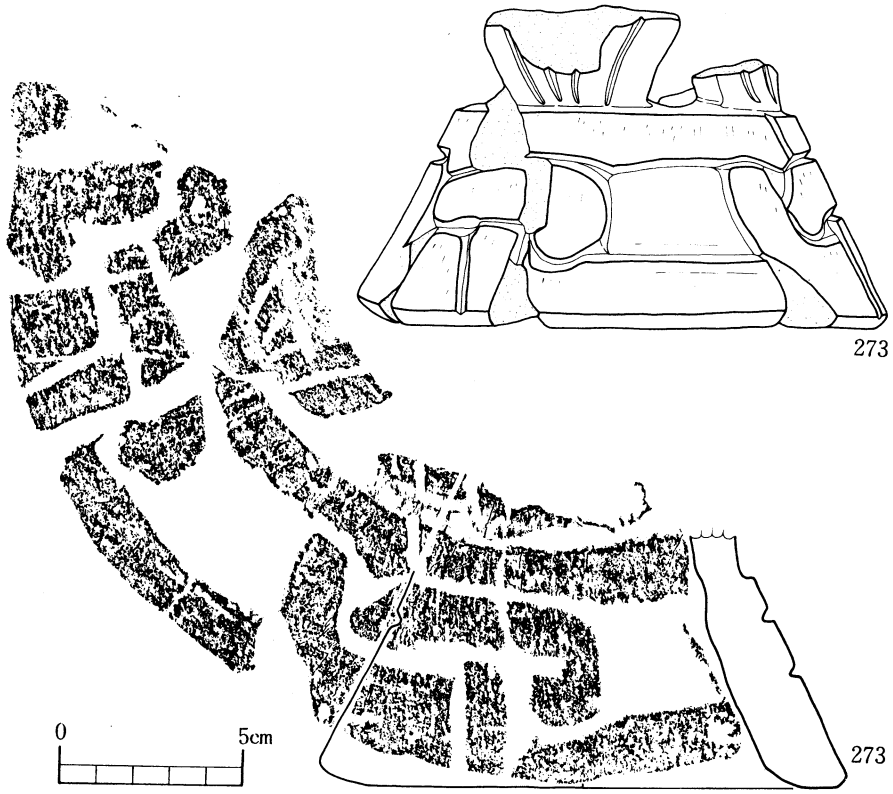
XII類土器は、型式不明の土器を一括して説明する。

273は、中空の器台で上半部の頸部付近の３箇所には三角形の透かしがある。器台の上位の皿部は欠損して不明であるが、底径は14.3cmを測る。三角形の透かし文の両側は沈線文の文様が施文される。三角形透かし文の下位は主文様部分で、削り出し文様が展開する。三角形の透かし文に対応して３箇所に、一端が鉤手状に曲がる削り出し文で文様帯を形成している。文様帯の間は削り込んで無文部をつくっている。胎土には、長石等の細粒を含む。色調は全体に黄褐色を呈するが、凹部や沈線内には部分的に紅色の化粧塗りが残存している。化粧塗りが剝落した器面は、地文に削り整形の痕跡が明確に確認される。内面は荒いヘラ削り整形である。

274～282は口縁部が若干肥厚してそこを文様帯とする共通の要素をもつが、文様に幾つかのパターンがある。

274・275・282はかまぼこ状に肥厚した口縁部に、貝殻腹縁の刺突文（線）で重弧文を連続して施文するタイプである。器内外面はヘラ削り整形で仕上げられ、胎土には長石粒の他に石英粒を含む。色調は黄褐色を呈するが、282は若干紅褐色を呈する。

278は同じかまぼこ状の口縁部に、貝殻刺突の重弧文とヘラ刺突文と凹線文間に貝殻刺突文

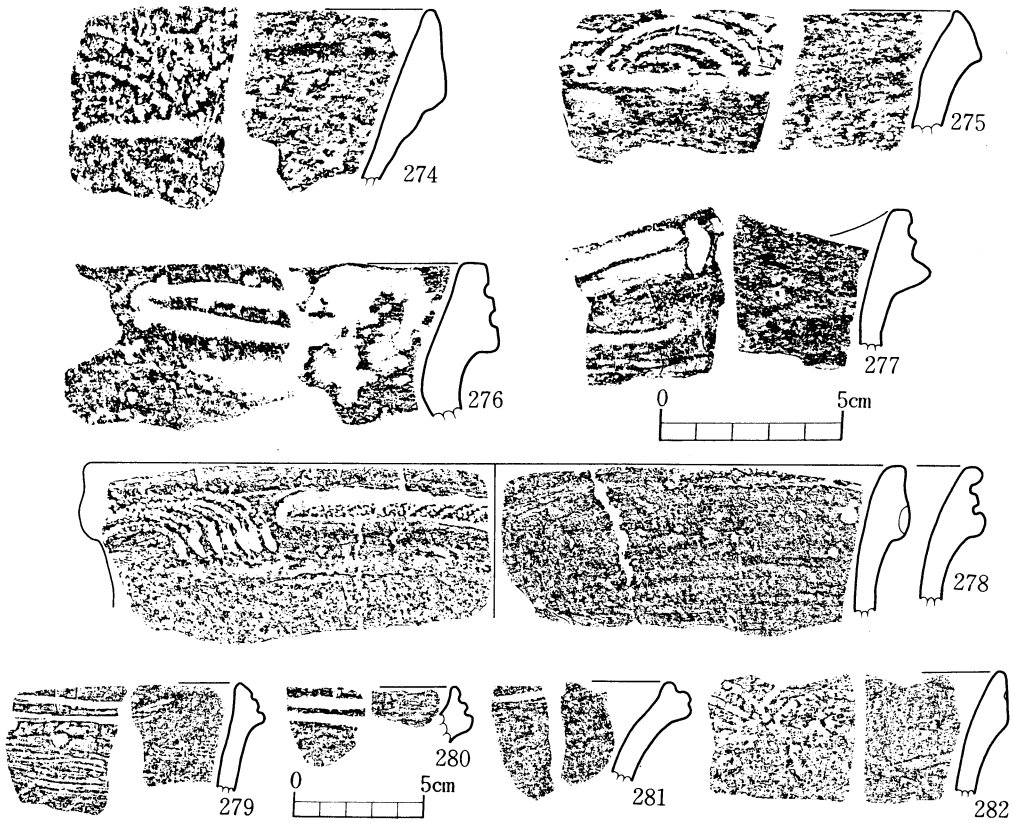


第54図　XII類土器実測図（１）

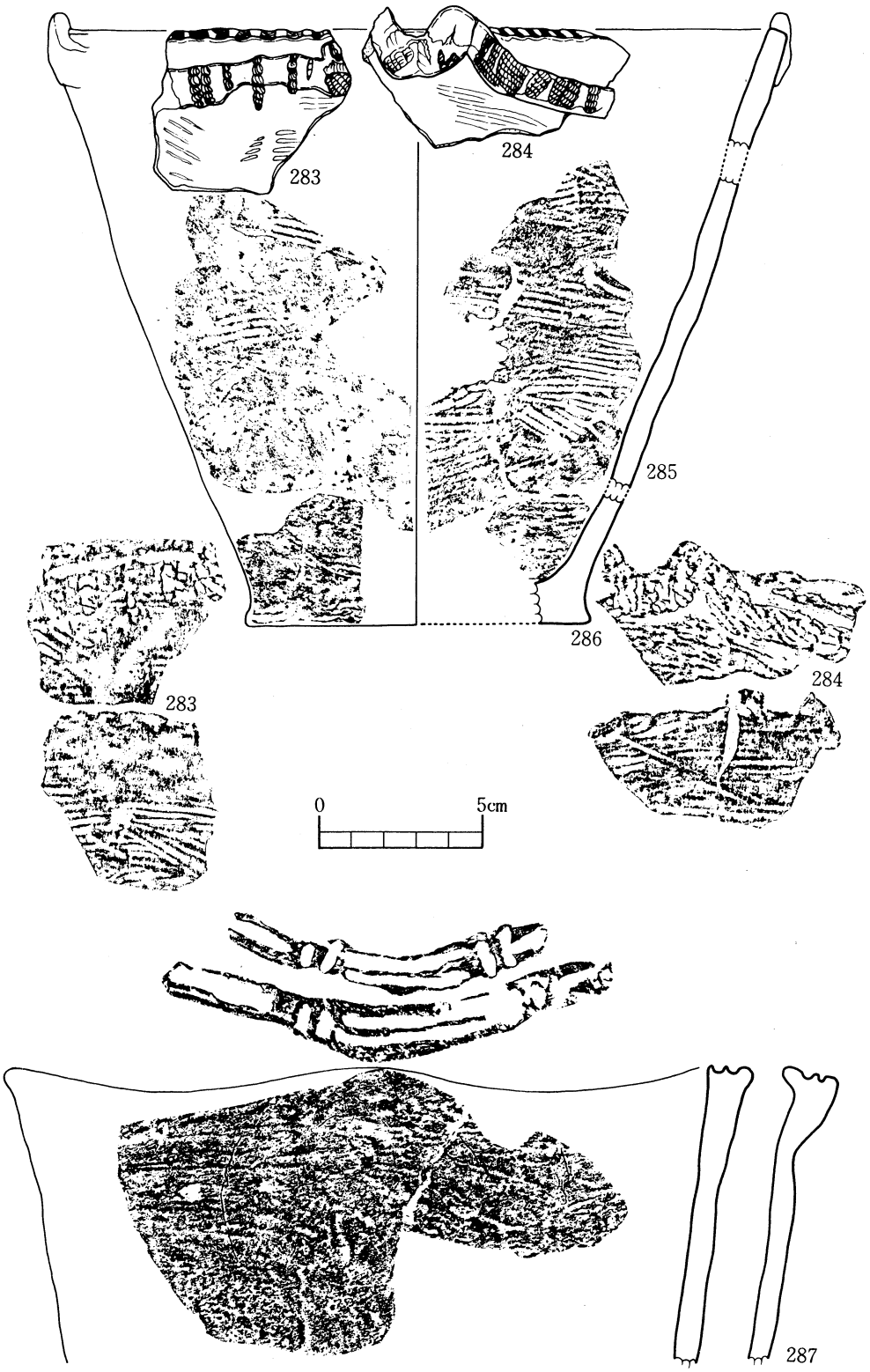
を充填した文様を組合せて文様帯をつくる。器内外面はナデ整形の丁寧な仕上げである。胎土には、長石や石英の細粒や角閃石を混入する。色調は、黄褐色を呈するが部分的に紅褐色を呈する。

276・277・279～281は、肥厚口縁部に凹線文を施文するタイプである。276・277は比較的大きな凹線文を施文し、凹線文は二本平行線で端部は曲線で繋いだり、弧文を施文する。279～281は、比較的細い凹線文が施文される。そのためか、口縁部肥厚部は狭くなる。

283～286は、口縁部付近に貝殻刺突文を施した貼付け突帯文を貼付するもので、直接は接合しないが同一個体と考えられるものである。器形は、平底で胴部から口縁部は直行するバケツ状を呈する深鉢である。口唇部は平坦に仕上げ、その平坦面には貝殻腹縁の刺突文を施す。口縁部外面には貼付け突帯文を貼付するが、「M」字状に屈曲させ口唇部上方に張り出した突起部分も存在する。内外面とも条痕仕上げであるが、部分的にナデ整形で仕上げられている。焼



第55図　Ⅻ類土器実測図（2）

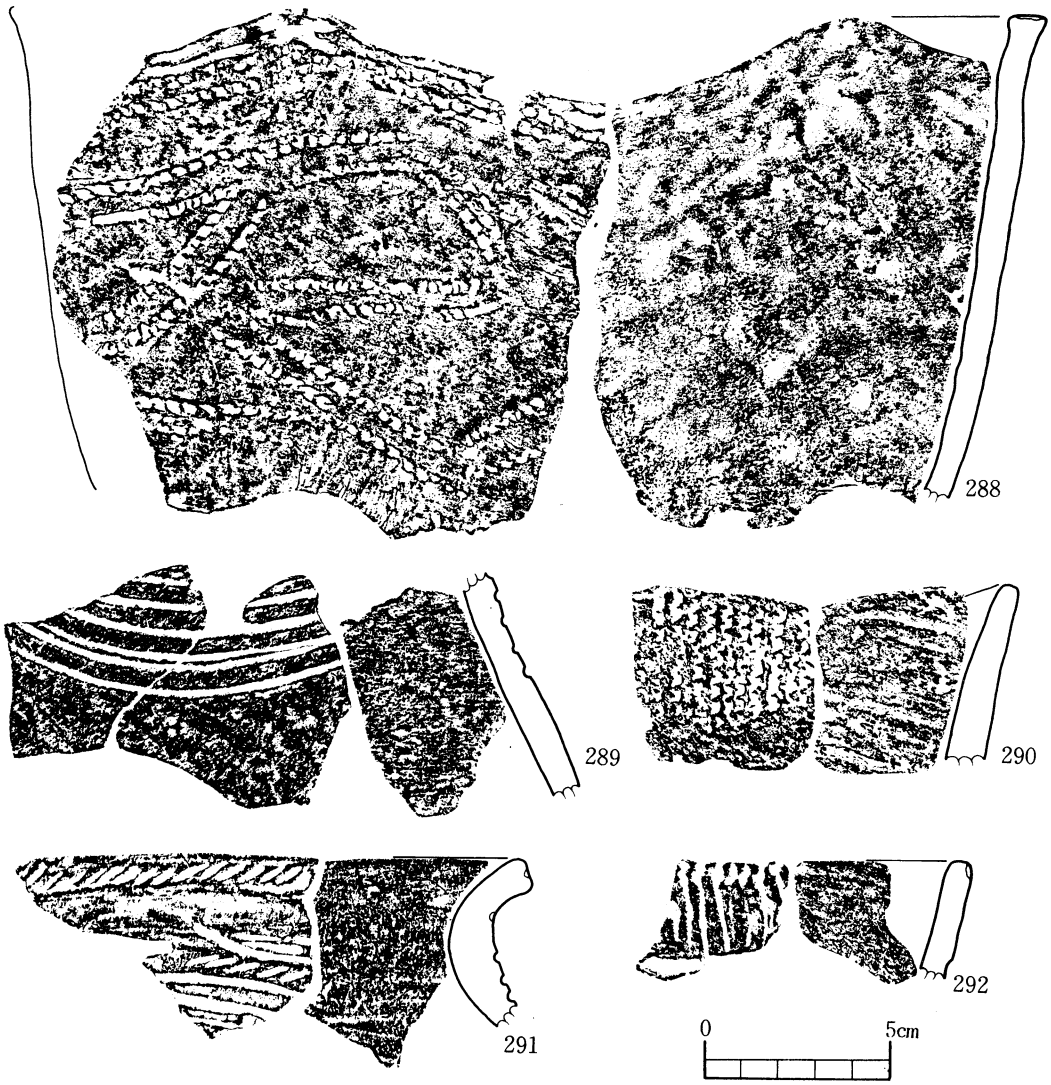


第56図　XII類土器実測図（3）

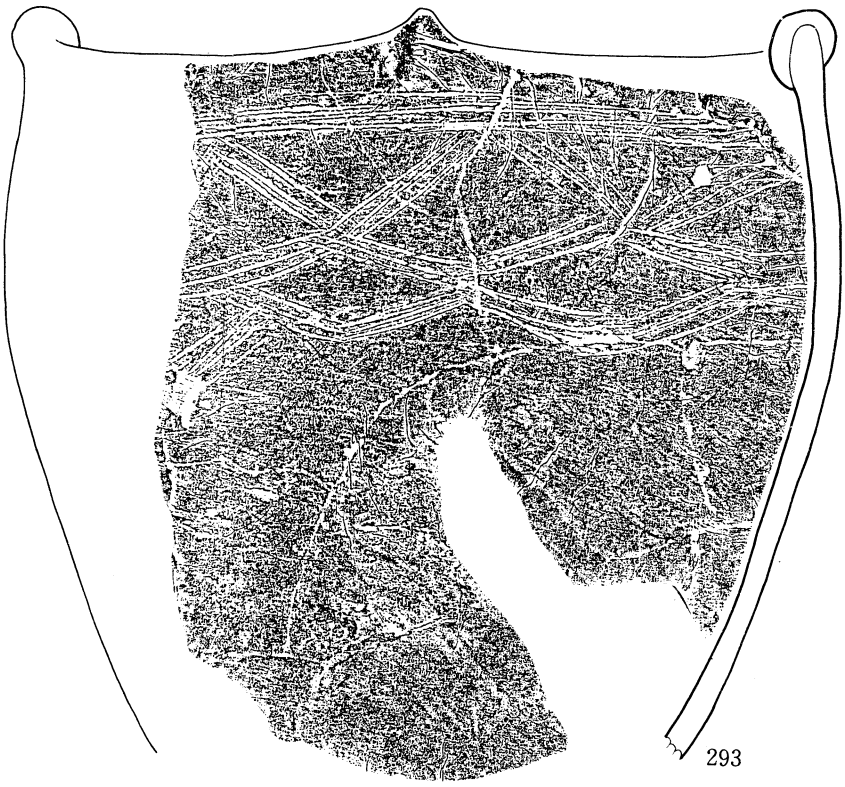
成は、良好で 堅緻である。色調は赤褐色を呈し、胎土には長石や石英を含む。

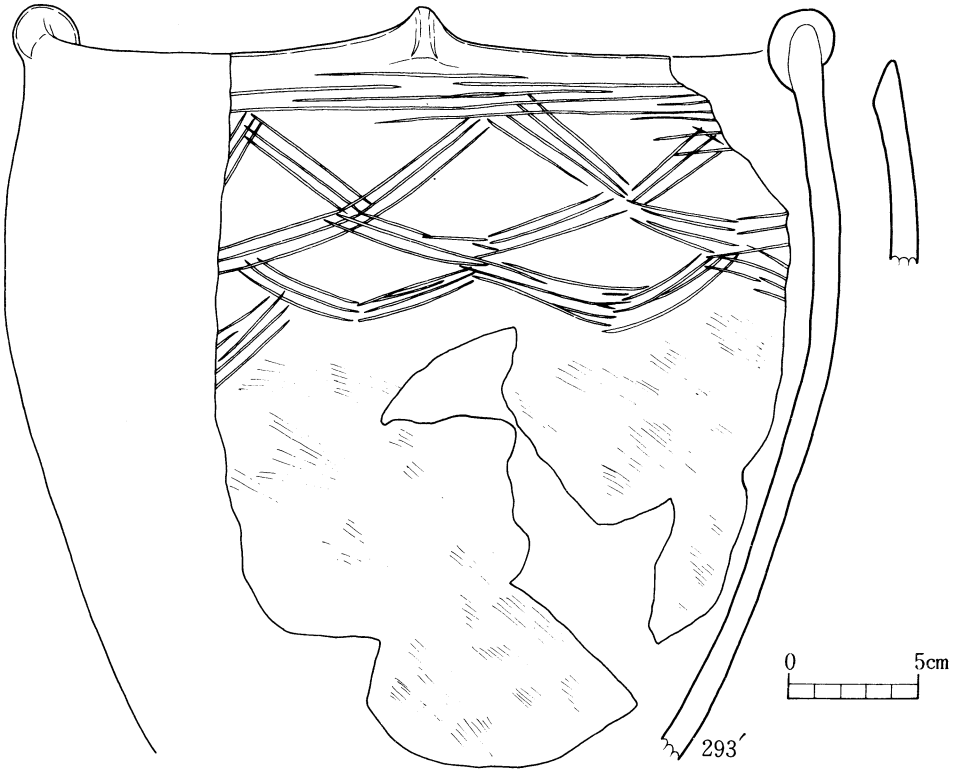
287は、口縁部は直行し、波状の山形口縁である。口唇部は平坦に作り、その平坦面に凹線文を巡らせる。波状の山形口縁の頂部の口唇部は僅かに広くなり、平行線の凹線文を施文し、波状口縁の下がったところで二本の短線で区切る。波状の凹面は凹線文を1本施文する。文様は、口唇部だけで胴部には文様は施文されない。器内外面は、丁寧なヘラナデ整形である。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石や石英粒を混入する。焼成は良好で堅緻である。

288は、胴部は僅かに膨らみもち、口縁部は直行して波状の山形を呈し、口唇部は平坦に納める深鉢である。胴部文様は、二本平行の貝殻腹縁の刺突文（線）で幾何学文を描く珍しいタ



第57図　Ⅻ類土器実測図（4）





第58図　XII類土器実測図（5）

イプである。口唇部の山形頂部にも貝殻腹縁の刺突文が施文されている。器内外面は丁寧なナデ整形で仕上げている。色調は暗褐色を呈し、胎土には長石や石英粒を混入する。焼成は、良好で堅緻である。

289は、細片のため定かではないが、断面の傾斜から壺状に内傾する頸部付近の破片である。頸部付近には5条以上の沈線文が巡る。

290は、口縁部は直行し波状の山形口縁を呈し、口唇部は丸味をもって納める。文様は、口縁部外面に貝殻腹縁の刺突文（線）を縦位に施文する。

291は、口縁部は大きく外反して口唇部は平坦に納める。口唇部の平坦面には斜位の刺突文を施す。頸部から胴部にかけては平行する沈線文が施文され、その一つの凹線文間には斜位の連続刺突文を充填している。器面は丁寧なナデ整形で、色調は赤褐色を呈する。

292は、口縁部は僅かに外反しながらそのまま立ち上がる。文様は、口縁部上端の稜部に半截竹管状の逆「C」字の刺突文が施文され、それ以下にはヘラ沈線が縦位に施文される。さらに下位には横位の凹線文が施文されるようである。

293は、比較的大きな破片であり底部を除きほぼ完形に復元できる。胴部は僅かに膨らみ、口縁部は内湾して立ち上がる。口縁部は平縁であるが、4箇所に突起をつくる。口径は、径cmを測る。口唇部は、突起以外のところは内傾して鋭角に尖る。突起のところは若干膨らみ丸味をもって納める。文様は、口縁部下に数条の横位の沈線文を巡らし、それ以下は3～4条の沈線文帯をもって三角形及び菱形を描く。器面整形は、ヘラ削り整形の後、ナデ調整で仕上げる。色調は茶褐色から暗茶褐色を呈し、胴部上半部から口縁部にかけて部分的に煤の付着が確認される。胎土には長石や石英粒を含み、焼成は良好で堅緻である。

294～297は、口縁部は大きく外反するタイプである。口縁部には突帯文を巡らせ、口唇部幅を広くしてその部分に連続刺突文を施文する。297は突帯が下がり、文様も口唇部側面に付く感じである。文様は半截竹管状の刺突文で、294～296とは異なるものである。器面は、内外面とも条痕整形の後、ナデ整形で仕上げている。色調は茶褐色から暗茶褐色を呈し、胎土には長石や石英及び金雲母を含む。焼成は、良好で堅緻である。

298は、口縁部が外反し、口唇部は丸味をもって納める。口縁部外面には縦位の押圧文が施文されている。刺突文は稚拙でであるが、僅かに貝殻腹縁の痕跡が確認される。ヘラ削り整形後、ナデ整形で仕上げている。外面は暗褐色を呈し、内面は赤褐色に近い。胎土には長石や石英及び角閃石等を含む。焼成は普通である。

299は、口縁部は外反し、口唇部は丸味をもって仕上げる。無文であるが、内外ともヘラナデ整形の丁寧な仕上げである。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好で堅緻である。

300は、半円状の突起をもつ口縁部片で、ほぼ直行する。突起の内面には縦位の凹線が施文される。口縁部の中位には微隆突帯文が貼付され、その上から稚拙な貝殻刺突文が施される。

301は、直行する口縁部で、内外面とも貝殻条痕仕上げで無文である。

302～303は口縁部片で、頸部から口縁へは内湾してそのまま直行して立ち上がる。口唇部は

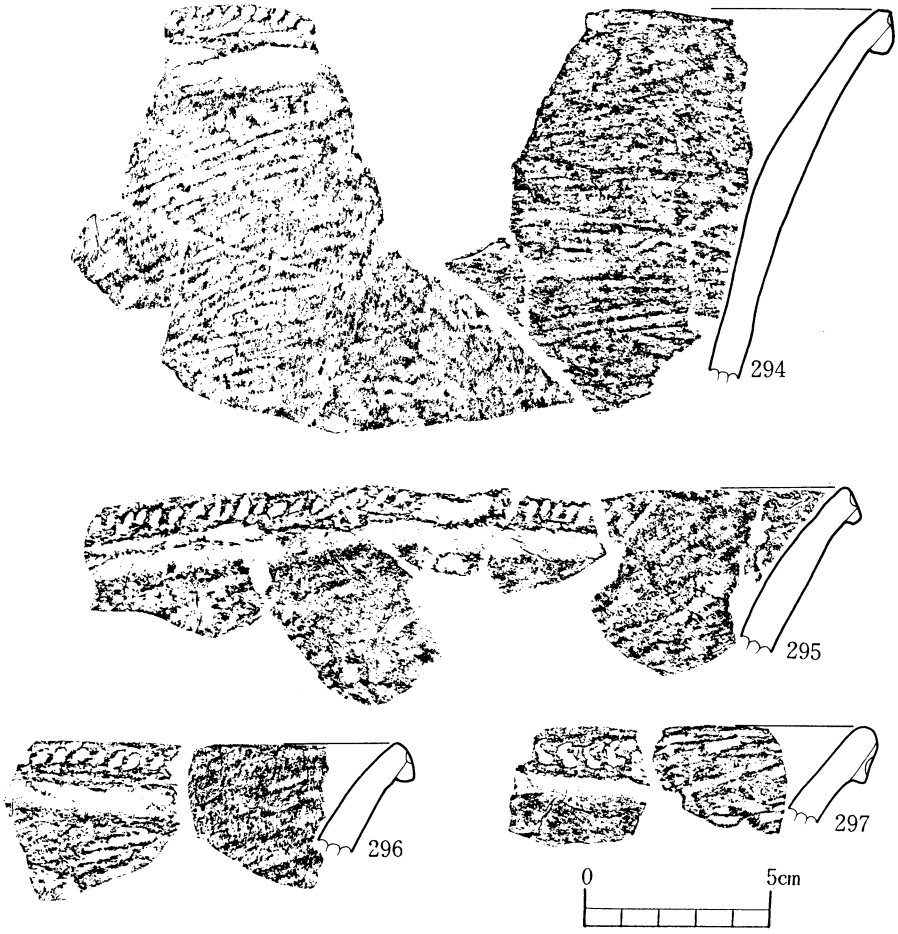
平坦に納める。口縁部には数条の沈線文が巡り、302の沈線上には縦位に刺突文が施文される。

304は直行する口縁部で、口唇部は平坦に納める。内面は横位の条痕で外面は縦位の条痕で整形して仕上げ、無文である。茶褐色を呈し、焼成は良好で堅緻である。

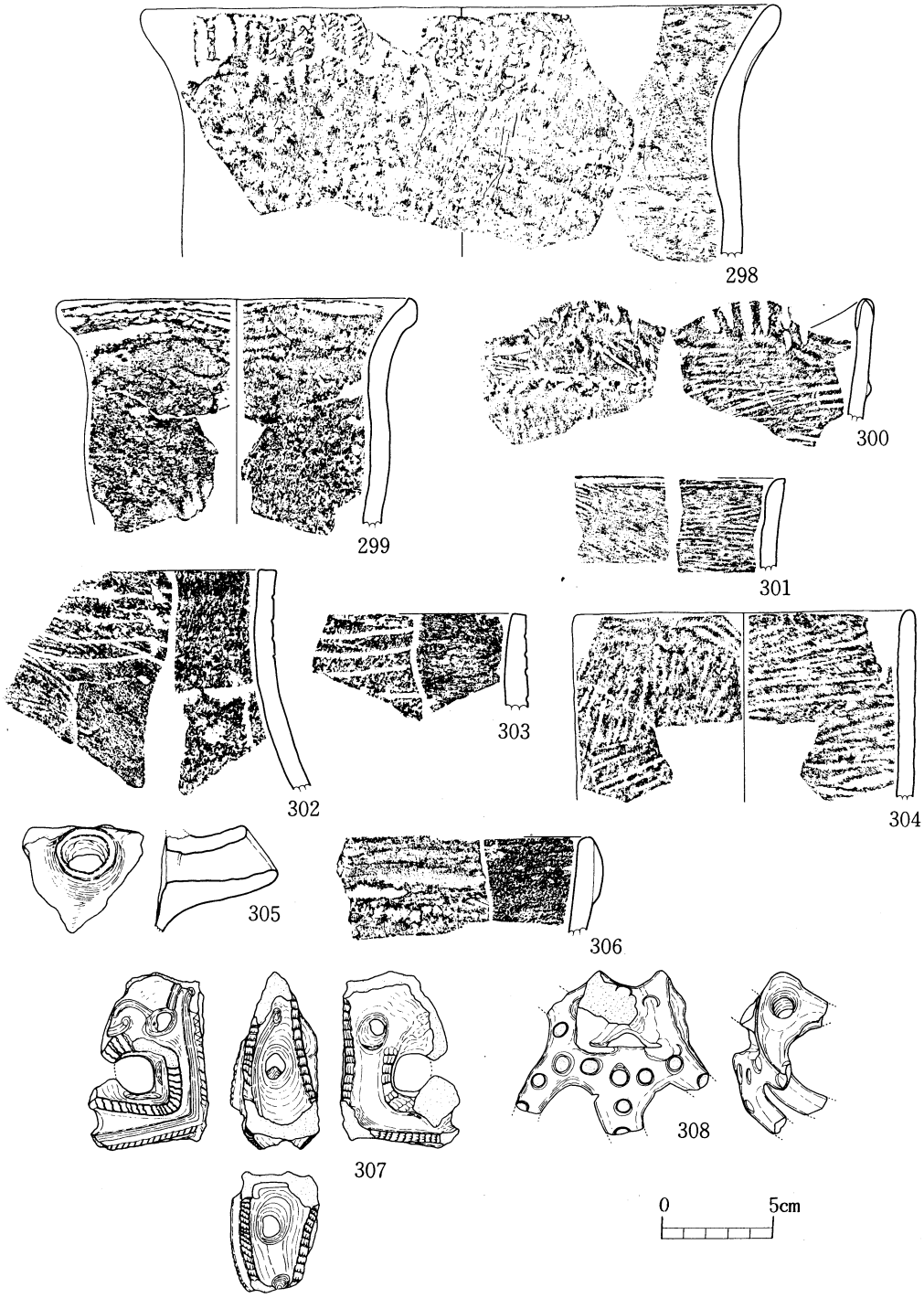
305は、注口部分である。注口の内径は、内側が1.5cm、外側は2.0cmと大きくなる。器面は手捏ねで凹凸がみられ、比較的稚拙である。色調は赤褐色を呈し、胎土には長石粒を含む。

306は、直行する口縁部にかまぼこ状の幅広突帯文を貼付したものである。内外面ともナデ整形で仕上げ、無文である。色調は茶褐色を呈する。

307は、装飾把手の一部である。中空と穿孔で立体的に形成し、各側面と底面は凹線文と貝殻腹縁刺突文の文様で華麗さを表現している。接着部分が欠損して本器の形態は不明である。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石及び石英の細粒や金雲母などを混入する。焼成は良好で堅



第59図　Ⅻ類土器実測図（6）



第60図　Ⅻ類土器実測図（7）

緻である。

308は、タコ足状に延びた粘土棒の５本が本器に接着する特殊な装飾把手である。上部の両脇は耳状に形作り、中央を穿孔している。表面には円形の刺突文が施文され、円形文の中央には海綿状の施文具の痕跡を残す。規格化されない比較的稚拙な作りである。これも、接着部分が欠損して本器の形態は不明である。

⑫ **Ⅻ類土器**　（第62図～第65図－309～346）

Ⅻ類土器は、各種の底部を一括した。底部には、平底と上げ底の二通りがある。平底は309～341で、上げ底は342～346である。

309～313・316・318・319・323・333・334・338・339などの平底は、底部の接地面が拡張して踏ん張り側面で締まりそこから胴部へ大きく外反して立ち上がるタイプである。その他の平底は、底部からそのまま外傾して胴部へ立ち上がるものである。

平底には、圧痕を有するものと無文がある。圧痕を有する平底には網代ともじり編みがあるが、ほとんどが網代でありもじり編みは316と323の２点のみが確認された。

309は、底面のほぼ全面が残存する底部である。底面は、網代底で平編みの圧痕を有するものである。経（たて）緯（よこ）とも幅４～５㎜程度の平たい植物繊維等の素材で、１超え１潜りの典型的な平編みである。

310は経緯とも平たい植物繊維等の素材で、経条は３㎜程度と細いもので、緯条は７㎜と若干広いもので編んだ平編みである。

311は断片的で全形は不明であるが、経条は３㎜程度に揃った平たい植物繊維質の素材であるが、緯条は２㎜程度の細いものや６㎜程度の幅広い素材を交互に組み合わせた変形の綾編みである。

312は、経条は２㎜程度の角材の素材で、緯条は５㎜程度の平たい植物繊維等の素材を組み合わせている。編みは、規則制が無く変形の綾編みであろう。

313は、経緯とも３～４㎜の平たい植物繊維等の素材を組み合せた３超え３潜りの綾編みであろう。圧痕中央部を後にナデ消しているため、全形の組み合わせは不明である。

314・315は、平編みの一種であろう。314は、経条が２㎜程度の棒状の素材であり、緯条は３㎜程度の平たい植物繊維質の素材である。そして緯条は１超え１潜りを繰り返し編まれ、経条は芯となるだけである。なかには、均一でない若干太い素材も含まれる。315も同様に、緯条が編まれるタイプである。

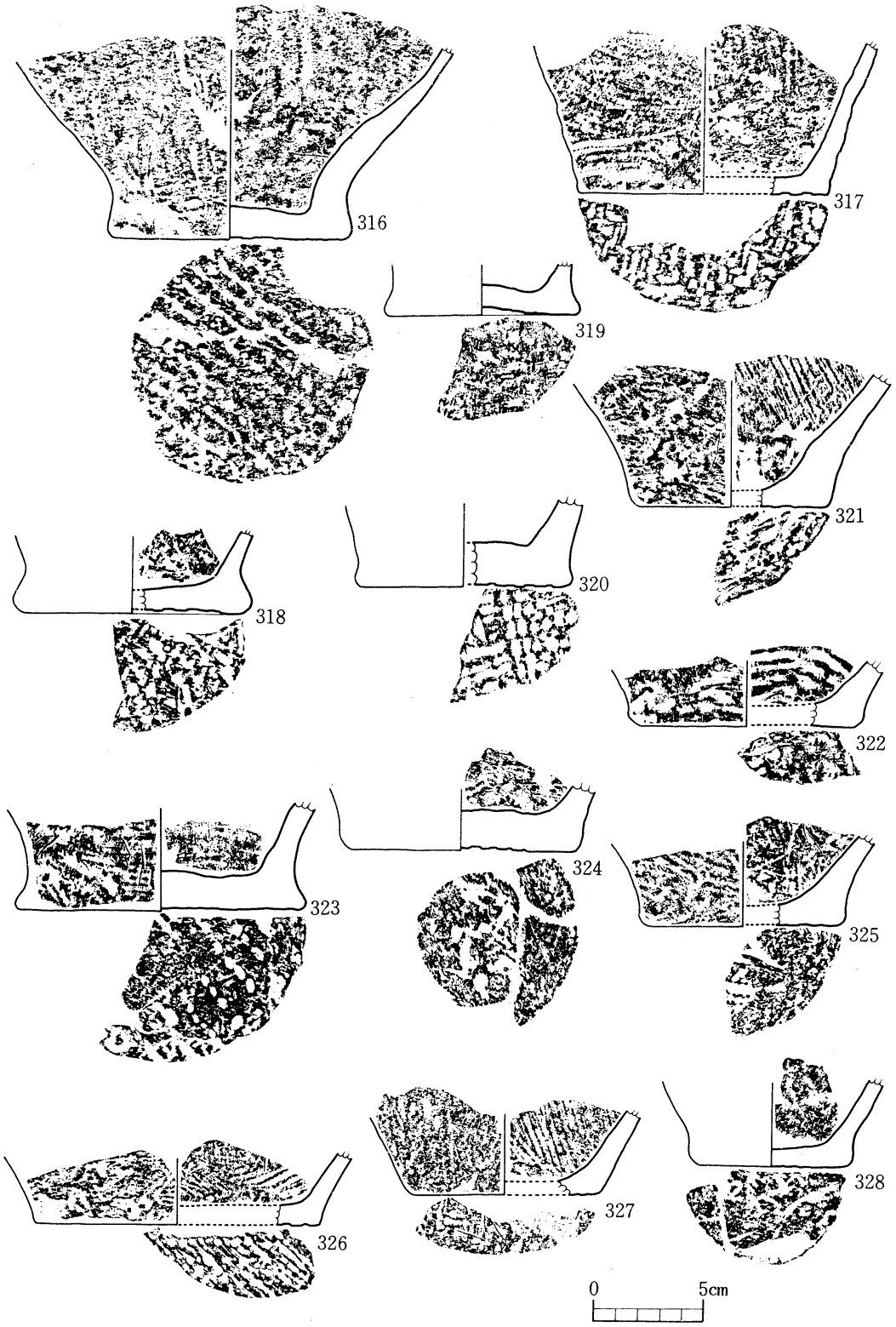
316は、もじり編みである。経条の素材はほとんど圧痕は付かなかが、部分的に２㎜程度の棒状の素材が確認される。緯条は、２～３㎜程度の紐状の素材で編まれている。

317は、変形の綾編みであろう。

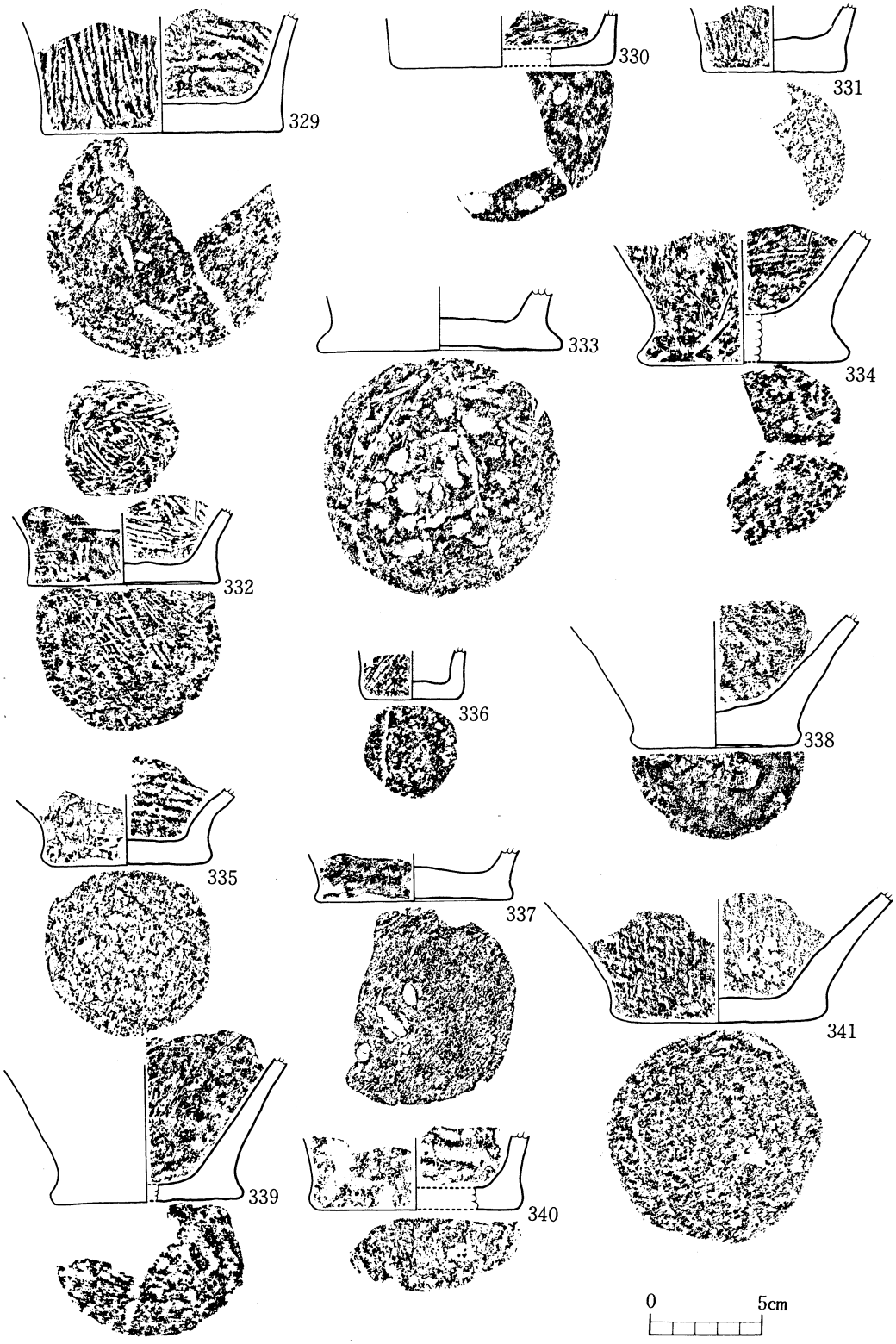
318～322は、圧痕が不鮮明であり編みは不明である。

323は、もじり編みである。緯条は、1.5㎝間隔で比較的太い紐状の素材で編まれている。

第61図　Ⅷ類土器実測図（1）



第62図　Ⅷ類土器実測図（2）



第63図　Ⅷ類土器実測図（3）

経条は、ほとんど圧痕は付かない。これは、経条をナデ消したものであり特殊な整形が想定される。

324は中央部分に綾編み状の圧痕が確認されるが、周囲をほとんどナデ消しており編みは不明である。

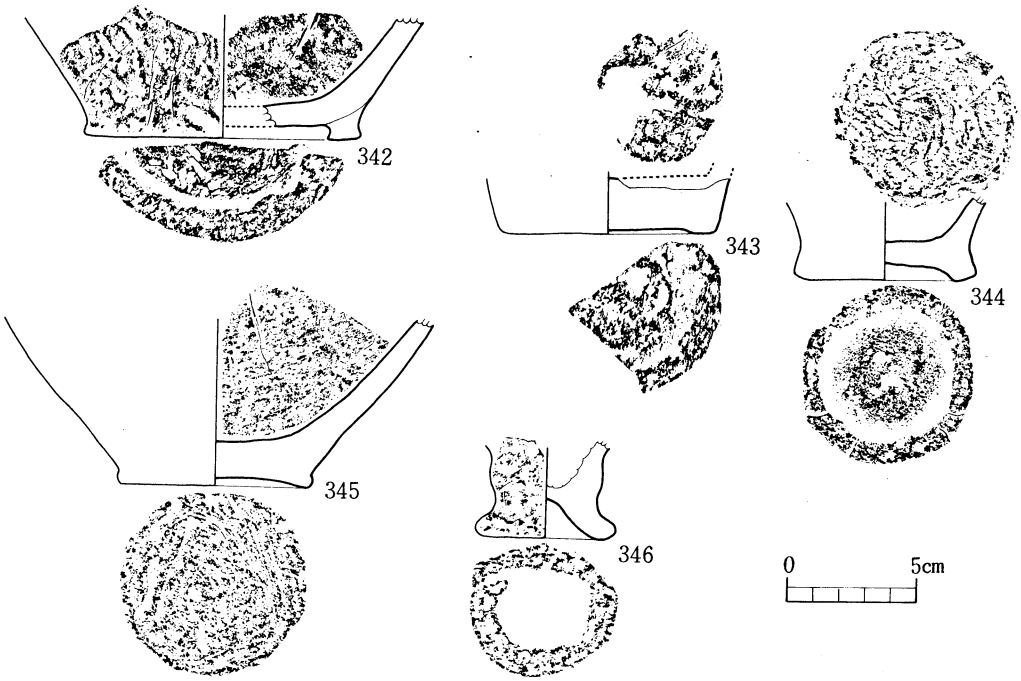
325は中央部分にもじり編み状の紐の痕跡が確認されるが、これも周囲をほとんどナデ消しており編みは不明である。

326は綾編み状であるが、不鮮明であり編み方は不明である。

327・328はいずれも圧痕は確認されるが、不鮮明であり編み方は不明である。これらはいずれも、圧痕をナデ消している可能性がある。

329～341は、無文の平底である。333・334・338・339は、底部の接地面が拡張して踏ん張り側面で締まり、そこから大きく外反して胴部へ立ち上がるタイプである。その他の平底は、底部からそのまま外傾して胴部へ立ち上がる。そこなかで、336は、底径は4.7cmと小さく、器壁厚も 0.5cmと薄いものである。ミニチュア土器の可能性が強い。

342～346は、上げ底の底部である。そのうち342～344は、高台状になる上げ底である。 345は、底面中央が弧状に高まる上げ底である。器面は全体的にナデ整形の丁寧な仕上げで磨消縄文土器の底部の可能性が強い。346は、接地面が踏ん張りラッパ状中空の底部である。底径は5.4cmと小さく、側面の締まったところの器壁は凹凸をもって装飾的に仕上げている。ミニチュア土器で脚台の可能性が強い。



第64図　Ⅷ類土器実測図（4）

第1表　出土遺物一覧表（1）

番号	類別	標　高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎　土	調　整	焼成	色　調
1	Ⅰ	71.0　他	D－19 Ⅹ	深鉢	口縁部	口　径　18.5	長　石	条痕、ナデ	良好	茶褐色
2	〃	71.35　他	〃　〃　他	〃	底　部	底　径　12.0	〃	〃	〃	〃
3	〃	71.37	〃　〃	〃	口縁部	器壁厚　0.8	〃	〃	〃	〃
4	〃	71.36　他	〃　〃　他	〃	〃	〃　0.9～1.2	〃	〃	〃	〃
5	〃	71.36	〃　〃	〃	胴　部	〃　0.9～1.1	〃	〃	〃	〃
6	〃	71.26	〃　〃	〃	〃	〃　1.0～1.3	〃	〃	〃	〃
7	〃	71.42	〃　〃	〃	〃	〃　1.1～1.2	〃	〃	〃	〃
8	〃	71.4	〃　〃	〃	〃	〃　0.7～1.1	〃	〃	〃	〃
9	〃	71.16	〃　〃	〃	〃	〃　0.8～1.2	〃	〃	〃	〃
10	〃	71.31　他	〃　〃　他	〃	口縁部	口　径　14.5	〃	〃	〃	〃
11	〃	71.245 他	〃　〃　他	〃	底　部	底　径　10.5	〃	〃	〃	〃
12	〃	71.15	〃　〃	〃	口縁部	器壁厚　0.5～0.7	〃	〃	〃	〃
13	〃	71.27	〃　〃	〃	〃	〃　0.8	〃	〃	〃	〃
14	〃	71.345	〃　〃	〃	胴　部	〃　0.7	〃	〃	〃	〃
15	Ⅱ	68.48	F－2　Ⅵ	〃	〃	〃　0.7～0.9	〃	〃	〃	暗茶褐色
16	〃	68.5	F－2　〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
17	〃	68.605	G－5　〃	〃	〃	〃　0.6	長石、金雲母	〃	普通	〃
18	Ⅲ	68.655 他	F－3　〃　他	〃	口縁～胴部	復元口径38.0復元高37.0	長石、角閃石	〃	良好	暗黄褐色
19	〃	68.505 他	A－3　〃　他	〃	口縁部	器壁厚　0.8～1.0	〃	〃	〃	茶褐色
20	〃	68.45	〃　〃	〃	〃	〃　0.7	〃	〃	〃	〃
21	〃	68.485 他	〃　〃　他	〃	胴　部	〃　0.8～0.9	〃	〃	〃	〃
22	〃	〃	B－4　〃	〃	口縁部	〃　〃	〃	〃	〃	〃
23	〃	68.475	A－3　〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	〃	〃
24	〃	68.165 他	A－2　〃　他	〃	〃	〃　0.6	〃	〃	〃	暗褐色
25	〃	68.15	〃　〃	〃	〃	〃　0.7～0.8	〃	〃	〃	〃
26	〃	68.45	B－4　〃	〃	〃	〃　0.8	〃	〃	〃	明褐色
27	〃	68.555	A－3　〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	〃	黄褐色
28	〃	68.445	〃　〃	〃	〃	〃　0.7	〃	〃	〃	明褐色
29	〃	68.48	A－4　〃	〃	〃	〃　0.8～0.9	〃	〃	〃	黄褐色
30	〃	68.59	A－3　〃	〃	〃	〃　0.8～1.1	〃	〃	〃	〃
31	〃	68.50	B－5　〃	〃	〃	〃　0.9～1.1	〃	〃	〃	暗褐色
32	〃	68.45	B－4　〃	〃	〃	〃　0.6～0.7	〃	〃	〃	〃
33	〃	68.456	〃　〃	〃	〃	〃　0.8～0.9	〃	〃	〃	〃
34	〃	68.53	〃　〃	〃	〃	〃　0.7～0.8	〃	〃	〃	灰褐色
35	〃	68.535	A－3　〃	〃	〃	〃　0.8～0.9	〃	〃	〃	明褐色
36	〃	68.445	A－2　〃	〃	〃	〃　0.8	〃	〃	〃	褐　色
37	〃	68.525	B－3　〃	〃	〃	〃　0.9	〃	〃	〃	明褐色
38	〃	68.465	A－2　〃	〃	底部付近	〃　0.8～0.9	〃	〃	〃	〃

第2表　出土遺物一覧表（2）

番号	類別	標　高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎　土	調　整	焼成	色　調
39	Ⅲ	68.47	B－4 Ⅵ	深鉢	底　部	底　径　6.5	長石、角閃石	条痕、ナデ	良好	茶褐色
40	〃	68.935	B－6 〃	〃	口縁部	口　径　19.4	長石、石英	〃	〃	黄褐色
41	〃	67.885 他	D－5 〃 他	〃	胴　部	器壁厚　0.9	〃	〃	〃	〃
42	〃	69.005	B－5 〃	〃	口縁部	〃　0.8	〃	〃	〃	赤褐色
43	〃	68.505	A－2 〃	〃	胴　部	〃　0.9～1.0	〃	〃	〃	暗褐色
44	Ⅳ	68.37 他	B－4 〃 他	〃	口縁～底部近く	復元口径　27.5	〃	〃	普通	黄褐色
45	〃	68.38	〃 〃	〃	胴　部	器壁厚　0.8	〃	〃	〃	〃
46	〃	〃	〃 〃	〃	底　部	〃　0.8	〃	〃	〃	〃
47	〃	68.43 他	〃 〃 他	〃	胴部近近	〃　0.8	〃	ケズリ、ナデ	〃	〃
48	〃	68.36 他	〃 他	〃	〃	〃　0.8	〃	〃	〃	〃
49	〃	68.36	A－2 〃	〃	底部付近	〃　0.8	〃	条痕、ナデ	〃	〃
50	〃	68.375	B－4 〃	〃	〃	〃　0.8	〃	〃	〃	〃
51	〃	68.52 他	A－3 〃 他	〃	口縁部	〃　0.7	〃	〃	〃	暗褐色
52	〃	68.56	〃 〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	〃	〃
53	〃	68.62	B－5 〃	〃	胴　部	〃　0.8	〃	〃	〃	〃
54	〃	68.58	B－4 〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	〃	〃
55	〃	68.54	A－3 〃	〃	〃	〃　0.9	〃	〃	〃	茶褐色
56	〃	68.505	A－4 Ⅹ	〃	〃	〃　0.8	〃	〃	〃	〃
57	〃	68.322	B－4 Ⅵ	〃	〃	〃　0.7～0.8	〃	〃	〃	〃
58	〃	68.525	〃 〃	〃	〃	〃　0.7～0.8	〃	〃	〃	〃
59	〃	な　し	な　し	〃	〃	〃　0.7～0.8	〃	〃	〃	〃
60	〃	68.4	B－4 Ⅵ	〃	〃	〃　0.7～0.8	〃	〃	〃	〃
61	〃	68.445	A－3 〃	〃	〃	〃　0.7	〃	〃	〃	暗褐色
62	〃	68.51	〃 〃	〃	〃	〃　0.9	〃	〃	〃	〃
63	Ⅴ	67.595	C－6 〃	〃	口縁部	〃　0.7～0.9	長石、石英、金雲母	ナ　デ	〃	赤暗褐色
64	〃	68.455	A－3 〃	〃	胴　部	〃　0.7	長石、石英、角閃石	〃	〃	黄赤褐色
65	Ⅵ	69.38 他	G－6 〃 他	〃	口縁部	〃　1.0	長石、石英	ケズリ、ナデ	普通	赤褐色
66	〃	68.96	E－6 〃	〃	〃	〃　0.85～1.0	〃	〃	〃	〃
67	〃	69.01	〃 〃	〃	〃	〃　0.9～1.0	〃	〃	〃	〃
68	〃	68.97 他	D－6 〃 他	〃	胴　部	〃　0.9～1	〃	ケズリ、ナデ	普通	赤暗赤褐色
69	〃	69.04 他	E－6 〃 他	〃	〃	〃　0.7～1.0	〃	〃	〃	赤褐色
70	〃	69.37	F－7 〃	〃	口縁部	〃　0.8	長石	ナ　デ	良好	黄褐色
71	〃	68.875	D－7 〃	〃	〃	〃　0.9	長石、石英	〃	〃	〃
72	〃	69.26	F－7 〃	〃	〃	〃　1.1～1.5	長石、石英、角閃石	〃	普通	茶褐色
73	〃	69.15	E－6 〃	〃	〃	〃　0.7	長石、石英、金雲母	ケズリ、ナデ	良好	〃
74	〃	72.565	F－24 〃	〃	〃	〃　0.9～ 1.0	〃	条　痕	〃	茶褐色
75	〃	72.56 他	〃 〃 他	〃	〃	〃　0.8～0.9	〃	〃	〃	〃
76	〃	72.565	〃 〃	〃	〃	〃　0.8～0.9	〃	〃	〃	〃

第3表　出土遺物一覧表（3）

番号	類別	標　高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎　土	調　整	焼成	色　調
77	Ⅵ	72.57	F－24 Ⅵ	深鉢	口縁部	器壁厚　0.8～0.9	長石、石英、金雲母	条　痕	良好	茶褐色
78	〃	72.09	C－22 〃	〃	〃	〃　1.0	長石、石英	ナ　デ	〃	赤褐色
79	〃	71.07	C－24 〃	〃	〃	〃　0.9	長石	ケズリ	〃	褐　色
80	〃	71.01	B－24 〃	〃	〃	〃　0.8～1.1	長石、石英	ナ　デ	〃	〃
81	Ⅶ	71.18	D－28 〃	〃	〃	〃　0.8～0.9	長石、金雲母	ケズリ、ナデ	〃	赤～黄褐色
82	〃	68.63	G－5 〃	〃	胴　部	〃　0.9～1.0	長石、石英	ナ　デ	〃	黄褐色
83	〃	72.27	C－28 〃	〃	〃	〃　1.0～	〃	〃	〃	〃
84	〃	69.31	F－7 〃	〃	〃	〃　1.0	〃	〃	〃	灰褐色
85	〃	69.22	F－6 〃	〃	〃	〃　0.7～0.8	〃	〃	〃	〃
86	〃	72.19	D－28 〃	〃	〃	〃　0.8～1.0	〃	〃	〃	赤褐色
87	〃	72.19　他	D－28 〃 他	〃	〃	〃　0.8～1.0	〃	〃	〃	〃
88	〃	71.16	C－24 〃	〃	〃	〃　1.0	〃	〃	〃	黄褐色
89	〃	69.36	F－7 〃	〃	〃	〃　0.9	〃	〃	〃	〃
90	〃	68.68	G－5 〃	〃	〃	〃　0.9	〃	〃	〃	〃
91	〃	72.74	F－24 〃	〃	〃	〃　1.3	〃	〃	〃	〃
92	〃	72.2	D－22 〃	〃	〃	〃　0.8	〃	〃	〃	赤褐色
93	Ⅷ	70.54　他	D－12 〃 他	〃	口縁～胴部	口径23.4器壁厚0.8	〃	ケズリ、ナデ	〃	黄暗褐色
94	〃	71.69　他	D－19 〃 他	〃	〃	器壁厚　0.9～1.2	〃	〃	〃	赤黄褐色
95	〃	71.52	C－16 〃	〃	胴　部	〃　0.7～1.2	〃	ナ　デ	〃	赤褐色
96	〃	71.82	E－18 〃	〃	〃	〃　0.9～1.2	〃	〃	〃	〃
97	〃	72.17	D－23 〃	〃	〃	〃　0.8～1.1	〃	〃	〃	〃
98	〃		AB－表	〃	〃	〃　0.9～1.1	〃	〃	〃	褐　色
99	〃	72.19	B－24 Ⅵ	〃	〃	〃　0.9～1.0	〃	〃	〃	茶褐色
100	〃	69.07	E－6 〃	〃	〃	〃　0.7～0.9	〃	〃	〃	〃
101	〃	72.27	D－23 〃	〃	〃	〃　0.7～0.9	〃	〃	普通	〃
102	〃	71.08	D－15 〃	〃	〃	〃　0.8～1.0	〃	ケズリ、ナデ	良好	〃
103	〃	63.305	F－6 〃	〃	〃	〃　0.9	〃	〃	〃	明褐色
104	〃	69.39	G－6 〃	〃	〃	〃　0.9～1.0	〃	ナ　デ	〃	〃
105	〃	72.23	D－23 〃	〃	〃	〃　0.7	〃	ケズリ、ナデ	〃	灰褐色
106	〃	71.94	D－19 〃	〃	〃	〃　0.8	〃	ナ　デ	〃	暗褐色
107	〃	72.21	D－24 〃	〃	〃	〃　0.8～1.1	〃	ケズリ、ナデ	普通	黄褐色
108	〃	71.065	B－24 〃	〃	〃	〃　0.7～1.1	〃	〃	良好	茶褐色
109	〃	72.065	A－24 〃	〃	〃	〃　0.8～1.2	〃	ナ　デ	〃	灰褐色
110	〃	72.59	F－21 〃	〃	〃	〃　0.8～1.0	〃	〃	〃	黄褐色
111	〃	68.185	F－6 〃	〃	〃	〃　0.7～1.0	〃	〃	〃	赤褐色
112	〃	68.225	〃　〃	〃	〃	〃　0.7～0.9	〃	〃	〃	黄褐色
113	〃	71.78	D－18 〃	〃	〃	〃　0.9	〃	〃	〃	茶褐色
114	〃	72.03	C－20 〃	〃	〃	〃　1.1	〃	〃	〃	〃

第4表　出土遺物一覧表（4）

番号	類別	標　高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎　土	調　整	焼成	色　調
115	Ⅷ	69.475	G－61 Ⅵ	深鉢	口縁部	器壁厚 0.9～1.1	長石、石英	ナ　デ	良好	茶 褐 色
116	〃	69.56	〃　〃	〃	〃	〃 0.9～1.1	〃	ケズリ、ナデ	〃	赤 褐 色
117	〃	68.78	B－5 〃	〃	〃	〃 1.3～1.8	長石	ナ　デ	〃	灰 褐 色
118	〃	69.21	F－6 〃	〃	〃	〃 0.8～1.0	長石、石英	条痕、ナデ	〃	赤黄褐色
119	〃	71.425	D－24 〃	〃	〃	〃 0.7～1.4	〃	ナ　デ	〃	赤 褐 色
120	〃	68.33	D－22 〃	〃	〃	〃 1.1～1.6	〃	ケズリ、ナデ	〃	茶 褐 色
121	〃	72.645	F－24 〃	〃	〃	〃 0.8～1.3	〃	〃	普通	〃
122	〃	71.3	D－15 〃	〃	〃	〃 1.0～1.4	〃	ナ　デ	〃	黄茶褐色
123	〃	72.64	D－19 〃	〃	〃	〃 0.9～1.3	〃	ナ　デ	良好	茶 褐 色
124	〃		CD－21表	〃	〃	〃 0.6～0.9	〃	ケズリ、ナデ	普通	赤 褐 色
125	〃	71.335	D－24 Ⅵ	〃	〃	〃 0.9～1.1	〃	〃	〃	茶 褐 色
126	〃	70.12	D－11 〃	〃	〃	〃 0.8～1.1	〃	〃	良好	〃
127	〃	69.54	D－7 〃	〃	〃	〃 0.9～1.1	〃	〃	〃	黄 褐 色
128	〃	69.36	F－6 〃	〃	〃	〃 0.8～1.1	〃	条痕、ナデ	〃	赤黄褐色
129	〃	69.49	D－7 〃	〃	胴　部	〃 0.7～1.1	〃	ケズリ、ナデ	〃	茶 褐 色
130	〃	71.75	E－18 〃	〃	口縁部	〃 0.8～1.0	長石、石英、金雲母	〃	〃	暗 褐 色
131	〃	72.21	D－22 〃	〃	口縁部付近	〃 0.8～0.9	〃	条痕、ナデ	〃	茶 褐 色
132	〃	72.245	D－22 〃	〃	口縁部	〃 1.1～1.2	長石、石英	ナ　デ	〃	明 褐 色
133	〃	72.02	D－20 〃	〃	〃	〃 1.1	長石、石英、金雲母	〃	〃	暗 褐 色
134	〃	69.935	D－9 〃	〃	胴　部	〃 0.8～0.9	長石、石英	条痕、ナデ	〃	茶 褐 色
135	Ⅸ	69.88 他	〃　他	〃	口縁部	〃 1.0～1.2	〃	ナ　デ	〃	〃
136	〃	68.815	〃　Ⅵ	〃	〃	〃 1.0～1.5	〃	〃	〃	黄茶褐色
137	〃	69.64	〃　〃	〃	〃	〃 0.9～1.5	〃	〃	〃	〃
138	〃	69.57	D－8 〃	〃	〃	〃 0.9～1.4	〃	〃	〃	黒 褐 色
139	〃	68.85	C－6 〃	〃	〃	〃 0.8～1.2	〃	〃	〃	茶 褐 色
140	〃	69.125	G－4 〃	〃	胴　部	〃 0.7～1.0	〃	〃	〃	明 褐 色
141	〃	68.645	B－5 〃	〃	〃	〃 0.9～1.2	〃	〃	〃	茶 褐 色
142	〃	68.46	C－5 〃	〃	口縁部	〃 0.9～1.0	〃	〃	〃	黄 褐 色
143	〃	68.84	C－7 〃	〃	胴　部	〃 0.7～0.9	〃	〃	〃	明茶褐色
144	〃	68.635	D－7 〃	〃	口縁部	〃 0.9～1.0	〃	〃	〃	灰 褐 色
145	〃	69.63	H－4 〃	〃	〃	〃 0.9～1.1	〃	〃	〃	〃
146	〃	69.53 他	〃　〃 他	〃	胴　部	〃 0.8～1.2	長　石	〃	普通	茶 褐 色
147	〃	69.53 他	〃　〃 他	〃	口縁～胴部	口　径 23.0	〃	〃	〃	〃
148	〃	70.64 他	A－3 〃 他	〃	胴　部	器壁厚 0.8～1.1	長石、角閃石	〃	〃	〃
149	〃		表	〃	〃	〃 0.7～1.2	〃	〃	〃	〃
150	〃	69.755 他	D－9 Ⅵ 他	〃	口縁～胴部	口　径 21.0	長　石	〃	〃	〃
151	〃	68.72	F－2 〃	〃	胴　部	器壁厚 0.7～1.0	長石、石	〃	良好	明 褐 色
152	〃	69.63	A－3 〃	〃	〃	〃 0.7～0.9	長石、角閃石	〃	〃	茶 褐 色

第5表　出土遺物一覧表（5）

番号	類別	標　高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎　土	調　整	焼成	色　調
153	Ⅸ	69.45 他	C－9 Ⅵ	深鉢	胴　部	器壁厚 1.0	長石、角閃石	ナ　デ	普通	茶 褐 色
154	〃	71.565	D－7 〃	〃	〃	〃 0.7～0.9	〃	〃	〃	〃
155	〃	68.76	〃 〃	〃	〃	〃 0.5～1.0	長石	〃	良好	暗 褐 色
156	〃	68.295	E－1 〃	〃	〃	〃 0.5～0.6	長石、角閃石	〃	普通	茶 褐 色
157	〃	70.005	C－9 〃	〃	〃	〃 0.7～0.9	長石	〃	良好	暗黄褐色
158	〃	68.415 他	F－1 〃	〃	口縁～胴部	〃 0.6～1.0	長石、角閃石	〃	〃	茶 褐 色
159	〃	68.52	F－2 〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	〃
160	〃	68.48	〃 〃	〃	胴　部	〃 0.7～0.8	〃	〃	〃	〃
161	〃	68.72	A－3 〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	明茶褐色
162	〃	68.34	C－4 〃	〃	口縁部	〃 0.6～1.1	〃	〃	〃	暗茶褐色
163	〃	67.92	G－2 〃	〃	胴　部	〃 0.9	〃	〃	普通	茶 褐 色
164	〃	69.79	C－8 〃	〃	口縁部	〃 0.8～0.9	長石	〃	良好	黄 褐 色
165	〃	69.94	〃 〃	〃	口縁～胴部	口径17.0胴径14.5	〃	〃	〃	暗黄褐色
166	〃	69.51	D－8 〃	〃	胴　部	器壁厚 0.7～0.9	長石、角閃石	〃	〃	暗茶褐色
167	〃	68.13	D－5 〃	〃	口縁部	〃 0.7～1.1	長石	〃	〃	茶 褐 色
168	〃	68.63	A－3 〃	〃	〃	〃 0.9～1.1	〃	〃	〃	明 褐 色
169	〃	68.555	F－3 〃	〃	〃	〃 0.7～1.0	長石、角閃石	〃	〃	灰茶褐色
170	〃	64.1	CD－2 〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	灰黄褐色
171	〃	62.68	D－1 〃	〃	胴　部	〃 0.5～0.6	長石、石英	〃	〃	暗 褐 色
172	〃	69.155	E－6 〃	〃	〃	〃 0.8～0.9	長石、石英、角閃石	〃	〃	〃
173	Ⅹ	71.19	D－15 〃	〃	口縁部	〃 0.7～3.5	長石、金雲母	条痕、ナデ	〃	暗茶褐色
174	〃	71.52	D－16 〃	〃	〃	〃 0.8～1.7	〃	〃	〃	茶 褐 色
175	〃	72.14	D－23 〃	〃	〃	〃 1.1～1.5	〃	〃	〃	暗 褐 色
176	〃	72.28	C－25 〃	〃	〃	〃 0.7～4.3	〃	〃	〃	茶 褐 色
177	〃	72.1	A－24 〃	〃	〃	〃 0.8～1.9	〃	〃	〃	明茶褐色
178	〃	72.08	D－23 〃	〃	〃	〃 1.0	長石	ナ　デ	〃	〃
179	〃	71.94	D－19 〃	〃	〃	〃 1.1～1.6	〃	〃	〃	灰 黄 色
180	〃	68.5 他	D－15 〃 他	〃	〃	〃 0.6～2.6	長石、金雲母	条痕、ナデ	〃	茶 褐 色
181	〃	71.16	〃 〃	〃	〃	〃 0.9～2.2	〃	〃	〃	赤 褐 色
182	〃	68.205	F－6 〃	〃	〃	〃 0.9～2.1	〃	〃	〃	茶 褐 色
183	〃	69.34	G－6 〃	〃	〃	〃 0.6～1.8	長石	〃	〃	明 褐 色
184	〃	68.205	F－6 〃	〃	〃	〃 0.9 ～1.7	長石、金雲母	〃	〃	黄 褐 色
185	〃	71.715	D－18 〃	〃	〃	〃 0.9～2.1	長石	ナ　デ	〃	明茶褐色
186	〃	72.21	D－22 〃	〃	〃	〃 0.8～1.4	〃	条痕、ナデ	〃	〃
187	〃	68.16	F－6 〃	〃	〃	〃 0.7～1.8	長石、金雲母	〃	〃	〃
188	〃	71.155	D－15 〃	〃	〃	〃 0.9～1.8	長石	〃	〃	暗灰褐色
189	〃	71.8	F－24 〃	〃	〃	〃 0.7～1.4	〃	〃	〃	暗茶褐色
190	〃	71.155	D－15 〃	〃	〃	〃 0.7～1.8	〃	〃	〃	明 褐 色

第6表　出土遺物一覧表（6）

番号	類別	標　高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎　土	調　整	焼成	色　調
191	X	72.05　他	D－23 Ⅵ	深鉢	口縁部	器壁厚　0.8～1.7	長石、石英、金雲母	条痕、ナデ	普通	暗茶褐色
192	〃	72 24	C－22 〃	〃	〃	〃　0.8～1.2	長　石	〃	〃	茶褐色
193	〃	72.09	C－23 〃	〃	〃	〃　0.7～1.7	〃	〃	良好	暗茶褐色
194	〃	72.27	D－24 〃	〃	〃	〃　0.9～1.8	〃	〃	普通	灰黄色
195	〃	71.115	B－24 〃	〃	〃	〃　1.0～2.2	長石、石英、金雲母	〃	良好	茶褐色
196	〃	68.45	F－5 〃	〃	口縁～胴部	復元口径23.0復元高30.5	〃	〃	〃	〃
197	〃	68.22	〃　〃	〃	〃	復元口径33.5復元高27.5	長　石	ケズリ、ナデ	普通	灰茶褐色
198	〃	69.26	E－6 〃	〃	口縁部	器壁厚　0.5～2.5	長石、金雲母	条　痕	〃	茶褐色
199	〃	71.05	D－15 〃	〃	〃	〃　0.7～1.8	長石、石英	条痕、ナデ	良好	明茶褐色
200	〃	72.17	C－24 〃	〃	〃	〃　1.2～1.5	長石、石英、角閃石	〃	〃	暗茶褐色
201	〃	72.155	〃　〃	〃	〃	〃　1.1～1.7	長石、石英	〃	〃	茶褐色
202	〃	72.18	〃　〃	〃	〃	〃　1.0～2.6	長石、石英、金雲母	〃	普通	暗褐色
203	〃	71.335	〃　〃	〃	〃	〃　0.9～1.8	長石、石英	〃	〃	明茶褐色
204	〃	72.225	〃　〃	〃	〃	〃　1.1～1.7	〃	〃	良好	暗茶褐色
205	〃	71.99	〃　〃	〃	〃	〃　0.9～1.6	〃	〃	〃	〃
206	〃	62.235	E－6 〃	〃	〃	〃　1.1～2.0	〃	〃	〃	赤褐色
207	〃	68.32　他	F－6 〃 他	〃	〃	〃　0.7～1.2	長石、石英、金雲母	〃	〃	茶褐色
208	〃	68.575 他	F－5 〃 他	〃	口縁～胴部	復元口径13.5器壁厚0.5～2.4	長石、石英	〃	普通	〃
209	〃	68.34	F－6 〃	〃	胴　部	器壁厚　0.7～1.4	長石、石英、金雲母	〃	良好	〃
210	〃	71.92	D－19 〃	〃	〃	〃　0.9～1.3	長　石	〃	〃	〃
211	〃	72.21	C－24 〃	〃	〃	〃　0.7～1.5	〃	〃	〃	褐　色
212	〃	72.17	〃　〃	〃	〃	〃　0.8～1.5	長石、石英、角閃石	〃	〃	暗茶褐色
213	〃	72.22	D－22 〃	〃	〃	〃　0.9～1.4	長石、石英、金雲母	〃	〃	茶褐色
214	〃	70.3	D－13 〃	〃	〃	〃　0.7～2.5	〃	ケズリ、ナデ	〃	明茶褐色
215	〃	71.55	D－16 〃	〃	〃	〃　0.8～1.6	長石、石英	条痕、ナデ	〃	〃
216	〃		C－17 表	〃	〃	〃　1.0～2.3	〃	〃	〃	〃
217	〃		D－17 表	〃	〃	〃　0.7～1.9	〃	〃	〃	〃
218	〃		C－17 表	〃	〃	〃　0.7～1.7	〃	〃	〃	〃
219	〃		〃　〃	〃	〃	〃　1.0～1.7	〃	〃	〃	〃
220	〃	72.23	D－24 Ⅵ	〃	〃	〃　1.2～2.7	〃	〃	〃	黄褐色
221	〃	70.09	C－10 〃	〃	〃	〃　0.8～2.2	長石、石英、金雲母	ナ　デ	〃	赤褐色
222	〃	71.97	D－19 〃	器台	脚　部	底　径　10.0	長石、石英	〃	〃	黄褐色
223	〃	68.76	G－5 〃	深鉢	口縁部	器壁厚　0.8～1.4	〃	条痕、ナデ	〃	茶褐色
224	〃	68.53　他	F－6 〃 他	〃	〃	〃　0.7～1.1	〃	〃	〃	暗茶褐色
225	〃	69.67	G－6 〃	〃	〃	〃　0.5～1.1	〃	〃	〃	茶褐色
226	〃	68.305	F－5 〃	〃	〃	〃　0.9～1.8	長石、石英、金雲母	ナ　デ	〃	〃
227	〃	71.24	C－24 〃	〃	〃	〃　0.8～1.7	〃	条痕、ナデ	〃	〃
228	〃	72.09	A－24 〃	〃	〃	〃　1.0～1.8	長　石	〃	〃	〃

第7表　出土遺物一覧表（7）

番号	類別	標　高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎　土	調　整	焼成	色　調
229	Ⅹ	71.295	C－24 Ⅵ	深鉢	口縁部	器壁厚 0.7～1.4	長石、石英	条痕、ナデ	良好	茶 褐 色
230	〃	69.9	D－10 〃	〃	〃	〃 1.0～1.8	〃	〃	〃	〃
231	〃	72.14	D－26 〃	〃	〃	〃 0.8～1.2	〃	〃	〃	茶～暗褐色
232	〃	70.63	F－14 〃	〃	〃	〃 0.9～1.2	長石、石英、金雲母	〃	〃	〃
233	〃	69.78	D－10 〃	〃	〃	〃 0.7～1.8	長石、石英	〃	〃	茶 褐 色
234	〃	72.335	D－22 〃	〃	〃	〃 0.7～1.3	長石、石英、金雲母	〃	〃	暗茶褐色
235	〃	69.91	D－10 〃	〃	〃	〃 1.0～1.3	長石、石英	〃	〃	灰 褐 色
236	〃	70.73	D－14 〃	〃	〃	〃 0.8～1.4	長石、石英、金雲母	〃	〃	暗茶褐色
237	〃	72.44	E－24 〃	〃	〃	〃 0.8～0.9	長石、石英	〃	〃	茶 褐 色
238	〃	72.205	D－23 〃	〃	〃	〃 0.5～0.9	〃	〃	〃	暗茶褐色
239	〃	71.03	E－15 〃	〃	〃	〃 0.8～1.0	長石、石英、金雲母	〃	〃	黄 褐 色
240	〃	72.28	D－23 〃	〃	〃	〃 0.9～1.2	長石、石英	〃	〃	茶 褐 色
241	〃	72.1 他	〃 〃 他	〃	〃	〃 0.7～0.8	長石、石英、金雲母	〃	〃	暗茶褐色
242	〃	72.095	D－24 〃	〃	〃	〃 0.9～1.3	長石、石英	〃	〃	茶 褐 色
243	〃	71.03	D－15 〃	〃	〃	〃 0.9～1.9	〃	〃	〃	〃
244	Ⅺ	69.44 他	D－8 〃 他	〃	〃	〃 0.8～1.1	長石、石英、金雲母	条痕、ナデ	普通	暗茶褐色
245	〃	72.07	D－20 〃	〃	〃	〃 0.7～1.1	長石、石英	〃	〃	茶 褐 色
246	〃	69.73 他	D－9 〃 他	〃	〃	〃 0.9～1.6	長石、石英、金雲母	〃	〃	暗茶褐色
247	〃	69.52 他	D－7 〃 他	〃	〃	〃 0.6～0.8	〃	〃	〃	茶 褐 色
248	〃	69.935	C－9 〃	〃	〃	〃 0.8～0.9	長石、石英	〃	〃	〃
249	〃	68.71 他	B－4 〃 他	〃	〃	〃 0.7～1.0	〃	〃	〃	〃
250	〃	69.88	D－9 〃	〃	〃	〃 1.0～1.1	〃	〃	〃	〃
251	〃	72.12	C－23 〃	〃	〃	〃 1.0～1.2	長石、石英、金雲母	〃	〃	〃
252	〃	69.61 他	D－9 〃 他	〃	〃	〃 1.0～1.1	長石、石英	〃	〃	〃
253	〃	72.45	E－24 〃	〃	〃	〃 0.9～1.0	〃	〃	〃	〃
254	〃	69.94	C－8 〃	〃	〃	〃 0.8～0.9	長石、石英、金雲母	〃	〃	〃
255	〃	69.59	H－4 〃	〃	〃	〃 0.9～1.1	〃	〃	〃	〃
256	〃	68.395	C－5 〃	〃	〃	〃 1.0～1.4	〃	〃	〃	〃
257	〃	69.89	C－8 〃	〃	〃	〃 0.8～0.9	〃	〃	〃	〃
258	〃	68.61	B－5 〃	〃	〃	〃 0.7～0.8	長石、石英	〃	〃	〃
259	〃		A－3 〃	〃	〃	〃 1.0～1.1	長石、石英、金雲母	〃	〃	〃
260	〃	72.745	F－24 〃	〃	〃	〃 0.9～1.3	〃	〃	〃	〃
261	〃	69.89	C－8 〃	〃	〃	〃 0.8～0.9	〃	〃	〃	茶～暗茶褐色
262	〃	69.83	〃 〃	〃	〃	〃 1.1～1.2	長石、石英	〃	〃	〃
263	〃	72.38	D－25 〃	〃	〃	〃 0.8～0.9	〃	〃	〃	〃
264	〃	69.75	D－8 〃	〃	〃	〃 0.8～0.9	長石、石英、金雲母	〃	〃	〃
265	〃	68.24	C－5 〃	〃	〃	〃 0.8～0.9	〃	〃	〃	〃
266	〃	69.655 他	D－8 〃 他	〃	〃	〃 0.7～0.8	〃	〃	〃	〃

第8表　出土遺物一覧表（8）

番号	類別	標　高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎　土	調　整	焼成	色　調
267	XI	69.72	D－10 VI	深鉢	口縁部	器壁厚　0.7～0.9	長石、石英、金雲母	条痕、ナデ	普通	茶～暗褐色
268	〃	68.26	C－5 〃	〃	〃	〃　0.9～1.0	〃	〃	〃	茶褐色
269	〃	68.325	A－2 〃	〃	口縁～胴部	復元口径22器壁厚0.8～0.9	〃	〃	〃	暗～茶褐色
270	〃	69.54	H－4 〃	〃	〃	復元口径20器壁厚1.0～1.1	〃	〃	〃	茶褐色
271	〃	68.43　他	F－6遺構他	〃	〃	器壁厚　0.9～1.1	〃	〃	〃	暗茶褐色
272	〃	72.02	B－24 VI	〃	〃	〃　0.6～1.2	〃	〃	〃	〃
273	XII	71.79　他	D－18 C－19 〃 他	器台	脚部	底径　14.3	長石	ケズリ	良好	黄褐色
274	〃	72.29	D－22 〃	〃	口縁部	器壁厚　0.5～1.5	長石、石英	ナデ、ケズリ	〃	〃
275	〃	72.38	D－25 〃	〃	〃	〃　0.8～1.5	〃	〃	〃	〃
276	〃	72.06	A－24 〃	〃	〃	〃　1.0～1.7	〃	〃	〃	明褐色
277	〃	69.71	D－8 〃	〃	〃	〃　0.6～1.4	〃	〃	〃	茶褐色
278	〃	71.015	D－15 〃	〃	〃	〃　0.8～1.7	長石、石英、角閃石	ナデ	〃	黄～紅褐色
279	〃	63.395	D－23 〃	〃	〃	〃　0.7～1.3	〃	〃	〃	黄褐色
280	〃	72.06	〃　〃	〃	〃	〃　1.3	長石、石英	〃	〃	茶褐色
281	〃	72.49	F－24 〃	〃	〃	〃　0.9～1.5	長石、石英、金雲母	〃	〃	〃
282	〃	63.03	D－8 〃	〃	〃	〃　0.8～1.6	長石、石英	ケズリ	〃	紅褐色
283	〃	68.47	A－3 〃	〃	〃	器壁厚 0.6～0.8 } 復元口径 23.0	〃	条痕、ナデ	〃	赤褐色
284	〃	68.57	〃　〃	〃	〃	器壁厚 0.8 } 復元口径 23.0	〃	〃	〃	〃
285	〃	68.54　他	〃　〃 他	〃	胴部	器壁厚 0.7～0.8 } 復元高 18.0	〃	〃	〃	〃
286	〃	68.38	〃　〃	〃	底部	器壁厚 0.7 } 復元高 18.0	〃	〃	〃	〃
287	〃	72.285	D－24 〃	〃	〃	器壁厚　0.7～1.4	〃	ヘラナデ	〃	茶褐色
288	〃	69.14	E－6 〃	〃	〃	〃　0.7～0.9	〃	ナデ	〃	暗褐色
289	〃	72.38	D－25 〃	〃	胴部	〃　0.6～0.9	〃	ケズリ、ナデ	〃	〃
290	〃	72.39	E－24 〃	〃	口縁部	〃　0.9～1.0	〃	〃	〃	茶褐色
291	〃	70.765	E－15 〃	〃	〃	〃　0.8～1.1	〃	ナデ	〃	赤褐色
292	〃	71.86	D－18 〃	〃	〃	〃　0.8	〃	〃	〃	〃
293	〃	68.29　他	F－5 〃 他	〃	口縁～胴部	口径　30.6	〃	ヘラ、ナデ	〃	茶～暗褐色
294	〃	70.64	D－14 〃	〃	口縁部	器壁厚　0.9～1.0	長石、石英、金雲母	条痕、ナデ	〃	暗茶褐色
295	〃	70.63	〃　〃	〃	〃	〃　1.0～1.1	〃	〃	〃	〃
296	〃	70.46	〃　〃	〃	〃	〃　〃	〃	〃	〃	〃
297	〃	71.17	D－15 〃	〃	〃	〃　0.8～1.3	〃	〃	〃	灰褐色
298	〃	70.765 他	E－15 〃 他	〃	〃	〃　0.9～1.2	長石、石英、角閃石	ケズリ、ナデ	普通	暗褐色
299	〃	68.845	F－3 〃	〃	〃	〃　0.9～1.0	長石、石英	ナデ	良好	黄褐色
300	〃	68.15	D－6 〃	〃	〃	〃　0.9	〃	条痕、ナデ	〃	〃
301	〃	68.5	A－3 〃	〃	〃	〃　0.7～0.8	〃	〃	〃	茶褐色
302	〃	68.725	D－5 〃	〃	〃	〃　0.8～0.9	長石、石英、金雲母	ケズリ、ナデ	〃	〃
303	〃	687	F－2 〃	〃	〃	〃　0.8～1.0	〃	〃	〃	〃
304	〃	68.625	F－3 〃	〃	〃	〃　0.7	長石、石英	条痕、ナデ	〃	〃

第9表　出土遺物一覧表（9）

番号	類別	標　高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎　土	調　整	焼成	色　調
305	XII	69.085	B－7 VI	深鉢	注口部	内径　内側1.5外側2.0	長石	ナ　デ	良好	赤褐色
306	〃	68.28	C－5 〃	〃	口縁部	器壁厚　1.0～1.2	長石、石英、金雲母	〃	〃	茶褐色
307	〃		D－18 表	把手	把　手	現存高　7.4	〃	〃	〃	〃
308	〃	72.07	D－21 VI	〃	〃	〃　7 3.	長石、石英	〃	普通	〃
309	XIII	68.225	F－6 〃	深鉢	底　部	底　径　16.4	〃	ケズリ、ナデ	良好	茶褐色
310	〃	68.89	G－5 〃	〃	〃	〃　10.8	〃	〃	〃	〃
311	〃	69.29	F－7 〃	〃	〃	〃　9.0	〃	条痕、ナデ	〃	〃
312	〃	68.725	D－14 〃	〃	〃	〃　9.2	〃	〃	〃	明茶褐色
313	〃	71.03	C－24 〃	〃	〃	〃　12.4	〃	〃	〃	茶褐色
314	〃	69.305	E－7 〃	〃	〃	〃　12.8	長石、石英、角閃石	〃	〃	〃
315	〃	69.31	F－7 〃	〃	〃	〃　12.0	長石、石英	〃	〃	〃
316	〃	71.0	B－24 〃	〃	〃	〃　11.0	〃	〃	〃	赤茶褐色
317	〃	69.38	F－7 〃	〃	〃	〃　11.2	〃	〃	〃	茶褐色
318	〃	68.235	F－6 〃	〃	〃	〃　10.0	〃	〃	〃	〃
319	〃	72.16	D－23 〃	〃	〃	〃　8.8	〃	〃	〃	〃
320	〃	72.14	〃　〃	〃	〃	〃　9.9	〃	〃	〃	黄茶褐色
321	〃	69.4	G－6 〃	〃	〃	〃　9	〃	〃	〃	茶褐色
322	〃	71.96	D－20 〃	〃	〃	〃　10	〃	〃	〃	〃
323	〃	68.245	F－6 〃	〃	〃	〃　13	〃	〃	〃	明茶褐色
324	〃	69.26	〃　〃	〃	〃	〃　10.6	長石、石英、金雲母	〃	〃	〃
325	〃	69,13	E－6 〃	〃	〃	〃　9.2	長石、石英	〃	〃	灰茶褐色
326	〃	68,09	D－6 〃	〃	〃	〃　13	〃	〃	〃	茶褐色
327	〃	68,53	B－24 〃	〃	〃	〃　8.6	〃	〃	〃	暗茶褐色
328	〃	68,75	D－24 〃	〃	〃	〃　7.4	〃	〃	〃	茶褐色
329	〃	68,315	D－22 〃	〃	〃	〃　10.6	長石、石英、金雲母	〃	〃	〃
330	〃	72,09	D－23 〃	〃	〃	〃　10.0	長石、石英	ナ　デ	〃	〃
331	〃			〃	〃	〃　6.4	長石、石英、金雲母	条痕、ナデ	〃	〃
332	〃	68.45	B－4 VI	〃	〃	〃　8.6	長石、石英	〃	〃	明茶褐色
333	〃	68.27	C－5 〃	〃	〃	〃　10.8	〃	ナ　デ	〃	〃
334	〃	69.4	G－6 〃	〃	〃	〃　9.4	〃	条痕、ナデ	〃	〃
335	〃	69.01	C－7 〃	〃	〃	〃　7.6	〃	〃	〃	〃
336	〃	71.57	D－17 〃	?	〃	〃　4.7	〃	〃	〃	〃
337	〃	68.505 他	A－3 〃 他	深鉢	〃	〃　8.8	〃	〃	〃	赤茶褐色
338	〃	69.27	F－6 〃	〃	〃	〃　7.6	〃	〃	〃	茶褐色
339	〃		D－17 表	〃	〃	〃　8.6	長石、石英、金雲母	〃	〃	〃
340	〃	69.33	F－7 VI	〃	〃	〃　9.6	長石、石英	〃	〃	明茶褐色
341	〃	72.37	D－25 〃	〃	〃	〃　9.5	〃	ケズリ、ナデ	〃	茶褐色
342	〃	70.475	D－11 〃	〃	〃	〃　10.8	〃	〃	〃	〃

第10表　出土遺物一覧表（10）

番号	類別	標　高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)cm	胎　土	調　整	焼成	色　調
343	XIII	71.085	B－24 VI	深　鉢	底　部	底　径　9.4	長石、石英	ケズリ、ナデ	良好	茶 褐 色
344	〃	72.23	D－22 〃	〃	〃	〃　6.8	〃	条痕、ナデ	〃	〃
345	〃	68.48	B－4 〃	〃	〃	〃　7.5	〃	〃	〃	明茶褐色
346	〃	69.08	E－6 〃	?	〃	〃　5.4	〃	ナ　デ	〃	〃

加　工　品（土製加工品）

番号	類別	標　高	区・層	器　種	部　位	法量(径・高・厚)cm	胎　土	調　整	焼成	色　調
440		72.68	F－24 VI	メンコ	胴　部	径4.4×4.2、厚0.8	長石、石英	ナ　デ	良好	茶 褐 色
441		72.00	B－24 〃	〃	〃	径4.8×4.5、厚0.85	〃	〃	〃	〃
442		68.87	C－7 〃	〃	〃	径5.9×3.3、厚0.7	〃	〃	〃	灰茶褐色
443		71.18	D－15 〃	〃	〃	径9.5×9　、厚0.8	〃	ケズリ、ナデ	〃	暗茶褐色
444		71.08	B－25 〃	〃	〃	径4.9×4.8、厚1.05	長石、石英、金雲母	条痕、ナデ	〃	茶 褐 色
445		72.06	D－21 〃	〃	〃	径5.6×5.3、厚0.8	長石、石英	〃	〃	〃
446		69.64	C－5 〃	〃	〃	径5.3×5.2、厚0.8	〃	〃	〃	明茶褐色
447		68.85	B－24 〃	〃	〃	径4.6×4.6、厚0.6	〃	ケズリ、ナデ	〃	茶 褐 色
448			C－22 表	〃	口縁部	径5.7×5.3、厚1.0	〃	〃	〃	明茶褐色
449		72.13	D－23 VI	〃	胴　部	径8　×7.8、厚0.8	〃	条痕、ナデ	〃	暗茶褐色
450		71.2	D－15 〃	〃	〃	径7.5×7.4、厚1.0	〃	〃	〃	茶 褐 色
451		68.845	F－4 〃	〃	〃	径5　×4.6、厚1.0	〃	〃	〃	暗茶褐色
452		72.23	D－22 〃	〃	〃	径4.7×4.7、厚0.7	〃	〃	〃	茶 褐 色
453		69.38	G－6 〃	〃	〃	径5.1×5.0、厚0.9	〃	〃	〃	明茶褐色
454		70.96	D－14 〃	〃	〃	径4.6×4.3、厚0.95	〃	〃	〃	茶 褐 色
455		68.805	C－24 〃	〃	〃	径4.4×3.8、厚1.0	〃	ナ　デ	〃	〃
456		72.165	D－23 〃	〃	〃	径3.5×3.5、厚0.85	〃	〃	〃	〃
457		69.8	C－8 〃	〃	〃	径5.8×2.8、厚0.7	〃	条痕、ナデ	〃	〃
458		71.98	B－24 〃	〃	〃	径3.3×2.0、厚0.9	長石、石英、金雲母	ナ　デ	〃	暗茶褐色

1）石器Ⅰ（石鏃）　（第67図－347～355）

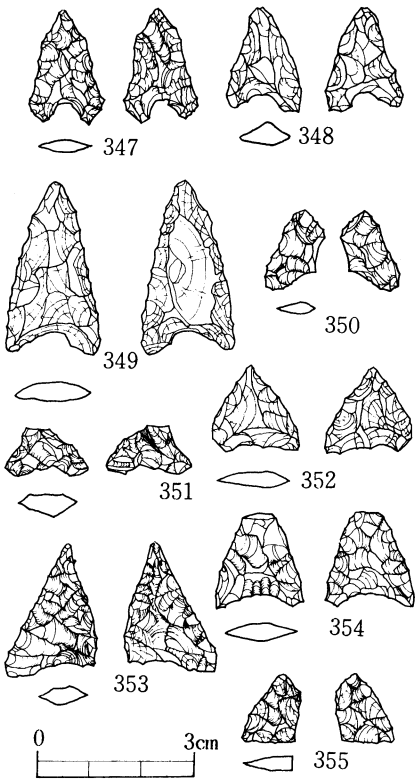
総数9点の打製石鏃が出土しており、すべて無茎鏃である。完形品3点、残り6点は破損品である。

347は、凹基式無茎鏃で基部にU字の深い介入をもつ完形品である。側辺は、先端より下¼のところに凸部をもっている。石質が黒耀石のため剥離面は、明確にとらえる事ができる。

348は、凹基式無茎鏃で完形品である。基部から先端に向かって側辺が左にずれている。そのため、左側辺は内側にわずかながら弧を描き右側面はその逆になる。剥離面は風化のため明確に捕らえる事はできない。

349は、凹基式無茎鏃で完形品である。側辺は、直線に近いものである。表面は風化しており、剥離面は明確に捕らえる事は出来ない。

350は、片脚が破損した凹基式無茎鏃であるがそれほど深い介入ではない。側辺は、先端に向かって直線に近いものである。



第65図　石器Ⅰ（石鏃）実測図

351は、凹基式無茎鏃で先端をもたない破損品である。基部と脚の境にわずかな凹みをもつものである。

352は、片脚が破損した基部の介入が直線に近い平基式無茎鏃である。側辺の形状から三角形に近いもので先端部は、鋭く加工している。

353は、片脚が破損した、基部が直線に近い平基式無茎鏃である。側辺の形状から、正三角形に近く先端部は鋭く加工している。

354は、基部にわずかな介入はあるものの直線に近い先端が破損した平基式無茎鏃である。側辺も、直線にちかいものである。

355は、基部が直線に近い片脚が破損した平基式無茎鏃である。側辺の形状から、正三角形に近いもので先端部は丸みをおびている。

2）石器Ⅱ（磨製石斧）（第67図－356～376）

総数21点の磨製石斧が出土しており、完形品2点、残り19点は破損品である。そのほとんどはすべてⅣ層より検出されている。

磨製石斧は、Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類、Ⅳ類に分類して説明する。

ア）Ⅰ類　（第68図－356～359）

Ⅰ類の3点の石斧は、乳棒状磨製石斧である。

356は、体部の横断面が楕円形で、肉厚の棒状を呈しており、刃部に向かって次第に太くなり刃部は蛤刃状をなす。石斧全体が研磨されており、研磨部分にはほとんど擦痕が見られ特に、基部の擦痕は鮮明に観察できる。

357は、破損のため基部だけを残す。全体的に丁寧な研磨が施されているが、風化のため擦痕は一部でしか確認することは出来ない。

358は、破損のため基部だけを残しており体部及び刃部の形態は全く不明であるが、その基部を見ると研磨による面づくりが施され、体部と側縁との境は鮮明である。

359は、破損のため刃部は残っていない。側面は、丁寧な研磨により平に近い面づくりが成され、擦痕も明確に確認できる。体部面は、風化のため擦痕を確認することができない。

イ）Ⅱ類　（第68・69図－360～371）

Ⅱ類の7点の石斧は、扁平磨製石斧である。

360は、刃部が破損しており形態は不明である。基部の形態は、丸みをおびており研磨の状態が伺える。体部も基部と同様丸みをおびているが側面の研磨がないために、その稜線は不明瞭である。側面以外には、全体的に擦痕を見ることができる。

361は、破損のため片側の体部及び刃部の一部だけが面を残している。残っている刃は、円刃である。風化のため擦痕及び使用痕は見ることができない。

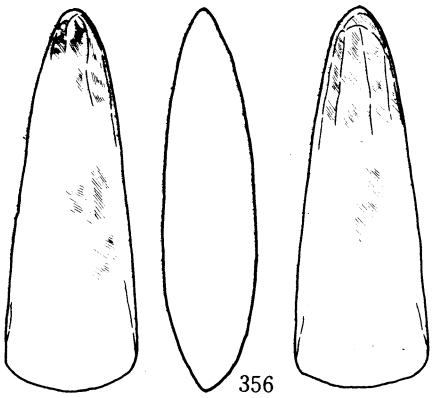
362は、破損のため基部がない。刃部は、円刃をなし蛤刃状で鈍く摩滅している。側面はわずかではあるが研磨された形跡が見られるが、風化のため擦痕は見られない。体部面及び基部面も風化のため明確な擦痕は見られない。

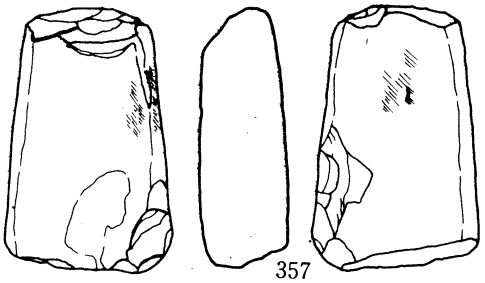
363は、破損のため体部の真ん中より基部にかけての形態は不明である。小さいながらも実に精巧にできており、研磨も側面まで行き届いている。風化もなく全体的に擦痕が見られる。刃部は円刃で蛤刃状である。

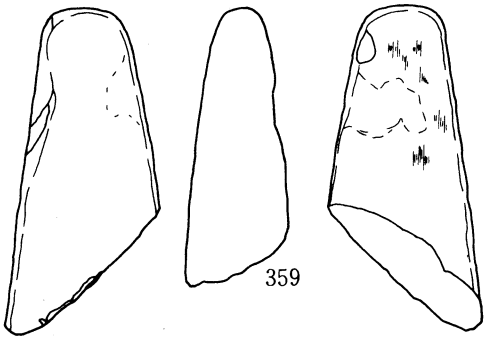
364は、体部及び裏の一部の刃部破損のため全形態は不明である。刃部は丁寧に研磨されているが風化のため擦痕は確認できない。鈍い摩滅は数ケ所見られる。側面は、敲打調整されており右側面は、研磨による面調整が施されている。刃部は、円刃である。

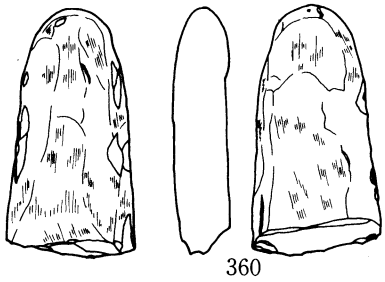
365は、363と同じような破損状態である。全体的に形態は、363の拡大した感じである。363よりも側縁は、きれいに研磨されていないため、擦痕も363程明確ではない。刃部は円刃を成し蛤刃である。

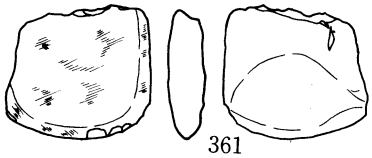
366は、破損のため刃部及び体部の一部が残っているだけで形態は不明である。刃部は丁寧な研磨により面が作られているが、風化のためわずかな擦痕しか確認する事はできない。また、鈍い摩滅が見られる。刃の形態は、残った刃部だけて推定すると直刃ではないかと考えられる。基部側面は、両面から研磨されており中心に稜を確認することができる。

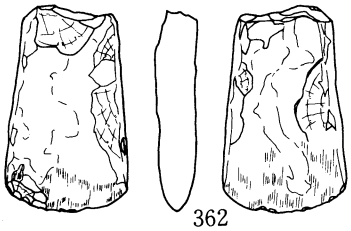


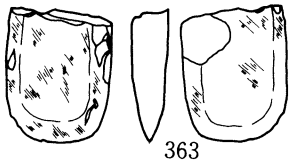


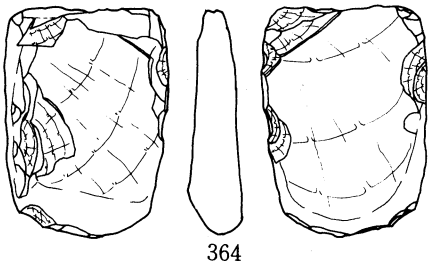


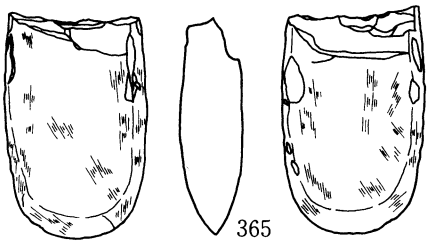


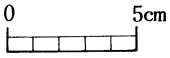




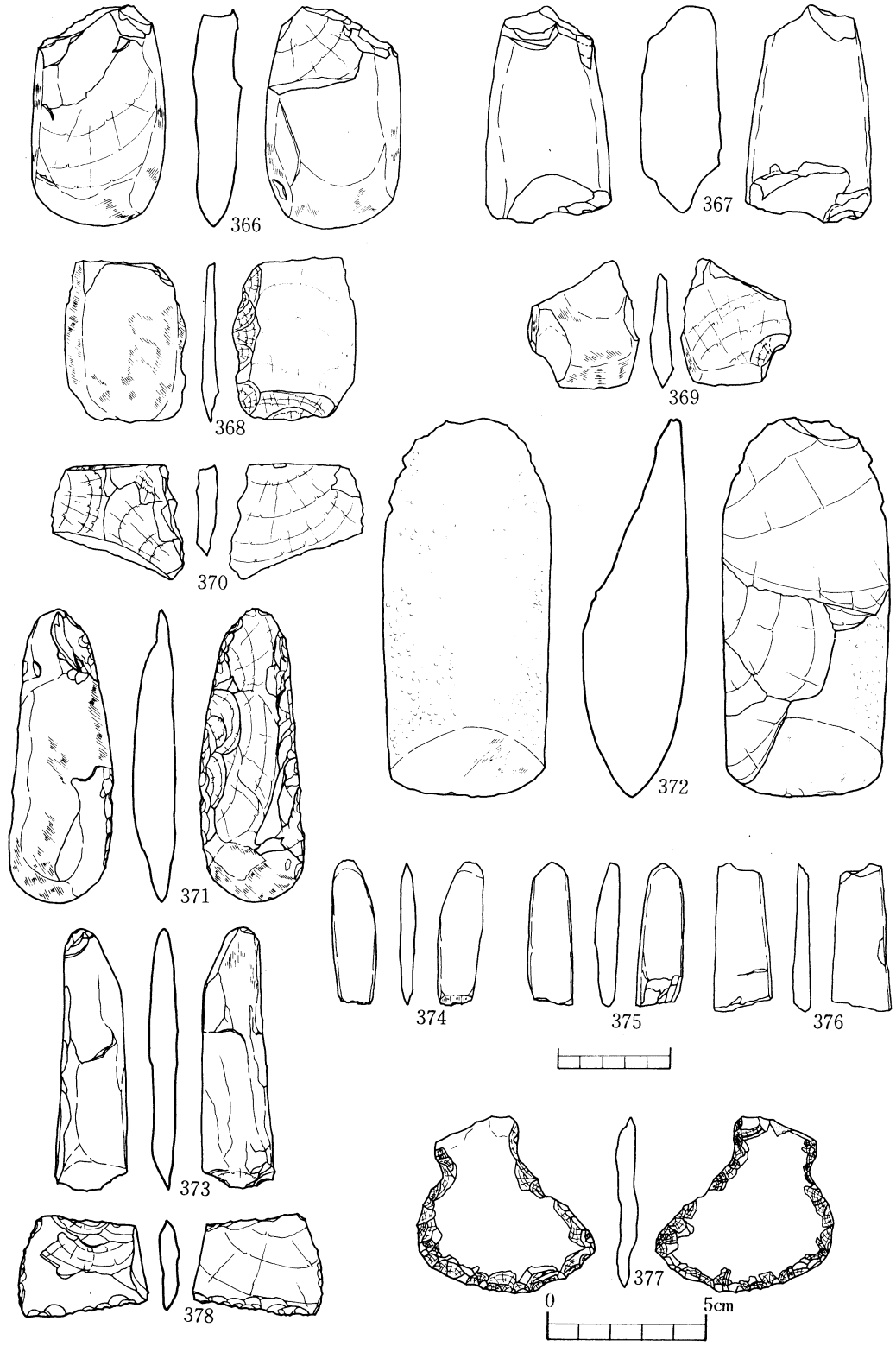








第66図　石器Ⅱ（磨製石斧）実測図



第67図　石器Ⅱ～Ⅳ（磨製石斧・石匙・スクレィパー）実測図

367は、破損のため基部及び刃部がない。体部及び側面に敲打調整が施されており、その後研磨による面調整が成されている。破損箇所の、鋭利な部分を使っていたのではないかと思われる破損面がある。

368は、破損のため体部片面、片側側面、刃部の一部が残っているだけで形態は不明である。刃面及び側面には、丁寧な研磨が施されており明瞭な擦痕が確認できる。

369は、破損のため体部及び刃部の片面が残っているだけで形態は不明である。刃面及び側面は丁寧な研磨がなされているが、風化のため擦痕は一部にだけ確認される。

370は、破損のため基部の片面が残るだけである。研磨は、横直線状に基部面しか施されておらずその他の部分は、剝離調整だけである。

371は、破損のため片面と裏の刃部の一部が残っているだけである。母岩より剝離された剝片をそのまま使用したものと考えられる。片面は、自然面をそのままの状態で研磨しその裏は刃部だけを研磨し側面は剝離調整が施されているだけである。研磨された部分は、明瞭な擦痕が確認できる。

ウ）Ⅲ類　（第69図　372）

372は、大型蛤刃磨製石斧である。基部は破損しており石斧の全形態は不明である。刃部は鈍く摩滅しており、体部は敲打により面調整されている。また側面は研磨により、面が調整されており、側面全体に擦痕が見られる。刃部から体部までの側縁を見ると基端部までほぼ一定の幅を持つのではないかと推定できる。

エ）Ⅳ類　（第69図　373～376）

Ⅳ類の、4点の石斧は鑿形石斧である。

373は、刃部がわずかに破損しているものである。両面とも丁寧な研磨が施されているが、風化のため側面に擦痕が確認できるだけである。刃部は、残っている片面が丁寧な研磨により刃面が形成されており、片刃ではないかと推定できる。

374は、刃部の一部破損品である。全体的に研磨が施されてはいるが、風化のため擦痕は確認できない。刃部は、残っている形態により鋭利な片刃を成していたと考えられる。基端部も使用目的のためか研磨により両刃が形成されている。

375は、比較的厚さがあり、刃部と考えられる下辺が破損している。側面に、わずかではあるが研磨による擦痕が確認できる。他面は、風化のため擦痕は確認できない。

376は、鑿形石斧に分類しているが、類似しているものとしてあげる。風化のため擦痕は確認できないが基部の一部だけ研磨され、他に研磨されている部分はない。刃部も形成されておらず鑿形石斧の製作途中ではないかと考えられる。

3）石器Ⅲ（石匙）　（第69図－377）

377は、横形の形態をもつ完形品である。刃部は、やや幅広で丸みをおびている。両面ともに自然面を多くのこし、刃部は細かな剝離面調整が行なわれている。つまみ部の幅は、全横幅の½にちかいものである。

4）石器Ⅳ（スクレーパー）　（第69図－378）

378は、刃部と思われるふたつの側縁に連続的な剥離調整がおこなわれている。形態は、横ながの長方形に近いものである。

第11表　石器出土一覧表

挿図番号	器　種	出土区	層位	石　材	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
347	打製石鏃	G－6	Ⅵ	黒耀石	0.59	2.1	1.4	0.2
348	打製石鏃	D－13	Ⅱ	砂岩	0.95	1.9	1.3	0.5
349	打製石鏃	B－16	Ⅵ	頁岩	1.92	3.9	2.2	0.55
350	打製石鏃	A－3	Ⅵ	黒耀石	0.32	1.5	0.8	0.25
351	打製石鏃	B－3	Ⅵ	黒耀石	0.33	0.9	1.6	0.45
352	打製石鏃	E－14	Ⅵ	頁岩	0.56	1.6	1.6	0.35
353	打製石鏃	D－13	Ⅵ	黒耀石	1.06	2.5	1.7	0.35
354	打製石鏃	D－1	Ⅵ	石英	0.95	1.85	1.7	0.35
355	打製石鏃	D－5	Ⅱ	黒耀石	0.35	1.3	1.0	0.3
356	磨製石斧	D－18	Ⅵ	頁岩	325	14.6	5.0	3.5
357	磨製石斧	D－13	表	ホルンフェルス	359	10.0	6.4	3.4
358	磨製石斧	D－13	Ⅵ	ホルンフェルス	30	4.0	3.4	1.8
359	磨製石斧	E－17	Ⅵ	ホルンフェルス	343	11.4	5.4	3.8
360	磨製石斧	E－6	Ⅵ	安山岩	158	9.5	4.9	2.1
361	磨製石斧	G－6	Ⅵ	安山岩	54	6.0	5.5	1.4
362	磨製石斧	E－6	Ⅵ	ホルンフェルス	95	7.9	4.7	1.6
363	磨製石斧	C－5	Ⅵ	安山岩	42	5.1	4.0	1.4
364	磨製石斧	F－6	Ⅵ	ホルンフェルス	175	8.7	6.3	2.1
365	磨製石斧	E－7	Ⅵ	ホルンフェルス	169	8.3	5.2	2.4
366	磨製石斧	A－4	Ⅵ	ホルンフェルス	190	9.7	5.9	2.1
367	磨製石斧	D－17	表	ホルンフェルス	238	9.4	5.6	3.5
368	磨製石斧	C－5	Ⅵ	ホルンフェルス	45	7.1	5.4	0.7
369	磨製石斧	H－4	Ⅵ	ホルンフェルス	28	5.6	4.7	0.9
370	磨製石斧	H－4	Ⅵ	ホルンフェルス	30	5.0	5.1	0.9
371	磨製石斧	D－24	Ⅵ	ホルンフェルス	144	8.6	6.1	1.7
372	磨製石斧	2－T	Ⅵ	ホルンフェルス	708	17.0	7.4	4.6
373	鑿形石斧	D－19	Ⅵ	粘板岩	63	11.6	3.2	1.3
374	鑿形石斧	F－6	Ⅱ下	粘板岩	13	6.4	1.7	0.7
375	鑿形石斧	D－23	Ⅵ	粘板岩	26	6.7	2.2	1.1
376	鑿形石斧	D－24	Ⅵ	粘板岩	17	6.5	2.6	0.5
377	石匙	D－19	Ⅵ	石英	6	5.5	5.5	0.6
378	スクレイパー	C－5	Ⅵ	頁岩	9	4.5	5.7	0.8

5）**石器Ⅴ**（磨石・敲石・凹石）（第70図～第74図）

対象となる磨石・敲石・凹石は、本遺跡では80点が出土している。そのうち56点を資料化した。石器Ⅴは素材の形をあまり変えないで使用している石器を扱う。従来の分類方法によればこの項に属する石器の用途は、主に磨石・敲石を上石として、凹石・石皿を下石として使用し製粉作業を行ったと考えられている。この磨石・敲石・凹石・石皿という分類は、肉眼で観察された使用痕を基準とするが、現在この磨石・敲石・凹石という三器種分類に混乱が起きている。即ち、異なる使用痕をあわせもつ石器をどのように分類するかの問題である。方向としては、三器種を一括して分類したり、どちらかの器種にまとめたり、形態的属性に基づく分類を行うなど様々な方法が試みられている。しかし使用痕こそはその石器の用途を如実に示すものであり、用途に立脚した石器の組成はその時代の生活文化を反映している。

以上のことから、ここではまず「磨る」「敲く」作業に関する使用痕に注目して分類する。その上で形態的特徴を比較したい。分類基準は、以下のとおりである。

- 石器Ⅴ
  - 凹みのないもの
    - 磨面のあるもの
      - 敲打痕のないもの（磨石）
      - 敲打痕のあるもの（磨石＋敲石）
    - 磨面のないもの－敲打痕のあるもの（敲石）
  - 凹みのあるもの
    - 磨面のないもの
      - 敲打痕のないもの（凹石）
      - 敲打痕のあるもの（凹石＋敲石）
    - 磨面のあるもの
      - 敲打痕のないもの（凹石＋磨石）
      - 敲打痕のあるもの（凹石＋磨石＋敲石）　7類

分類表現は、従来の表現を使用する。それは、この分類表現に石器の用途が意味されてきたからである。従って「＋」は、その用途の同時使用を示すものである。

石器Ⅴ各類と厚さ・長さ・重量・折損・石材について調べたのが第１表～第４表である。

第１表は石器Ⅴ各類と厚／長の平均値との関係を示したものである。この値は石器の縦断面の偏平度を示し、偏平度が強い順に並べてある。本遺跡では0.3前後に集中部が１カ所、0.5前後に集中部が１カ所、0.7前後に集中部が１カ所見られる。

第２表は石器Ⅴ各類と重量との関係を示したものである。傾向としては、100g台及びそれ以下のものと、200g及び300g台のものと、500g以上のものとに集中部がみられる。

第３表は石器Ⅴ各類の折損の存否を示したものである。本遺跡では半欠品が70％を占める。

第４表は石器Ⅴ各類と石材との関係を示したものである。ここでは未資料化分の石器も個数に入れている。本遺跡の石材の種類は、安山岩・花崗岩・砂岩・溶結凝灰岩の５種類である。そのうち安山岩と花崗岩が総数の83％を占め、特に安山岩は63％を占める。中ノ原遺跡周辺では安山岩はシラス層中の岩石であり、川原で多く見られる。一方花崗岩・砂岩・頁岩・溶結凝灰岩は遺跡左側の迫田川上流の高隈山系を構成する岩石である。いずれも身近な岩石であった

以下、各類について詳述する。

１類　磨石（第70図－379～384）

第12表　石器Ⅴ・Ⅵ各類の折損　　（　）内は%

	完形品	半欠品	半欠品(＋未資料)	転用品	総数
石器Ⅴ　1－A類	2 (100)				2
1－B類	4 (100)				4
2　類	1 (6)	3	16 (88)	1 (6)	18
3－A類	4 (17)	9	19 (83)		23
3－B類		2	2 (100)		2
3－C類		3	3 (100)		3
3－D類	3 (43)	3	4 (57)		7
4－A類	4 (67)	2	2 (33)		6
4－B類	1 (100)				1
5　類		1	1 (50)	1 (50)	2
6　類	1 (100)				1
7　類		1	1 (100)		1
総　数	20 (29)	24	48 (69)	2 (3)	70
石器Ⅵ　(石皿)	2 (20)	8	8 (80)		10

第13表　石器Ⅴと重量の関係

	～100g	～200g	～300g	～400g	～500g	～600g	～601g
1－A類	1						
1－B類			2	3			1
2　類	2	2		1			
3－A類						3	1
3－D類		1	2				
4－A類		2	1	1			
4－B類		1					
6　類				1			

第14表　厚/長の平均値

	厚/長の平均値		厚/長の平均値		厚/長の平均値		厚/長の平均値
3－B類	0.287	5　類	0.498	7　類	0.523	4－B類	0.673
6　類	0.303	3－A類	0.508	3－C類	0.600	2　類	0.724
1－A類	0.438	3－D類	0.514	4－A類	0.666	1－B類	0.734

第15表　石器Ⅴ・Ⅵ・Ⅶと石材との関係

（　）内は%

		安山岩	花崗岩	砂　岩	頁　岩	溶結凝灰岩
石器Ⅴ	1－A類	1（50）	1（50）	0	0	0
	1－B類	3（75）	1（25）	0	0	0
	1　類	4（67）	2（33）	0	0	0
	2　類	10（56）	0	6（33）	2（11）	0
	3－A類	5（22）	12（52）	4（17）	0	2（19）
	3－B類	2（100）	0	0	0	0
	3－C類	2（50）	0	2（50）	0	0
	3－D類	3（50）	0	1（17）	2（33）	0
	3　類	12（34）	12（34）	7（20）	2（6）	2（6）
	4－A－a類	2（67）	0	0	0	1（33）
	4－A－b類	0	0	1（100）	0	0
	4－A－c類	0	1（50）	1（50）	0	0
	4－B類	0	0	1（100）	0	0
	4　類	2（29）	1（14）	3（43）	0	1（14）
	5　類	2（100）	0	0	0	0
	6　類	1（100）	0	0	0	0
	7　類	1（100）	0	0	0	0
	総　数	32（46）	15（21）	16（23）	4（6）	3（4）
	石器Ⅵ－A類	5（100）	0	0	0	0
	石器Ⅵ－B類	4（80）	1（20）	0	0	0
	石器Ⅵ（石皿）	9（90）	1（10）	0	0	0
	砥　石	4（80）	1（20）	0	0	0

本類は、小形の自然円礫を素材として、礫の一部に磨面のみが形成される石器である。「磨る」作業に使用したものである。磨石は合計6点出土している。全て完形品である。

断面形により、

A、断面形が、楕円形を示すもの

B、断面形が、三角形を示すもの

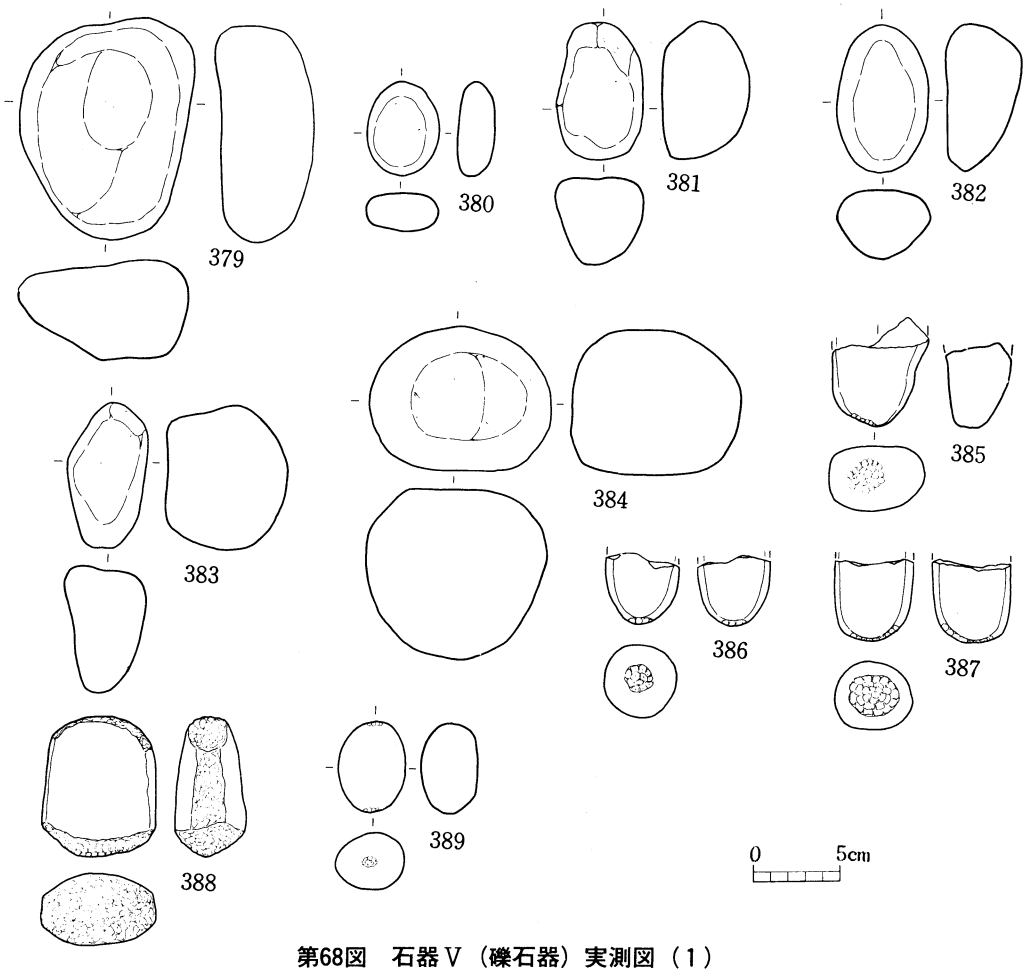
の2細別できる。本遺跡からは1－A類2点（379、380）、 1－B類4点（381～384）が出土した。共に片面のみ磨面をもつ。

1－A類

01は磨面が摩耗により凹むものである。側面が整形されておらず磨石とした。石材は花崗岩、Ⅳ層出土である。380は非常に小形であり重量も軽い。従って、指で持って一度砕かれたものを更に細かく磨り潰すのに使用したと考えられる。石材は安山岩、Ⅲ層下出土である。

1－B類

381～383は掌の中に納まる大きさである。側面には手擦れと思われる凹みが見られる。石材は



第68図　石器Ⅴ（礫石器）実測図（1）

共に安山岩。共にⅣ層上出土である。384の大きさは掌の中には納まらないが、片手で充分使用できる大きさである。磨面は二段になるが、単なる持ち手の角度の違いによるものと思われる。石材は花崗岩、Ⅳ層上出土である。

2類　敲石　(第70図－385～389)

本類は小形の自然円礫を素材として、礫の一部に敲面のみが形成される石器である。堅果類を「敲く」「推し潰す」作業に使用したものである。敲石は合計18点出土している。但し折損が多く、5点のみ資料化した。内、完形品は1点のみである。5点とも円礫の先端部を使用している。385～387は棒状の敲石である。共にⅣ層上出土である。385の敲打痕集中部は中央より若干ずれている。形状より石斧の転用品の可能性がある。石材は砂岩。386・387は直径40mm程度の棒状製品の先端部である。石材は安山岩。388は磨製石斧よりの転用品である。上下両端、特に下端が敲かれ凹みが生じている。石材は砂岩、Ⅳ層上出土である。389は上下両端が敲かれている。敲打の範囲は直径約10mmである。石材は砂岩、Ⅳ層出土である。

3類　磨石＋敲石　(第71図～第73図－390～412)

本類は、小形の自然円礫を素材として、礫の一部に磨面と敲面が形成される石器であり、「磨る」「敲く」「推し潰す」作業に使用したものである。磨石＋敲石は合計35点出土している。そのうち24点を資料化した。完形品は7点、半欠品は17点である。敲打痕の位置と断面形により次の様に細分した。

- 敲打が全周にわたるもの
  - 敲打集中部がないもの
    - 断面形が楕円形のもの　3－A類
    - 断面形が略長方形のもの　3－B類
  - 敲打集中部があるもの － 断面形が楕円形のもの　3－C類
- 敲打が一部のもの ―― 断面形が楕円形のもの　3－D類

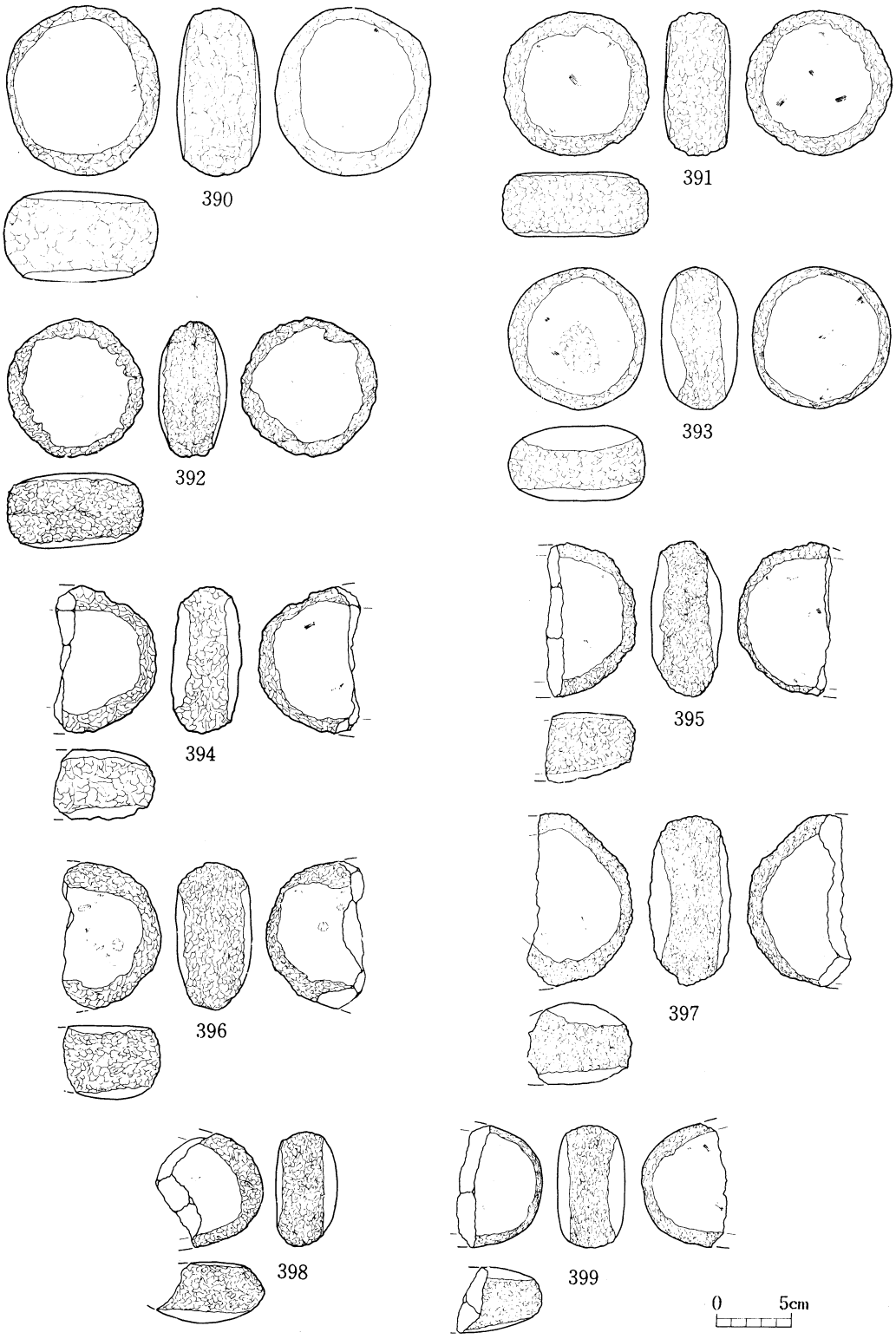
その結果4細別できる。本遺跡からは3－A類総数23点（資料化13点、390～402)、3－B類総数2点（資料化2点、403～404)、3－C類総数4点（資料化3点、405～407)、3－D類総数6点（資料化6点、408～413）が出土した。

3－A類

390が本類の典型的な例である。磨面は両面に形成され、側面は全周にわたり激しく敲かれ断面形が楕円形を呈する。同様のものが392、394～397、399～340、402である。391は表裏両面とも平坦になるまで充分に磨られている。393は磨面中央部にも敲打痕集中部が観察でき、「敲石」としては、表面及び側面が使用されている。398は磨面は片面のみだが、良く磨られ若干の凹みが生じている。401は側面にも線条痕が観察でき、「磨石」としては表面及び側面が使用されている。石材は、390・393・398・399が安山岩、391・392・394～397・400～402が花崗岩である。出土層位は、394・396が表層、401がⅡ層、395・397がⅢ層、390～393・398～400がⅣ層上、402がⅣ層である。

3－B類

本類は、磨面が両面に形成され、側面は全周にわたり激しく敲かれている点で3－A類と共通する。しかし、3－A類より表裏両面共に良く磨られ、その結果断面形が略長方形を呈する



第69図　石器Ⅴ（礫石器）実測図（2）

のが特徴である。この事は、本類が「敲石」よりは「磨石」として多用された事を示している。石材は共に安山岩である。出土層位は403がⅢ層、404がⅣ層上である。

3－C類

本類も、磨面が両面ともに形成され、側面は全周にわたり激しく敲かれ、断面形が楕円形を呈する点で3－A類と共通する。しかし、側面に敲打痕集中部があるのが特徴である。405・406は65×30mm程度の、407は直径約30mm程度の敲打痕集中部をもつ。この事は、本類が「敲石」よりは「敲石」として多用された事を示している。石材は405が砂岩、406・407が安山岩である。出土層は共にⅢ層である。

3－D類

本類は、側面の敲打が全周にわたらず一部分に限られている点で、3－A～C類と異なる。磨面の位置と断面形により、

a、磨面は両面ともに磨られており、断面形が楕円形を呈しているもの

b、磨面は先端部に円形状に形成され、断面形が円形を呈しているもの

の2細別できる。本遺跡からはaが5点（408～411・413）、bが1点（412）出土した。

3－D－a類

408～411は3類の他のものと比較して、掌の中に納まる程小形であり重量も軽く敲打の頻度も低いのが特徴である。この事は、これらが「敲石」よりは「磨石」として多用された事を示している。用途としては、更に細かい製粉作業又は携帯用に用いたものと思われる。類例としては、草野貝塚の小形磨石・敲石類、榎木原遺跡の小形敲石があげられる。石材は408が砂岩、409・410・が安山岩、411が頁岩である。出土層類は408～410がⅥ層上、411がⅣ層である。413は、形態的・重量的には典型的な3類の範疇に入るものである。3－B類より敲打の頻度が更に低く、主に「磨石」として使用されていた。石材は安山岩、Ⅳ層出土である。

3－D－b類

412は形態的には3類の範疇から外れるものであるが、使用痕からは当該に分類される。一方の先端部に20×25mmの円形状の磨面が形成され、他方の先端部に30×30mmの円形状の敲面が形成されている。両手で下側から支え持つ恰好で、重量を利用して「磨り潰す」「敲き潰す」のに使用したと考えられる。石材は安山岩である。ピット3からの出土である。

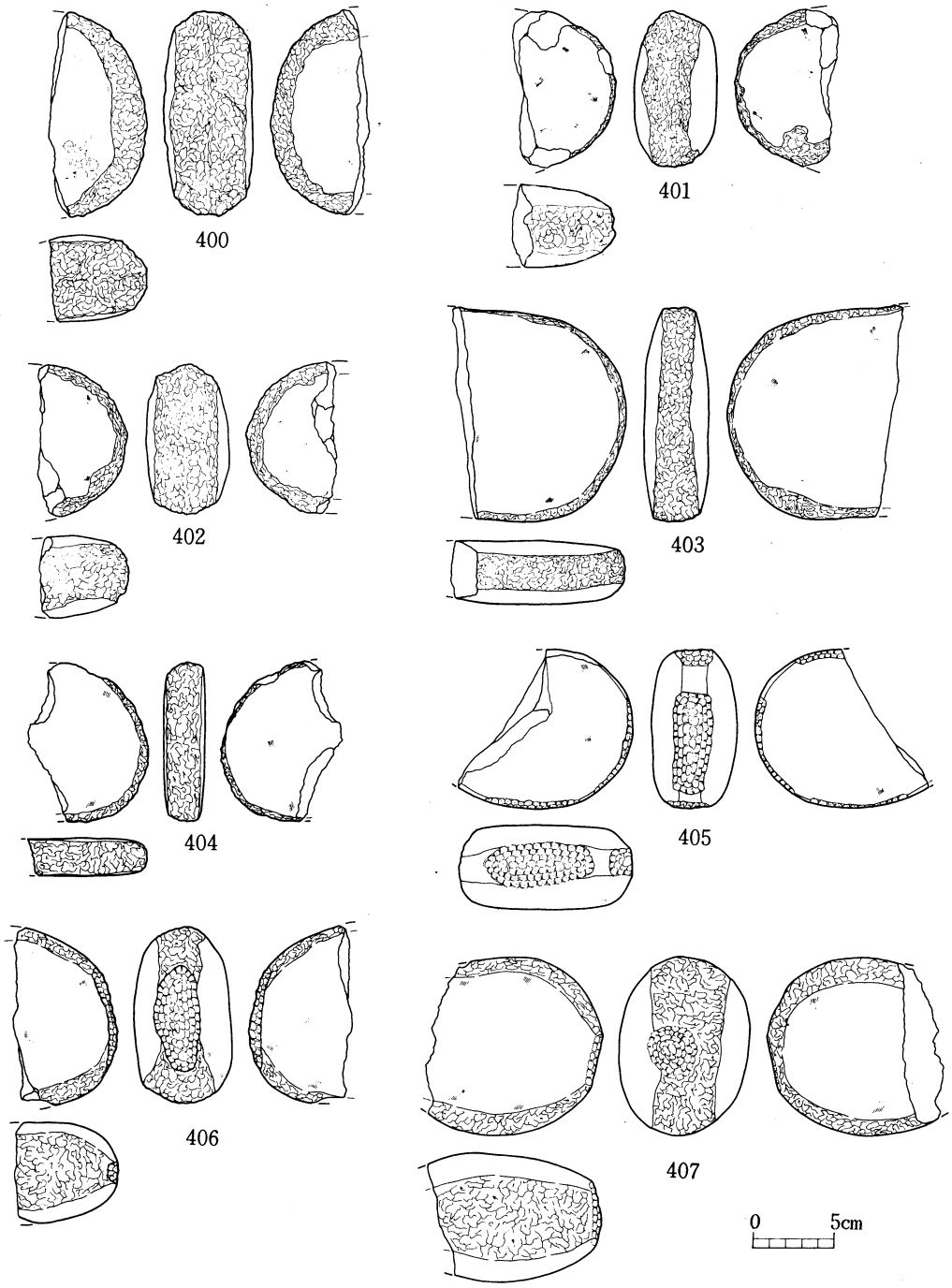
4類　凹石　（第73図～第74図－414～420）

本類は、小形の自然円礫を素材として、礫の一部に数個の凹みが形成される石器である。凹石は合計7点出土している。完形品は5点、半欠品は2点である。

凹石の用途としては植物加工具説・石器製作具説等があるが、両説とも上石説と下石説に分かれる。ここでは凹みの形成の違い、凹みを有する面の数、凹みの位置、凹みの範囲等を記し実験はしていないので特定は出来ないが、用途は形状より想定できることを記す。

凹みの形成の違いにより、

A、凹みが敲打によるもの



第70図　石器Ⅴ（礫石器）実測図（3）

B、凹みが摩耗によるもの

の２細別できる。本遺跡からは４－Ａ類６点（414～419）、４－Ｂ類１点（420）出土した。

４－Ａ類

本類は凹みを有する面の数により、

a、凹みが１面のみのもの

b、凹みが２面にあるもの

c、凹みが４面にあるもの

の３種に細分できる。本遺跡からは、ａが３点（414・416・418）、ｂが１点（419）、ｃが２点（415・417）出土した。

４－Ａ－ａ類

本類は、深さ５㎜程の敲打による凹みがほぼ表面中央部に位置する。敲打の範囲は30×20㎜の円形状を呈する。一つの敲打痕の直径は約5～6㎜を計る。414は裏面に直径約30㎜の円形状の手擦れ痕が形成されている。石材は414・416が安山岩、418が溶結凝灰岩である。出土層は418が表層、414・416がⅣ層上である。

４－Ａ－ｂ類

419は深さ５㎜程の敲打による凹みがほぼ表裏両面中央部に位置する。敲打の範囲は直径約30㎜の円形状を呈する。一つの敲打痕の直径は約５～６㎜を計る。他の敲石と比べて小さく携帯用とも考えられる。石材は砂岩、表層出土である。

４－Ａ－ｃ類

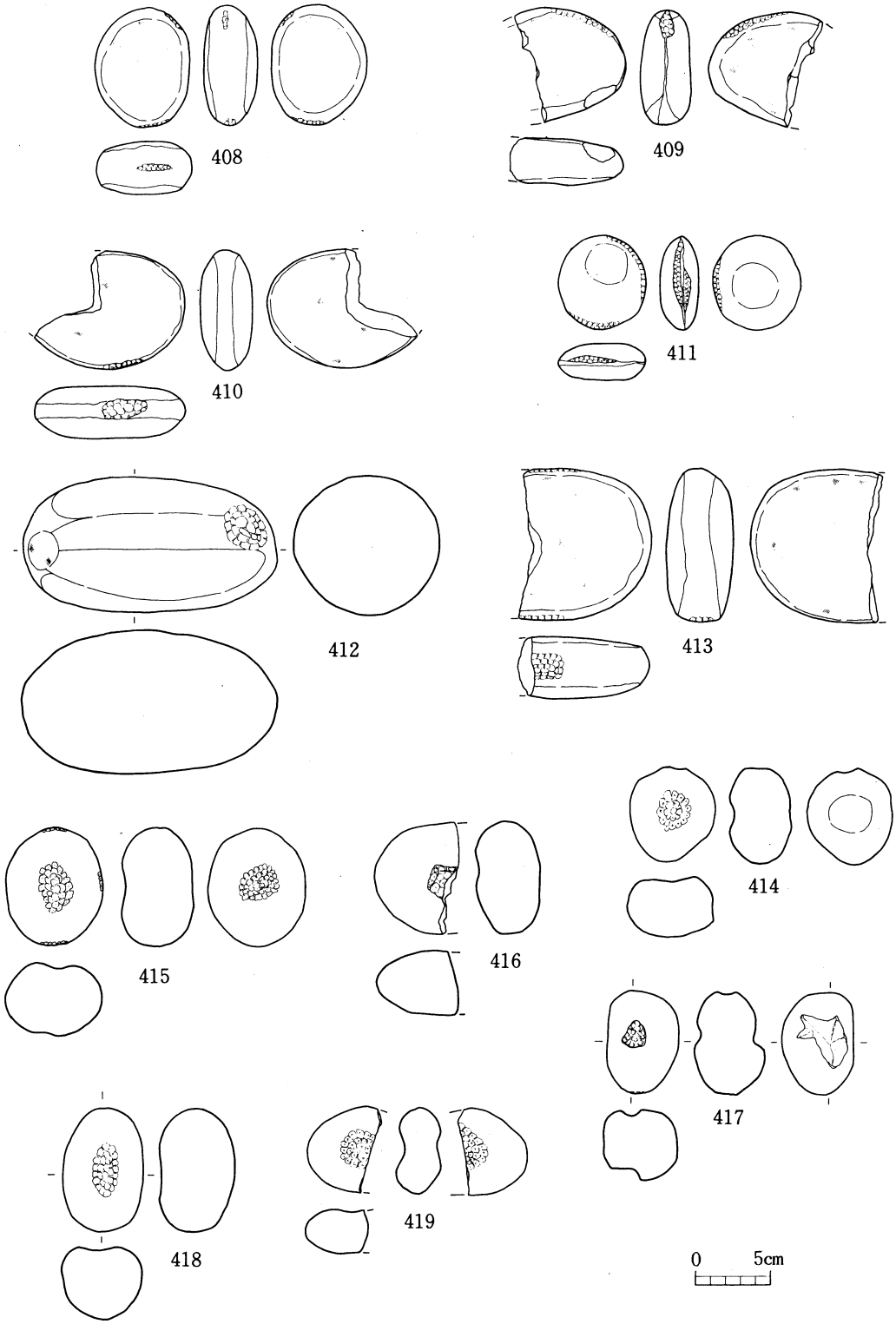
本類は、敲打による凹みがほぼ表裏両面、上下両端中央部に位置するのが特徴である。415は、敲打による凹みが深さ５㎜程であり、敲打の範囲は直径約30㎜の円形状を呈する。一つの敲打痕の直径は約５～６㎜を計る。石材は花崗岩、表層出土である。417では表裏両面の凹みと上下両端の凹みで形状が異なる。表裏両面の凹みは打ち欠かれているが、上下両端の凹みは直径約５～６㎜の敲打痕の集合体である。上下両端の凹みは敲打の結果による凹みであるが、表裏面の凹みは使用する上で必要な凹みとして整形された凹みである。従って、凹みに指をかけて製粉具として使用したと考える。石材は砂岩、Ⅳ層上の出土である。

４－Ｂ類

420は、摩耗による凹みが表面にのみ長径約40㎜短径約30㎜にわたって見られる。凹みは、深さ５㎜程である。用途は凹みに線条痕が見られる事から「磨る」作業に使用したと考えるが形状からは「磨石」より「石皿」に近い使い方をしたと思われる。石材は花崗岩質の砂岩、Ⅳ層上の出土である。

５類　凹石＋磨石　（第74図－421・422）

本類は、小形の自然円礫を素材として、礫の一部に数個の凹みと磨面が形成される石器である。「磨る」「敲く」作業に使用したものである。凹石＋磨石は合計２点出土している。全て半欠品である。



第71図　石器Ⅴ（礫石器）実測図（4）

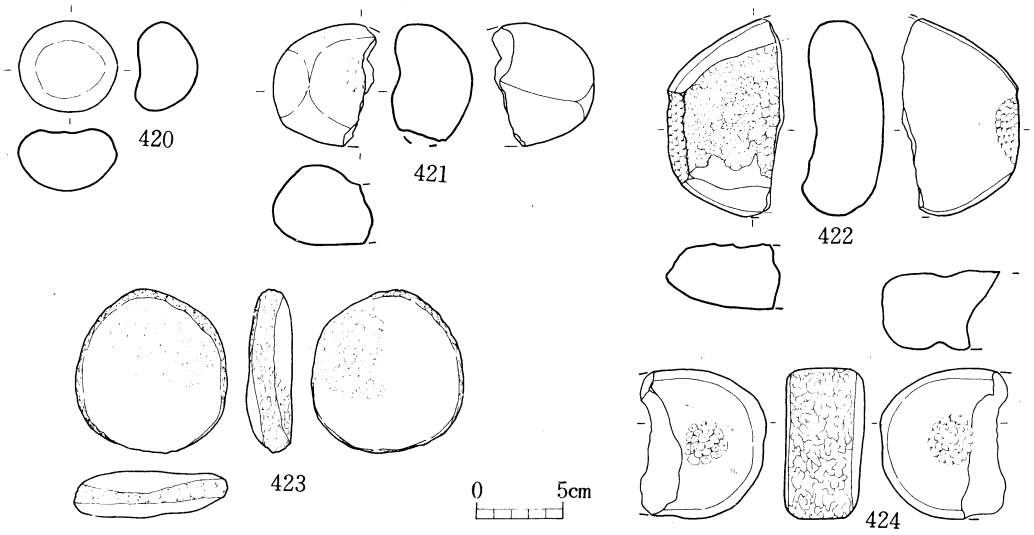
421には、表面に１カ所敲打痕集中部がある。敲打痕集中部の範囲は直径約20mmを計る。１つの敲打痕の直径は約５～６mmである。表面左側に平坦な磨面が形成されている。従って磨る作業と敲く作業にほぼ同時に使用したと思われる。石材は安山岩、Ⅳ層上の出土である。422はほぼ表面全面にわたって敲打がなされており、その結果深さ10mm程の凹みを生じており、縁辺部が形成されている。表面左側端部から裏面にかけて敲打痕集中部が形成されている。この部分は表面の凹み部に接続する形で形成されており、凹み部の注ぎ口のような位置にある。これは敲石の下石であったことを示す。表面縁辺部には磨面の稜線が観察できるが、凹み部は磨面を潰しており、磨石よりの転用品である事を示す。石材は安山岩、Ⅳ層上の出土である。

６類　凹石＋敲石　（第74図－423）

本類は、小型の自然円礫を素材として、礫の一部に数個の凹みと敲面が形成される石器である。凹石＋敲石は、423の計１点出土している。423は表裏両面共に激しく敲かれた敲打痕集中域が見られる。側面も全周にわたり激しく敲かれている。本例は厚さ27mmと薄い。従って下石としての用れた「凹石」としての用途と、上石として敲く「敲石」としての用途を兼ねたものである。石材は安山岩、Ⅳ層上の出土である。

７類　凹石＋磨石＋敲石　（第74図－424）

本類は、小形の自然円礫を素材として、礫の一部に数個の凹みと磨面と敲面が形成される石器である。凹石＋磨石＋敲石は、424の計１点出土している。424は深さ５mm程の敲打による凹みがほぼ表裏両面中央部に位置する。敲打の範囲は直径約30mmの円形状を呈する。一つの敲打痕の直径は約５～６mmを計る。同時に表裏両面ともによく磨られており、かつ側面は全周にわたり激しく敲かれている。従って下石として敲かれた「凹石」としての用途と、上石としては「磨る」「敲く」用途に使用したものである。石材は安山岩、Ⅳ層上の出土である。



第72図　石器Ⅴ（礫石器）実測図（５）

石器Ⅵ（石皿）　（第75図～第77図－425～434）

本類は、大形偏平礫を素材として、礫の形を皿状に整えた石器である。全て凹み面には線条痕が観察できる。皿状の部分で他の道具を用いて「磨る」作業に使用したものである。石皿は10点出土している。完形品は２点、半欠品は８点である。

断面形により、

Ａ、縁辺部が形成されるもの

Ｂ、縁辺部が形成されないもの

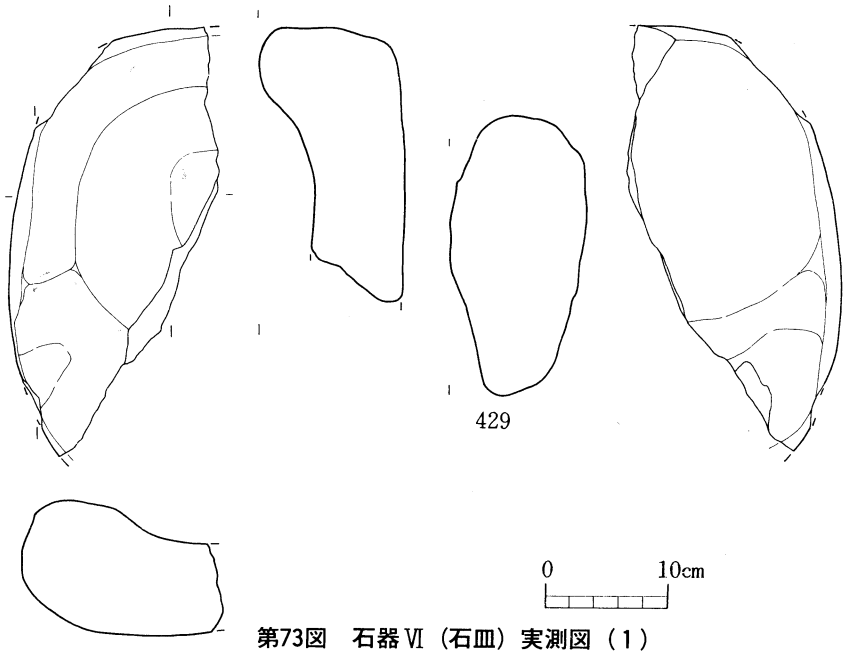
の２細別できる。本遺跡からは８－Ａ類５点(425～429)、８－Ｂ類５点(430～434)が出土した。

Ａ類

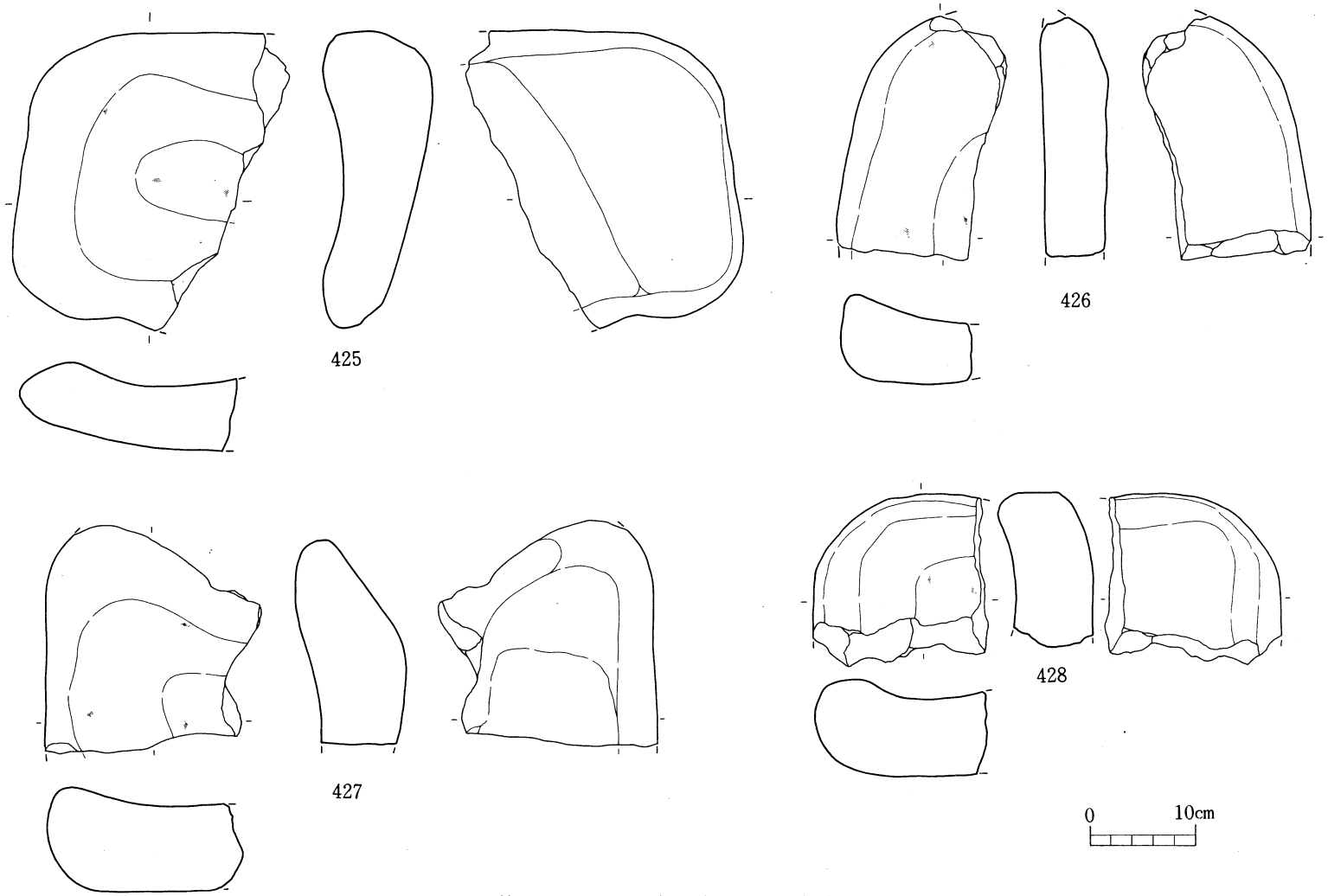
本類は、丸縁の縁辺部を持ち中央が弓状に凹むものである。全て半欠品のため上面観は不明であるが、425・430の上面観は隅丸方形を呈する。429は注ぎ口を持つ石皿である。表面上側が本体部、左下隅が注ぎ口となる。本例は特に皿部が深く、意識して縁辺部を造り出している。石材は全て安山岩、出土層位は425が表層、426がⅢ層、427がⅣ層、428・429がⅣ層上である。

Ｂ類

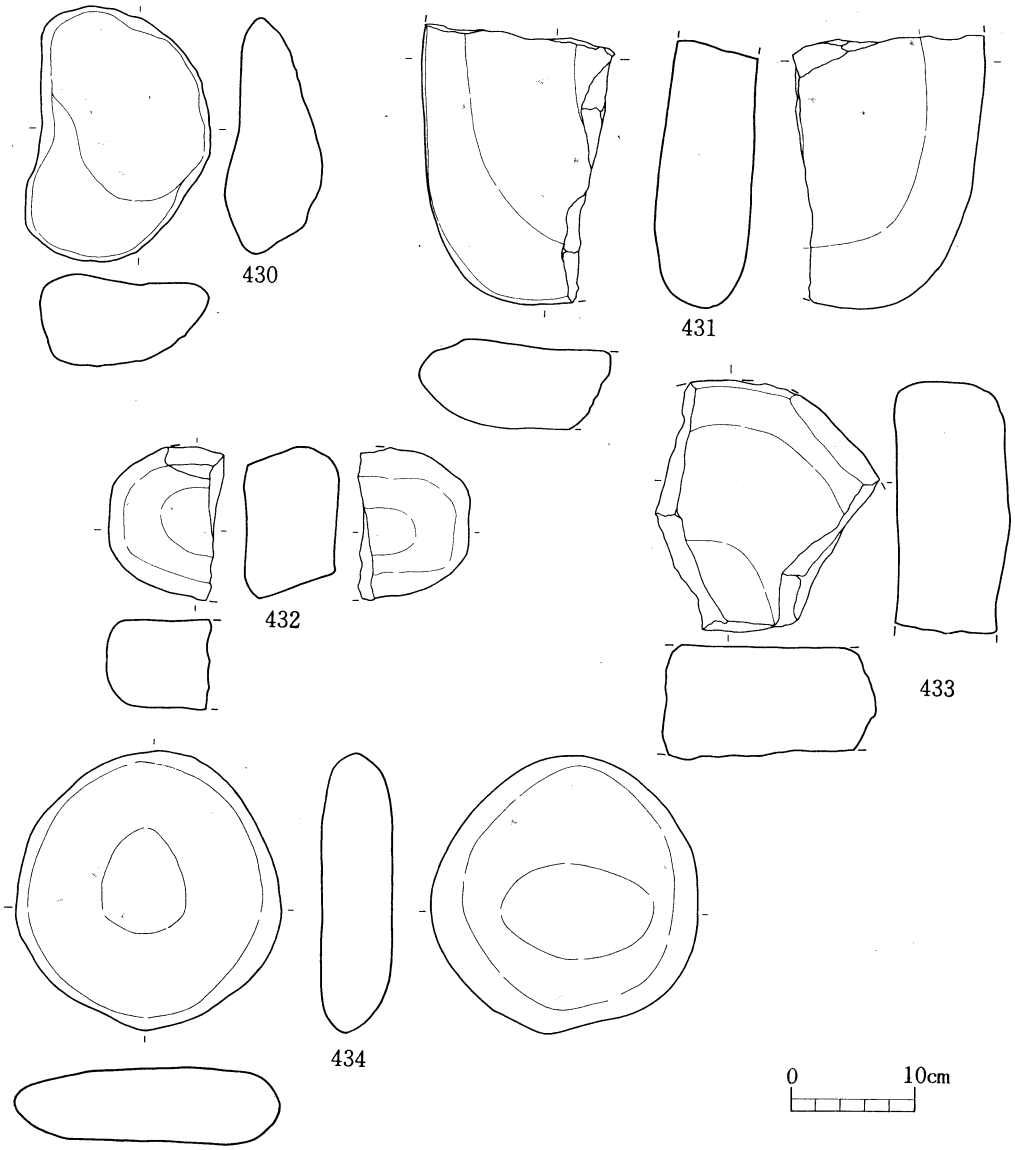
本例は、縁辺部が形成されず皿部が若干凹むものである。430・433は偏平な転石を利用したものである。431・434は上面観はＡ類に類似しており、皿部の凹みの深さは使用の頻度の差である可能性も示している。432は表裏両面、両側面とも磨られ、断面は平行四辺形状を呈する。表面及び裏面は若干凹む。磨面側端部から側面部にかけて整形痕が見られる事より石皿とした。石材は430～433が安山岩、434が花崗岩である。出土層位は430・431がⅣ層432・434がⅣ層上、433が表層である。



第73図　石器Ⅵ（石皿）実測図（１）



第74図　石器Ⅵ（石皿）実測図（２）



第75図　石器Ⅵ（石皿）実測図（3）

石器Ⅶ（砥石）　（第78図－435～439）

本類は表裏両面共に線条痕が観察でき、断面形が方形を呈する石器である。磨製石器等の製作工程に於ける「研ぐ」作業などを行ったものである。縁辺部と若干の凹み部が観察できることより、石皿からの転用品である。砥石は合計５点出土している。

使用痕跡より、

A、線条痕を伴う研磨面のみのもの

B、線条痕を伴う研磨面と研磨溝があるもの

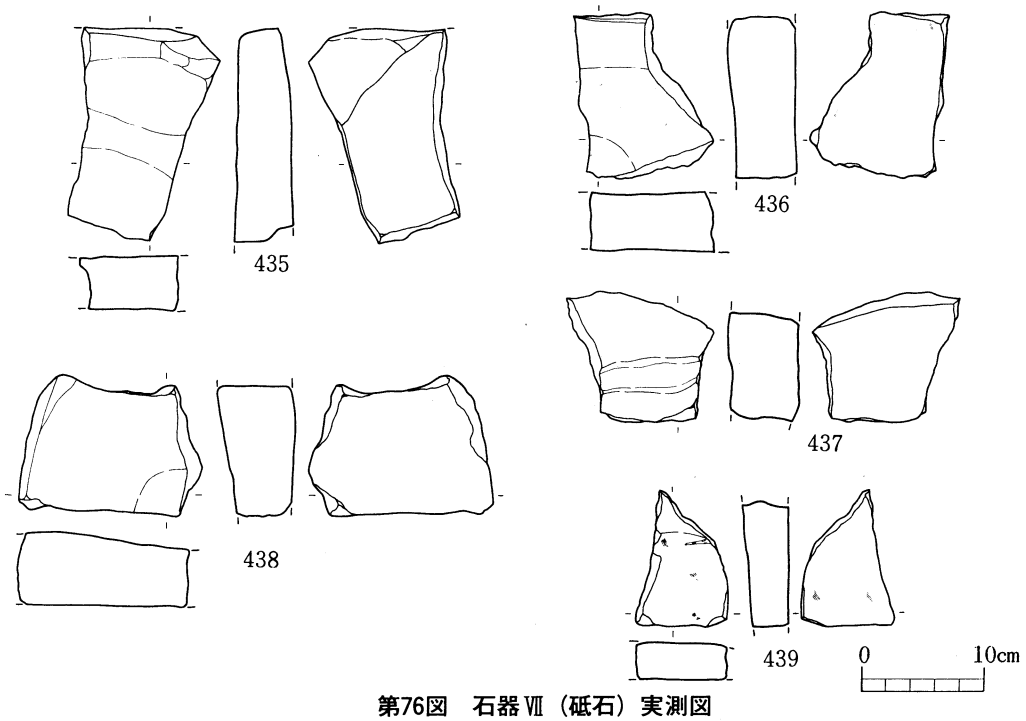
の２細別できる。本遺跡からはA類４点（435・436・438・439）、B類１点（437）が出土した。

A類

表裏両面に平坦な研磨面がある。この面を利用して比較的幅の広い工具を「研ぐ」作業に使用したと考える。側面は４面とも折損している。共に縁辺部から若干の凹み部にかけて使用している事を考えると、この折損は整形の結果と考えられる。石材は全て安山岩、出土層位は438がⅣ中層、他はⅣ層である。

B類

437は表面に幅約30mm深さ約５mmの研磨溝がある。研磨溝の断面形が浅いU字形をしている事より石器又は木器の先端の丸いものを「研ぐ」作業に使用したと考えられる。表面のほかの部分と裏面には平坦な研磨面がある。この面を利用して比較的幅の広い工具を「研ぐ」作業に使用したと考える。側面が４面とも折損している点ではA類と共通し、整形の結果と考える。石材は花崗岩、出土層位はⅢ層である。



第76図　石器Ⅶ（砥石）実測図

第16表　石器Ⅴ～Ⅶ出土一覧表（1）

	器　種	出土区	層位	石　材	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
379	石器Ⅴ－1類	F－6	Ⅳ	花崗岩	990	12.9	10.0	5.9
380		G－1	Ⅲ下	安山岩	82	5.5	4.2	2.3
381		D－16	Ⅳ上	安山岩	272	8.0	5.1	5.1
382		D－20	Ⅳ上	安山岩	276	8.6	5.3	4.0
383		G－6	Ⅳ上	安山岩	384	8.4	4.7	7.4
384		C－24	Ⅳ上	花崗岩	1270	10.5	8.3	10.0
385	石器Ⅴ－2類	D－19	Ⅳ上	砂　岩	(135)	6.4	5.5	3.8
386		D－18	Ⅳ上	安山岩	120	4.9	4.5	4.0
387		F－7	Ⅳ上	安山岩	90	3.9	4.2	4.1
388		D－15	Ⅳ上	砂　岩	370	8.1	6.4	4.2
389		A－3	Ⅳ	砂　岩	95	5.3	4.0	3.4
390	石器Ⅴ－3類	F－6	Ⅳ上	安山岩	1140	11.3	10.4	6.2
391		G－1	Ⅳ上	花崗岩	675	9.5	9.8	4.3
392		D－29	Ⅳ上	花崗岩	605	9.3	9.1	5.0
393		D－9	Ⅳ上	安山岩	660	9.5	9.1	5.1
394		D－17	表層	花崗岩	(445)	9.8	6.8	4.5
395		D－24	Ⅲ	花崗岩	(410)	10.2	5.9	5.0
396		C－16	表層	花崗岩	(495)	11.0	6.5	4.8
397		C－1	Ⅲ	花崗岩	(550)	11.4	6.9	5.5
398		O－11	Ⅳ上	安山岩	(220)	7.6	7.2	4.1
399		D－10	Ⅳ上	安山岩	(280)	8.1	5.7	4.6
400		D－18	Ⅳ上	花崗岩	(630)	12.6	6.1	5.5
401		D－1	Ⅱ	花崗岩	(420)	9.6	6.4	5.1
402		D－8	Ⅳ上	花崗岩	(370)	9.3	5.6	5.0
403		C－22	Ⅲ	安山岩	(950)	13.2	10.8	4.0
404		C－6	Ⅳ上	安山岩	(260)	9.8	7.4	2.4
405		F－6	Ⅳ上	砂　岩	(670)	10.7	9.8	5.5
406		C－23	Ⅲ	安山岩	(610)	10.9	6.4	6.1
407		D－24	Ⅲ	安山岩	(1380)	11.0	10.6	8.0
408		C－23	Ⅳ上	砂　岩	280	8.0	6.3	3.5

第17表　石器Ⅴ～Ⅶ出土一覧表（2）

	器　種	出土区	層位	石　材	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
409	石器Ⅴ－3類	G－6	Ⅳ上	安山岩	225	7.5	7.5	3.4
410		D－24	Ⅳ上	安山岩	310	10.0	8.0	3.5
411		F－3	Ⅳ	頁　岩	145	6.3	5.7	3.5
412					2200	17.0	9.7	9.1
413		C－9	Ⅳ	安山岩	615	10.2	9.7	4.6
414	石器Ⅴ－4類	D－20	Ⅳ上	安山岩	185	6.3	5.7	5.1
415		C－2	表層	花崗岩	350	7.9	6.5	4.9
416		E－6	Ⅳ上	安山岩	215	7.3	5.6	5.6
417		C－15	Ⅳ上	砂　岩	180	6.9	4.8	4.7
418		C－24	表層	凝灰岩	280	8.3	5.4	5.0
419		D－17	表層	砂　岩	(90)	5.8	4.2	3.0
420		E－7	Ⅳ上	砂　岩	150	5.4	5.2	3.5
421	石器Ⅴ－5類	F－7	Ⅳ上	安山岩	(245)	7.1	5.8	4.7
422		D－22	Ⅳ上	安山岩	(500)	11.4	6.6	3.8
423	石器Ⅴ－6類	C－5	Ⅳ上	安山岩	340	9.4	8.9	2.7
424	石器Ⅴ－7類	F－2	Ⅳ	安山岩	405	8.6	7.3	4.5
425	石器Ⅵ	F－2	表層	安山岩	(8100)	280	26.2	8.4
426		D－24	Ⅲ	安山岩	(3660)	230	12.5	8.5
427		F－3	Ⅳ	安山岩	(5500)	211	20.3	9.0
428		D－6	Ⅳ上	安山岩	3060	162	16.6	9.4
429		D－15	Ⅳ上	安山岩	(7380)	350	17.3	12.0
430		A－3	Ⅳ	安山岩	2090	192	13.7	7.6
431		F－4	Ⅳ	安山岩	(4200)	218	15.5	7.3
432		G－5	Ⅳ上	安山岩	490	88	6.7	5.4
433			表層	安山岩	4390	230	21.5	6.3
434		E－18	Ⅳ上	安山岩	4790	166	18.0	9.4
435	石器Ⅶ	A－3	Ⅳ	安山岩	1490	174	12.3	4.7
436		B－4	Ⅳ上	安山岩	1110	134	11.3	5.0
437		D－22	Ⅲ	花崗岩	1100	106	12.0	5.8
438		C－6	Ⅳ中	安山岩	1800	115	15.0	6.0
439		A－3	Ⅳ	安山岩	440	112	7.6	3.4

3　加工品（円盤形土製加工品）　（第79図－440～458）

土器の口縁部や胴部などの破片を利用して、円盤状に加工したものである。これまで各遺跡では一般的に、①周縁部を丁寧に擦って円形に面取りを行なったもの、②やや丁寧に面取りを行なったもの、③ただ打ち欠いただけのものの３種類に分けられている。そして本遺跡では、440のように円盤の中央に穿孔を有する特異なものも存在している。

中ノ原遺跡では、この円盤形土製加工品に該当するものは19点出土している。そのうち、穿孔を有するものは１点、周縁部を丁寧に擦って面取りを行なったものは１点、やや丁寧に面取りを行なったもの12点、ただ打ち欠いただけのもの５点に分けられる。

穿孔を有するもの（440）

440の１点で、径4.4×4.2cmの器壁厚0.8cmを測る小型のものである。周縁部の調整は、比較的荒く交互に打ち欠いただけである。穿孔はほぼ中央に内外から穿たれ、径５mmの円孔となっている。丁寧なナデ整形の無文の胴部片を使用している。

周縁部を丁寧に擦って円形に面取りを行なったもの（444）

444の１点で、丁寧な擦り仕上げで真円形をつくるもので径4.9×4.8cmを測る。凹線文間に連続ヘラ刺突文を施文する口縁部に近い胴部片を使用している。

やや丁寧に面取りを行なったもの（442・443・445～447・449～452・456～458）

このタイプは12点出土している。442は半欠品であるが、周縁部は比較的丁寧な面取りが施されている。凹線文間に横位の貝殻腹縁刺突文（線）を充塡するタイプで、本遺跡のⅦ類土器に属す破片を使用している。443は、径9.5×9.0cmを測る最も大型の真円を呈するものである。加工された土器片は、数条の凹線文で平行線や渦文を描き器面は丁寧なヘラミガキで整形した磨消縄文の可能性が強い土器片である。447・458も無文ではあるが同様なヘラミガキ整形である。445は、凹線文で平行線と渦文を描く土器片を使用している。446・449～452・456～458は、無文の胴部片を使用している。449と450は、大形のものである。449は8.0×7.8cmを測り内外面に条痕調整を施し、450は7.5×7.4cmを測り内面を条痕整形を施す土器片である。他は比較的に小型のものである。

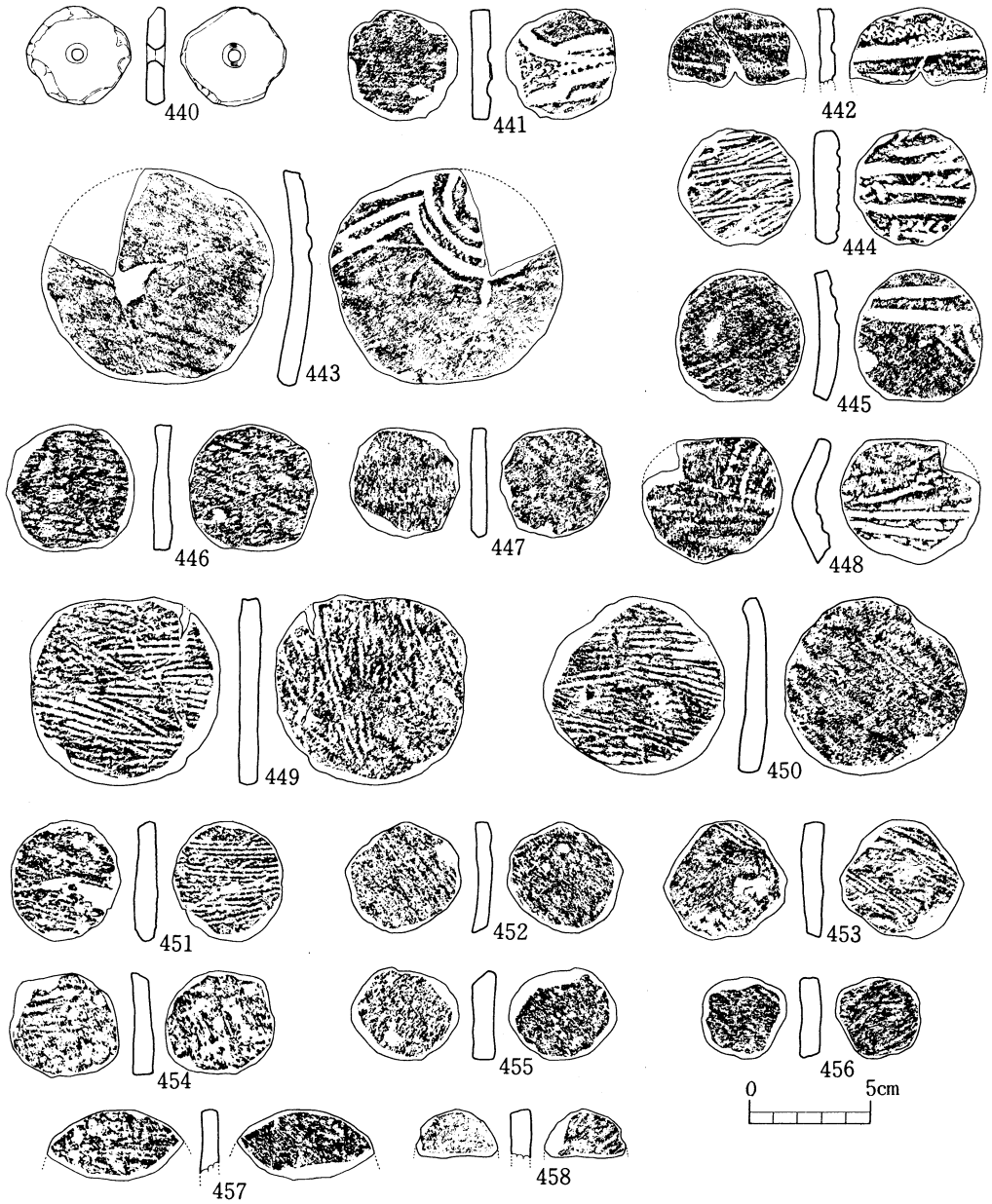
ただ打ち欠いただけのもの（441・448・453～455）

このタイプは５点出土している。このタイプは、土器片をただ打ち欠いて円形に整形しただけのものである。

441は、二本平行の凹線文間に貝殻腹縁の刺突文を充塡させた本遺跡Ⅶ類土器に該当する土器片を利用している。

448は、外反した口縁部片を利用した円盤形土製加工品である。頸部から口縁部の外反破片を使用しており、安定度は極めて悪い。口唇部も周縁部の一部となっており、口唇部の平坦面には丁寧な連続刻目が施文されている。外面の文様は、頸部下に二本平行線の凹線文がみられる。口縁部内面には、貝殻腹縁刺突文（線）が弧状に３本確認される。

453～455は、無文の胴部を使用したものである。



第77図　加工品（土製加工品）実測図

第４節

2　出土石器　（第99図－538～545）

総数８点の打製石斧が出土しており、完形品６点、破損品２点である。石質は、頁岩が多い。出土した石斧は三つの形態に分類できる。

538は、形態により分銅型に分類できる完形品である。両面とも大きな剥離調整により形成されており、側面には細かな剥離調整がみられる。刃部は両刃であり、両刃面には、使用痕と考えられる擦痕が確認できる。

539は、538同様分銅型の完形品である。片面に、母岩より剥離されたままの面を残している。基部片面に柄を装着したと考えられる凹を観察でき、その逆面には装着のためと考えられる擦痕が観察できる。刃部の一部にも擦痕が観察できる。

540は、分銅型の刃部を残す破損品である。母岩より剥離された剥片を使用されたと考えられ、片面一部には自然面を残している。裏面も側縁にだけ細かな剥離調整が施されており、母岩からの剥離面を残していると考えられる。自然面を残す側の刃部および刃面には、縦方向の擦痕が観察できる。

541は、撥型の完形品である。風化の状態が激しく、刃部および側縁の剥離調整も明瞭に観察できない。

542は、撥型の完形品であり、541よりも風化が激しく、細かな剥離調整は観察しにくい。

543は、短冊型の完形品である。側縁周辺に集中して剥離調整が施されている。刃部には、鈍い摩滅が数カ所観察でき裏刃部には、縦方向の擦痕を観察できる。剥離面は風化のため、明瞭には観察できない。断面は、わずかではあるが湾曲している。

544は、短冊型の完形品である。横剥ぎの剥片で、全体的に大きな剥離によって形成されている。刃部は、鈍く摩滅しており一部には擦痕も確認できる。

545は、短冊型の基部破損品である。石質のためか、細かな剥離まで明瞭に観察できる。他の打製石斧と比べると厚みのある断面を呈している。

第18表　石器一覧表

挿図番号	器　種	出土区	層位	石　材	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
538	打製石斧	D－13	Ⅵ	頁岩	324	18.5	0.83	0.2
539	打製石斧	A－24	Ⅵ	頁岩	296	16.5	7.6	1.7
540	打製石斧	D－19	Ⅵ	頁岩	294	14.0	10.0	1.7
541	打製石斧	G－1	Ⅵ	ホルンフェルス	159	14.2	6.7	1.3
542	打製石斧	G－2	Ⅵ	ホルンフェルス	183	15.3	7.6	1.2
543	打製石斧	F－6	Ⅵ	頁岩	169	14.5	6.3	1.5
544	打製石斧	F－2	Ⅵ	頁岩	218	16.4	6.0	1.7
545	打製石斧			頁岩	234	10.8	6.2	2.7

第４節　Ⅴ層の調査

１　遺構

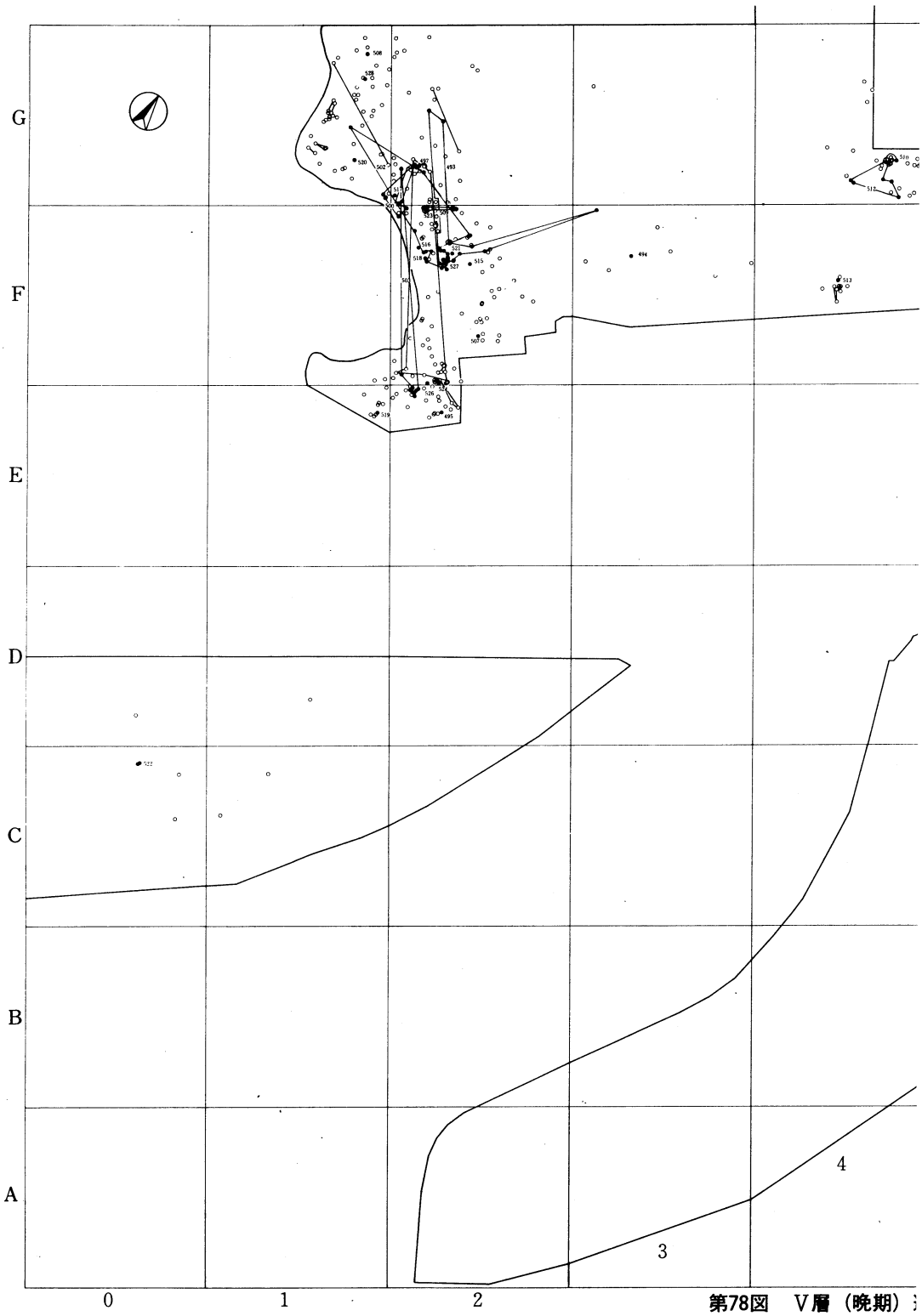
本遺跡の第Ⅴ層からは、竪穴住居址と土壙および集石遺構がそれぞれ１基ずつ検出された。これらの遺構は、遺構内および遺構周辺の遺物から判断して、南九州の縄文時代晩期前半に位置付けられている入佐式土器の時期に比定することができよう。いずれも中ノ原の台地の西南縁辺部に位置しているＦ－２区で検出された。今回検出された住居址は１基であるが、Ｈ－１～３区より北西部は未調査であること、縁辺部はかなり削平されていること等を考慮すれば、複数の存在も否定できない。

①　竪穴住居址　（第79図～第86図）

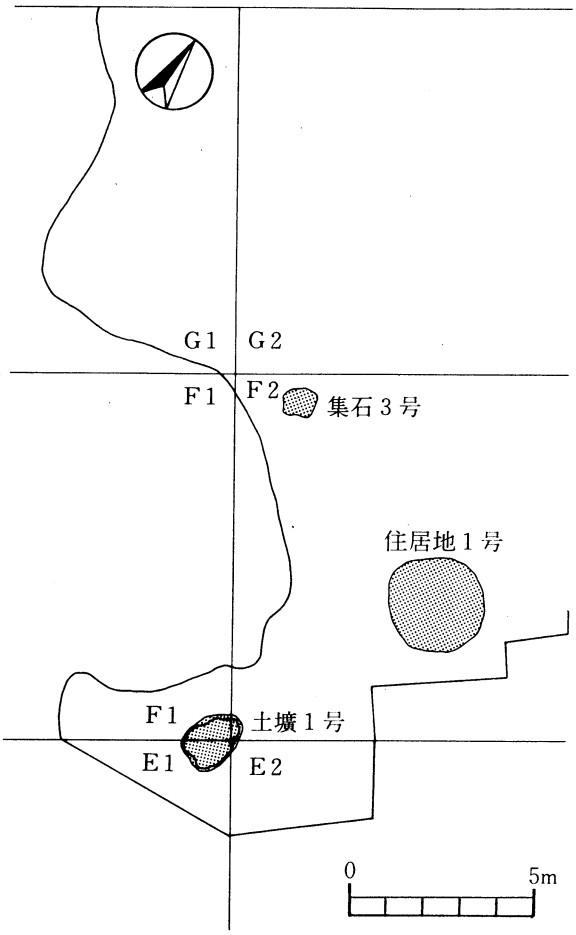
竪穴住居址はＦ－２区から検出された。当初、第Ⅴ層中位において、周囲と比較して若干土色の濃い部分としてとらえ調査したが、遺構であるか否かはなかなか把握できなかった。明らかに遺構であり、しかも竪穴住居址であろうと判断するに至ったのは、第Ⅵ層まで掘り下げ、かつ内部床面中央部に炉址状の焼土面を検出したからであった。

平面形は3.5m×3.2mを測る略円形を呈し、検出面から最も深い部分で30cmであった。前述のように、遺構検出が非常に困難で、土色の大きく異なる第Ⅵ層上面での把握であるために、本来の規模は当然プラスアルファを考えなければならない。床面からの立ち上がりは遺構の北東部が急で、対する南西部にいくにつれて徐々に傾斜が緩やかになっている。フラットな床面では合計５か所のピットを検出した。中でも遺構中央に位置しているＰ１は、80cm×65cmの楕円形を呈し、最も規模が大きい。深さは約10cmと浅いが、赤褐色に変色した焼土と考えられる埋土を検出した。これは粒子が細かでさらさらしていた。焼石等は出土しなかった。

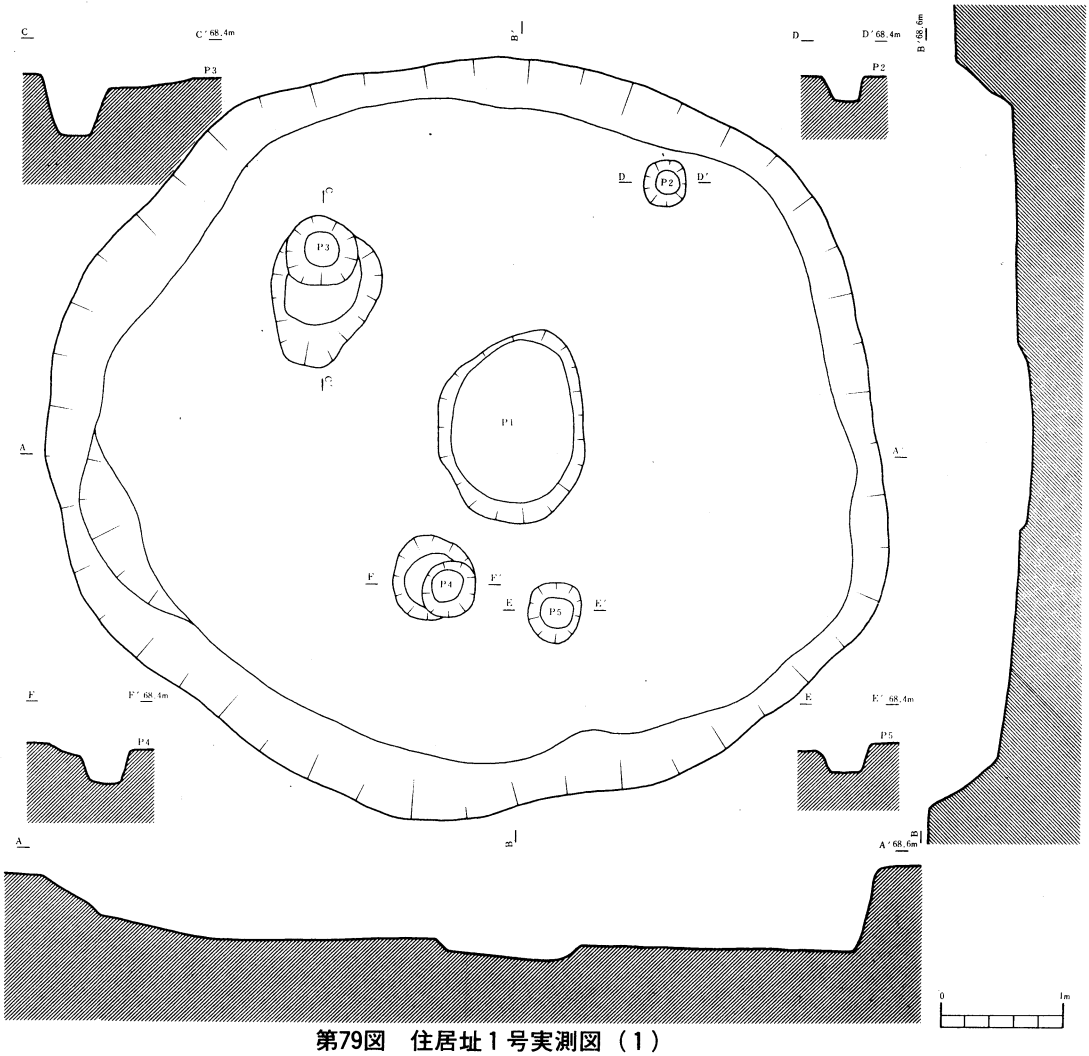
Ｐ２は径28cmを測る円形の小ピットである。Ｐ3は長径120cm、短径90cmの略楕円形のピットで最深部で45cmを測る。Ｐ４は長径74cm、短径69cmの略楕円形の平面形を有するが、底面は段違いを呈しており、２個の重複も考えられるが、埋土等からは明確に判断できなかった。西側の最深部は、28cmと深い。Ｐ５は径49cmを測る円形のピットである。いずれのピットからも遺物の出土はなかった。これらＰ２～Ｐ５がどのような性格をもっているのか。柱穴とした場合にどのような構造が考えられるのかなど、これら遺構の検出状態から住居そのものの復元がある程度、可能になると思われるが、柱穴を明確に把握できないことから、詳細な復元は推定の域を出ない。ただ、基本的なスタイルとして、平面形が円形を呈し、床面中央部に炉址と考えられる円形の浅い掘り込みを有するという情報を得ることができたことは有意義であった。つまり、これまで南九州本土において、縄文期の住居址が検出された例は少なく、晩期に限ってみると３遺跡７例にすぎない。本遺跡周辺では、榎木原遺跡、水の谷遺跡（ともに鹿屋市）での検出例が知られているが、なかでも榎木原遺跡の例は、本遺跡同様に入佐式土器の時期のもので、形態も類似しており注目される。



第78図　V層（晩期）

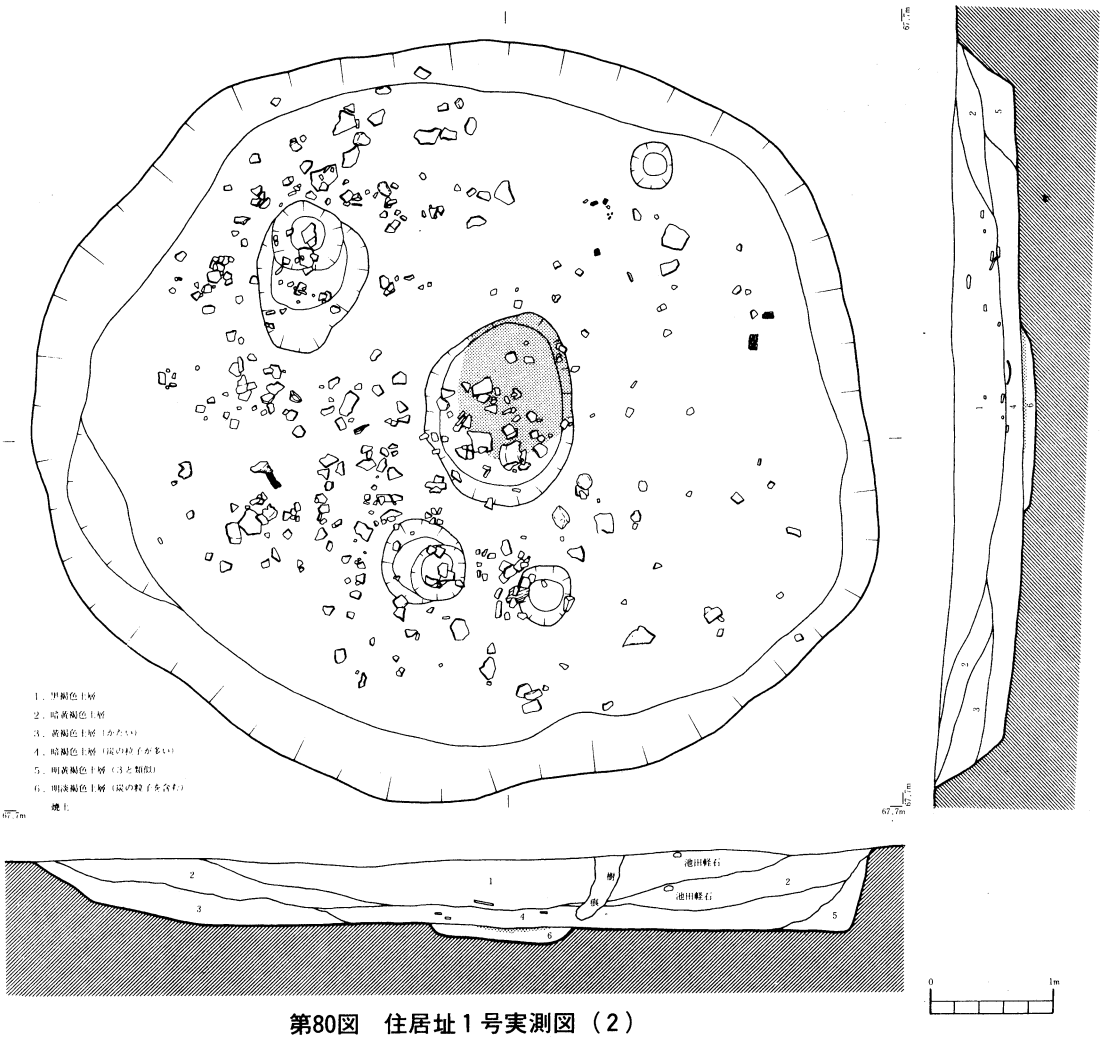


遺構・遺物出土分布図



第79図　住居址１号実測図（１）

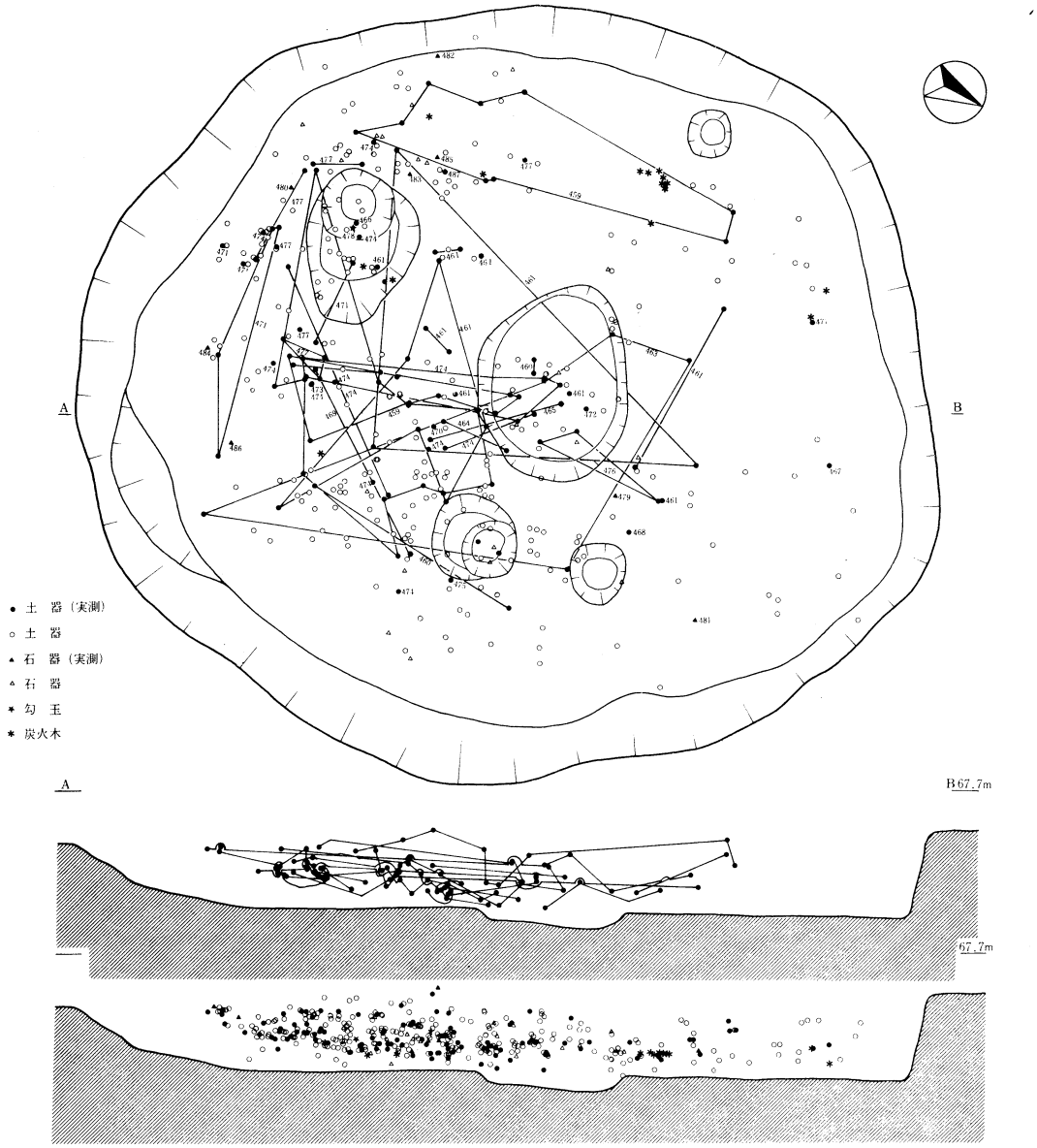
遺構検出が困難を極めたことについては先に述べたが、そのことは、第82図の埋土状況からも理解することができる。結果的に遺構中央となる部分が黒褐色土層と極めて黒色の強い土層で、周囲へ広がるにつれて第Ⅵ層に同化するように変化していくという状況であった。樹痕による破壊を除けば、保存状態も良好だったにもかかわらず、遺構上面をある程度カットしなければならなかったことは残念であった。そのような中で、今回調査した方法は、まず中央部の床面を検出し、さらに床面から壁面を追いかけるというものであった。これは遺構検出の方法として一般的なものであるが、床面はともかく壁面の立ち上がりの確認は非常に手間取った。面での把握が困難であったことを考慮すればむしろ当然のことであるが、検出時に有効だったのは、第Ⅵ層特有の亀甲状亀裂であった。亀裂の有無が遺構埋土と床面および壁面との区別に役立った。今後、これらのことを考慮し、少しでも遺構本来の姿を検出するために、遺物包含層と遺構および遺構の埋土の関係を研究する必要があろう。



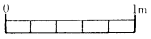
第80図　住居址１号実測図（２）

第80図は、住居址内の遺物分布図である。本住居址内より、土器 383 点、土製品１点、石器 10 点の総数 394 点にのぼる遺物が出土した。本遺跡における晩期の遺物は、第78図で示したように、一部を除いてほぼＦ、Ｇ－２区に集中している。削平状況を考慮すれば、本来Ｇ－２区より北西部へも遺物の分布は広がっていたものと考えられる。本遺跡の第Ｖ層出土の土器は、前述のように入佐式土器である。他の土器型式は皆無である。つまり、入佐式土器の単純遺跡ということができる。

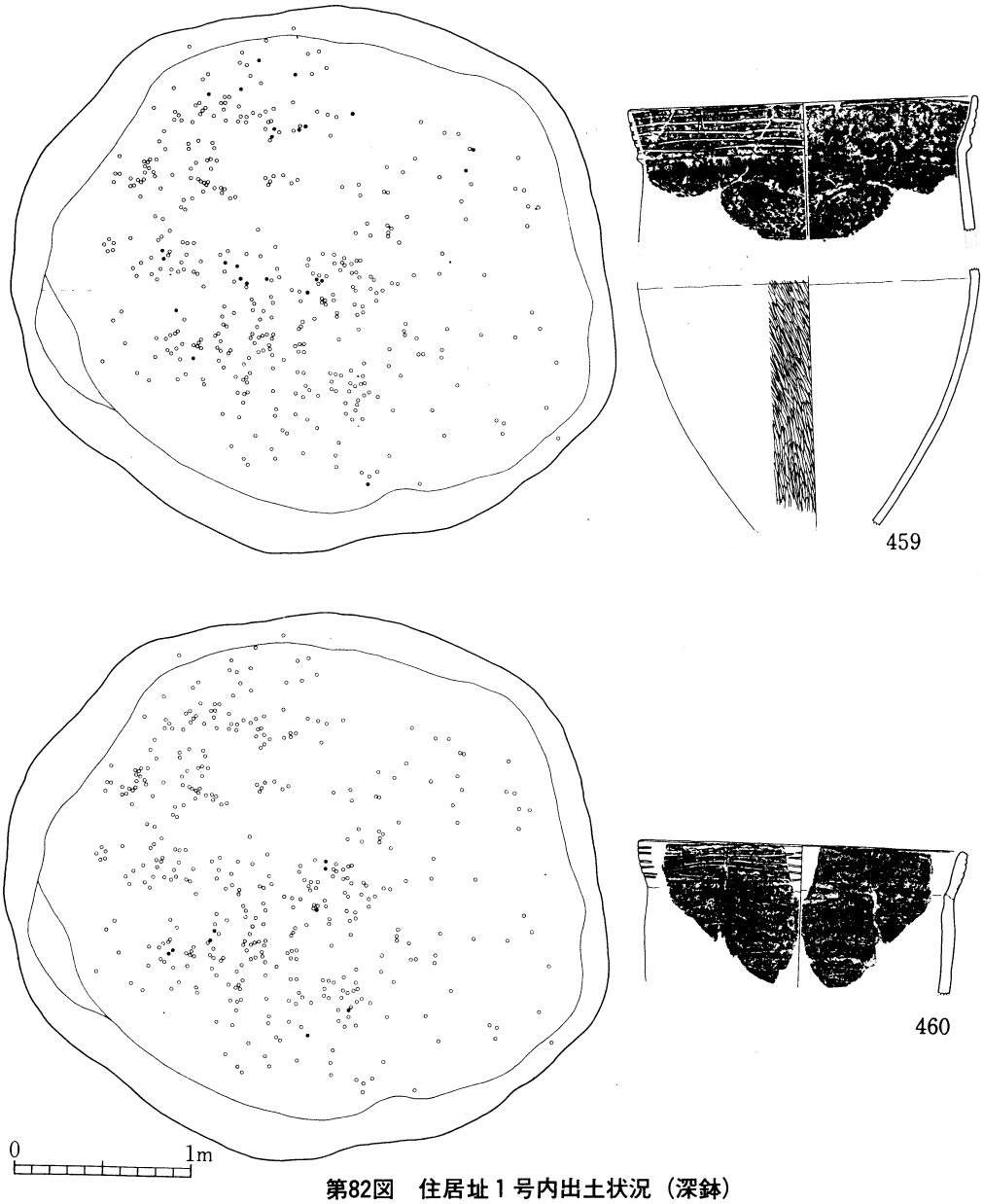
住居址内の土器もまた、これまで入佐式土器と呼ばれてきたタイプに属するものが含まれており、住居址そのものと第Ｖ層出土の遺物および住居址埋土中の遺物との間には、時間差が無いか、たとえあったとしても大きく離れるものではないと考えることができよう。また、埋土中の土器は、後述のように数個体の土器に復元（図面上を含む）することができ、入佐式土器のセット関係を考える上で何らかの示唆を与えてくれるものと考える。



第81図　住居址１号実測図（３）



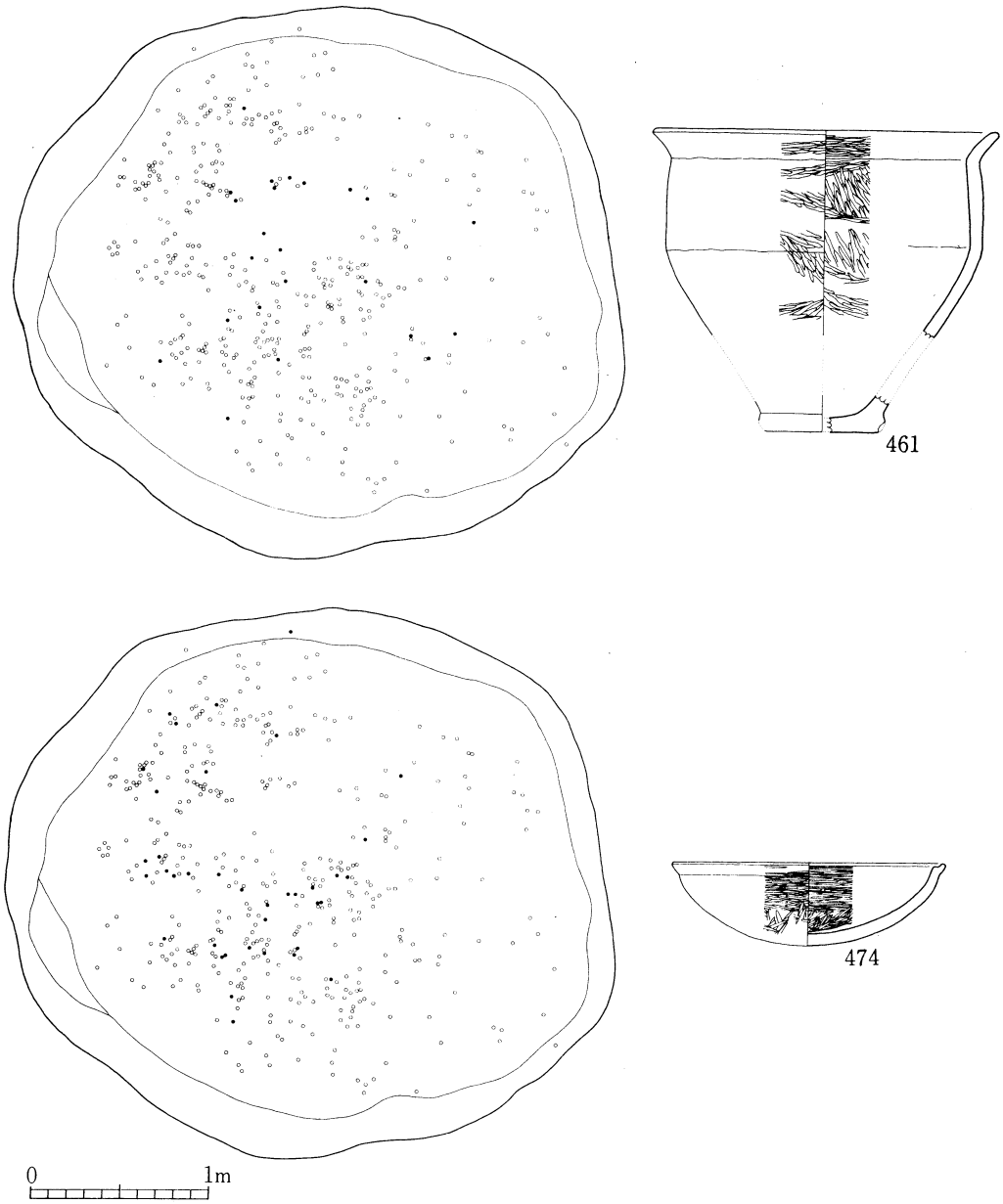
第81図は、遺物の出土状況をドットで表したものである。まず平面図をみると、遺物は遺構の中央部から西南部に集中していることがわかる。また、遺物の接合がみられる範囲は、径約２ｍの円形内におさまる。（最長は1.7ｍである。）次に断面図をみると、平面同様、中央部から西南部への遺物の集中がみられるものの、埋土中むらなく出土していることがわかる。さらに、接合状況断面図から、二つのことがわかる。一つは、第80図のように埋土には上下で色、質の変化が若干あるものの、それとは関係なく遺物が接合しているということ。もう一つは、検出面よりも上位から出土したものと下位のものが接合していることから、遺構本来の掘り込み面が検出面よりも上位にあることを裏付けられるということである。



第82図　住居址１号内出土状況（深鉢）

459は遺構内で最も完形近くまで復元することができた深鉢である。土器片は、遺構中央からやや西南よりと、西よりの２ヶ所で合計24点出土している。検出段階で最も大きな土器片を有する深鉢であった。

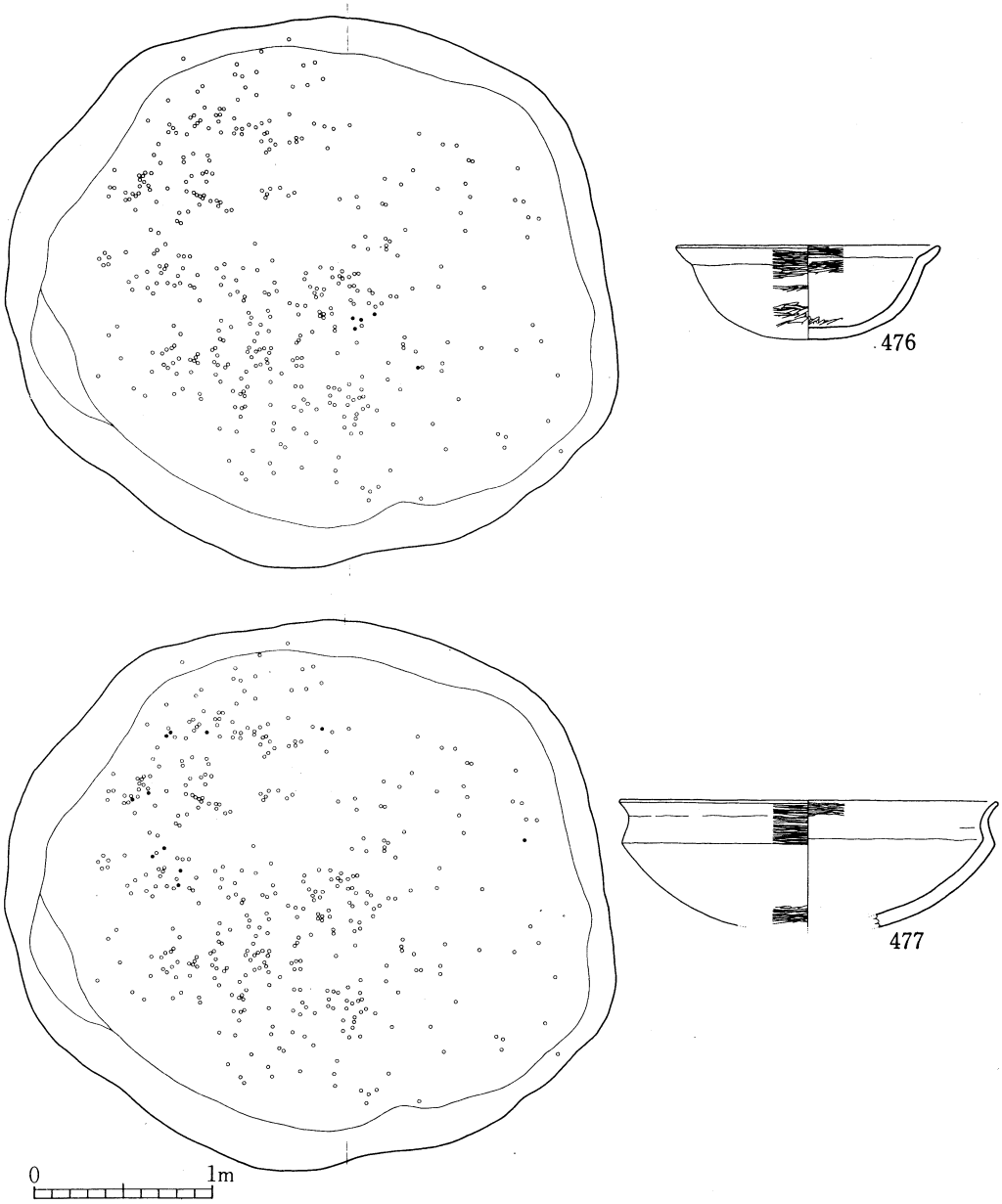
460は口縁部から胴部にかけて復元することができた深鉢である。土器片は、遺構中央から南部にかけて９点出土している。459と460はまるで遺構内を二分するように分布している点に興味がもたれる。



第83図　住居址1号内出土状況（中鉢・浅鉢）

461は器厚と口径がほぼ同じスケールをもつ鉢である。胴部と底部は接合していないが、同一個体と考えられるため、想定復元したものである。23点の土器片が出土しているが、分布はほぼ遺構全面にわたっている。

474は完形に復元することができた浅鉢である。38点の土器片が出土しているが、ほとんど遺構西南部に集中している。また底部付近に比べて、口縁部は細かく割れており、接合するのが非常に困難であった。



第84図　住居址１号内出土状況（浅鉢・浅鉢）

476は完形に復元できた浅鉢である。土器片は５点と少ないが、これは１点ずつが大きいためである。分布は、ほぼ遺構中央部に集中している。

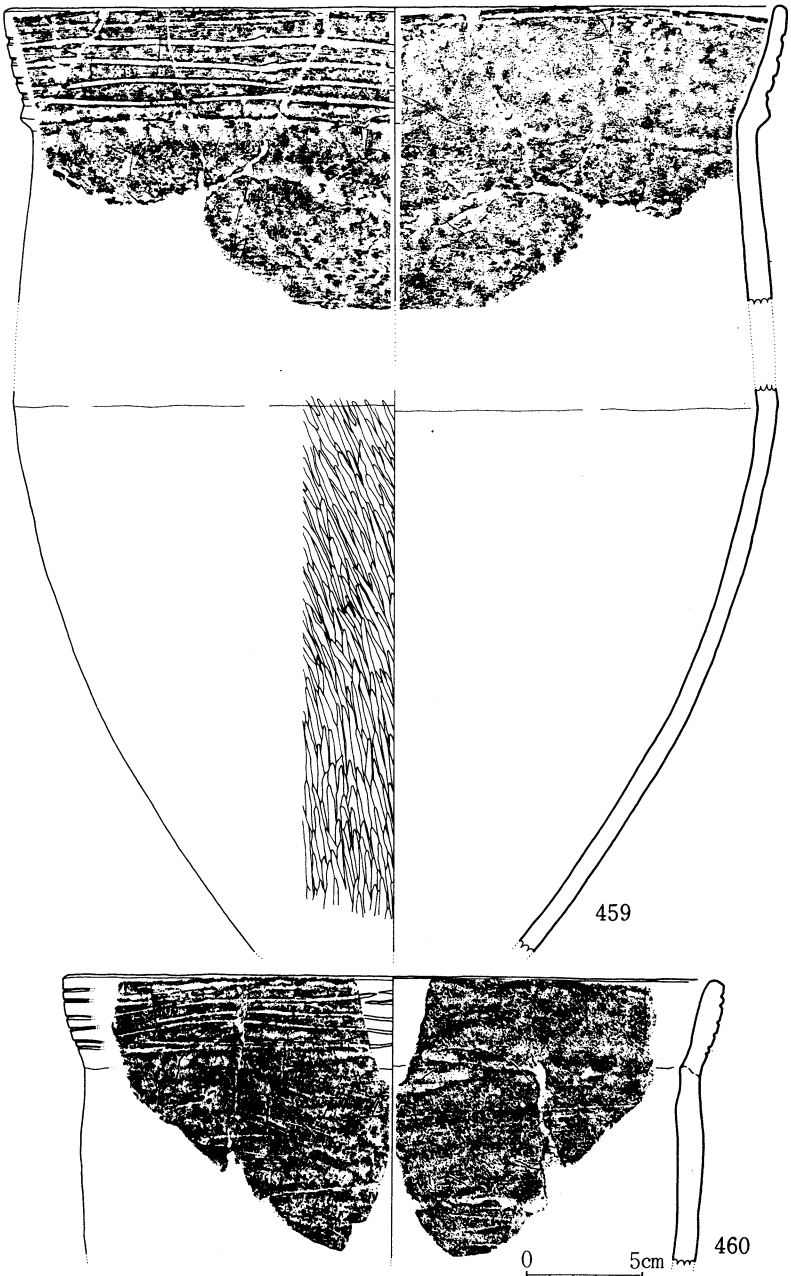
477は口縁部から底部近くまで接合した浅鉢である。11点の土器片が出土しているが、ほとんと遺構西部に、しかも縁辺部に集中している。

第84図から第86図まで比較的、接合土器片の多いものを６個体取り上げたが、遺構内での同一個体の分布、さらに埋土状況との関係など、今後さらに追究していく必要がある。

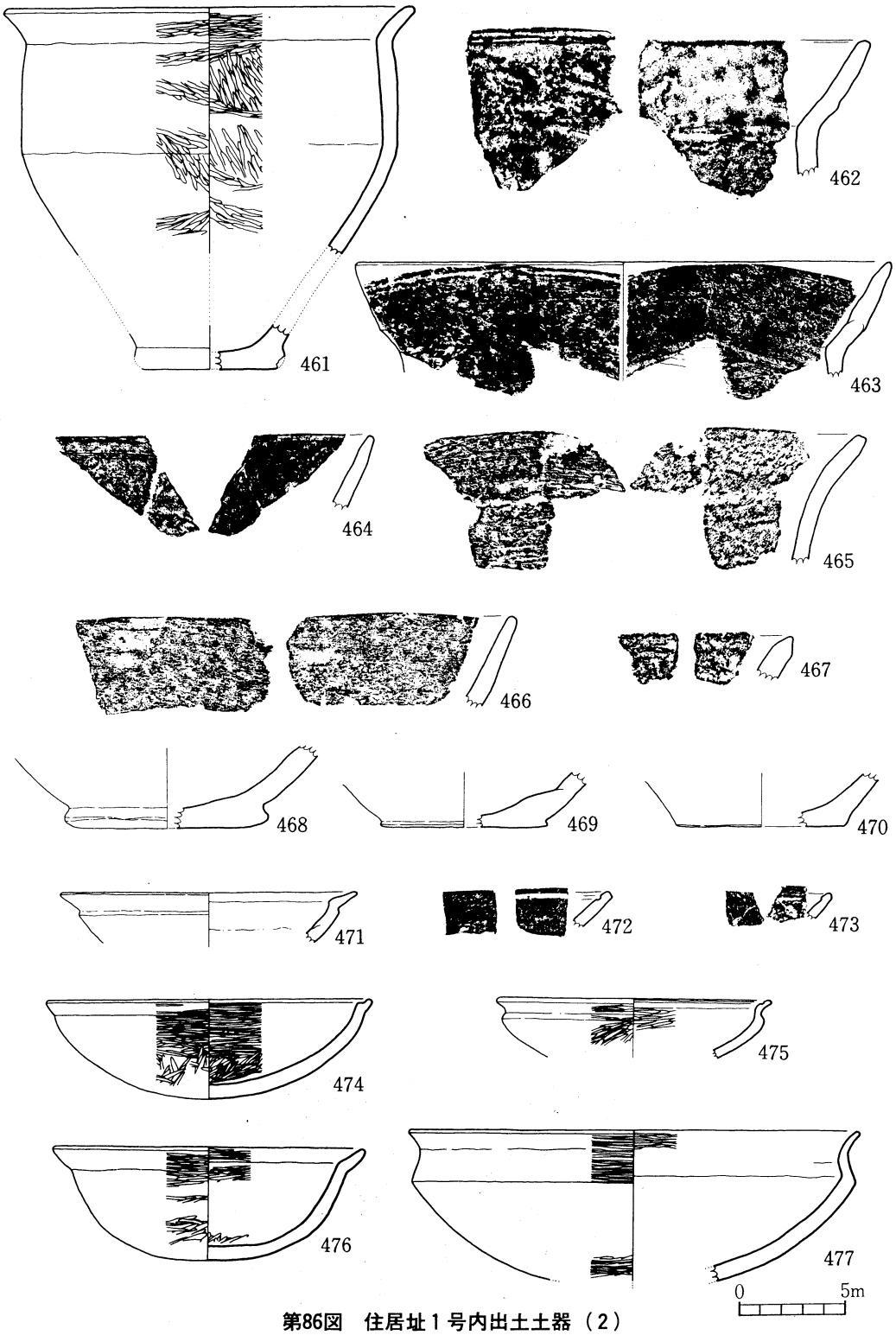
〔**出土遺物**〕　住居址内からは、土器・土製品・石器等が出土した。その分布状況については、第80図・第81図に示した通りである。

① **土器**　（第85図・第86図－459～477）

住居址内出土の土器は、総数383を数えた。これらは比較的接合資料にめぐまれ、459・461の深鉢、474～477の浅鉢のように、ほぼ全形を知ることのできるものもあった。



第85図　住居址１号内出土土器（１）

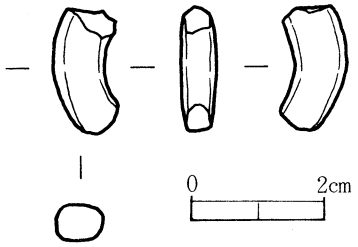


第86図　住居址１号内出土土器（２）

459～470は深鉢である。459は図面上で復元した大形の深鉢である。口径が34.2cm、器高は推定約45cmを測る。若干内湾しながら外開きに立ち上がる口縁部の外面には、幅0.3～0.5mmの沈線が4条施されている。沈線はほぼ繋がっているものの、約10cm単位で施されており、その繋ぎ目が若干ずれる部分もある。この幅約5cmの口縁部文様帯と以下の胴部との境には、断面三角の突帯状の盛り上がりがあり、「く」の字状の屈曲とともに、口縁部と胴部の区別を明瞭にしている。胴部最大径は33.4cmで口径よりもやや小さいが、口縁部を含む胴部片と胴部下位の大形片とは接合していないために、あくまでも推定の域を出ない。その胴部最大径の部分は、極わずかに屈曲し、底部付近へとゆるやかにカーブしている。この屈曲部の外面にはススが付着している。器厚は胴部上位と下位では若干差があり、上位の方が約1cmと下位よりも0.2cm程度厚い。器面は内外面ともに比較的丁寧である。特に胴部下位の外面は縦方向のヘラ磨きが顕著である。これに対し胴部上位外面は、横位のナデ調整が施され、部位によって器面調整の差異が見られる。内面は横及び縦方向に、ハケ目状の丁寧な仕上げが観察できる。460は口径28.4cmの深鉢である。口縁部外面には幅約4cmの文様帯があり、4条から6条の沈線が施されている。沈線は先端の鋭利な施文具によるもので、断面三角形を呈している。また9cm程度の短いものもあり、その配列はかなり雑である。この口縁部が若干外傾する程度で、以下の胴部はほぼ直立を呈している。器壁は統一性が無く、粘土の接合面と見られる部分がやや薄い。器面調整は内外面ともにナデ調整であるが、459と比較してあらゆる点で粗製となっている。461は口径19.4cm、推定器高17cmの鉢である。器高よりも口径の方が長く、深鉢というよりもむしろ中鉢と呼べるべきものである。口縁部～胴部片と底部は接合していないが、胎土の状況から同一個体として推定復元した。「く」の字に屈曲する口縁部の内面は、ややなめらかであるが稜を作っている。胴部最大径は17.6cmで口径より一回り小さい。屈曲部は内外面ともに口縁部のそれと同様に稜が見られる。器面調整は内外面に横及び縦方向のヘラ磨きが施され、若干光沢を有する部分もある。胎土に3～5mm程度の砂粒を含んでいる。462～467は深鉢の口縁部片である。いずれも外面に文様（沈線）は施されていない。462は「く」の字に外反する口縁部片で、屈曲部内面に稜を残している。文様は施されていないが、屈曲部外面のやや上位に微隆帯をもうけている器面には磨きのあとが見られ、丁寧な調整を行ってはいるが、一部粘土の接合面が残っている。口唇部直下には煤が付着している。463は口径25.2cmの深鉢である。「く」の字に屈曲する口縁部片で文様はない。ただ、462と同様に屈曲部外面のやや上位に微隆帯をもうけ頸部以下との区別を明瞭にしている。文様はないが、口縁部を意識している証拠であろう。内外面ともにナデ調整を行っているが、胎土に砂粒を含むために一部露出している。外面には煤が多く付着している。464も「く」の字に外反する口縁部片であるが、若干内湾気味に立ち上がっている。462・463と同様に屈曲部外面のやや上位に微隆帯が見られる。器面は内外面共に丁寧なナデ調整を行っている。465の口縁部片は外反するものの屈曲部の稜線が内外面ともに明瞭でなく、なめらかにカーブしている。内外面共にナデ調整を行っているものの焼成がやや不良で、全体的に若干もろく、表面が剝落している部分もある。外面に

② **土製品**　(第87図－478)

土製品と考えられるものは1点出土した。勾玉状に湾曲したものであるが、一部欠損しているために勾玉であるかどうか断定はできない。残存部は最大長 1.8 cm、最大幅 0.8 cmを測る。中央部断面はやや丸みを帯びた長方形状を呈し、面の境には若干稜線が見られ、最大厚は0.55cmである。これまで本県における縄文時代の勾玉出土例は、加世田市の上加世田遺跡が知られている。晩期前半に位置付けられている上加世田式土器の時期で、ヒスイ製の勾玉が8点（獣形勾玉・「コ」字勾玉）出土している。本遺跡出土のものが、勾玉であるとすると土製勾玉としては初めて発見例である。勾玉であるとするならば頭部と考える部分が欠損しているために、穿孔の有無も不明であり、前述のように即断はできない。このような資料は、福岡県鞍手町新延貝塚[1]（棒状土製品）、本県では笠沙町西之薗遺跡[2]（土偶の腕？）、鹿屋市榎田下遺跡[3]（棒状の手捏ね土製品）等で出土している。用途について判断するにはいずれも資料不足である。もっともその多くが欠損品であることを考慮すると当然のことかも知れないが、今後資料の増加に伴い、検討を要する遺物である。



第87図　住居址1号内出土土製品

③ **石器**　(第88図－479～488)

石器は打製石斧等総数10点出土した。これらは入佐式土器に伴う石器として注目される。

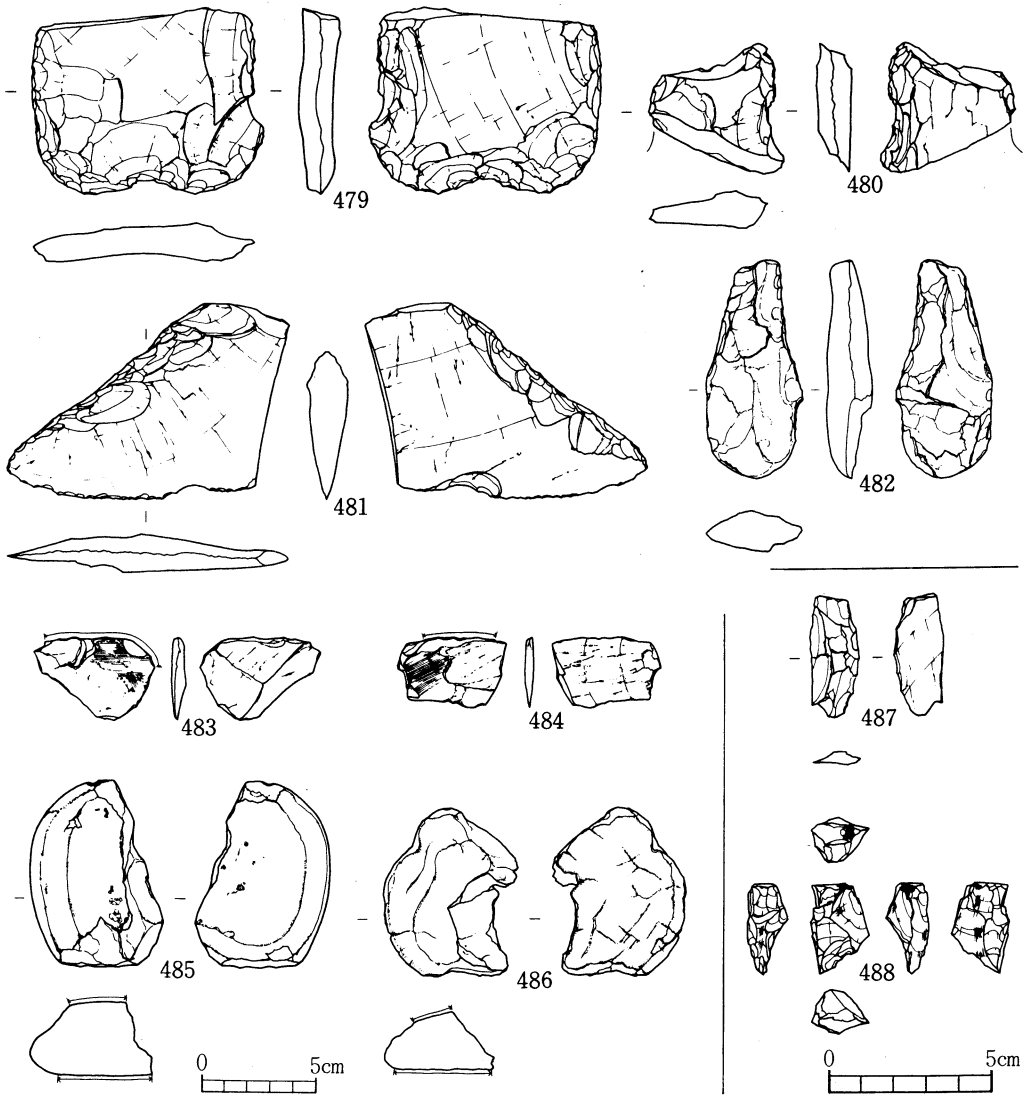
479・480は打製石斧である。いずれも玄武岩製のもので欠損品である。479は基部が欠損した扁平打製石斧で、最大長は不明であるが、最大幅10cmを測る。横長剥片を素材とし、裏面に主要剥離を残している。刃部及び側辺を交互に剥離調整しているが、刃部中央は若干抉れている。480も張り出す肩の部分が残存していることから扁平打製石斧であると考えられる。刃部及び基部の一部が欠損している。

481はスクレイパーと考えられるもので、大形の剥片を素材とし、交互剥離による細かで入念な調整を行い長さ約7cmの刃部を作っている。側辺の一部は両面からの剥離調整の後、刃潰しを行っている。断面は刃部を先端とする三角形状（楔形）を呈している。石材は石斧と同様に玄武岩を使用している。482は小型の石斧状の形態をもつ石器であるが、用途については不明である。縦長の原石の側辺を細かく剥離した後、刃潰しを行っている。また上端及び下端には磨耗痕が見られる。石材は千枚岩である。

483・484は頁岩製の磨製石器である。いずれも欠損品のために全形は知り得ないが、2点とも非常に薄い製品で、残存する辺は刃潰しを行っているのが特徴である。

485・486は砂岩製の磨石状の石器である。いずれも欠損品である。いわゆる一般的な磨石の形態をもたないためにあえて磨石状とした。特に485は二面に磨痕を有するものの、完形平面は五角形と考えられる。また火熱のためか赤茶褐色に変色し数ケ所にひび割れが見られる。

486は長楕円形を呈し、一般的な磨石の形態に近いが、多面体で面の構成は不規則である。



第88図　住居址1号内出土石器

磨痕は二面見られる。また側辺及び長軸両端には敲打痕も残っている。

487は玄武岩製の縦長剝片である。石斧等製作時のものであろう。488は多くの剝離面を残す石器である。気泡が一部見られるものの、黒味が深く良質の黒耀石を素材としている。平坦な上端及び側辺の一部に打痕が見られる。いわゆる楔形石器[④]状の用途も考えられる。

① 鞍手町埋蔵文化財調査会　1980　『新延貝塚』

② 鹿児島県教育委員会　1978　「西之薗遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(8)』

③ 鹿児島県教育委員会　1989　「榎田下遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48)』

④ 岡村道雄　1983　「ピエス・エスキーユ、楔形石器」『縄文文化の研究』7　雄山閣　には、「九州では縄文時代晩期の出土例が多く、……」と記載されている。

② 土壙

（第89図）

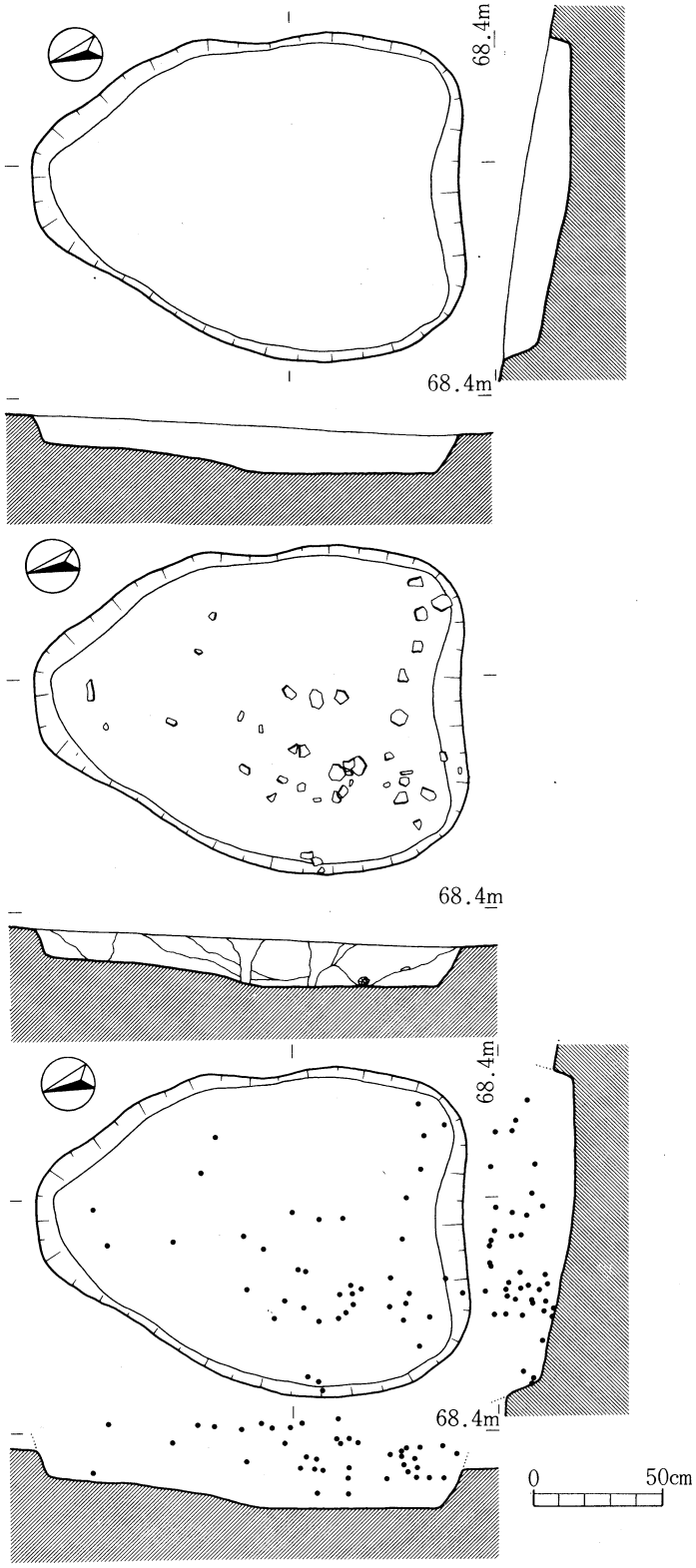
土壙も他の遺構同様にF－2区から検出された。竪穴住居址からは5mしか離れていない。

平面形が最大長1.66m、最大幅1.29mの不定形を呈している。深さは最大で18cmと浅い。

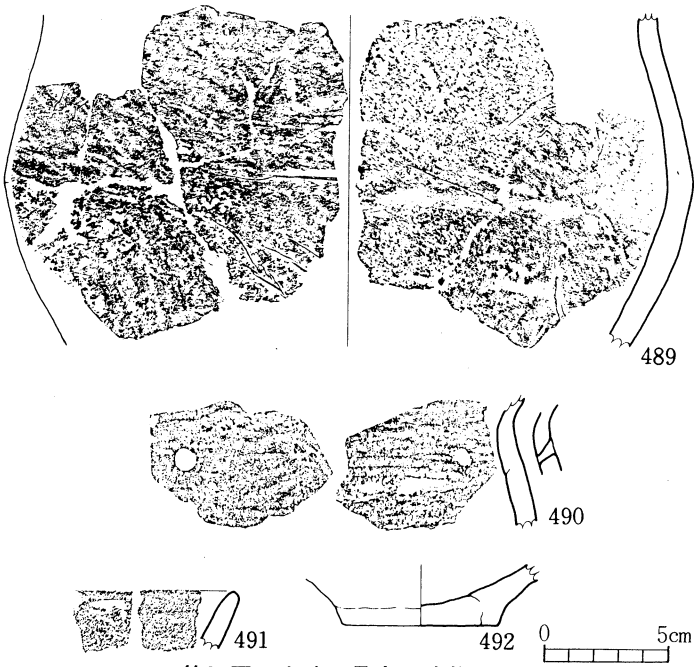
検出は、同区の竪穴住居址と同様に平面の輪郭を把握することが非常に困難であった。また、近くに大きな樹株が存在したため、破壊が激しく、遺構本来の姿を検出するにはほど遠い結果となった。したがって、前述のスケールは、かろうじて残され、検出できたものである。

床面は東側半分は平坦であるが、西側から中央部にかけては傾斜しており、最大10cmの差がある。床面にピットは検出されない。

埋土は、遺構中心部が暗褐色を呈し、周囲にいくにつれて第Ⅵ層に同化するように黄褐色を呈していく。これは、竪穴住居址とまったく同様の状況である。また、埋土中に炭化物を含んでいることも大きな特徴である。



第89図　土壙1号実測図



第90図　土壙１号出土遺物

出土遺物　（第90図）

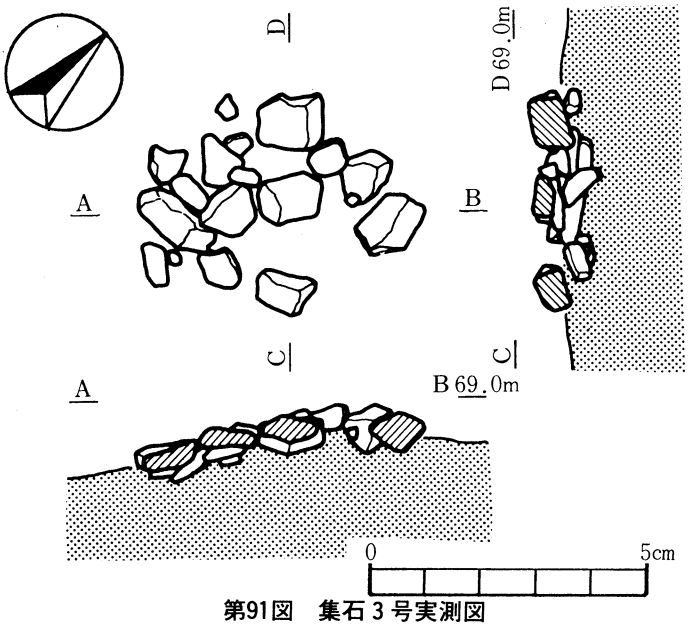
土壙内からは総数42点の土器が出土した。しかし、図化することができたのは、４点にすぎなかった。

これらはやはり、第Ⅴ層あるいは竪穴住居址等から出土した土器と同様に入佐式土器に比定できるものである。

489は深鉢で、本土壙内出土土器の中で、中心的な位置を占めるものである。口縁部および底部の接合資料は無かったが、土壙内で12点が接合し、他にも同一個体と考えられるものが数多くあった。胴部最大径が28cmを測るが、内外面共にカーブは鈍く、当然稜線は見られない。外面は黒褐色を呈し、頸部から胴部にかけては横方向の丁寧なミガキが観察されるが、胴部から以下は二次加熱のためか剝落もあり粗く、煤も大量に付着している。内面は暗茶褐色で剝落が目立つ。胎土に角閃石を含んでいる。490も深鉢の頸部片であるが、外側穿孔の補修孔が見られる。491も深鉢の口縁部片であるが、小片のため詳細不明。外面は無文である。492は深鉢の底部である。接合状況から底部製作の過程が良く観察できる。

③　集石遺構　（第91図）

第Ⅴ層より、集石遺構が１基検出された。挙大の角礫を中心に、計16個の礫で構成されているが、掘り込みなどの施設は伴っていない。焼土や炭化物等は検出されておらず、いわゆる集石遺構として捉え得るかどうか疑問が残るが、ここでは包含層中に散在している礫が、集中しているという意味で取り上げた。これらの礫は、同層中から単独で出土している縄文時代晩期入佐式土器の時期に伴うものと考えられる。



第91図　集石３号実測図

2　遺物

本遺跡の第Ⅴ層からは、土器及び石器が出土した。これらの分布状況は第80図に示した通りであるが、竪穴住居址、土壙、集石などの検出された遺跡南西部の台地縁辺部に集中的に出土していることがわかる。しかし、台地内部にも点々と分布しており、今回の発掘調査区域以外にも遺物が集中して出土する部分の存在も可能性として考えておかなければならない。

1）土器（第92図～第95図　493～528）

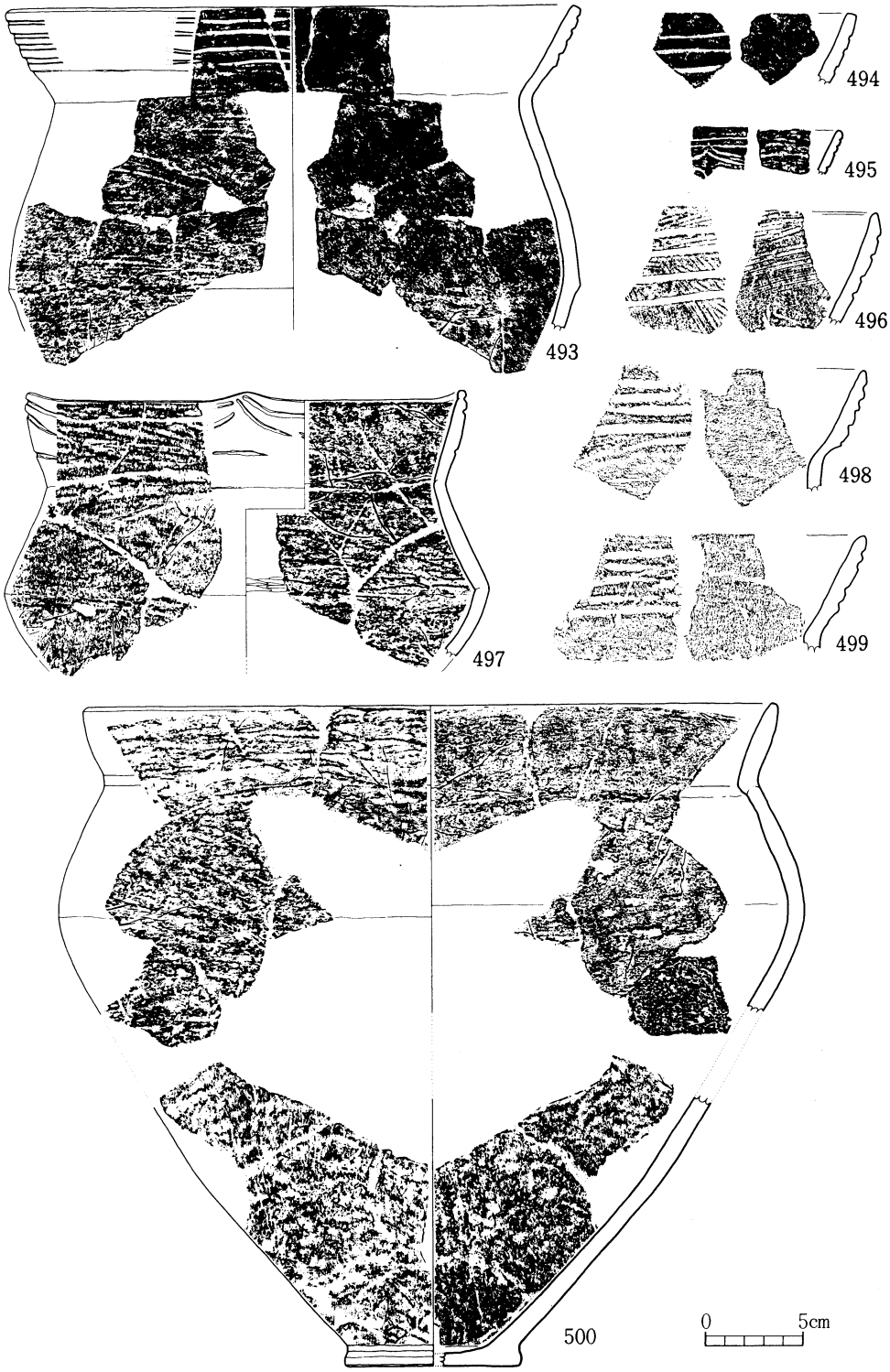
第Ⅴ層出土の土器は、すべて南九州の縄文時代晩期前半中葉に位置付けられている入佐式土器である。これは前述の遺構内出土の土器の場合と同様で、本遺跡の第Ⅴ層は入佐式土器の単純層ということができる。土器は深鉢が圧倒的に多く、他に浅鉢が少量出土している。

①　深鉢（第92図～第94図　493～523）

図化することの可能な深鉢は総数31点であった。この中には500や503のようにほぼ全形を知ることのできる資料もあった。また底部として10点図化したが、これらと口縁部片との関係を明確にすることはできなかった。入佐式土器は、口縁部が「く」の字状に大きく開き、屈曲する胴部をもつという器形を基本的なパターンとしている。本遺跡のものもこれに合致するわけであるが、口縁部の形態、胴部の屈曲状態、あるいは器面調整などいくつかのバリエーションが見られる。今回は主として口縁部文様の有無で分類した。

a　深鉢Ⅰ類（第92図　493～499）

Ⅰ類としたものは、口縁部外面に文様：数条の沈線を有するものである。493は口径29.4cmを測る深鉢である。大きく外へ開く口縁部の外面には、4条の沈線が施されている。この沈線は数の増減こそないものの、上下に揺れるなど、若干端正さに欠けている。この口縁部文様帯は、口唇部からほぼ3分の2程度のところまでで、残りは屈曲部まで無文帯となっている。またややフラットな口唇部から文様部にかけては若干肥厚させている(7.5mm）のに対し、無文部から屈曲部までは全体の器壁の中で、最も薄い部分（6mm）となっている。胴部の屈曲部は外面が明瞭な稜をもつのに対し、内面は緩やかなカーブを描いている。外面の稜は、整形時に粘土を隆起させ、あたかも二角突帯を張り付けたようにはっきりとしている。そのため、胴部下位は上位よりも一段内側に入り込んでいるように見える。器面調整は内外面共に丁寧なナデ調整で、一部磨かれたように光沢をもつ部分もある。特に内面の仕上げは丁寧であるが、胴部の屈曲部のみ横方向の粗い仕上げが残っている。これは粘土接合時の名残であろう。494～498は口縁部片である。なかでも494・495は口縁部文様帯のみの小片である。494の口縁部片はフラットな口唇部からほぼ6mmの器厚を保ちながら、3条の浅い沈線をもつ文様帯をつくっている。内外面共に丁寧な器面調整を行い、一部磨きが見られる。495は器厚4mmと他の深鉢に比べ極端に薄くなっている。文様は先端の鋭利な施文具による5条の沈線が見られるが、途中で欠損しているために全体像は不明である。5条のうちの上2条は平行に、次の2条が一部平行して山形を作っている。また残る1条は山形部分で下位に垂れ下がっている。器面はヘラ磨

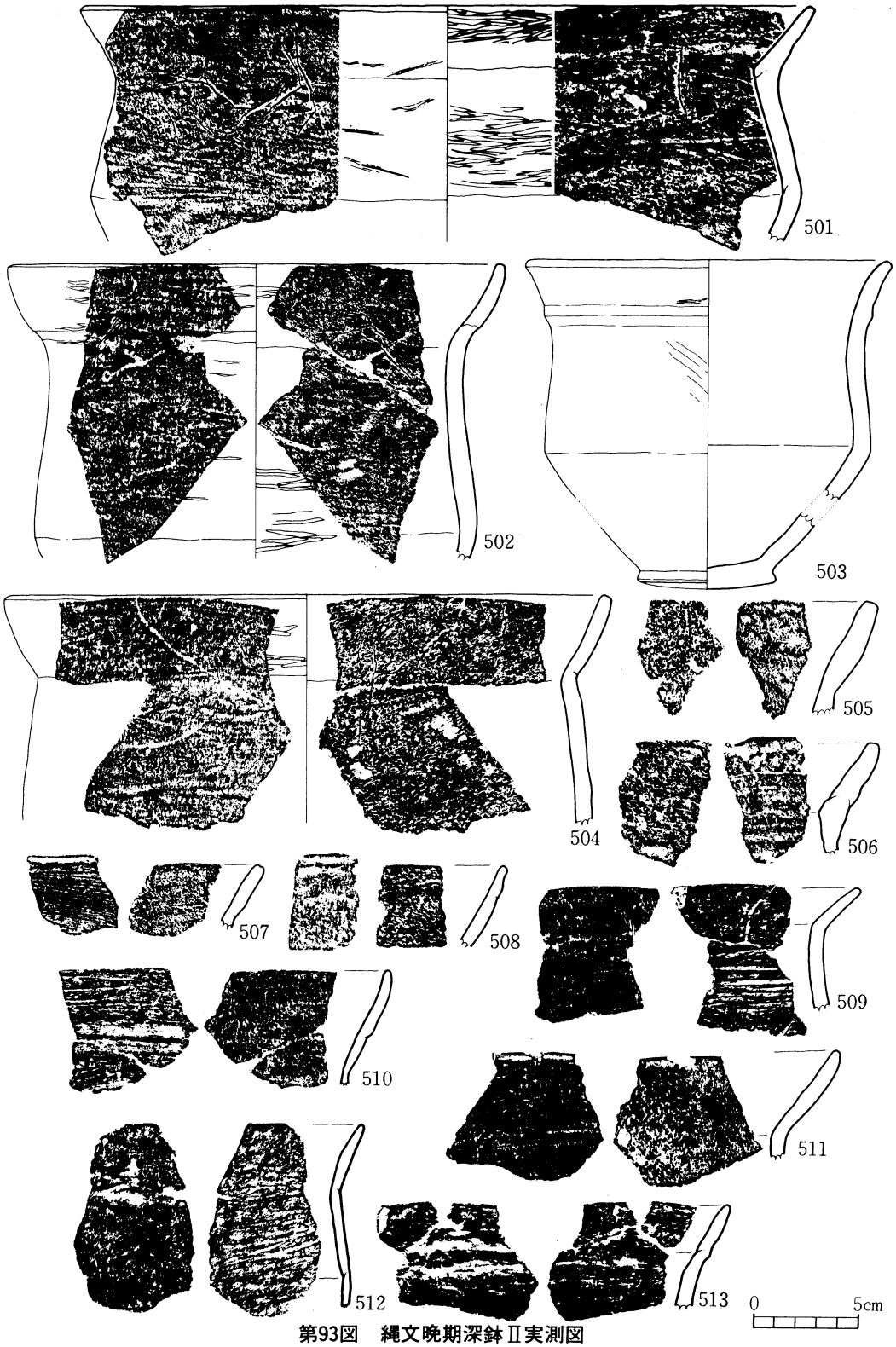


第92図　縄文晩期深鉢Ⅰ実測図

きで、浅鉢同様の仕上げを行っている。496の口縁部片は外反するものの口唇部付近で若干内湾している。外面には4条の平行沈線が施されている。器面調整を内外面共に貝殻条痕で行っているため、他の時期（縄文時代後期）も考えたが、ここでは入佐式土器の範疇でとらえた。497は大きく外反する口縁部片で、外面に5条の沈線が施されている。この文様部の器厚が8mmであるのに対し、頸部のくびれ部は5mmと非常に薄い。498も外反する口縁部片であるが、幅約6cmのうち、口唇部から4cmを文様帯とし、5条の浅い沈線を施している。残り2cmは無文で境界に稜をもっている。文様施文の後、若干器面調整（ナデ）を行っているために、沈線が消されてしまった部分もある。499は口径22.6cmの深鉢である。大きく外反する口縁部外面には3条の沈線が施されている。これらの沈線は施文後の器面調整等により短沈線となっている部分もあり、全体的に雑然としている。また、口縁は一部山形を形成し、沈線もこれに呼応する形で山形に施文されている。ただし山形部の沈線はつながらず、「八」の字状を呈している。胴部も大きく屈曲し（胴部最大径24.8cm）、口縁部と合わせてめりはりのある器形を作っている。これら2ヶ所の屈曲部は粘土の接合部でもあり、内面に若干その名残りが観察できる。器面調整は比較的粗く、文様の雑然さと合わせて、器形のめりはりとは対象的である。なお口縁部外面には少量ではあるが煤が付着している。

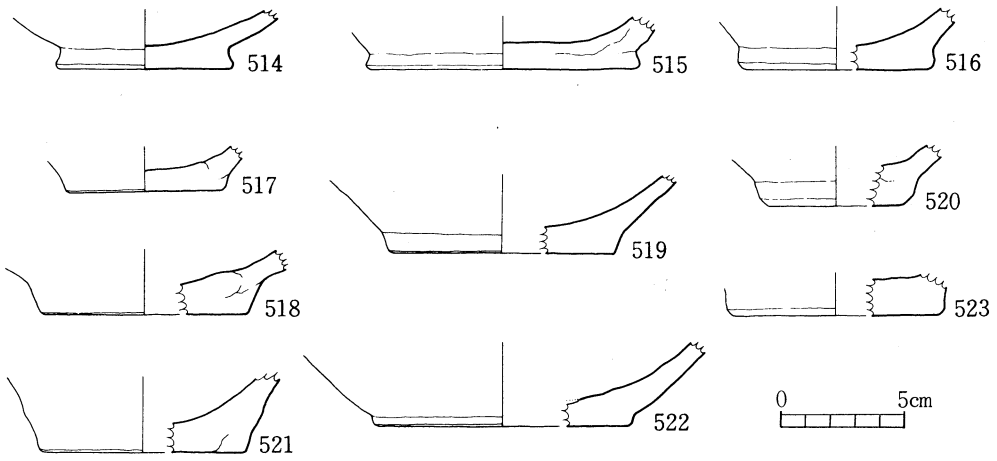
b　深鉢Ⅱ類　（第92図・第93図－500～513）

Ⅱ類としたものは、口縁部外面に文様をもたないもの、つまり無文土器である。口縁部が大きく外反し、屈曲する胴部を有するという器形は、Ⅰ類とほぼ同じである。500は口径が35.6cm、推定器高が33.9cmを測るもので、本遺跡出土の深鉢の中では比較的大形の部類に属している。口縁部器壁は中央部が1.05cmと厚く屈曲部内面の稜がやや内側へ張り出している。胴部最大径は38.2cmと口径を上回っている。屈曲は緩やかなカーブを描いており、内外面共に稜は鈍い。特徴的なのは胴部屈曲部が口縁部に近いということである。頸部から胴部屈曲部と胴部屈曲部から底部までの比率は1：4で、屈曲部以下が若干間延びした印象をうける。径9cmを測る底部は平底で、外面がややくびれている。中央部付近の器厚は0.65cmと全体を通じてもっとも薄い。器面調整は全体的に粗く、ナデを主体としているが、その際生じる粘土の塊が、処理されないまま数ヶ所残っている。なおこの土器は、G－1区でほぼ一括して出土した。501は口径35.3cmを測り、500同様大形の深鉢である。大きく外反する口縁部の内面には明瞭な稜をもつが、外面は緩やかなカーブを描き、稜は鈍い。胴部最大径は33.8cmで口径より一回り小さい。この屈曲部も緩やかで稜も鈍い。全形は知り得ないが、おそらく胴部屈曲部以下が長く、500と同様な器形を有するものと考えられる。器面調整は、粗いナデ仕上げを行っている外面に比べ、内面は非常に丁寧で、口縁部内面などは横位のヘラ磨きを行い光沢すら観察できる。502は口径23.8cmを測る深鉢である。口縁部は外反するものの、若干内湾気味に立ち上がっている。頸部内面は緩やかで稜も鈍いが、外面は若干段を有し、文様は無いものの、口縁部と胴部の境界を明瞭にしている。胴部最大径は21.2cmと口径よりもやや小さい。内外面共に稜は鈍い。外面は横位の粗いナデ調整の後、ヘラ磨きを行っているが、部分的に磨き以前の調整痕が

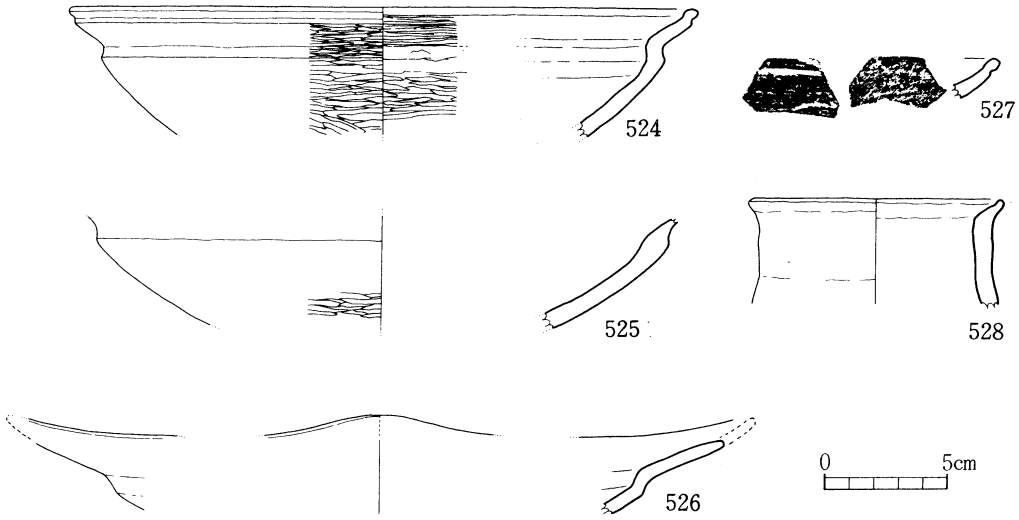


第93図　縄文晩期深鉢Ⅱ実測図

観察できる。内面は丁寧なヘラ磨きを行い、凹凸も少なく光沢がある。なお、口縁部の接合資料が少なかったため、ここで示した口径には若干増減も考えられることを追記しておきたい。接合はしなかったが同一個体と考えられる胴部片の中に、幅約2cmを測る粘土紐の接合面を残すものもあった。503は図面上で完形に推定復元した深鉢である。口径は17.4cm、推定器高が15.7cmを測る。口縁部は外反するが、他の深鉢と異なり、胴部屈曲部から緩やかにカーブを描きながら外反している。つまり入佐式土器に見られる「く」の字状の口縁部が存在しないのである。当然、口縁部内面に稜は見られない。ただし、口縁部外面に三角突帯状の隆起部をもうけ、胴部と一線を画している。胴部最大径は15.6cmを測り、明瞭な屈曲部をもっている。底部は直接胴部と接合しないものの、胎土、焼成等から同一個体と判断して復元した。底径は6.6cmを測り、底面器壁は1.2cmと厚い。胴部への立ち上がりはくびれ、底部中央よりも若干浮き上がっている。つまり完全な平底ではなく、安定感に欠ける。器面調整は内外面共に丁寧なヘラ磨き状の仕上げを行っている。504は口径29cmの深鉢である。大きく外反する口縁部を持っており、内外面に明瞭な稜をつくっている。土器片が少なく、全形は知り得ないが、胴部下端は、あと少しで屈曲部にたっするものと考えられる。505～513は「く」の字に外反する口縁部及び胴部片である。それぞれ小片のために口径は不明である。505の口縁部は中央が1.2cmと厚く器面調整と合わせて全体的にやや雑な仕上げを行っている。506は内面に明瞭な稜をもつ口縁部片である。焼成は良好であるが、胎土には砂粒が多い。また整形がやや粗く、粘土の接合部が一部残っている。507は器厚0.6cmと薄い口縁部片である。口唇部に浅い凹部をもつのが特徴である。器面調整は内外面共に丁寧なナデ仕上げを行っている。508は若干内湾しながら外へ立ち上がる口縁部片である。器厚は0.6cmと薄いが一部粘土の接合面を残している。509は器厚が0.5～0.65cmと薄い。器面調整は丁寧なナデ仕上げを行っているが、胴部内面は板状工具による整形の跡が明瞭に残っている。510の口縁部片は器厚0.3～0.5cmと非常に薄いが、幅は5.5cmと広い。口縁部の中央よりやや上位に隆起部をもうけているが、文様は施さ



第94図　縄文晩期深鉢底部実測図



第95図　縄文晩期浅鉢他実測図

れていない。また若干内湾しながら外反しているのも特徴の一つである器面調整は内外面共に丁寧なナデ仕上げを行っている。511も510と同様に若干内湾しながら外反する口縁部であるが、口縁部外面に隆起部は無い。外面及び内面の口唇部近くは、丁寧なヘラ磨きを行っている。屈曲部内面には稜が観察できる。512は小片ながらも口縁部から胴部屈曲部まで接合した資料である。口径は知り得ないが、器厚も0.3～0.5cmと薄いことから、小型の深鉢と考えられる。口縁部及び胴部は共に屈曲部の内側に稜をもつのが特徴で、外側は緩やかにカーブしている。器面調整は外面及び口縁部内面は、丁寧なヘラ磨きを行っている。胴部もやや粗いがヘラによる仕上げを行っている。513は外反する口縁部をもつものの、屈曲は鈍く整形も粗い。口縁部屈曲部外面には、粗雑ではあるが、隆起部をもうけ胴部との境界を明確にしている。

514～523は深鉢の底部片である。すべて平底であるが、胴部への立ち上がり部分に若干相違が見られる。514～515は底径がそれぞれ7.2cm、10.1cm、7.8cmを測る土器片で、いずれも胴部への立ち上がりにくびれ部をもっている。これに対し、残りの517～522は、くびれ部をもたない底部片である。517・518は底径6.4cm、8.4cmを測る土器片で、粘土の接合状況が観察できる。519～522は底径がそれぞれ9.2cm、5.4cm、8.2cm、10.4cmを測る土器片である。これらは、底部の器厚と立ち上がる胴部の器厚の割合がほぼ2：1であるという特徴をもっている。523は底径8.4cmを測るが底面のみのため立ち上がり等は不明である。

②　浅鉢他　(第95図－524～528)

524～527は浅鉢である。完形になるものは出土しなかった。524は口径25.6cmを測る浅鉢である。傾きについては若干変動の可能性もある。大きく屈曲する胴部（最大径22.8cm）をもつもので、器面調整は内外面共に丁寧なヘラ磨きを行っている。525は胴部のみの資料であるが、524と同様の口縁部を有するものと考えられる。屈曲する胴部の最大径は23.2cmを測る。526は口縁部が波状を呈する浅鉢の小片で、図面上で推定復元した。527は口縁部の小片である。528は口径10.4cmを測る小型の土器で、壺状の器形を呈する。やや外反する口縁部と、若干稜を残す肩部が観察できる。器面は内外面共に丁寧なナデ調整を行っている。

第4節

2　出土石器　（第96図～第98図－529～548）

縄文時代晩期の石器は、総数29点出土した。そのほとんどが打製石斧と考えられるものであるが、完形品が少なく、石器原形を想定できないものもあった。ほとんどが第Ⅵ層出土のものである。また平面分布を見ると土器（入佐式土器）とほぼ同様な分布を示している。特に竪穴住居址の検出されたＦ－２区及びその周辺区からの出土が多い。

529～537は、素材に頁岩を使用したもので、器面に鉄分が多く付着しているという特徴を有する。

529は残存長15.5cmを測る大形の打製石斧状石器であるが、形態からむしろ土掘り具等の機能が考えられる。様長の剝片を利用し、刃部を欠いているが、頭部とした方には縦方向の擦痕が観察される。

530も529同様、横長剝片を利用したもので、機能的にも同様なことが考えられる。両面ともに擦痕が観察できる。側辺の摩滅も見られ、かなり使用したものと考えられる。

531は打製石斧と考えられるものであるが、頭部を欠いている。刃部には縦方向の擦痕が観察される。

532は横長の大形剝片で、残存する一側辺は、剝離調整を行っているが、全形については不明である。

533・534はいずれも打製石斧の頭部と考えられるものである。533の両側辺は摩耗が激しく、剝離面が明瞭でない。

535は厚さ２～５mmと非常に薄く、長方形を呈する平面形の長辺部分に磨痕が観察され、刃部状の辺を形成している。実測図は縦型にしたものの、その形態から、打製石庖丁状の機能も考えられる。竪穴住居址から出土した484・485も同様な形態・機能が考えられ、入佐式土器期の石器組成の一部をなすものと考えられる。

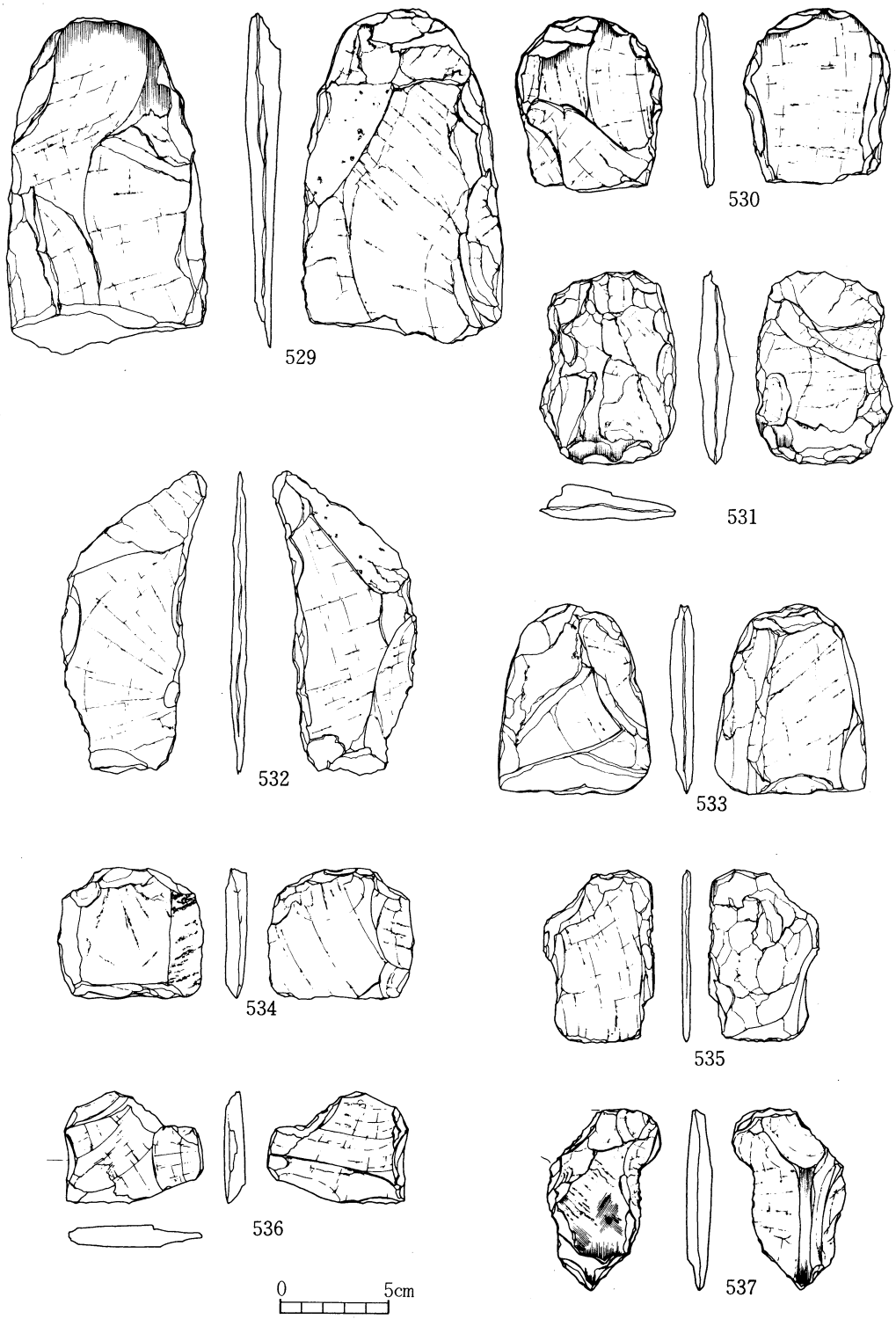
536は打製石斧の一部と考えられるもので、頭部及び刃部を欠いている。両側辺ともに摩耗が激しく、剝離面が明瞭でない。

537は頭部の張り出す打製石斧と考えられるものである。頭部の一端を欠いているが、刃部には擦痕、また面の一部には磨痕が観察される。このように頭部の張り出す（最大幅が頭部にある）打製石斧は、鋭利な刃部をもつという特徴を有するようである。本遺跡からは１点しか出土していないが、他の縄文時代晩期遺跡からも、少数ではあるが出土しているようである。今後検討を要する石器であろう。

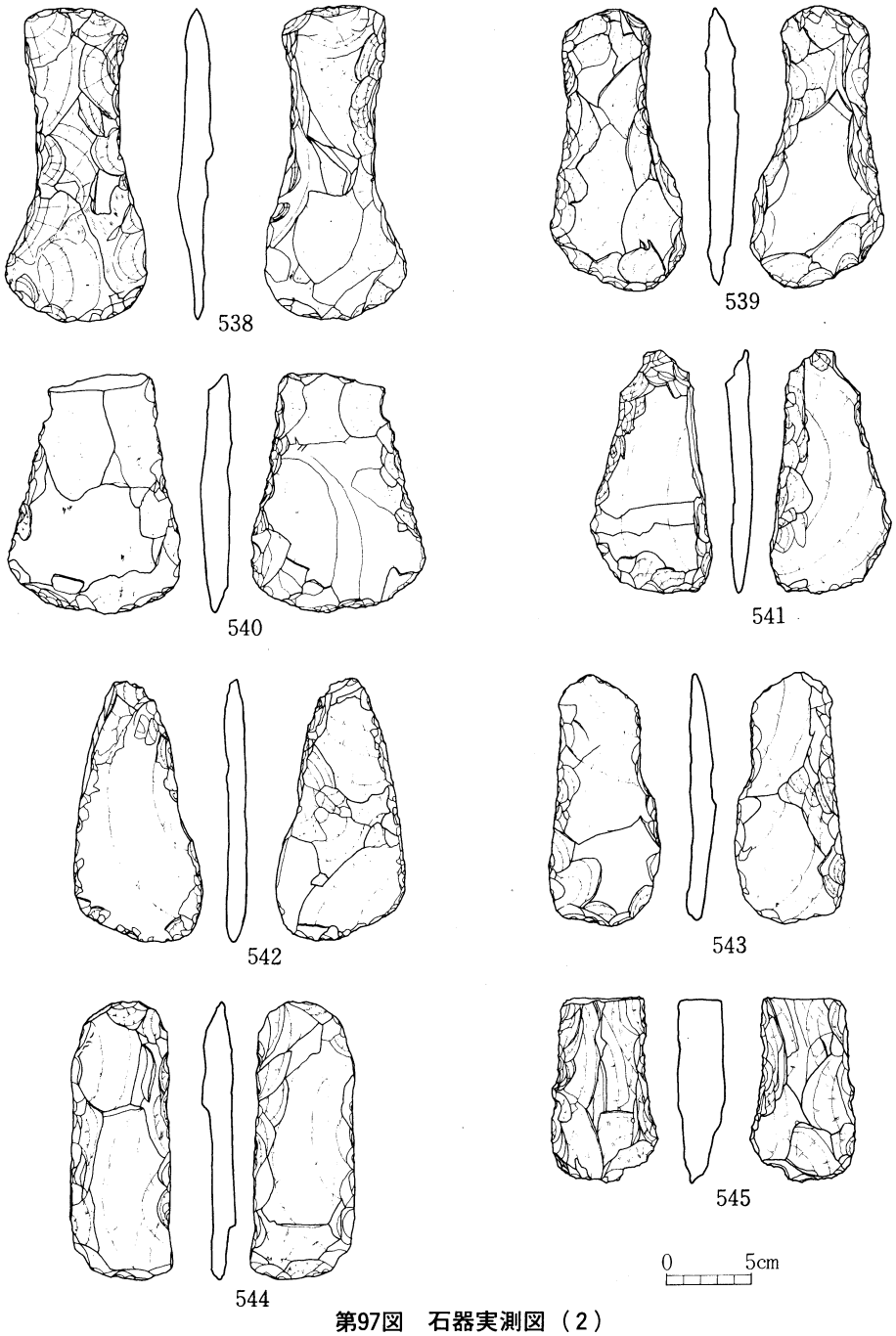
538･539、541～544は打製石斧の完形品である。

538は形態により分銅型に分類できるものである。両面とも大きな剝離調整により形成されており、側面には細かな剝離調整がみられる。刃部は両刃であり、両刃面には、使用痕と考えられる擦痕が確認できる。

539は538同様に分銅型の完形品である。片面に、母岩より剝離されたままの面を残してい



第96図　石器実測図（1）



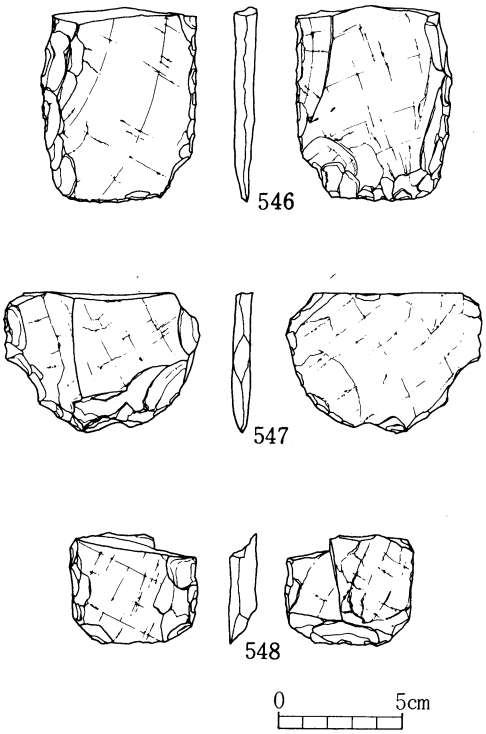
第97図　石器実測図（2）

る。基部片面に柄を装着したと考えられる凹部を観察でき、裏面には装着のためと考えられる擦痕が観察できる。刃部の一部にも擦痕が観察できる。

540は分銅型の刃部を残す破損品である。母岩より剝離された剝片を使用したと考えられ、片面一部には自然面を残している。裏面も側縁にだけ細かな剝離調整が施されており、母岩からの剝離面を残していると考えられる。自然面を残す側の刃部及び刃面には、縦方向の擦痕が観察できる。

541は撥型の完形品である。風化の状態が激しく、刃部及び側縁の剝離調整も明瞭に観察できない。

542も撥型を呈する完形品であるが、541よりも風化が激しく、細かな剝離調整は観察しにくい。



第98図　石器実測図（3）

543は短冊型の完形品である。側縁周辺に集中して剝離調整が施されている。刃部には、鈍い摩滅が数ケ所観察でき、裏面刃部には、縦方向の擦痕を観察できる。剝離面は風化のため、明瞭には観察できない。断面は、わずかではあるが湾曲している。

544も短冊型の完形品である。横はぎの剝片で、全体的に大きな剝離によって形成されている。刃部は鈍く摩滅しており、一部には擦痕も確認できる。

545は短冊型の基部破損品である。石質のためか、細かな剝離まで明瞭に観察できる。他の打製石斧と比べると厚みのある断面を呈している。

546～548は打製石斧の刃部と考えられるものである。

548は残存部が少ないために全形は不明であるが、546は短冊型、547は分銅型を呈する打製石斧と考えられる。547は側辺及び刃部に丁寧な剝離調整を行っている。

第Ⅲ章　発掘調査のまとめ

大正時代からの古い研究史をもつ中ノ原遺跡は、今回の発掘調査によって大浦地区の中ノ原台地の西端を中心に300ｍに及ぶ範囲に拡がっていることが判明した。そして本遺跡の今回の発掘調査は、遺跡を丁度串刺しにしたような形となった。台地中央部はこれまでの農地開発によって削平や破壊を受けて遺跡の中心は台地西側端部に偏っているが、それでも多くの成果が得られた。縄文時代は、早期以降、前期、後期、晩期の各期において多くの成果が得られた。また、弥生時代及び中世以降についても竪穴住居址や掘立柱建物跡などが検出され多くの成果が得られているが、整理の都合上、整理作業及び報告書作成は次年度に回すことになった。ここでは、縄文時代についての発掘調査の若干のまとめをしておきたい。

第１節　縄文時代早期について

前期から後期の全面発掘調査後の下層確認は、東西（Ｄ区基準線に沿って）に幅２ｍのトレンチを１本通し、南北は20ｍ毎に１本を掘り下げた。つまりトレンチの設置率は、本調査面積の25％を占めることになる。確認調査の結果、早期包含層は２箇所で検出され、それ以外は存在しないことが確認された。

出土遺物の形態が把握できるものはＤＥ18区～ＤＥ19区の総数35点の土器片で、２個体分が確認された。それらは同一型式と考えられるため、中ノ原遺跡のⅠ類土器として取扱った。つまり早期は１型式のみの出土である。

Ⅰ類土器は、比較的短線で斜位の貝殻腹縁刺突文線を口縁部外側に巡らせ、胴部には粗い貝殻条痕文を施文する。１個体は縦位に他は綾杉状に施文するタイプである。このタイプは、文様形態から石坂式土器の範ちゅうに属することが考えられる[①]。しかし、石坂式土器との相違点は、口縁端部が肥厚しない点や口唇部や底部下端に刻目が施されない点があげられる。これらは石坂式土器の主要な文様要素でもあり、本遺跡のⅠ類土器が地域差及び時期差を示すものかさらには異型式を示すものか類例の増加を待って検討する必要がある。

第２節　縄文時代前期について

縄文時代前期に該当するものには、集石遺構と出土土器がある。なお、土器以外の石器やその他の遺物については、出土層位が同層で判別は不可能なため後期の節で一括して取扱った。

①　集石遺構について

集石遺構は２基検出されている。いずれも縄文時代前期の所産と考えられるものの、本遺跡出土土器のどの時期に属するかは定かでない。

集石は、１号が65cm×65cmの円形プラン、２号が70cm×55cmの楕円形プランを呈し、１号が小型の角礫中心であるのに対し、２号は拳大の円礫が比較的多いという違いを見せている。こ

れらは、いずれも明瞭な掘り方は確認されていないが、1号に若干凹部が見られた。また、2号を構成する礫の中には凹石が含まれていた。

② 土器について

前期に該当する土器は、Ⅱ類土器からⅤ類土器の4系統の土器群である。

Ⅱ類土器は、いずれも細片の胴部片であるが、隆帯文系土器で轟B式土器に比定されるものである[②]。隆帯文は縦・横位に交叉して施文するもの（15）と斜位に施文するもの（16）があるが、これらは同個体と考えられる。隆帯文の特徴や形態から轟BⅡ式土器に該当することが考えられる。本遺跡での出土量は僅少であるが、本県では荘式タイプ（出水市荘貝塚）として早くから知られていた形態でもある[③]。

Ⅲ類土器は、逆三角錐の器形を呈し器面全体に条痕文を施すタイプである。器面の内外に条痕文を無造作に縦・横位に施文し、丸みをもった口唇部には刻目文等を施すのが特徴としてあげられる。39以外は底部資料はほとんどないが、丸底から平底に近い形態と考えられる。Ⅲ類土器は形態上は類似するが、細かな点の特徴は若干分かれる。轟式土器の範ちゅうに属すことが考えられるが、数型式に細分される可能性がある。

Ⅳ類土器は押引条痕文系土器としたもので、最近、大口市瀬ノ上遺跡などでも出土し注目されるタイプである[④]。底部は丸底で、胴部は僅かな屈曲を呈しながら口縁部は大きく開く。押引条痕文を縦位に施し、そこからさらに横位に施文して文様を構成している。口縁内面にも同様の文様を施文する。今後、文様の特殊性から一型式として把握され得るタイプである。これまで轟式土器や曽畑式土器と共伴して出土する例が多く、また、両型式の文様の特徴を備えている点からも前期の範ちゅうに属すことが考えられる。

Ⅴ類土器は、沈線文系土器で曽畑式土器に比定される。口縁部片と胴部片の僅か二点の出土であるが、曽畑式土器の特徴を良く備えている。口縁内外に刺突文を施文し、胎土には滑石を含まないもので南九州によく散見するタイプである。

第3節　縄文時代後期について

Ⅵ層の後期に該当する遺構は、検出されていない。Ⅵ層の出土遺物には、Ⅵ類～XⅢ類土器と石器Ⅰ～石器Ⅶと円盤形土製加工品などがある。

① 土器について

後期に該当する土器は、Ⅵ類土器からXⅢ類土器の8類の土器群がある。しかし、XⅡ類土器は型式不明土器を一括し、XⅢ類土器は後期土器の底部を一括したものである。

Ⅵ類土器は、口縁部に貝殻腹縁刺突文を巡らせその下位には凹線文文様を展開させるものである。平縁口縁の他に波状口縁も存在する。最近、志布志町中原遺跡から良好な資料が発見されて阿高式土器からの系譜が想定される一群に比定することができる[⑤]。また、榎田下遺跡からも出土しており、縄文時代中期から後期にかけて展開する重要な南九州の土器型式の一つである。

Ⅶ類土器は、凹線文間の無文部に貝殻腹縁刺突文を充塡させるタイプである。従来、「疑似縄文」や「擬縄文」と呼称されるタイプであるが、本遺跡出土のものには貝殻腹縁刺突文が稚拙でいわゆる「疑似縄文」とは呼び難いタイプが多く、あえて「貝殻腹縁刺突充塡文土器」とした。榎田下遺跡でも出土しており、形態や型式の整理が急がれるタイプである。

Ⅷ類土器は、細形の平行凹線文系の土器である。しかし、本遺跡出土のものは細片が多く、さらには器形・文様がバラェティに富み良好な資料とは言い難い。93や94のように、一般には二本平行の凹線文で文様を展開するもので、指宿式土器に該当するタイプである[6]。平縁口縁と波状口縁のタイプが存在するが、波状口縁には内面に短凹線文や刺突文を施文する。

Ⅸ類土器は、肥厚口縁を呈した磨消縄文系土器である。磨消縄文系土器は、大きく3つのタイプに分かれる。そのうちの1つのタイプは1点（164）の出土であるが、小池原上層式土器に比定されるものである。その他のタイプは、納曽式土器と西平式土器の二つの型式に区分される。納曽式土器は西之表市納曽遺跡出土のものを標式とし、135～147の土器がこれにあたる。147や150のように本遺跡では完形品に近い比較的良好な資料が出土している。その他のものは西平式土器に比定されるものである。本遺跡出土の土器は、これら両型式や市来式土器との関係を知る良好な資料として注目される。

Ⅹ類土器は、口縁部が肥厚して屈曲するタイプで市来式土器に比定される[7]。口縁部を肥厚させ断面三角形あるいは「く」の字に形つくるもので、口縁部は4隅が高くなったいわゆる波状口縁を呈する器形である。文様は肥厚口縁部を中心に凹線文とヘラ状刺突文や貝殻腹縁刺突文を組み合わせて構成されるもので、南九州を中心とした独特の土器型式とされている。特に、214～221は、他と比較して精巧な整形で華麗な文様施文が確認される。さらに、222の器台も形態上この類に属することが考えられるもので、丁寧で華麗なシンボル的な造りである。

Ⅺ類土器は、口縁部が屈曲するタイプである。このⅺ類土器には、口縁部は頸部から外反して途中で稜をつくって内湾するものと頸部から外反するだけの二つのタイプがある。前者をⅺ－A類とし、後者をⅺ－B類とした。器形は大きく異なるが、施文上においてはⅺ－A類土器は貝殻腹縁刺突文を屈曲稜部を中心に施文し、Ⅺ－B類土器は同施文を頸部付近に施文するという共通の要素もみられる。本遺跡ではⅨ類土器と共に出土する傾向がみられるが、すでに笠沙町西之薗遺跡[8]や末吉町丸尾遺跡[9]でも同様の傾向が確認されており、両型式の関係が注目される。さらに形態上、Ⅺ類土器は市来式土器の範ちゅうに属すことが考えられるが、Ⅺ－A類とⅺ－B類が2型式に区分されるかどうかは今後の課題といえる。

Ⅻ類土器は出土量が少ないため便宜的に一括して取扱ったが、このなかには多型式のものが含まれることが考えられる。特徴的なものには、次のようなものがみられる。

273は、中空の器台で頸部に3箇所の三角形の透かしをもつタイプである。文様は、特徴的な削り出し文様である。吹上町白寿遺跡では、本出土例に酷似したものが完形品で出土している。文様の形態から中期的様相が考えられるものである[10]。

274～282は、肥厚口縁に貝殻腹縁刺突文や凹線文で文様を施文するタイプである。特に、

276～278は、その文様の特徴から中期終末～後期初頭に位置付けられる南福寺式土器に類似するものである[11]。

283～286は同一個体であるが、口縁部に貼付け突帯文を巡らせその突帯文上と口唇部平坦面に貝殻腹縁の刺突文を施している。器形は、平底でバケツ状に復元される。さらに287は、口唇部平坦面を僅かに拡張しその部分に凹線文を施文するタイプである。そのほか、288や290のように貝殻腹縁刺突文を口縁部に幾何学に或は縦位に施文する珍しいタイプも存在する。いずれも型式は不明である。

また、これ以外にも珍しい新例のタイプがみられる。293はヘラ描き沈線の幾何学文と口縁部4隅に突起をもつ非常に特徴的な土器である。294～297は口縁端部外側に突帯を貼付して口唇部を拡張させ、その口唇部に刺突文を連続して施文するものである。300は口縁部の中位に突帯文を巡らせ、その上から貝殻腹縁刺突文を施している。

そのほか、特殊なものもみられる。305は稚拙な造りであるが、土器の注口の部分である。307と308は装飾把手の一部である。欠損部分が多く本器は不明であるが、珍しいタイプである。以上、形態上は後期に属すことが考えられるが、少量の出土で断片的な資料のため、その実態については今後の資料の増加を待ちたい。

XIII類土器は、各種の底部を一括した。底部には平底と上げ底の二通りがあり、平底は33個で上げ底は5個と少ない。また、平底には圧痕を有するものと無文のものがあるが、圧痕を有する底部はもじり編みが2点で他はすべて網代である。しかし、部分的に圧痕が付着したものやナデ消されたものなどが存在し、全体的に稚拙である。

② 石器について

本遺跡の縄文時代に該当するVI層出土の石器は、石器I～VIIの7種に類別した。そのうち、礫石器の磨石、敲石、凹石は一括し石器Vとして扱った。VI層からは前期と後期の時期の土器が出土するが、これらの石器がこれらのどの時期に該当するか定かでない。

石器Iは打製石鏃で、広い調査区にも拘らず僅か9点という少ない出土である。

石器IIは磨製石斧で、21点の出土がみられた。磨製石斧の形態は、乳棒状石斧(4)、扁平磨製石斧(12)、太型蛤刃石斧(1)、鑿型石斧(4)に類別される。特に小型の鑿形石斧は末吉町宮之迫遺跡[12]や志布志町中原遺跡のように縄文時代後期の特徴的な石斧と考えられるものである。

石器IIIは石英製の石匙で、石器IVは頁岩製のスクレイパーである。

石器Vは、磨石・敲石・凹石などいわゆる礫石器である。本遺跡では総数70点出土しているが、46点を資料化した。礫石器の場合、先の三種の要素が複合して使用される状態が多い。つまり、器種の兼用である。本遺跡出土のものを使用痕から判断すると、1類＝磨石、2類＝敲石、3類＝磨石＋敲石、4類＝凹石、5類＝凹石＋磨石、6類＝凹石＋敲石、7類＝凹石＋磨石＋敲石に類別される。用途による使用頻度の多い器種は3類であり、兼用の使用頻度は磨石と敲石の組み合わせが最も多い。また、石材の選択では安山岩が平均的に使用されているが、1・3類では花崗岩の使用が多く、2・4類では砂岩の使用が目立つ。

第４節　縄文時代晩期について

縄文時代晩期に該当するものとしては、遺構が竪穴住居址、土壙、集石遺構がそれぞれ１基ずつ検出され、これらの遺構内及び第Ⅵ層を中心に、土器、土製品、石器が出土した。

①　竪穴住居址について

竪穴住居址はＦ－２区から１基検出された。平面形は3.5m×3.2mを測る略円形を呈し、中央に地床炉と考えられる浅い円形ピットを有するものである。柱穴状のピットは４ケ所検出することができたが、住居の上屋構造を把握するまでには至らなかった。

遺構内からは多くの遺物が出土しているが、中でも注目されるのが土器である。本遺跡の晩期土器は、従来入佐式土器（南九州の縄文時代晩期前半中葉に位置付けられている）と呼ばれている土器一型式のみであることは本文中で既に述べたが、遺構内出土土器のうち、完形近くまで復元できたものが５個体と、入佐式土器の実態にせまる上で貴重な資料を得ることができた。ただ問題は、これらが同時期のセットとしてとらえ得るかどうかということであるが、本遺跡では入佐式土器以外の晩期土器が出土していないこと、遺構周辺出土の遺物も入佐式土器が中心となることなどを考慮すれば、竪穴住居址と遺構内出土の遺物の関係は、同時期か、時間差があっても大きなものではないと考えられる。

石器は打製石斧、磨石状石器等10点出土している。これらは入佐式土器に伴う石器として、今後、整理・検討していかなければならない。

その他の遺物として、土製品が１点出土している。最大長18.cm、最大幅0.8cmと非常に小形の製品である。このような資料は、福岡県鞍手町新延貝塚（棒状土製品）、本県では川辺郡笠沙町西之薗遺跡（土偶の腕？）、鹿屋市榎田下遺跡（棒状の手捏ね土製品）等で出土しており、その機能はもとより、帰属時期等今後、整理・検討を要する遺物である。

これまで、鹿児島県本土における、縄文時代晩期該当の竪穴住居址は、鹿屋市水の谷遺跡（上加世田式　６基　円形）、鹿屋市榎木原遺跡（入佐式　１基　円形）、加世田市上加世田遺跡（入佐式　１基　方形）、揖宿郡喜入町梅木渡瀬遺跡（黒川式　１基　柄鏡状）の４遺跡９例が知られているだけである。近年、九州でも資料の増加に伴い縄文集落の在り方が序々に明らかになりつつあり、本資料もまた大隅半島における縄文時代晩期前半の住居スタイルの一つとして貴重な情報を提供してくれたと考える。

②　土壙について

土壙は竪穴住居址から約５ｍ離れて１基検出された。樹株が存在したために破壊が激しく、検出状況は不良であったが、出土遺物から、竪穴住居址とほぼ同時期の入佐式期のものと考えられる。性格については把握できなかったが、埋土中に炭化物が含まれていたことなどから、竪穴住居の補助的な役割等が考えられよう。

③　集石遺構について

集石遺構は１基検出された。竪穴住居址と約５ｍ、土壙と約８ｍしか離れていない。周辺の出土土器から入佐式期のものと考えられる。ただ、構成する礫が16個と少ないこと、雑然とし

ていること等から、いわゆる集石遺構としてとらえ得るか疑問が残るが、本文でも述べたように、今回は、包含層（第Ⅴ層）中に散在している礫が、比較的集中している部分という意味で取り上げた。

④　土器について

晩期に該当する土器は、遺構内及び第Ⅴ層出土のものを合わせて、すべて入佐式土器に比定されるものである。深鉢が多く、他に浅鉢等が出土した。

深鉢は口縁部文様（沈線）の有無から、Ⅰ類とⅡ類に分類した。Ⅰ、Ⅱ類ともに、「く」の字に外反する口縁部および外側へ大きく張り出す胴部をもつという、入佐式土器の基本的器形を有することには変わりない。

深鉢Ⅰ類は、口縁部に3～7条の横位の沈線を施すものである。沈線は、部分的にとぎれたり、隣接する線と合流するなど比較的雑な仕上げを行っている。

深鉢Ⅱ類は、文様（沈線）をもたないものである。ただ、503や513のように、口縁部下位に微隆帯をもうけ、文様帯を意識したと考えられるものもある。これらⅠ類とⅡ類の関係をみると、量的には遺構内、包含層中ともにⅡ類の方が多い。単純に個体数を比較すると、ほぼ2倍以上の開きがある。このような深鉢の在り方は、本遺跡出土の入佐式土器を考える上で非常に示唆的である。入佐式土器深鉢における沈線の有無は、これまでも指摘されていたことであるが、上加世田式－入佐式－黒川式という晩期土器変遷の中で、口縁部の無文化傾向を考慮するならば、本遺跡出土の土器群は、入佐式土器の中でも後出のものである可能性が高いと考えられる。このことは、口縁部の無文化、沈線の粗雑化、胴部最大径の曲線化（稜線が鈍くなる）、張り出し底部の存在、500のように、胴部最大径が頸部に近づく傾向（胴部が間延びする）等からも裏付けられよう。

浅鉢（マリ形とよばれるものも含む）の出土は深鉢に比べて非常に少ない。その傾向は、特に包含層中において顕著である。深鉢に比べて、口縁部形態はバリエーションが豊富である。深鉢の変遷と合わせて、今後セット関係の確立が必要である。注目すべき点は、従来の入佐式土器浅鉢の基本的特徴である、間延びした口縁部をもつ浅鉢の資料が今回出土しなかったことである。このことは、前述の“入佐式土器の中でも後出のもの”の在り方を考える上で有効な手段となり得るかも知れない。

⑤　石器について

第Ⅴ層出土の遺物の中で、晩期該当の石器と考えられるものは、総数20点出土した。そのほとんどが、打製石斧の形態を有するもので、その平面形から、撥型、分銅型、短冊型に大きく分類できるようである。このような打製石斧形態の種類の豊富さは、本遺跡に限ったことではなく、晩期遺跡特有の状況であるが、529のような大形の石器、あるいは535のような打製石包丁状石器の存在も合わせて、南九州の縄文時代晩期社会を復元する上で、多くの情報を与えてくれていると考えられる。今後、石器組成の確立、土器型式との関係、さらには周辺地域との比較等を行うことが必要であろう。

註（引用文献）

① 河口貞徳　1955　「南九州の条痕文土器」『石器時代』1号

② 松本雅明・富樫卯三郎　1961　「轟式土器の編年」『考古学雑誌』　47－3

宮本一夫　1989　「轟式土器」『縄文土器大観』1

③ 寺師見國　1943　『鹿児島県下の縄文式土器分類及び出土遺跡表』

④ 大口市教育委員会　1986　「瀬の上・平田遺跡」『大口市埋蔵文化財発掘調査報告書』　(5)

⑤ 志布志町教育委員会　1985　「中原遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』　(9)

⑥ 京都帝国大学考古学研究室　1921　「薩摩國揖宿郡指宿村土器包含層調査報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』　第六冊

⑦ 本田道輝　1981　「市来式土器　縄文土器Ⅱ」『縄文文化の研究』4

⑧ 笠沙町教育委員会　1978　「西之薗遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』　(8)

⑨ 鹿児島県教育委員会　1984　「丸尾遺跡－大隅地区埋蔵文化蔵分布調査概報」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』　(29)

⑩ 河口貞徳　1976　「器台付皿形土器」『鹿児島考古』11号　鹿児島県考古学会

⑪ 寺師見國　1940　「肥後水俣南福寺貝塚」『考古学』第十巻第七号　東京考古学会刊

⑫ 末吉町教育委員会　1981　「宮之迫遺跡」『末吉町文化財調査報告書』2

⑬ 河口貞徳　1972　「上加世田遺跡発掘調査概要』第5次　加世田市教育委員会

⑭ 山崎純男・島津義昭　1981　「九州の土器」『縄文文化の研究』4　縄文土器Ⅱ

⑮ 鞍手町埋蔵文化財調査会　1980　『新延貝塚』

⑯ 鹿児島県教育委員会　1978　「西之薗遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』　(8)

⑰ 鹿児島県教育委員会　1989　「榎田下遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』　(48)

⑱ 鹿屋市教育委員会　1986　「水の谷遺跡」『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書』　(5)

⑲ 鹿児島県教育委員会　1987　「榎木原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』　(44)

⑳ 加世田市教育委員会　1985　「上加世田遺跡－1」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』　(3)

㉑ 喜入町教育委員会　1988　「梅木渡瀬調査地区」『喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書』　(3)

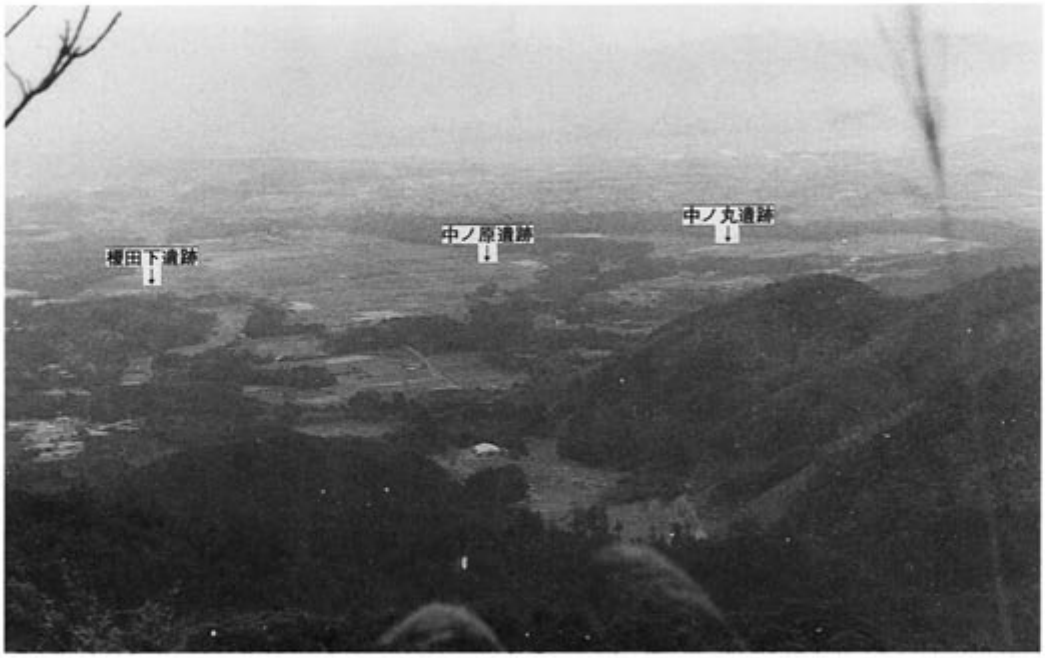
㉒ 高橋信武　1983　「縄文人の生活　住居」『大分県史』先史編Ⅰ

㉓ 北郷泰道　1987　「集落論ノート－南九州の晩期集落から－」『考古学研究』第34巻　第1号

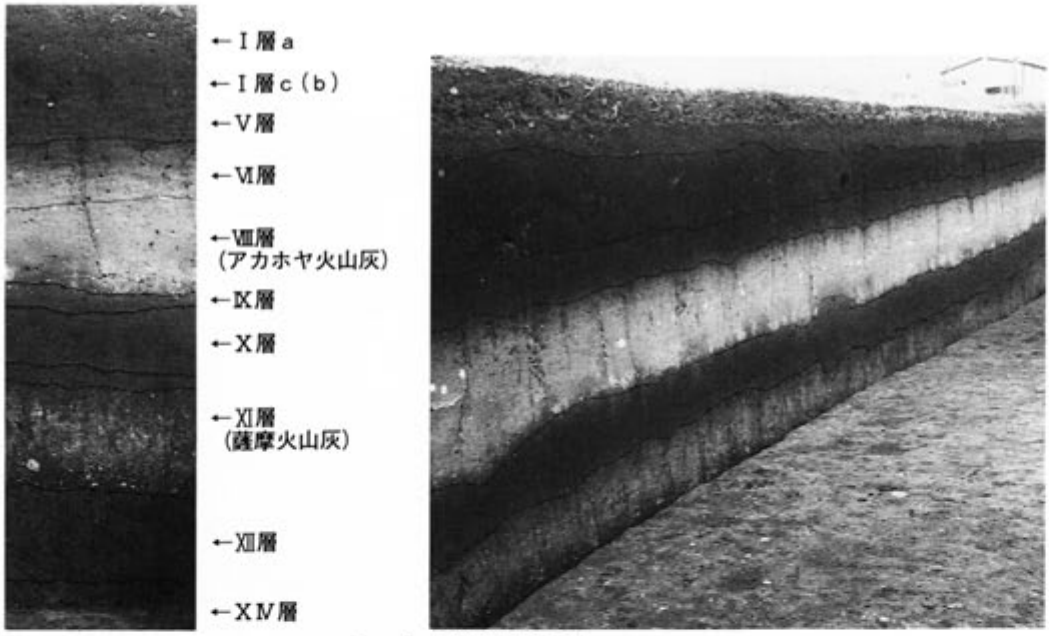
㉔ 末吉町教育委員会　1980　『中岳洞穴　遺跡調査報告書』

㉕ 下山　覚　1988　「南部九州縄文晩期深鉢形土器の型式変化について」『第2回合同研究会資料　テーマ縄文時代晩期の土器について』沖縄考古学会・鹿児島県考古学会　下山氏が提示した“深鉢形土器型式変化の概念図”によると、本遺跡の晩期土器は、Ⅳ期に該当するものと考えられる。

図版1



1．遺跡遠景



2．中ノ原遺跡の層位

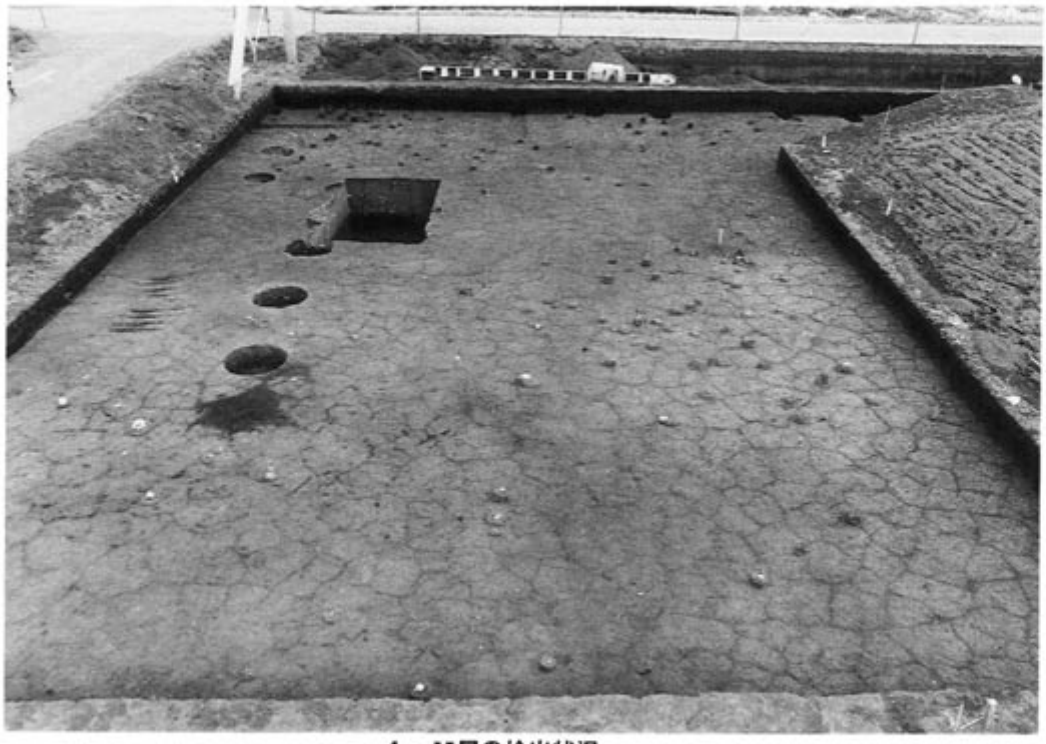
図版 2

1．ＤＥ18区・19区のＸ層遺物出土状況（西から）

2．Ⅰ類土器出土状況

3．Ⅰ類土器（10・11）

4．Ⅰ類土器（1・2）



1．Ⅵ層の検出状況

2．集石1号検出状況

図版 4

1．集石 2 号検出状況

2．石斧（356）出土状況

3．土器（273）出土状況

2．底部（316）出土状況

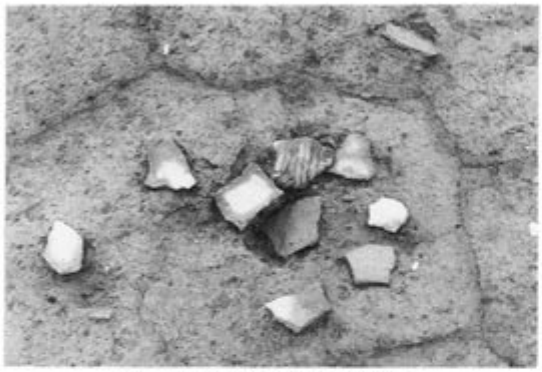
1．石皿（429）出土状況

2．土器（173等）出土状況

3．土器（222）出土状況

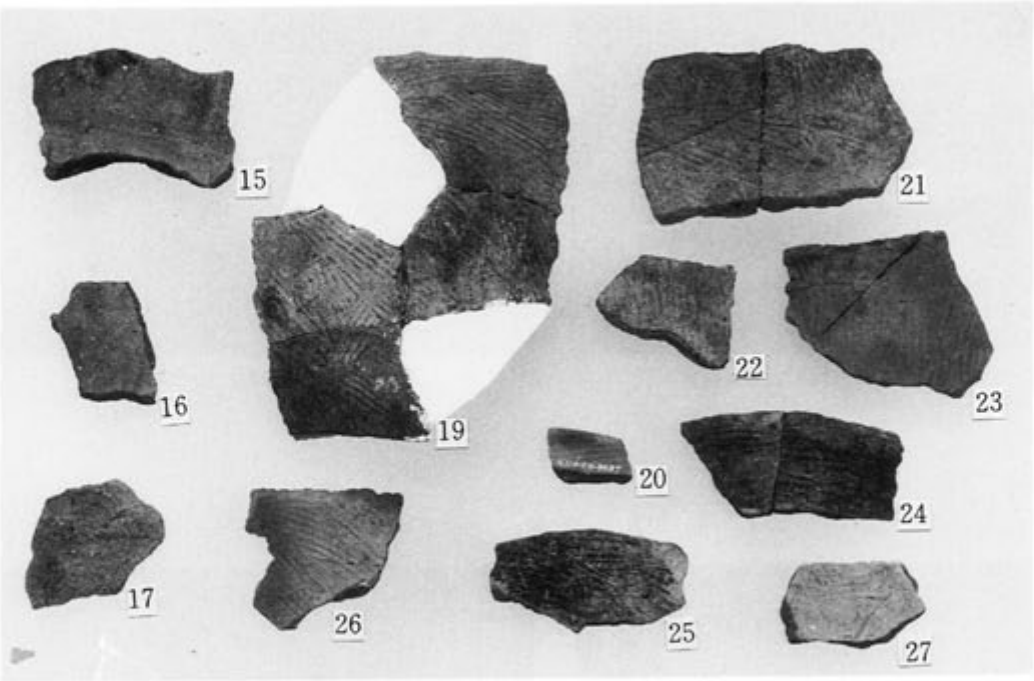
4．土器（192）出土状況

5．石斧（538）出土状況

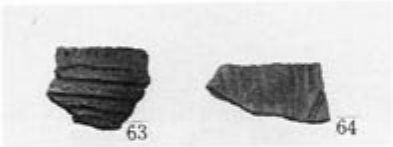


6．土器（76等）出土状況

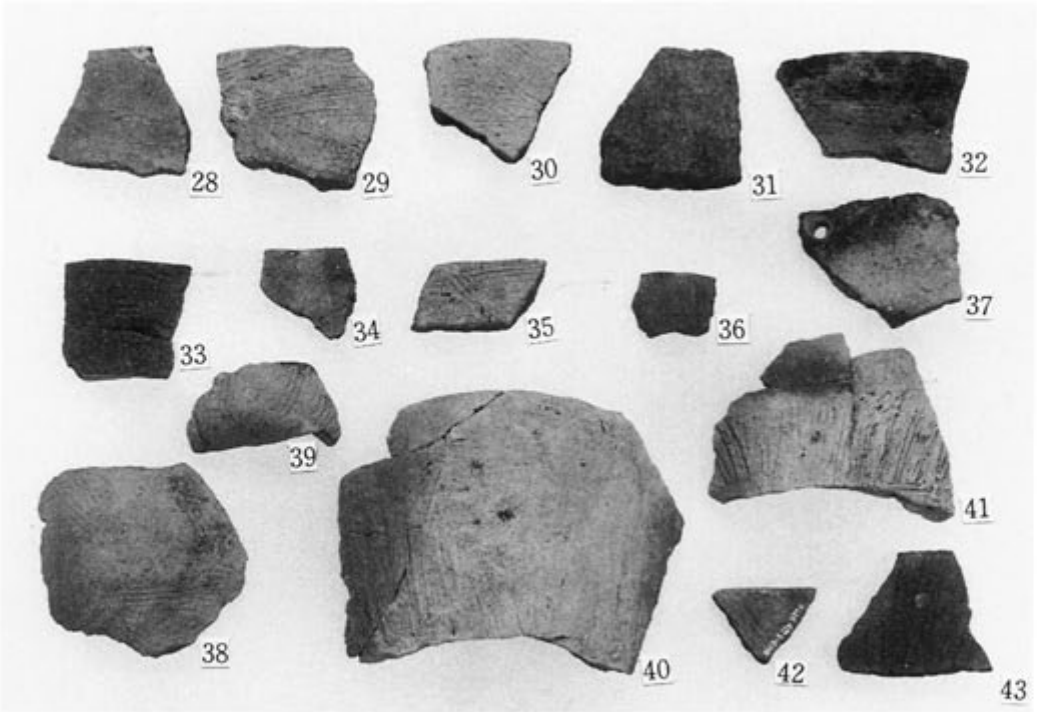
図版 6



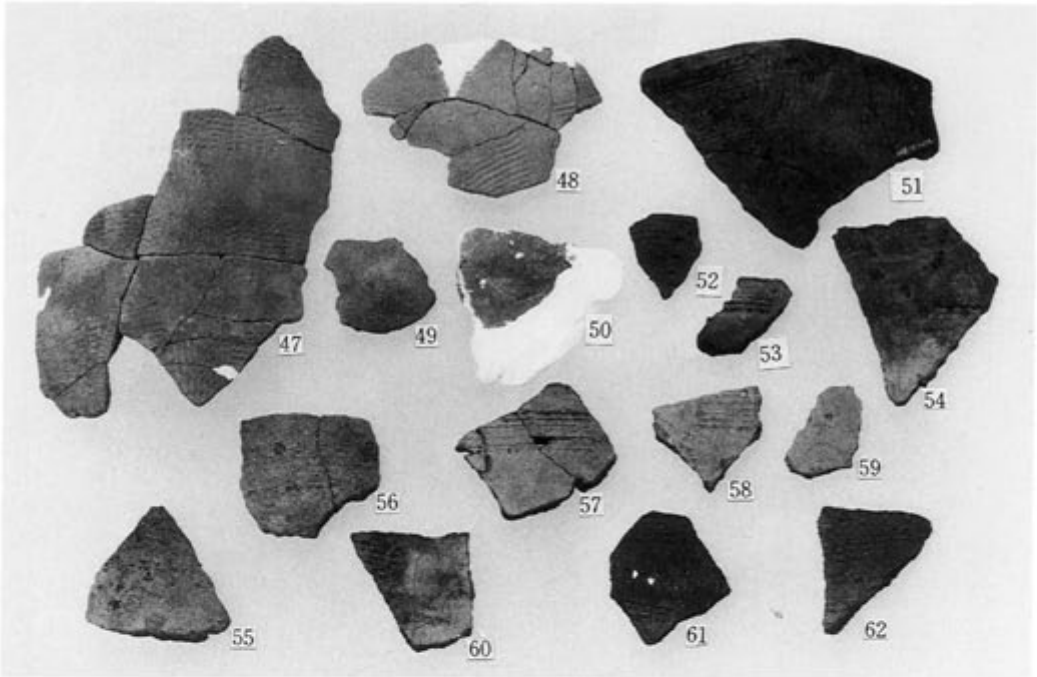
1．Ⅱ類（15～17）・Ⅲ類（19～27）土器



2．Ⅲ～Ⅴ類土器（18・44～46・63・64）

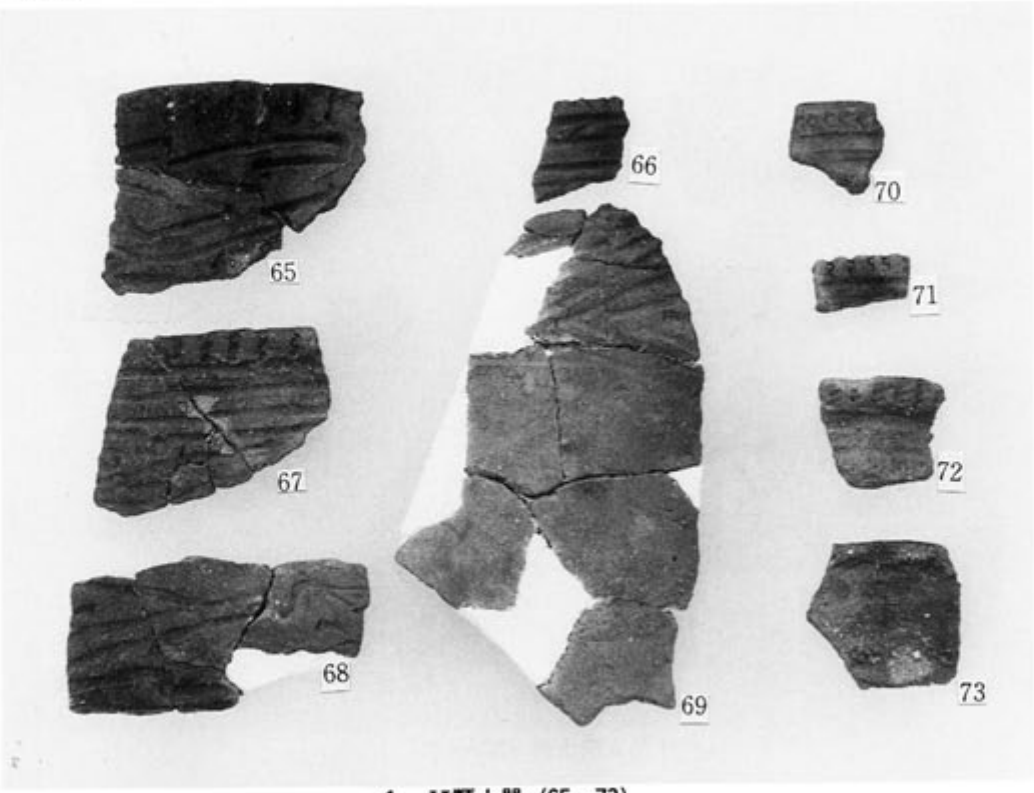


1．Ⅲ類土器（28～43）

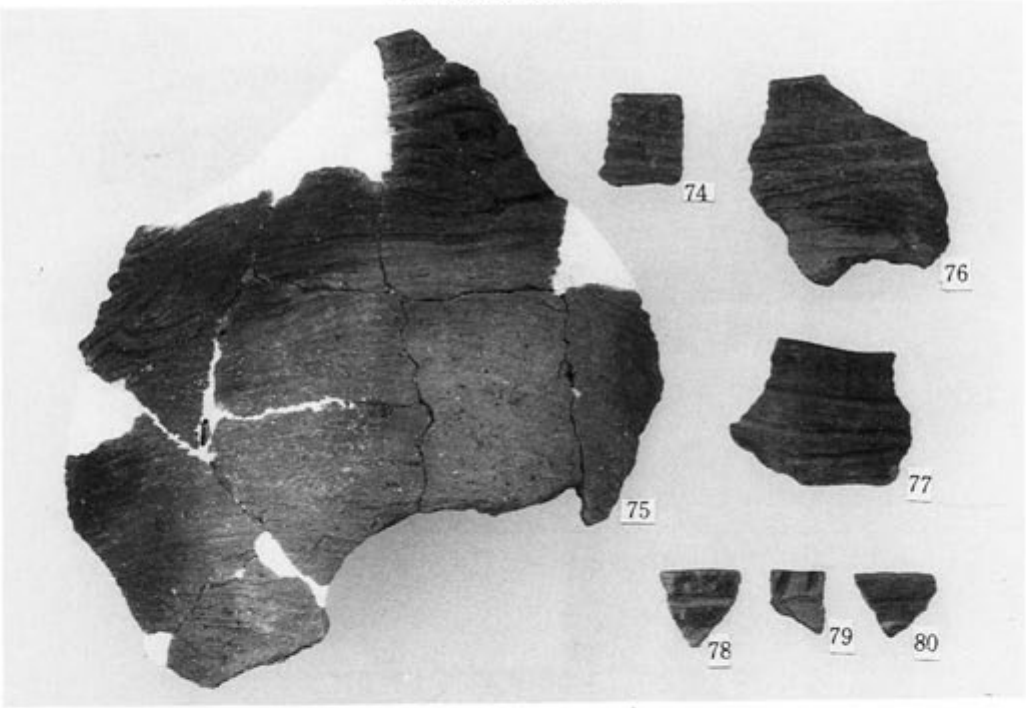


2．Ⅳ類土器（47～62）

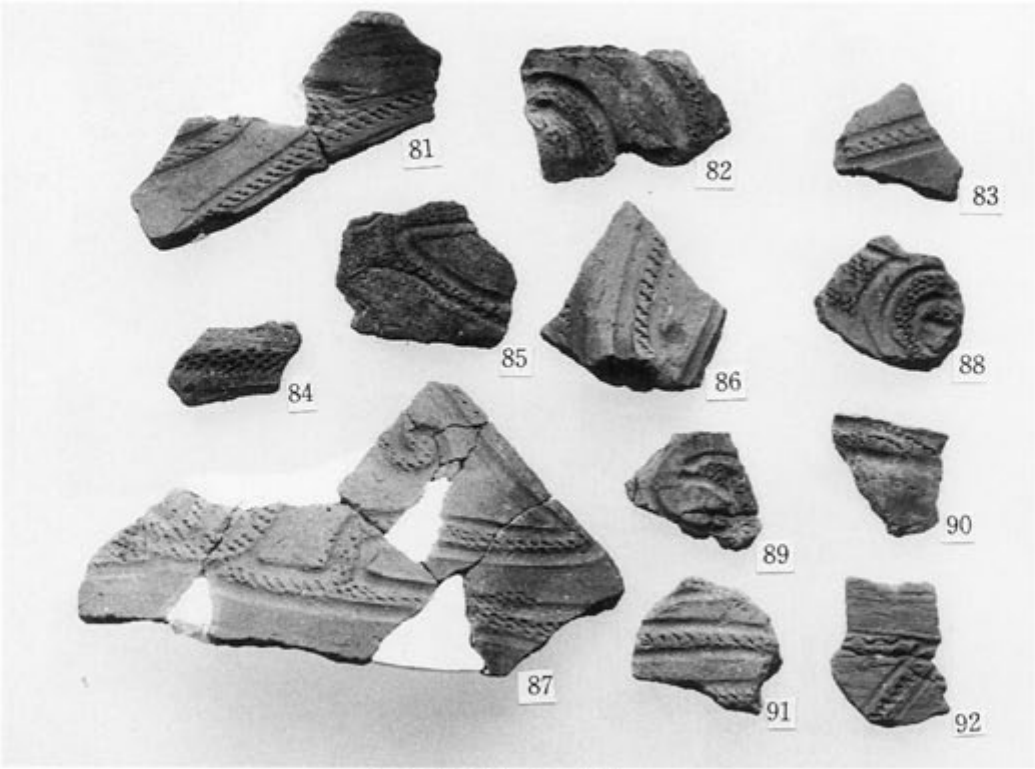
図版 8



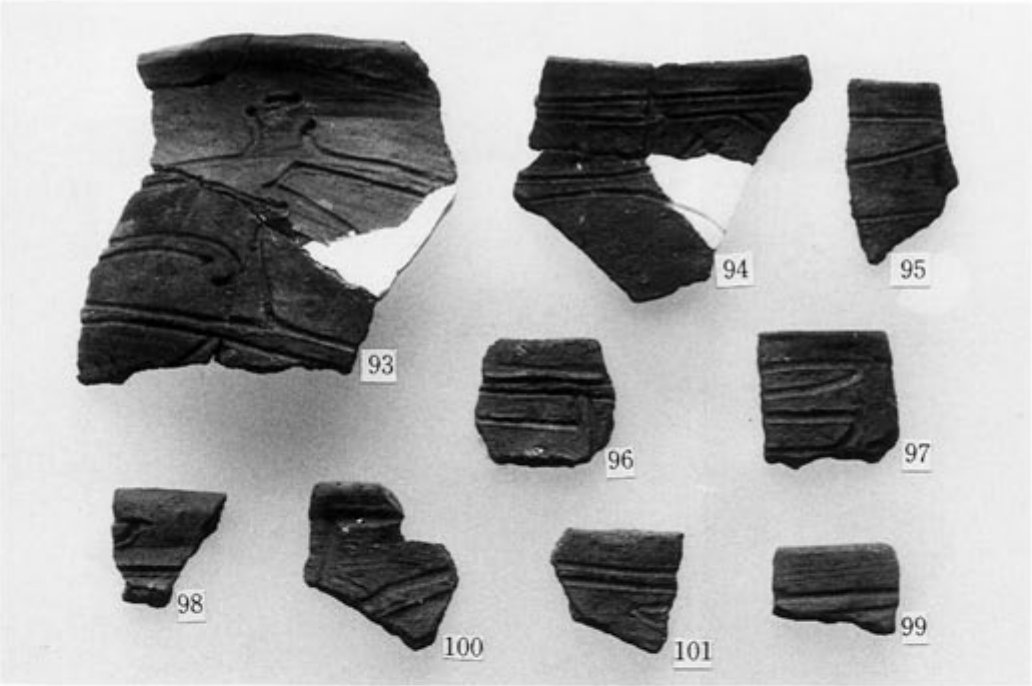
1．Ⅵ類土器（65～73）



2．Ⅵ類土器（74～80）

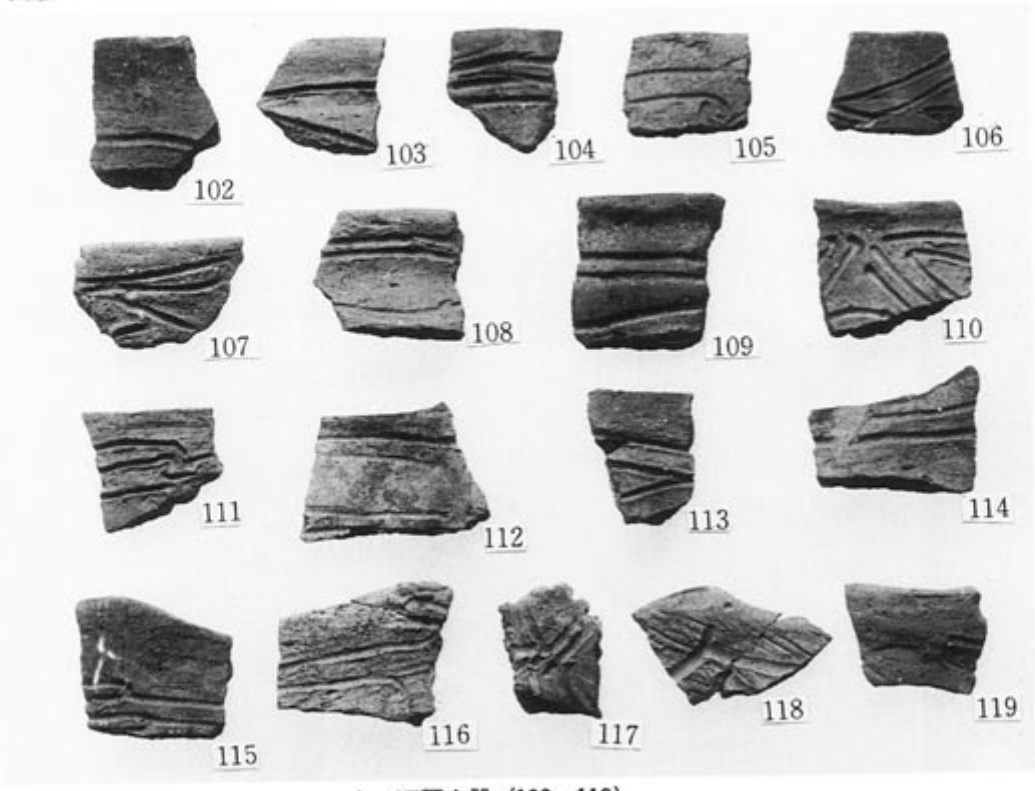


1．Ⅶ類土器（81～92）

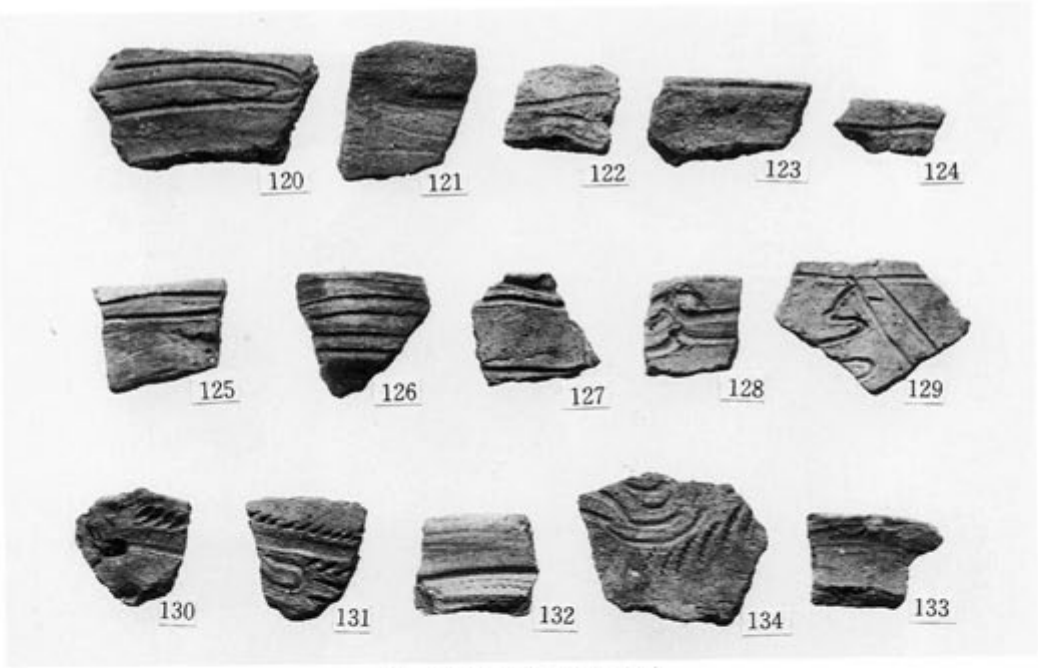


2．Ⅷ類土器（93～101）

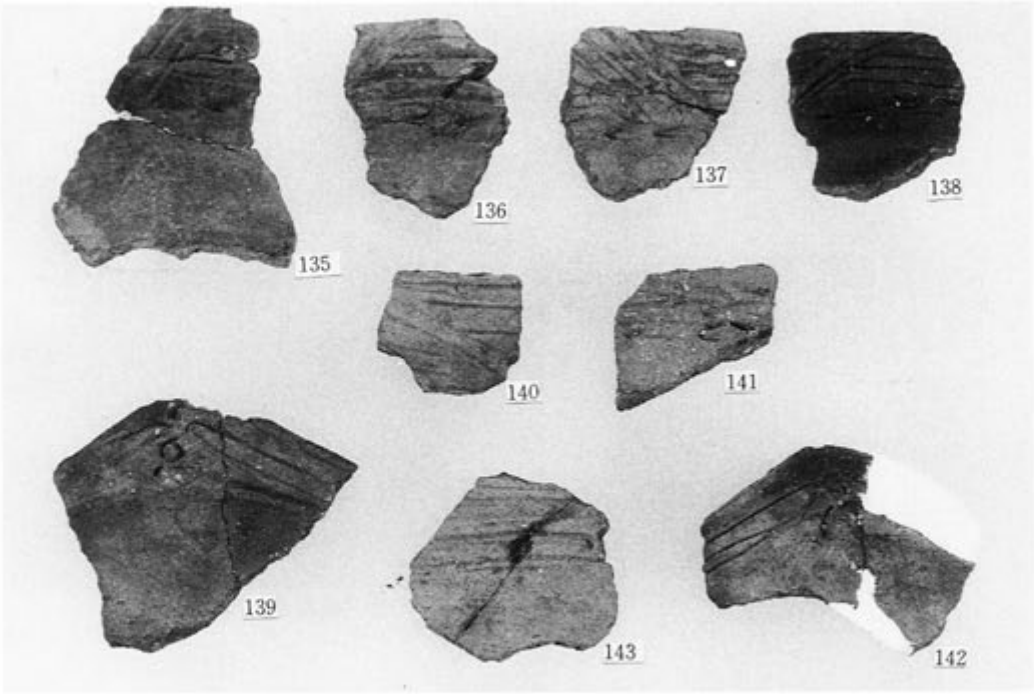
図版10



1．Ⅷ類土器（102～119）



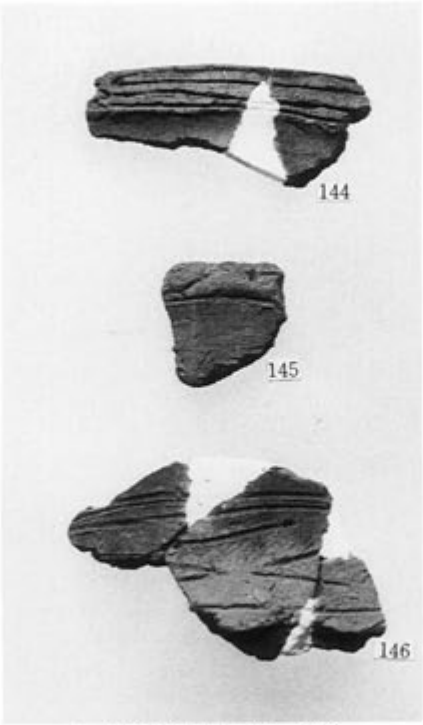
2．Ⅷ類土器（120～134）



1．Ⅸ類土器（135～143）

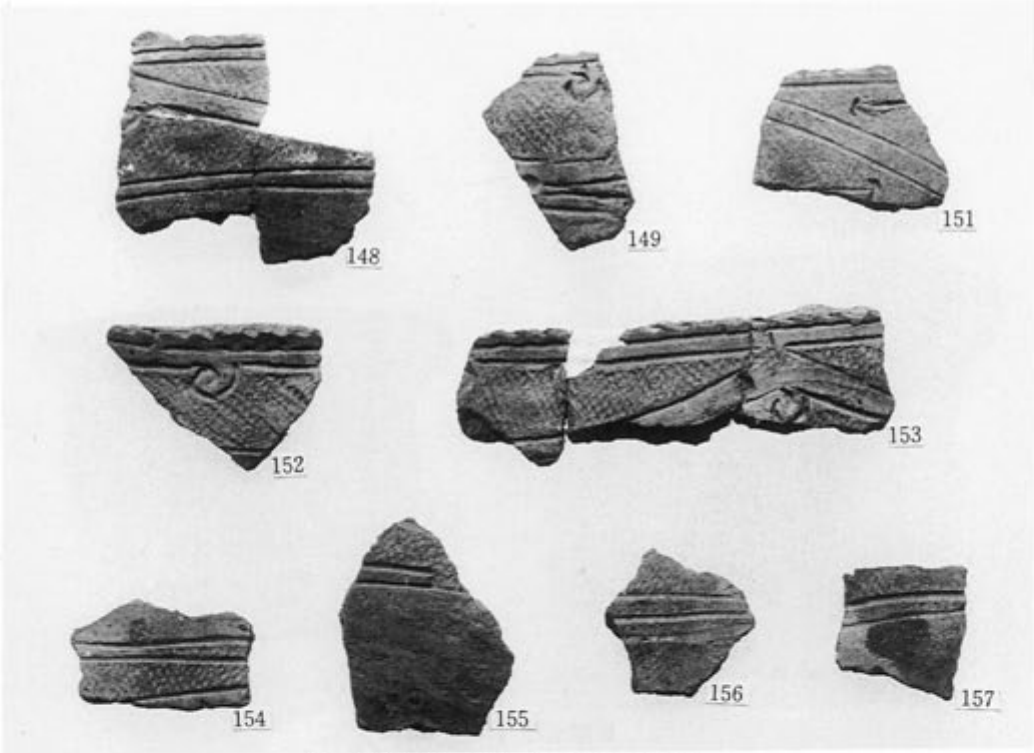
2．Ⅸ類土器（147・150）

図版12

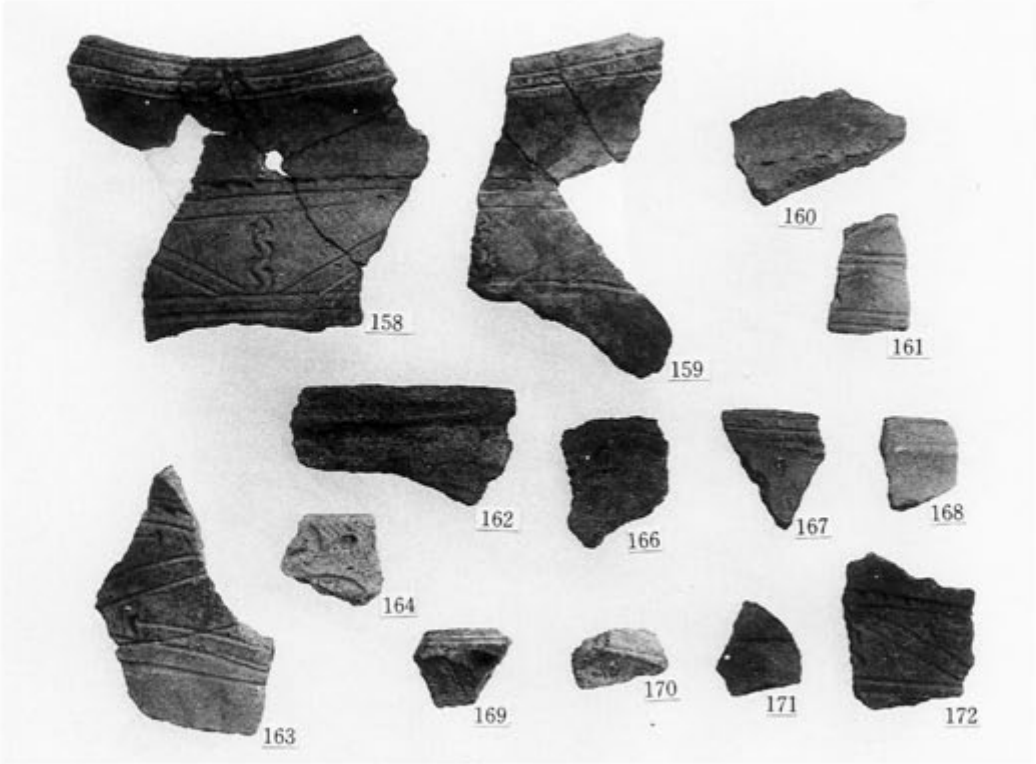


1．Ⅸ類土器（144～146）

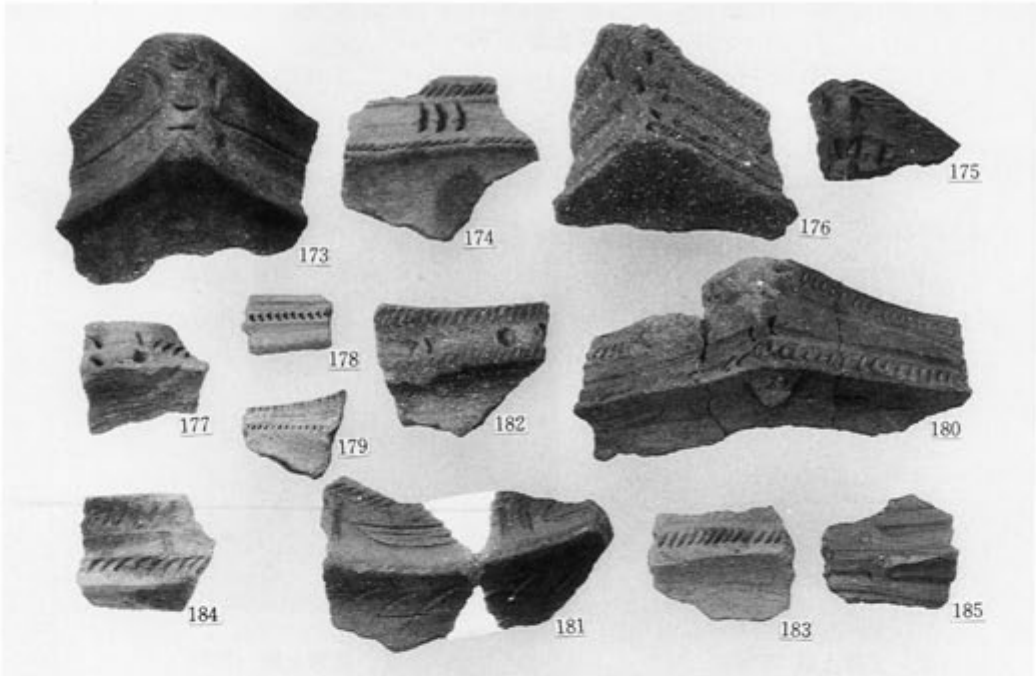
2．Ⅸ類土器（165）



3．Ⅸ類土器（148・149・151～157）

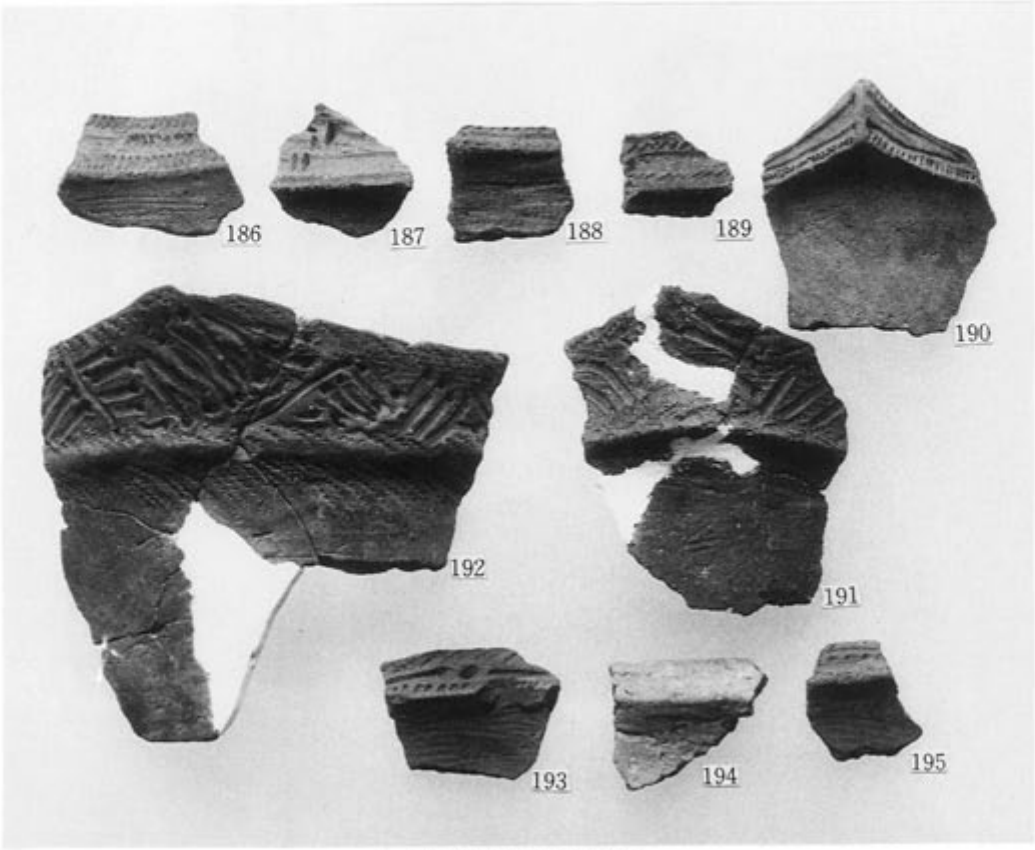


1．Ⅸ類土器（158～172）



2．Ⅹ類土器（173～185）

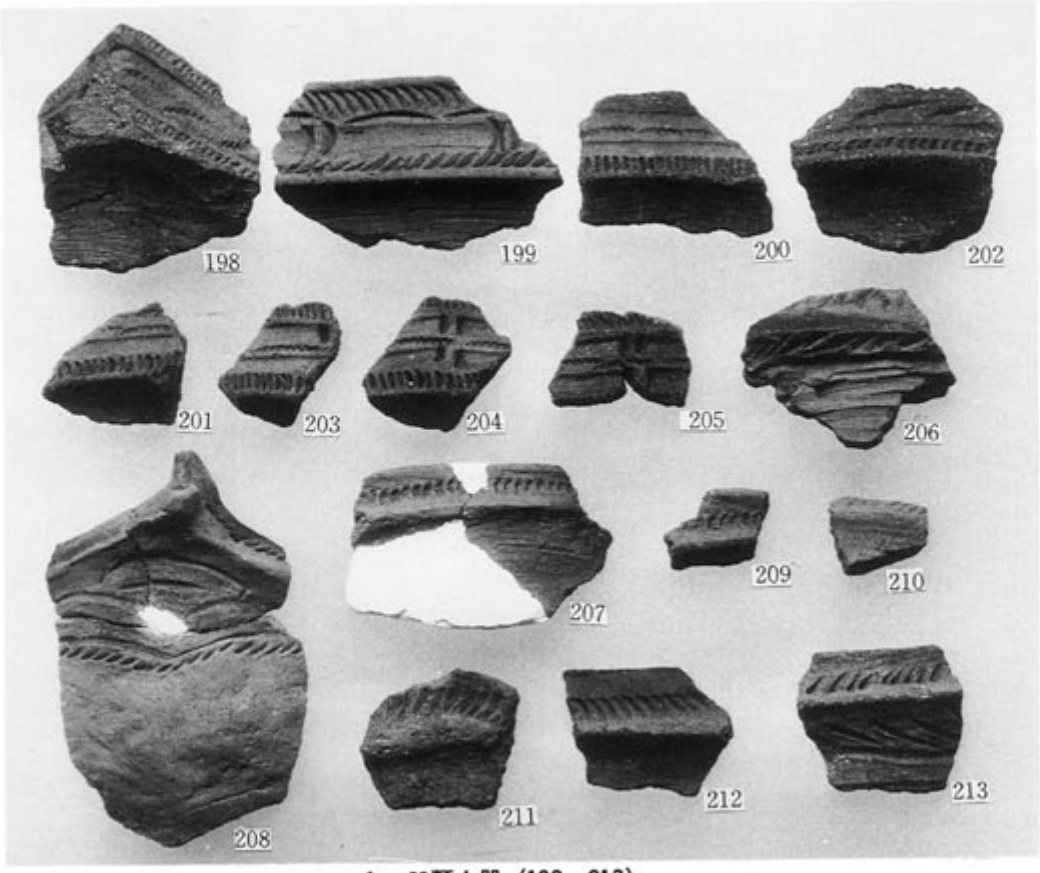
図版14



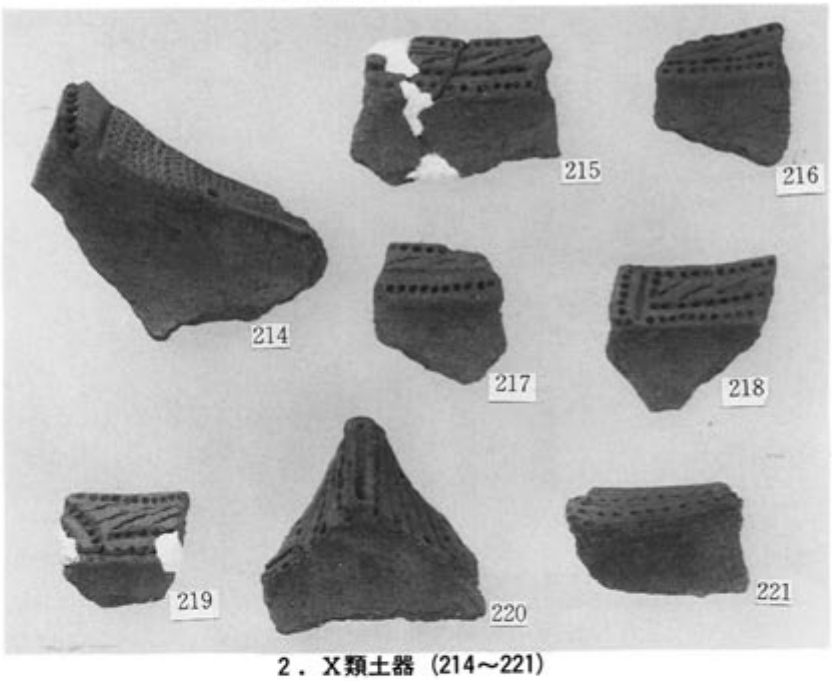
1．X類土器（186～195）

2．X類土器（196）

3．Ⅸ類土器（197）



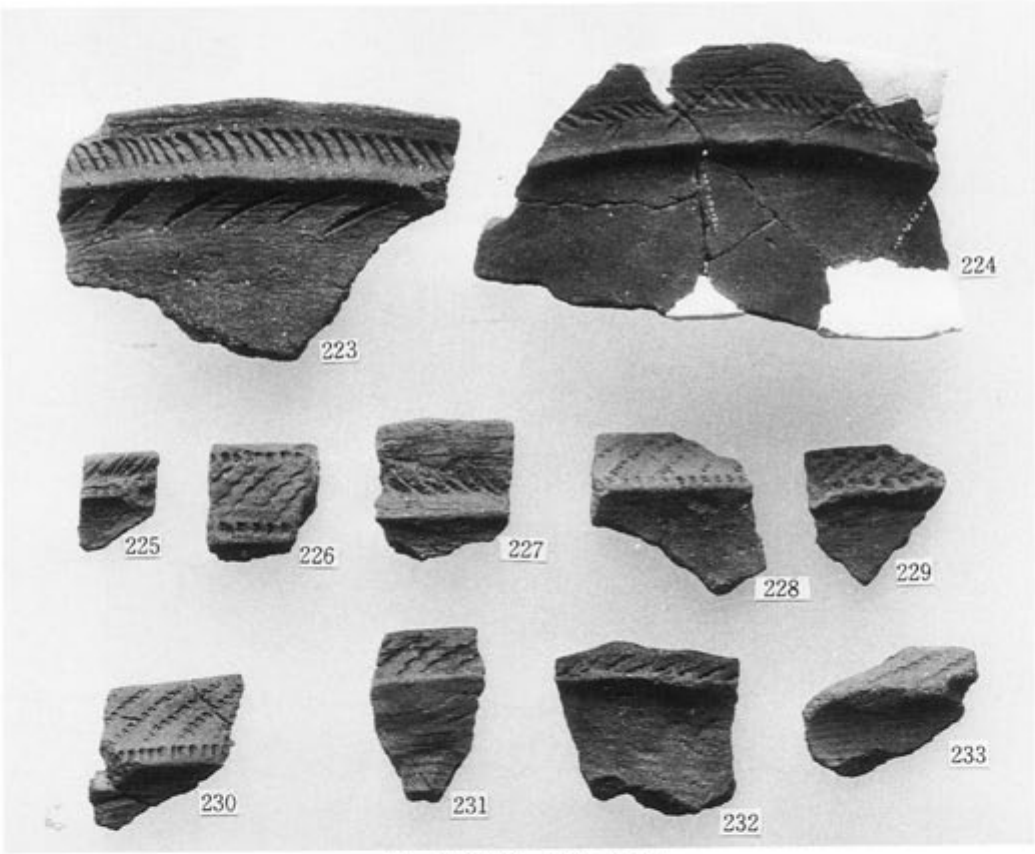
1．X類土器（198～213）



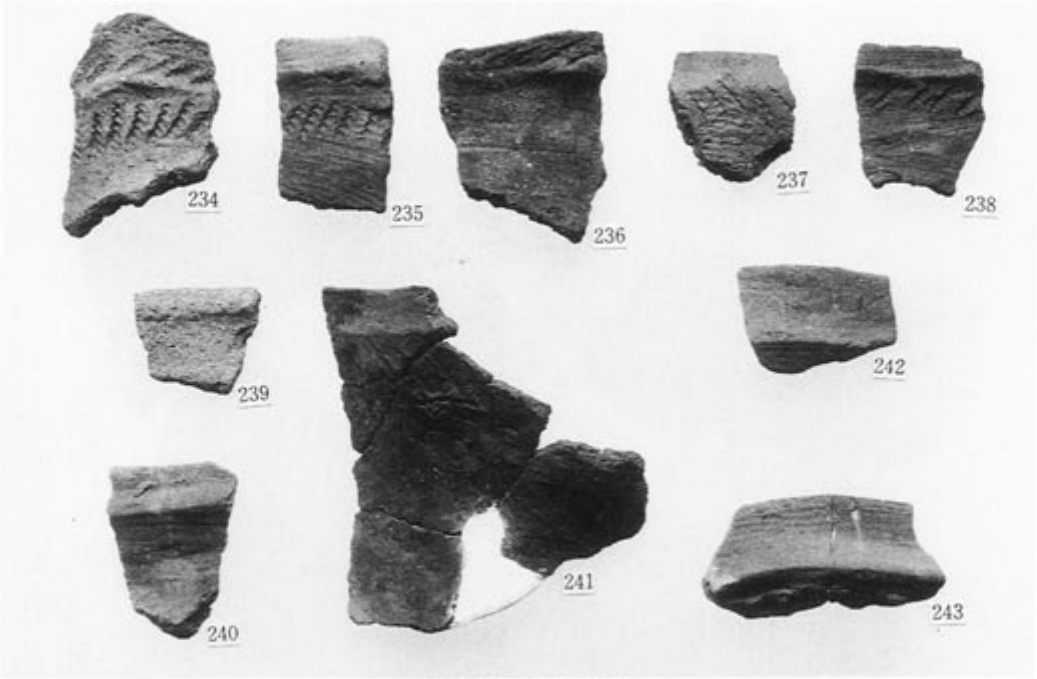
2．X類土器（214～221）

図版16

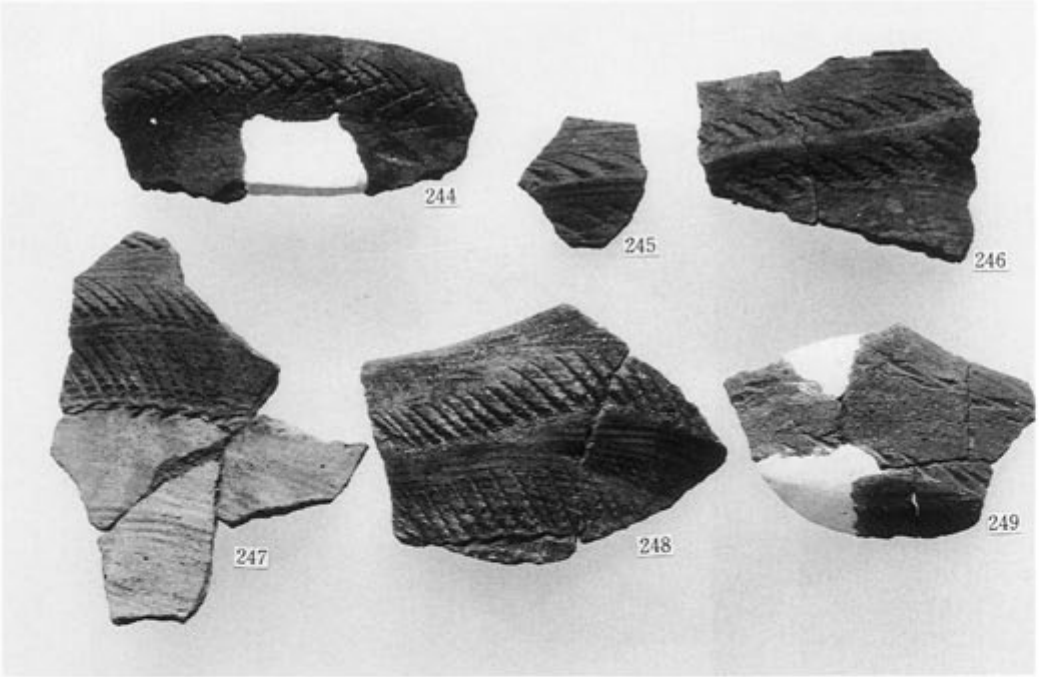
1．X類土器（222－A）



2．X類土器（223～233）

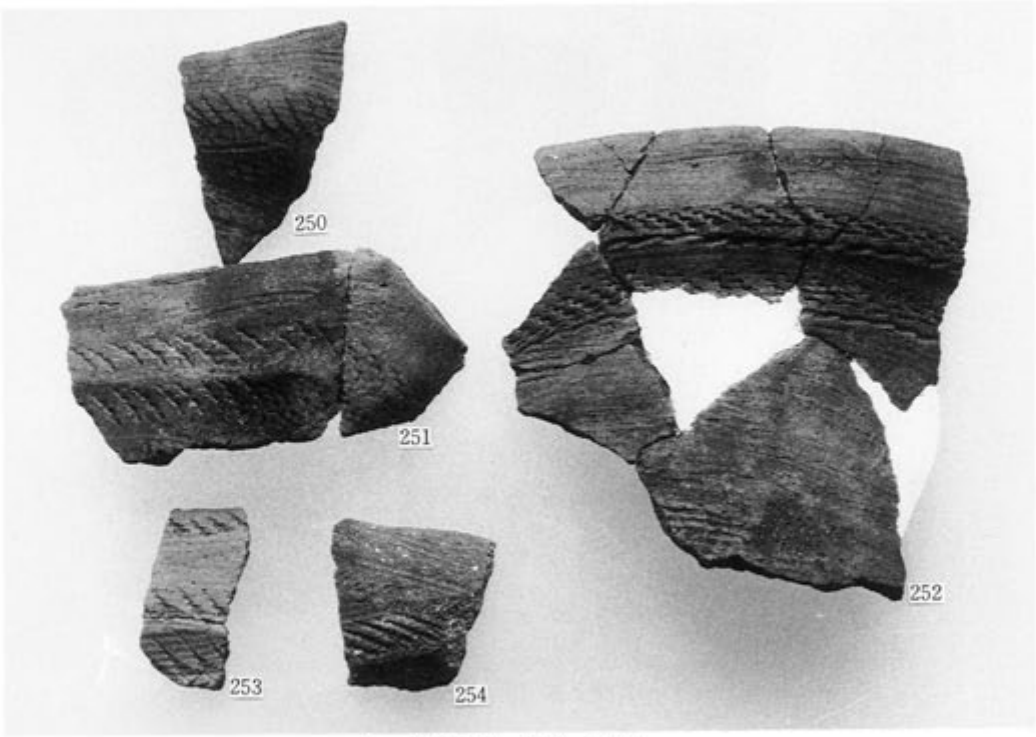


1．X類土器（234～243）



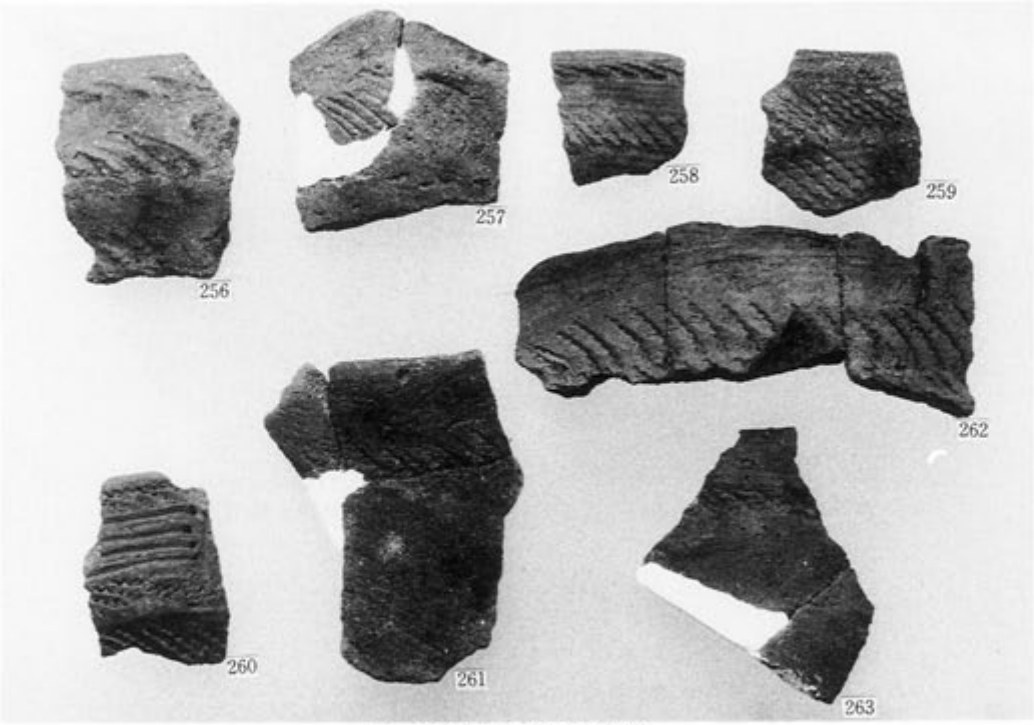
2．XI類土器（244～249）

図版18

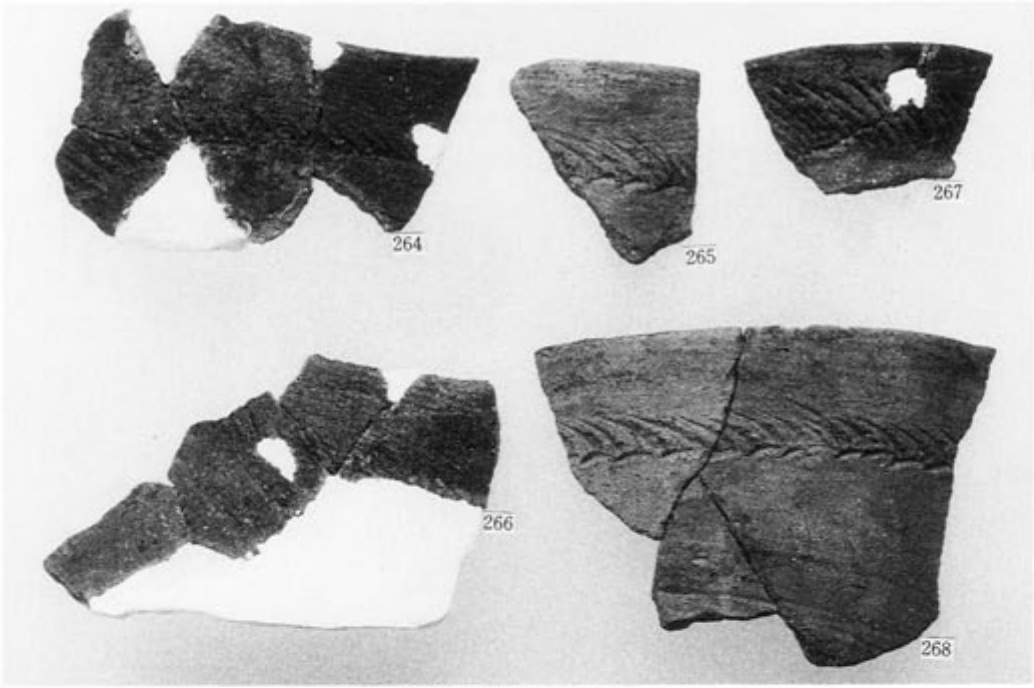


1．Ⅺ類土器（250～254）

2．Ⅺ類土器（255）



1．Ⅺ類土器（256～263）



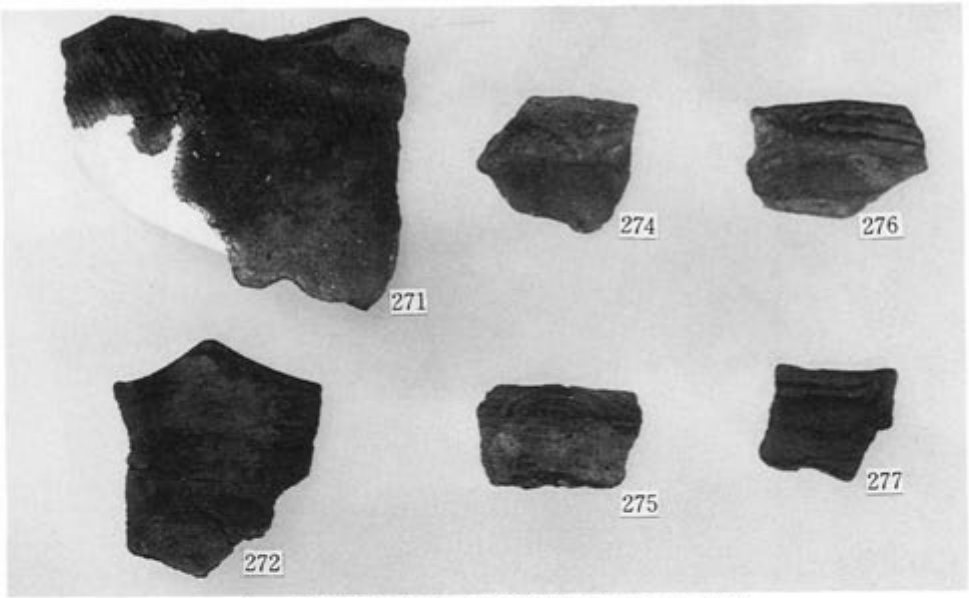
2．Ⅺ類土器（264～268）

図版20

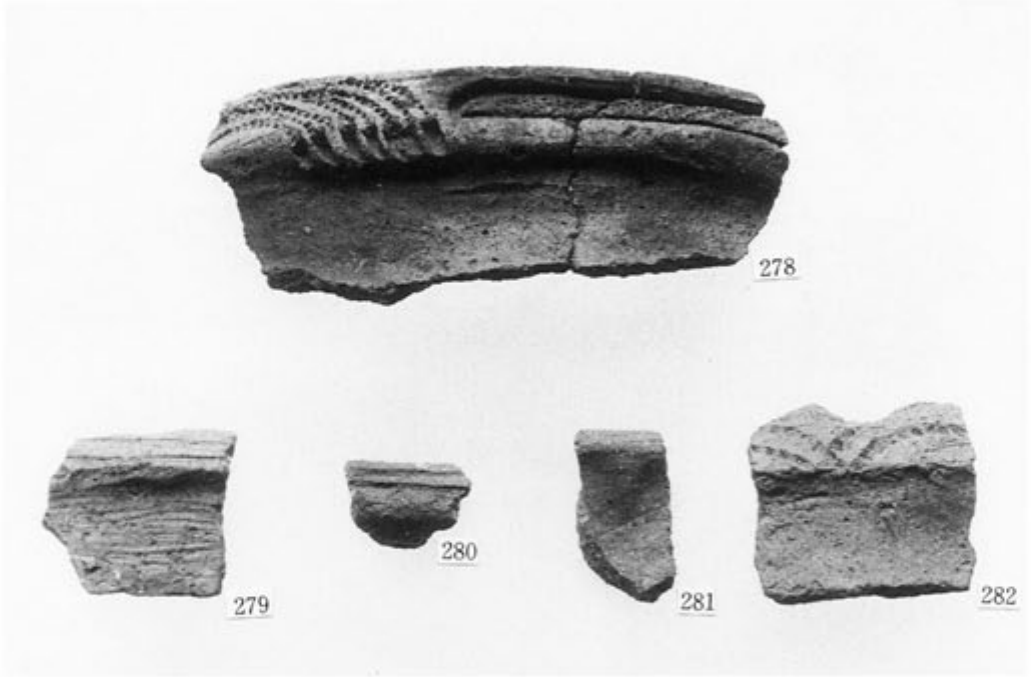
1．Ⅺ類土器（269）

2．Ⅺ類土器（270）

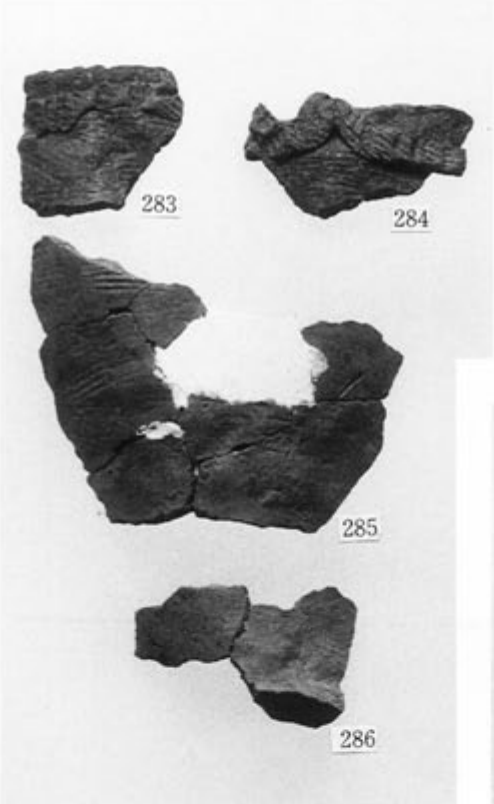
3．Ⅻ類土器（273）



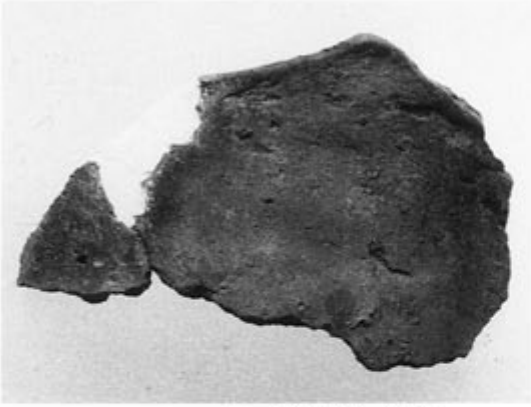
4．Ⅺ類土器（271・272）Ⅻ類土器（274～277）



1．Ⅻ類土器（278～282）

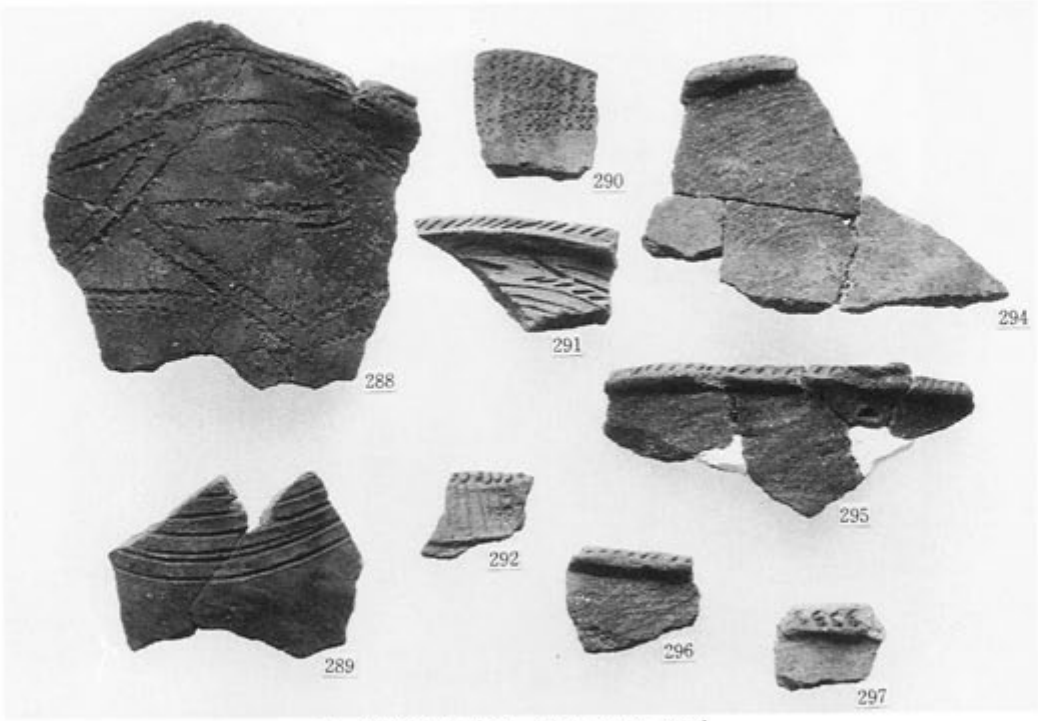


2．Ⅻ類土器（283～286）



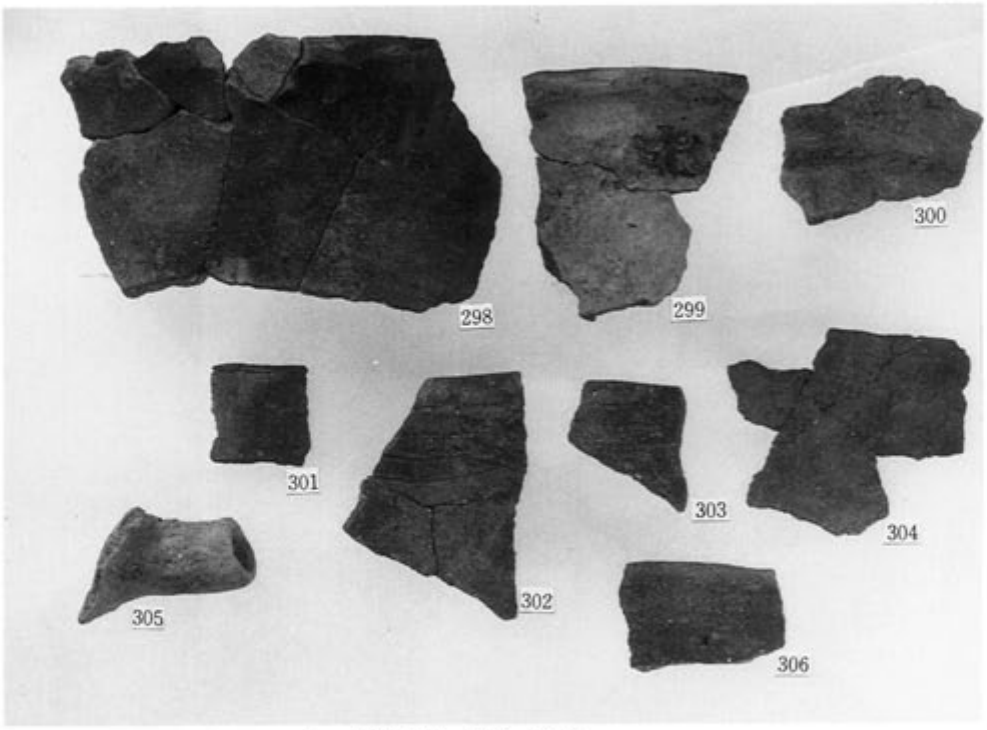
3．Ⅻ類土器（287）

図版22



1．Ⅻ類土器（288～292・294～297）

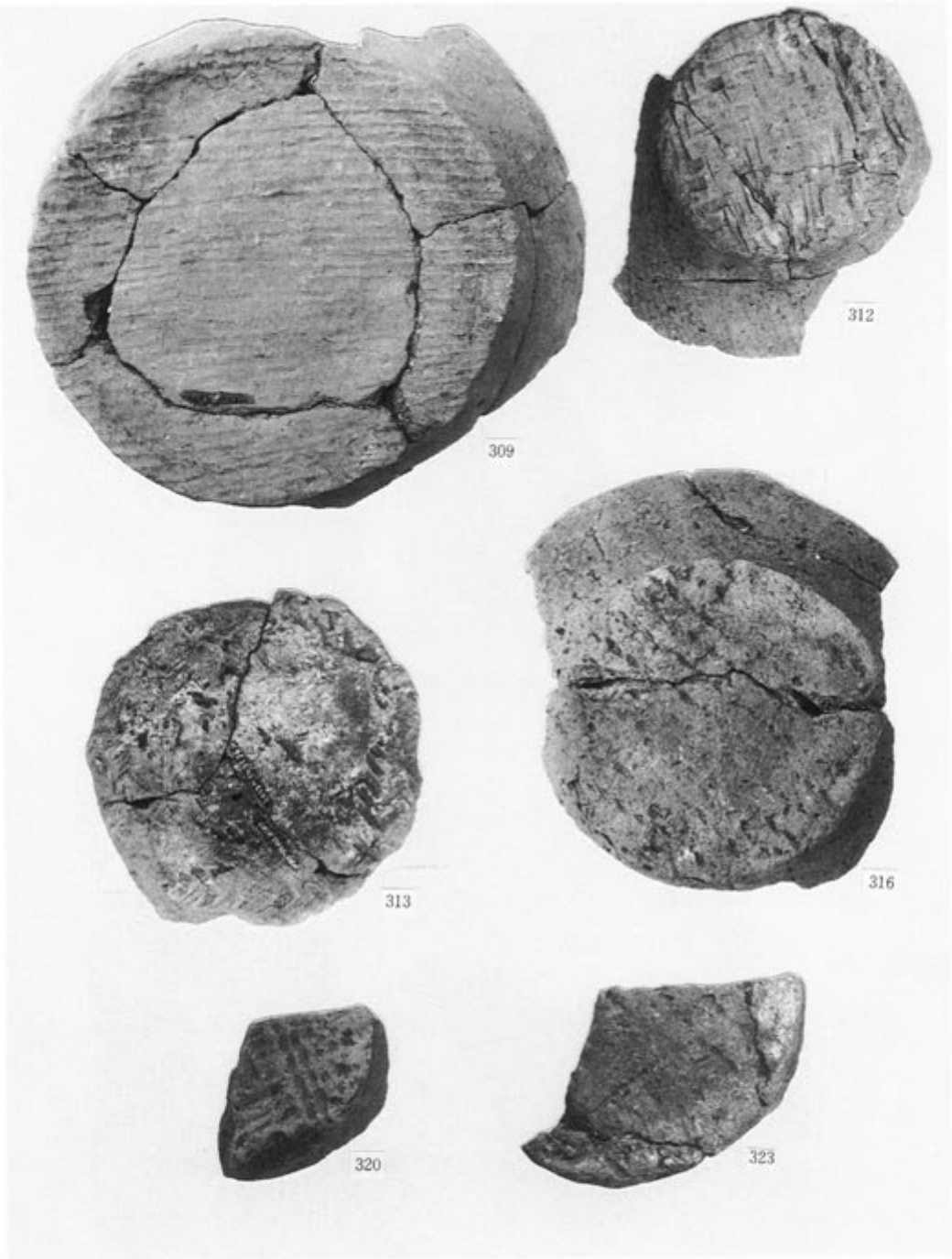
2．Ⅻ類土器（293）



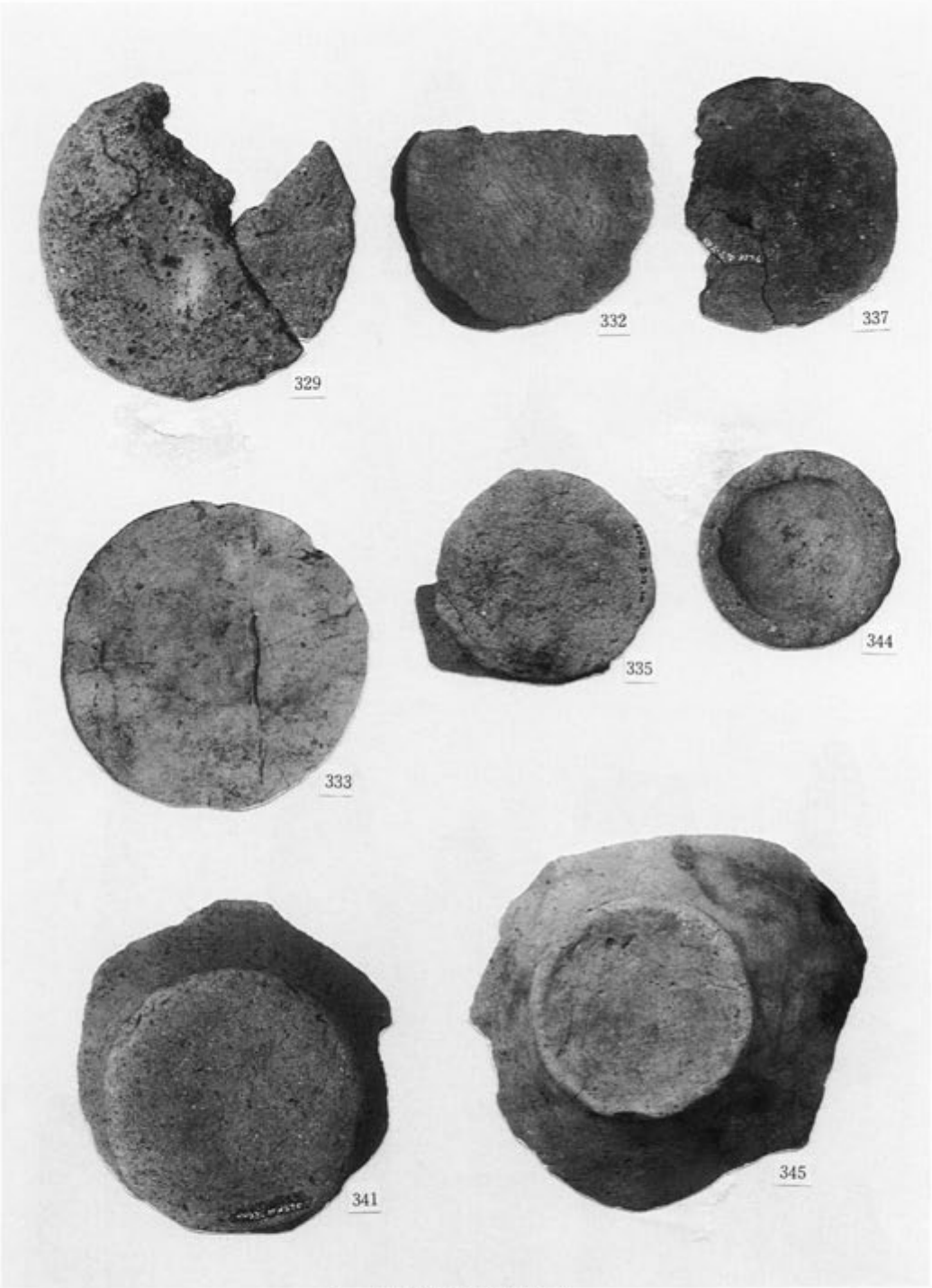
1．Ⅻ類土器（298～306）

2．Ⅻ類土器（308・307）

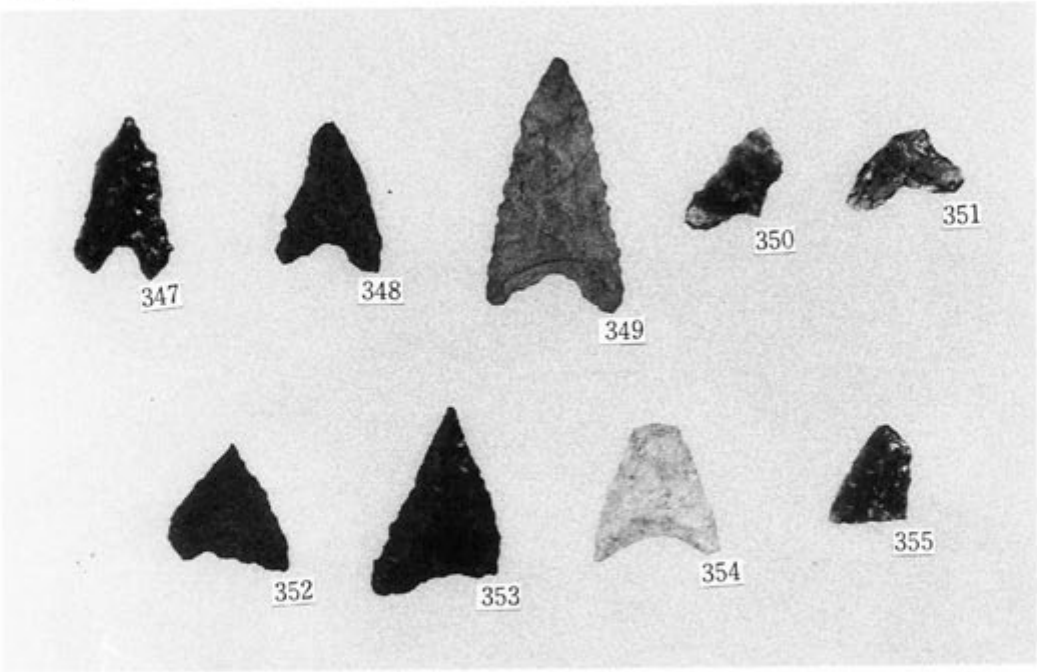
図版24



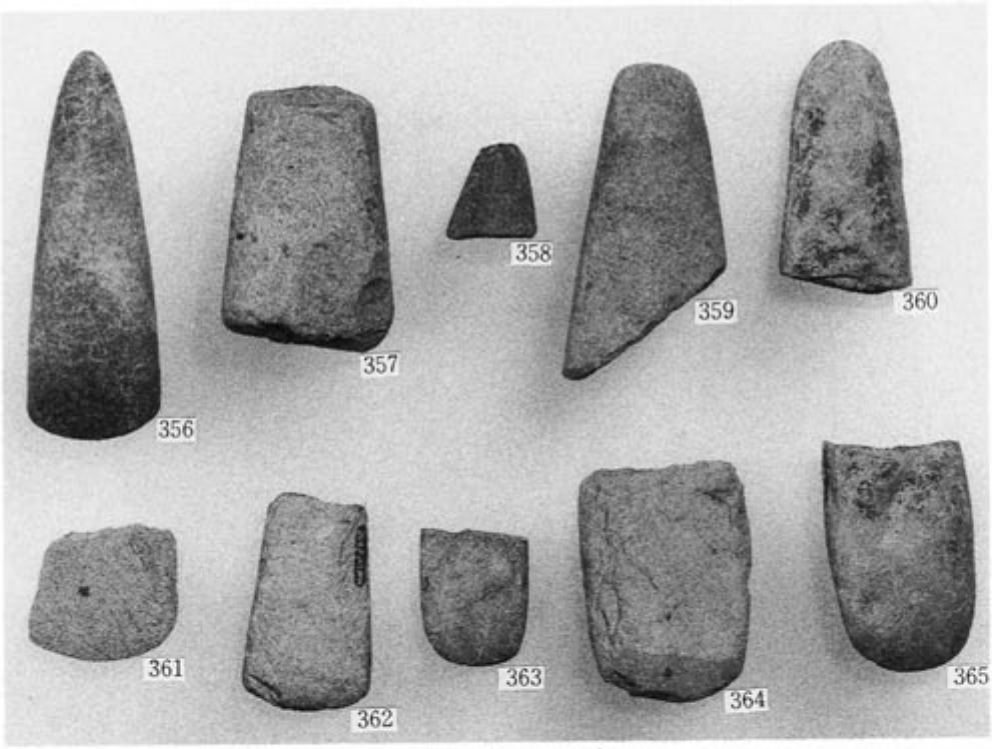
1．XⅢ類土器（底部1）



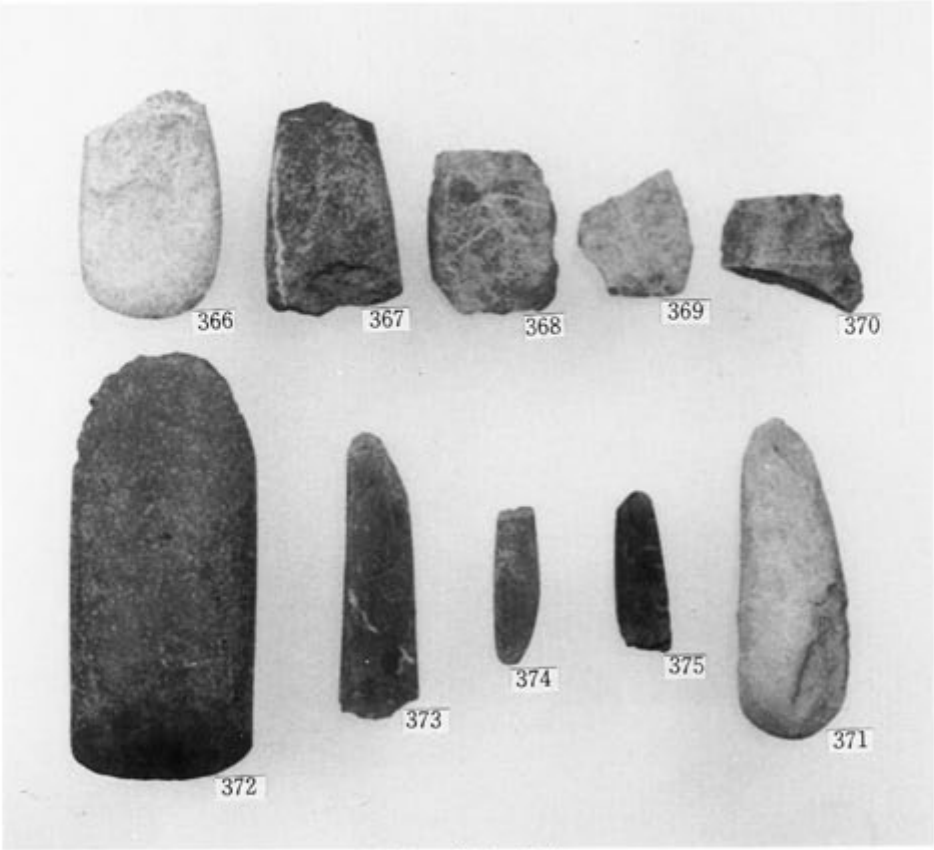
1．XⅢ類土器（底部2）



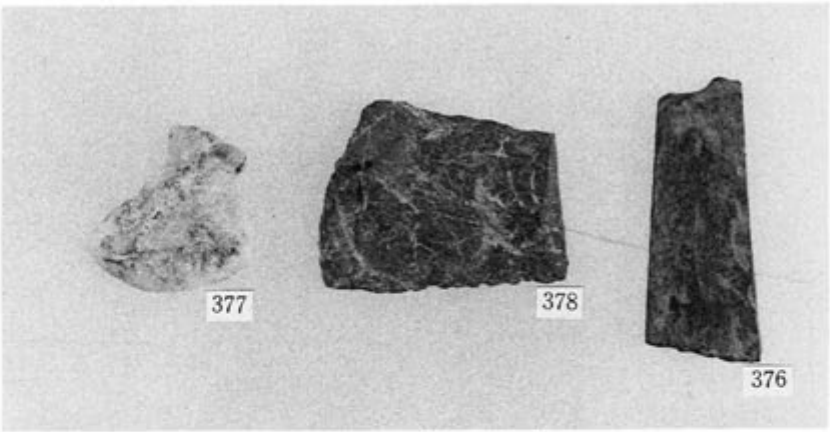
1．石器Ⅰ（347～355）



2．石器Ⅱ（356～365）

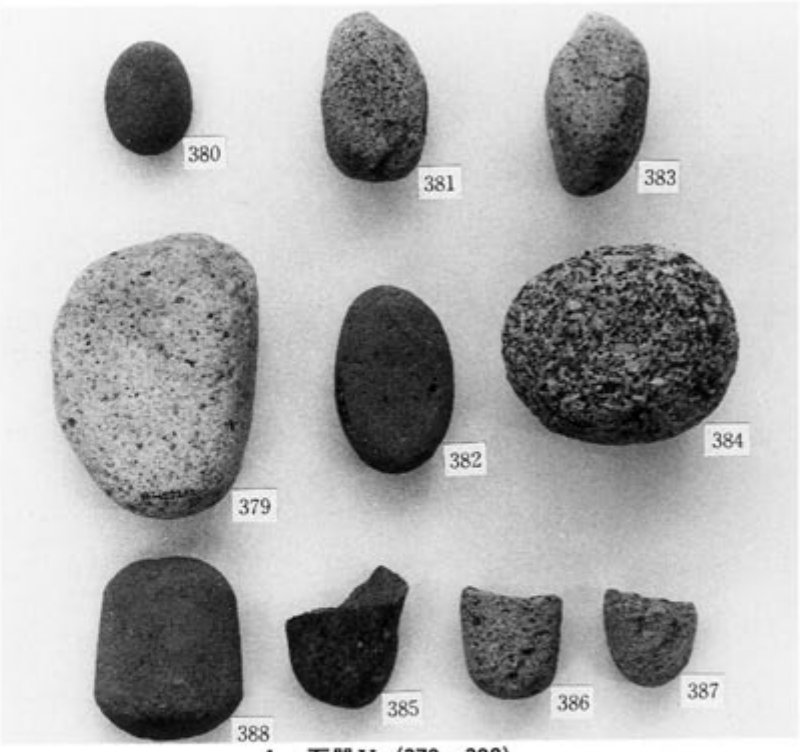


1．石器Ⅱ（366～375）

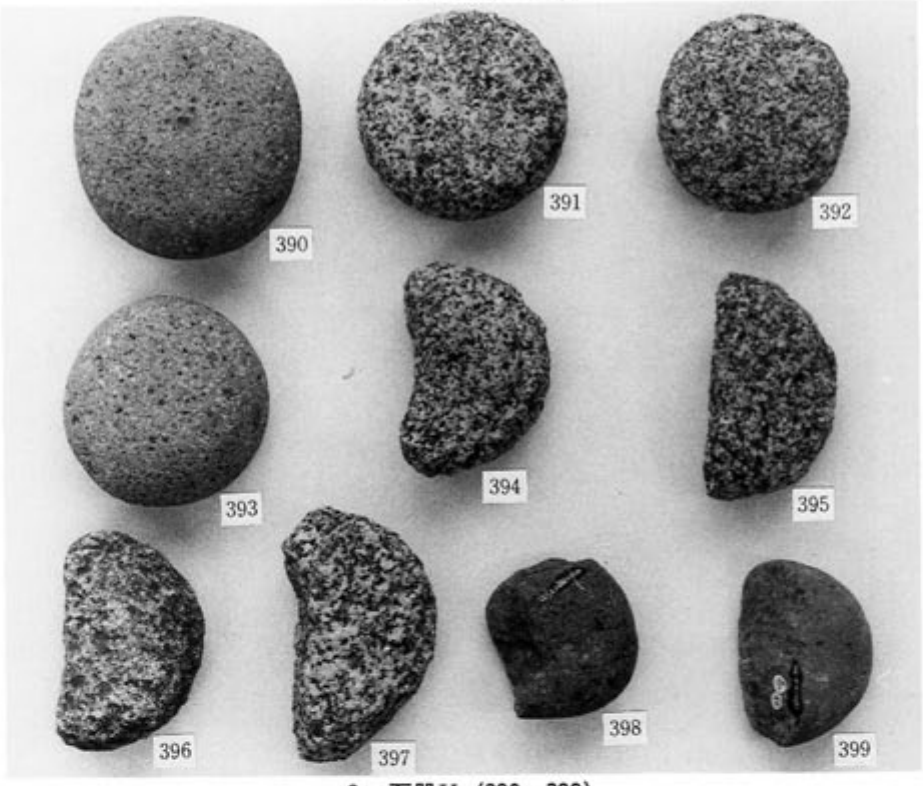


2．石器Ⅲ～Ⅳ（376～378）

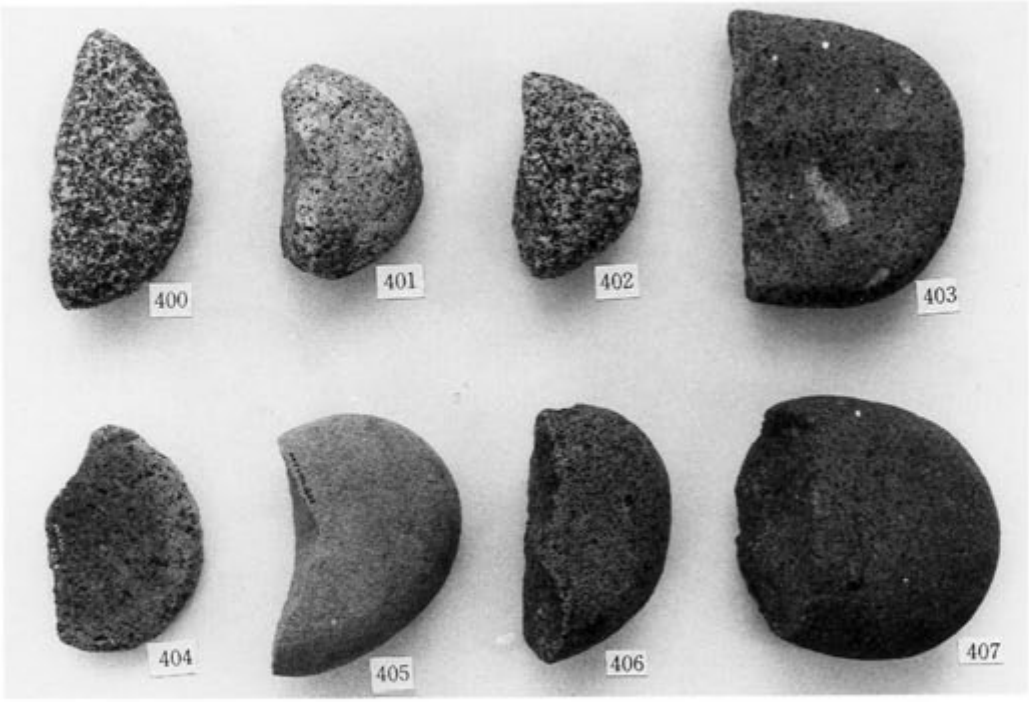
図版28

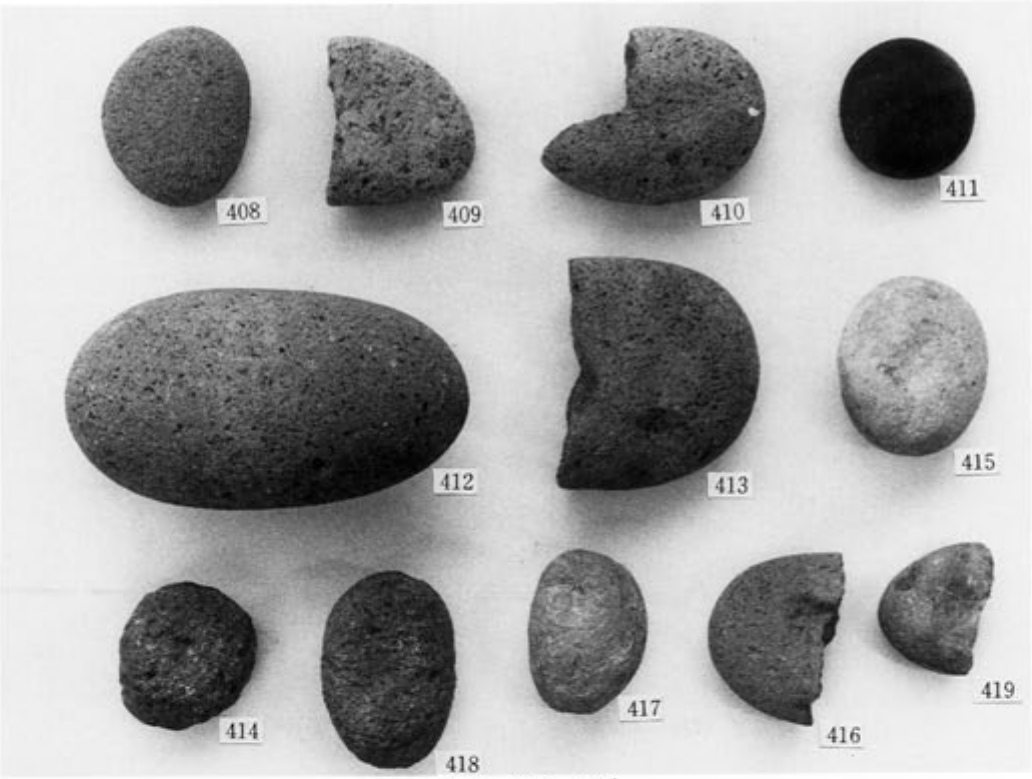


1．石器Ⅴ（379～388）



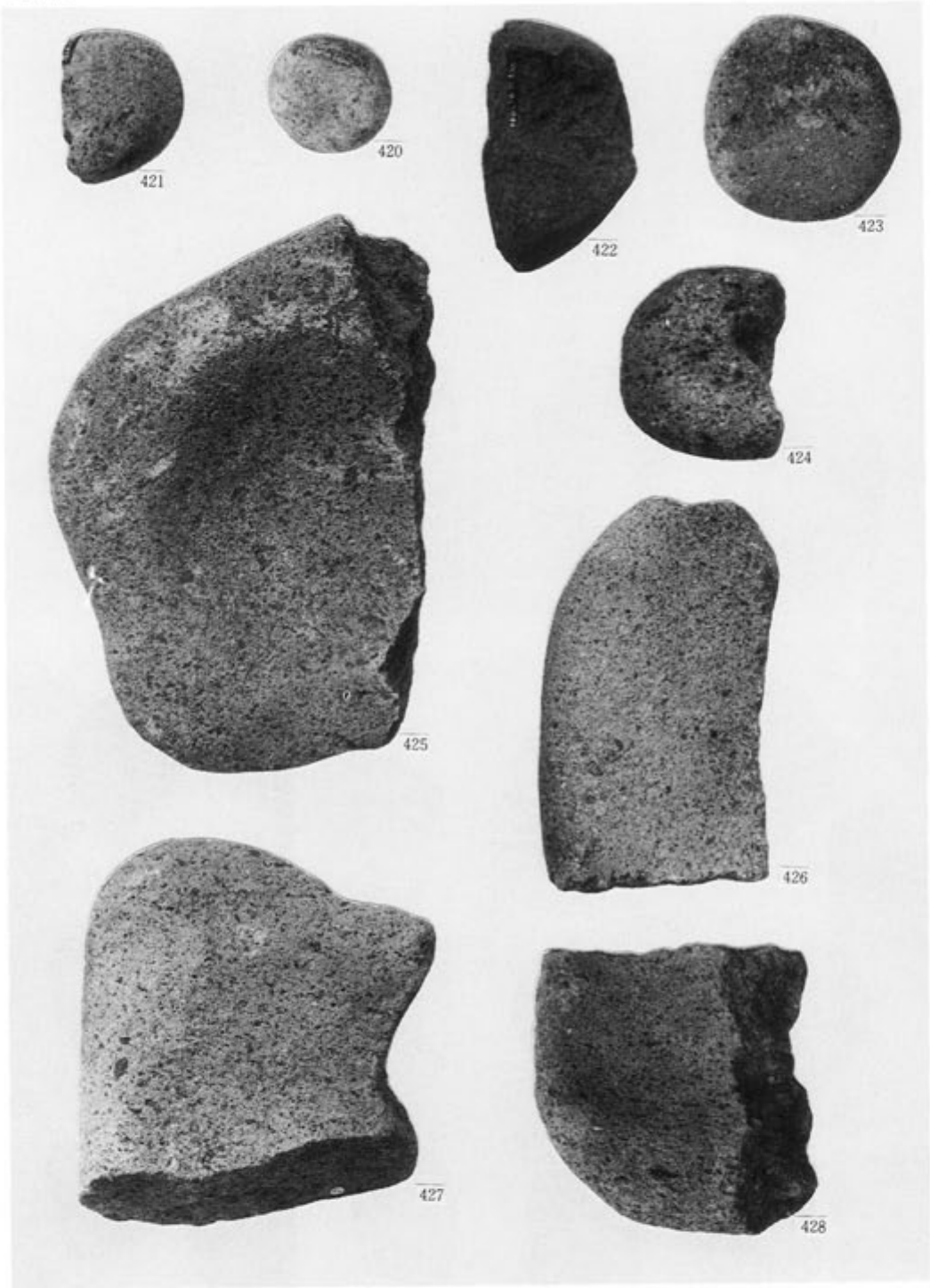
2．石器Ⅴ（390～399）


400
401
402
403
404
405
406
407


408
409
410
411
412
413
415
414
418
417
416
419

1．石器Ⅴ（400～419）

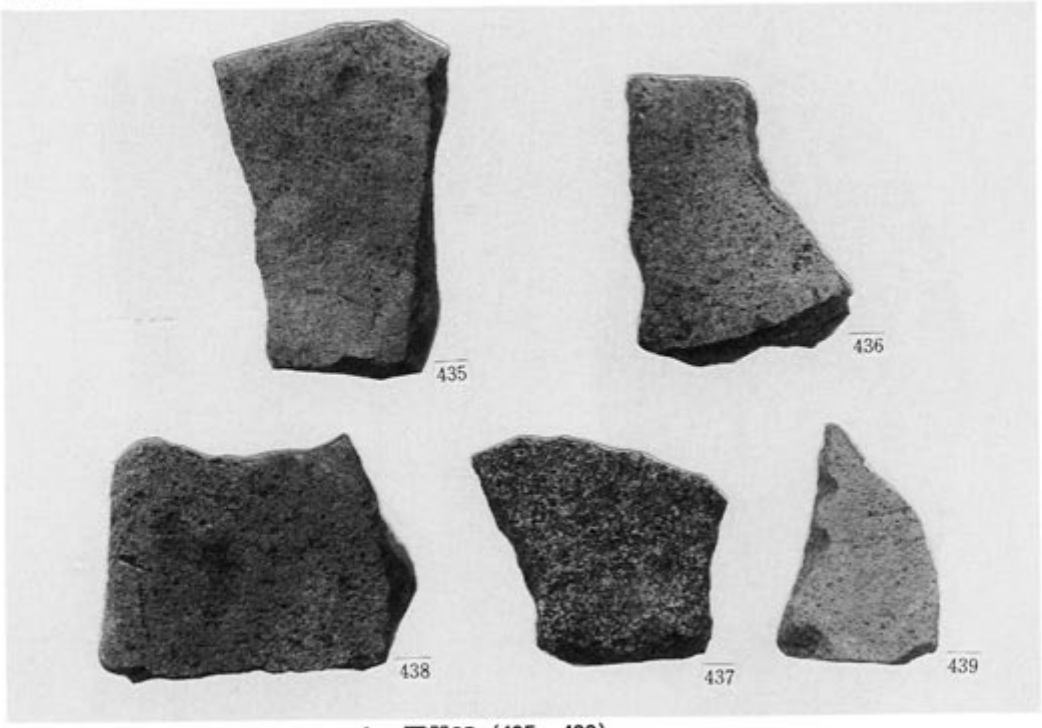
図版30



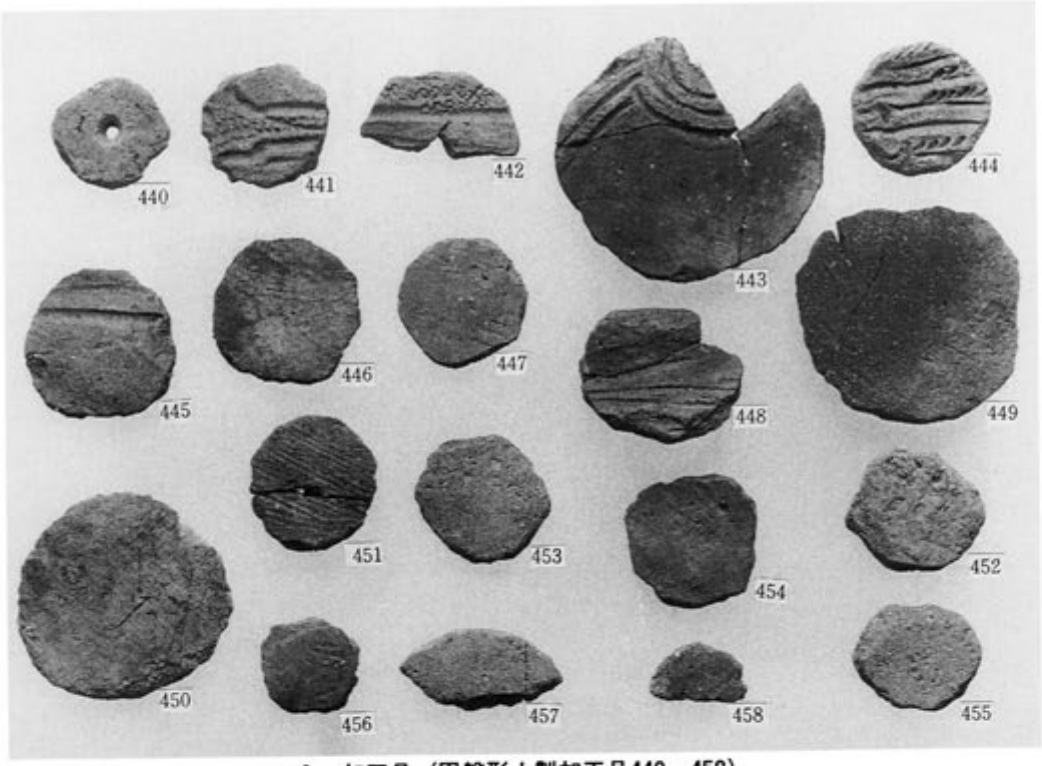
1．石器Ⅴ（420～424）　　2．石器Ⅵ（425～428）

1．石器Ⅵ（429～432）

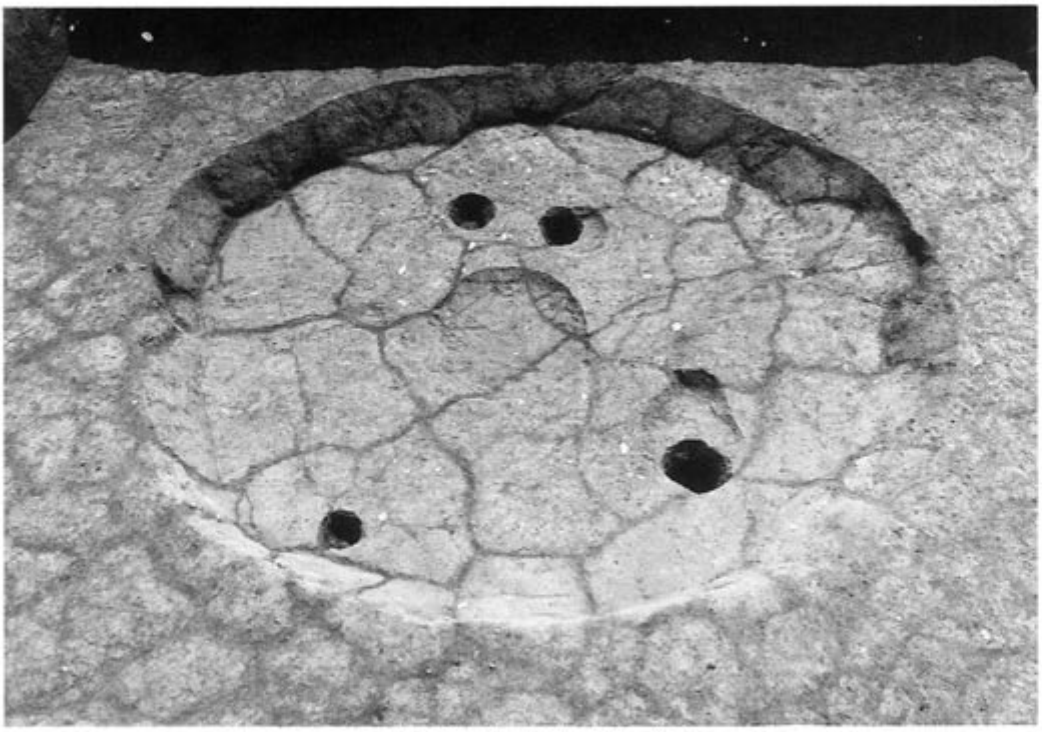
図版32



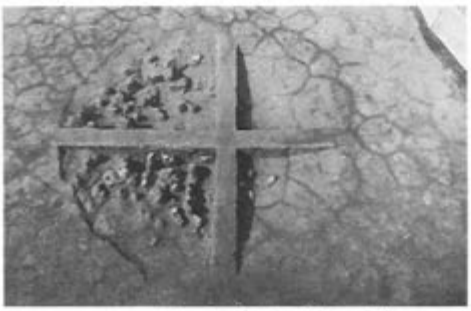
1．石器Ⅵ（435～439）



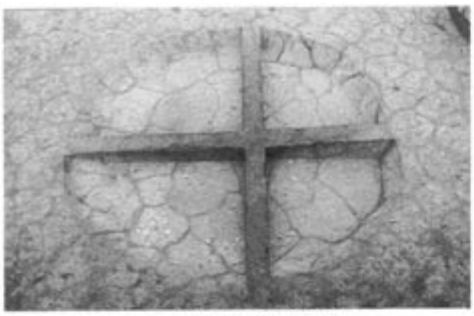
2．加工品（円盤形土製加工品440～458）



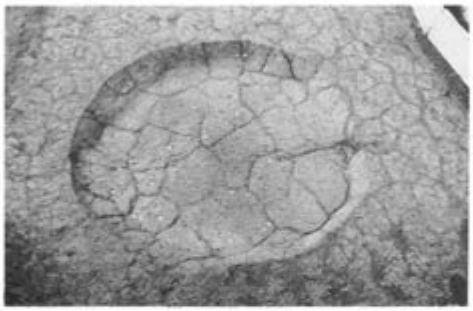
1．住居址1号（縄文時代）全景



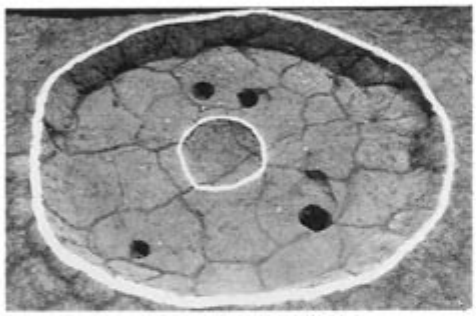
2．遺物出土状況（南から）



3．住居址埋土状況

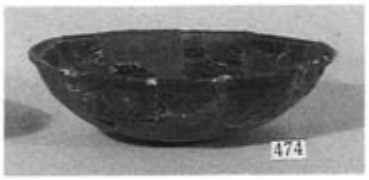


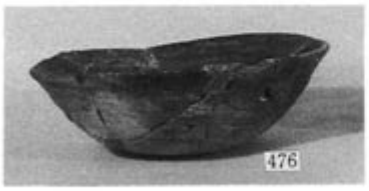
4．床面検出状況

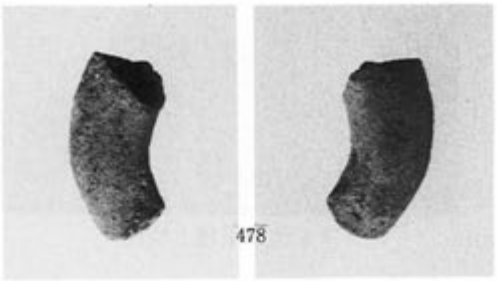


5．住居址掘り上げ状況

図版34



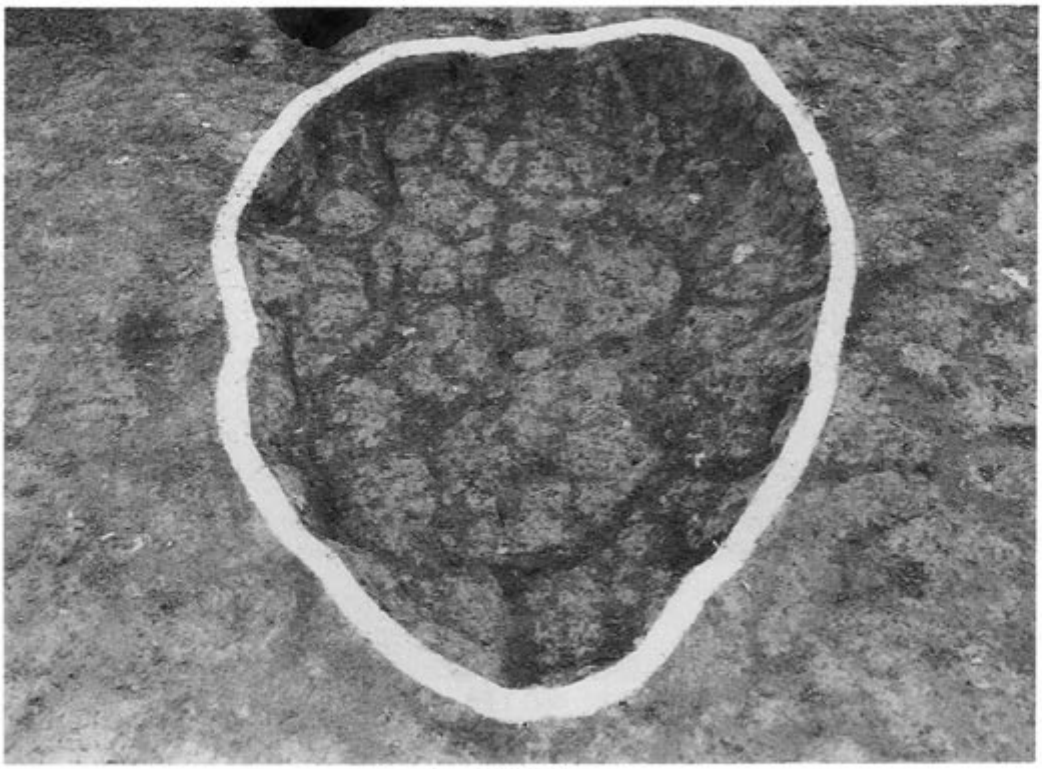




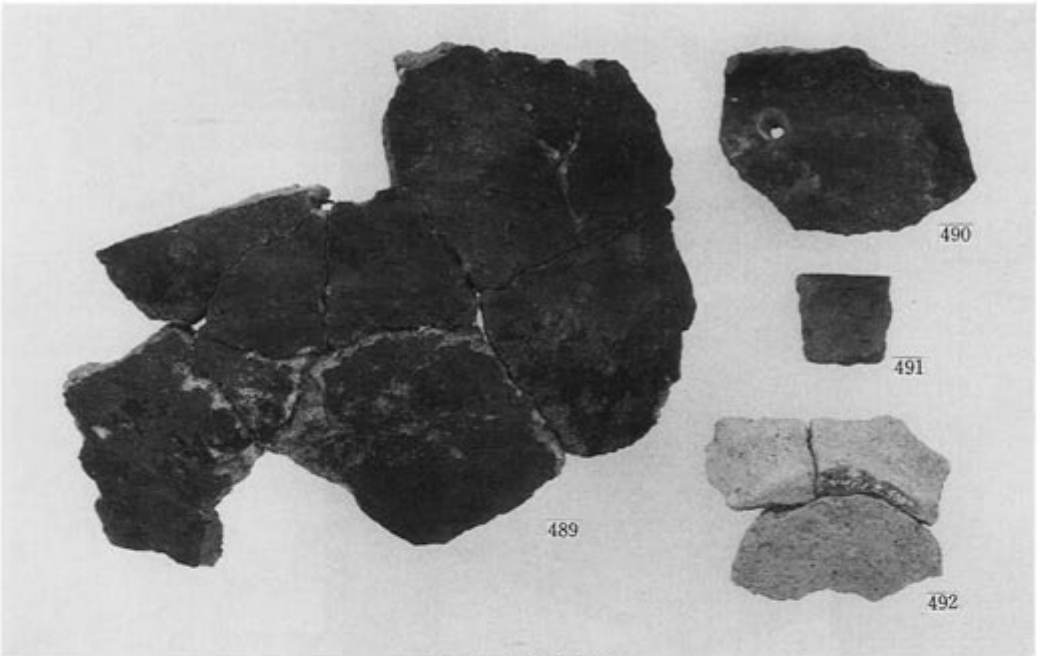
土製品出土状況

土器出土状況

1．住居址1号出土遺物



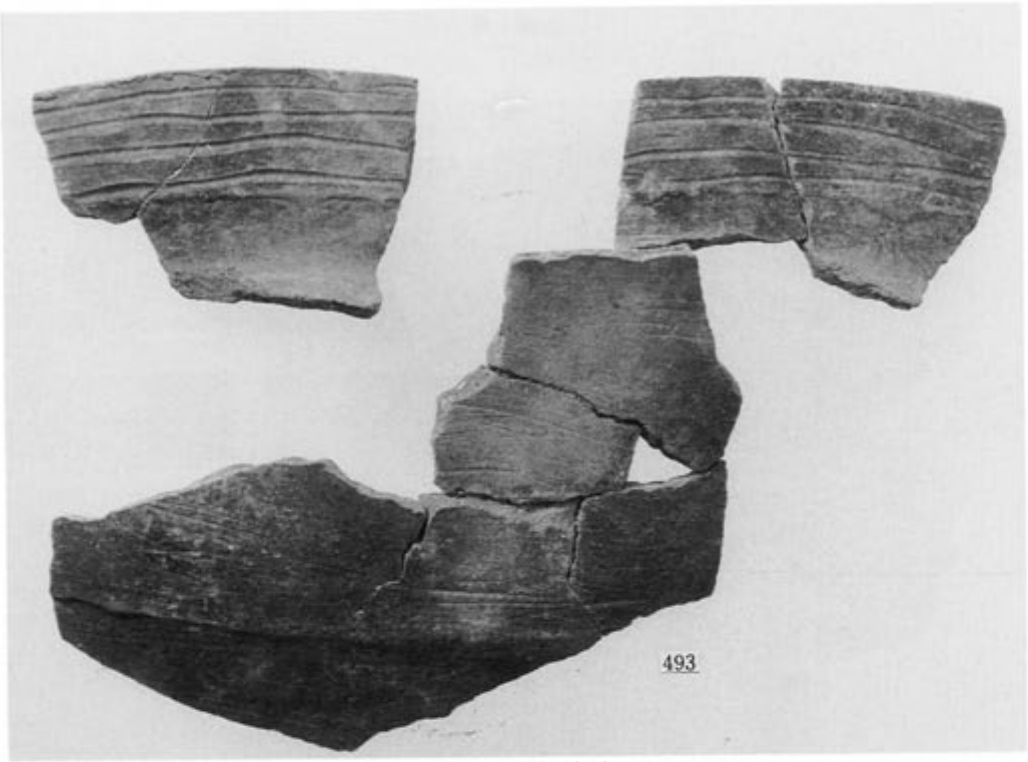
1．土壙1号



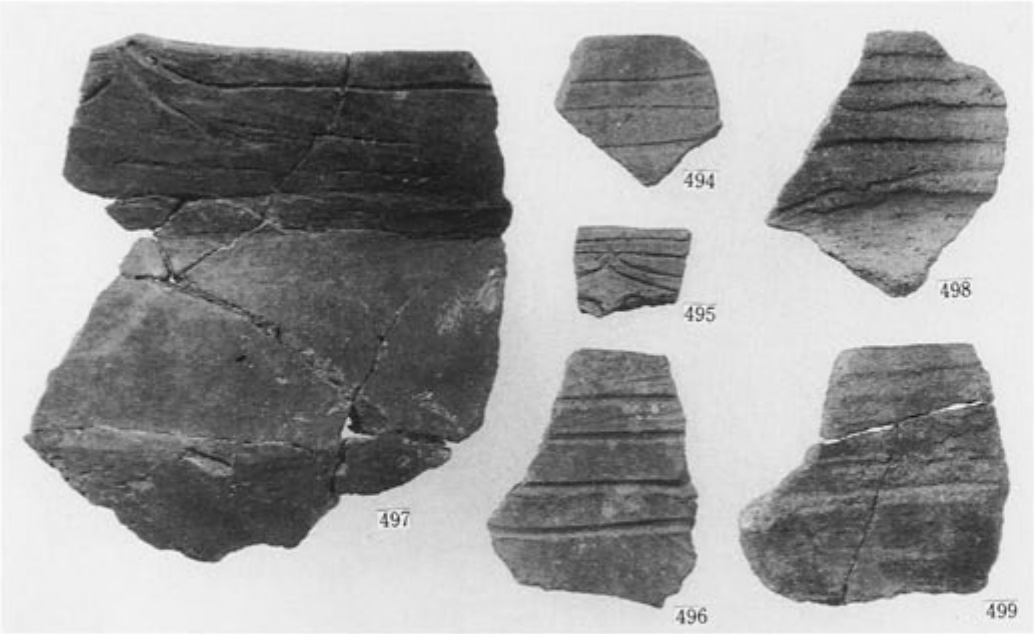
2．土壙1号出土遺物

図版36

1．集石3号

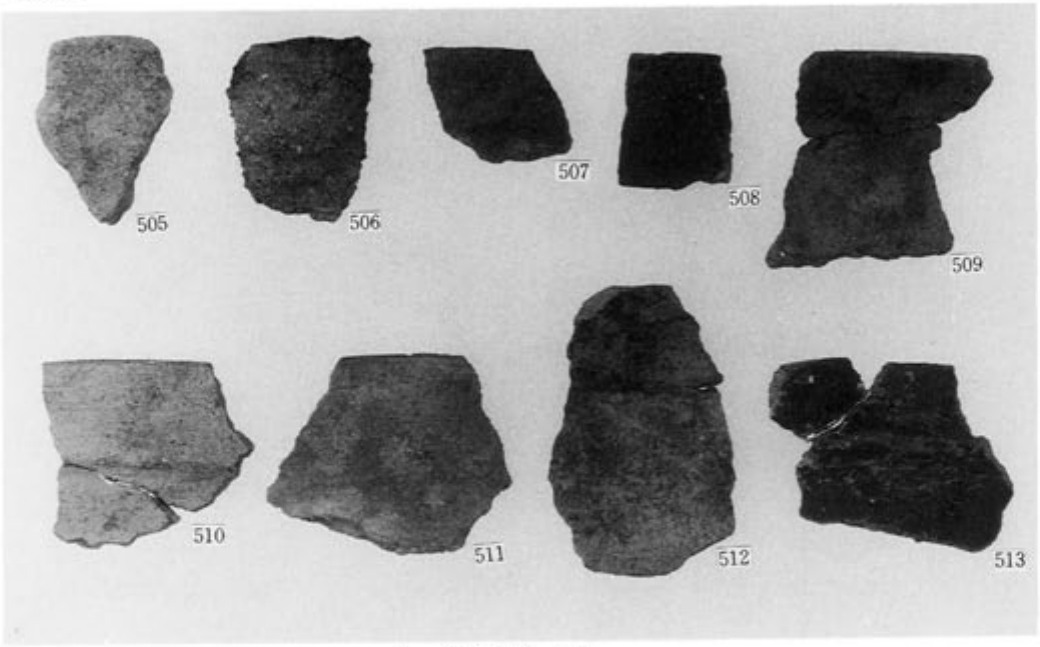


2．縄文土器（1）

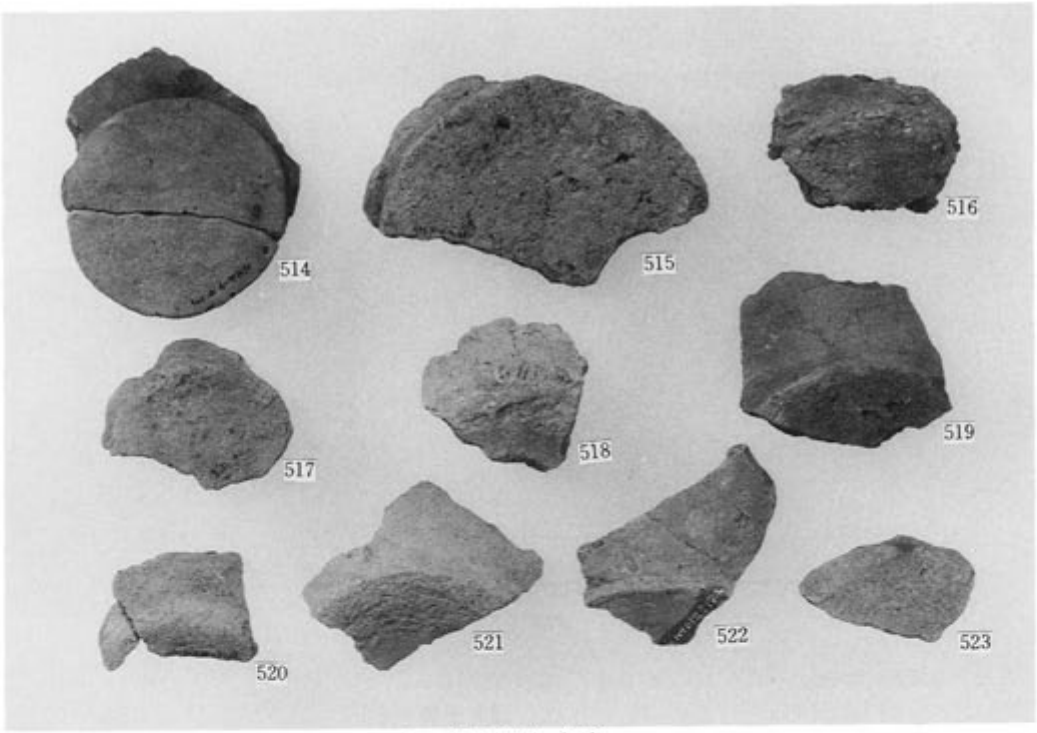


1．縄文土器（2）

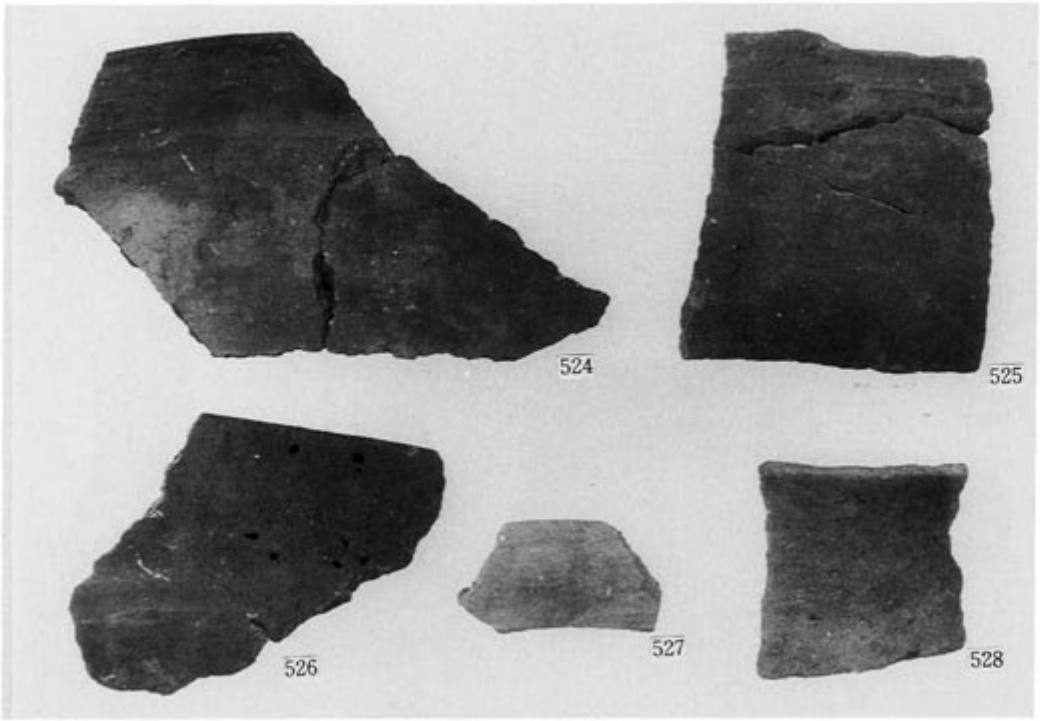
2．縄文土器（3）



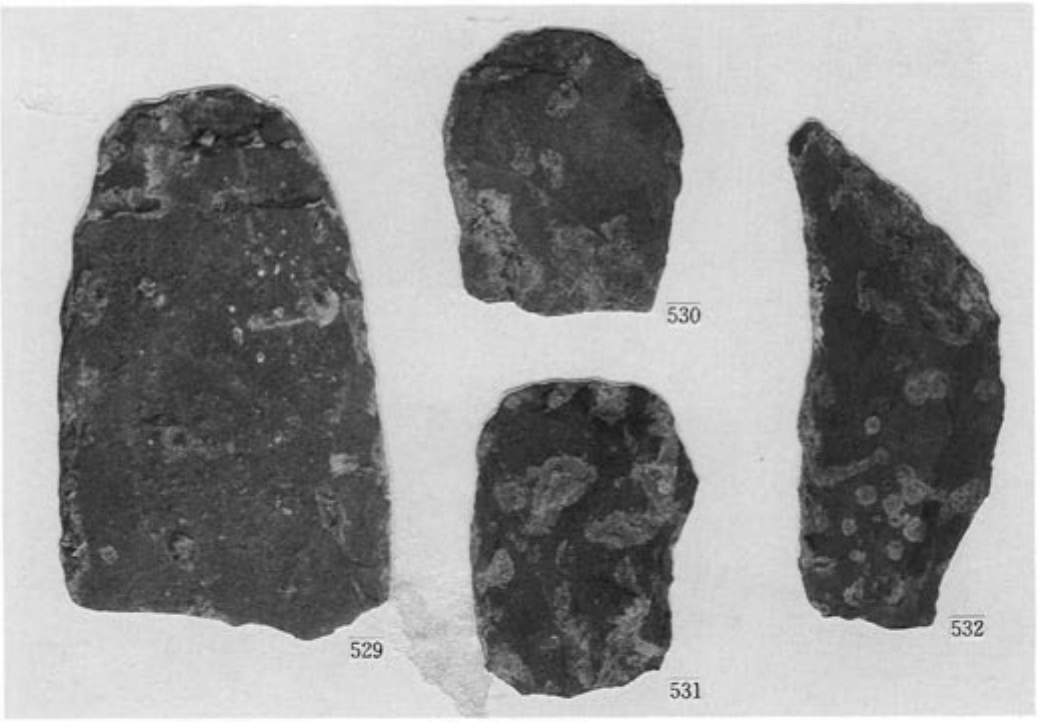
1．縄文土器（4）



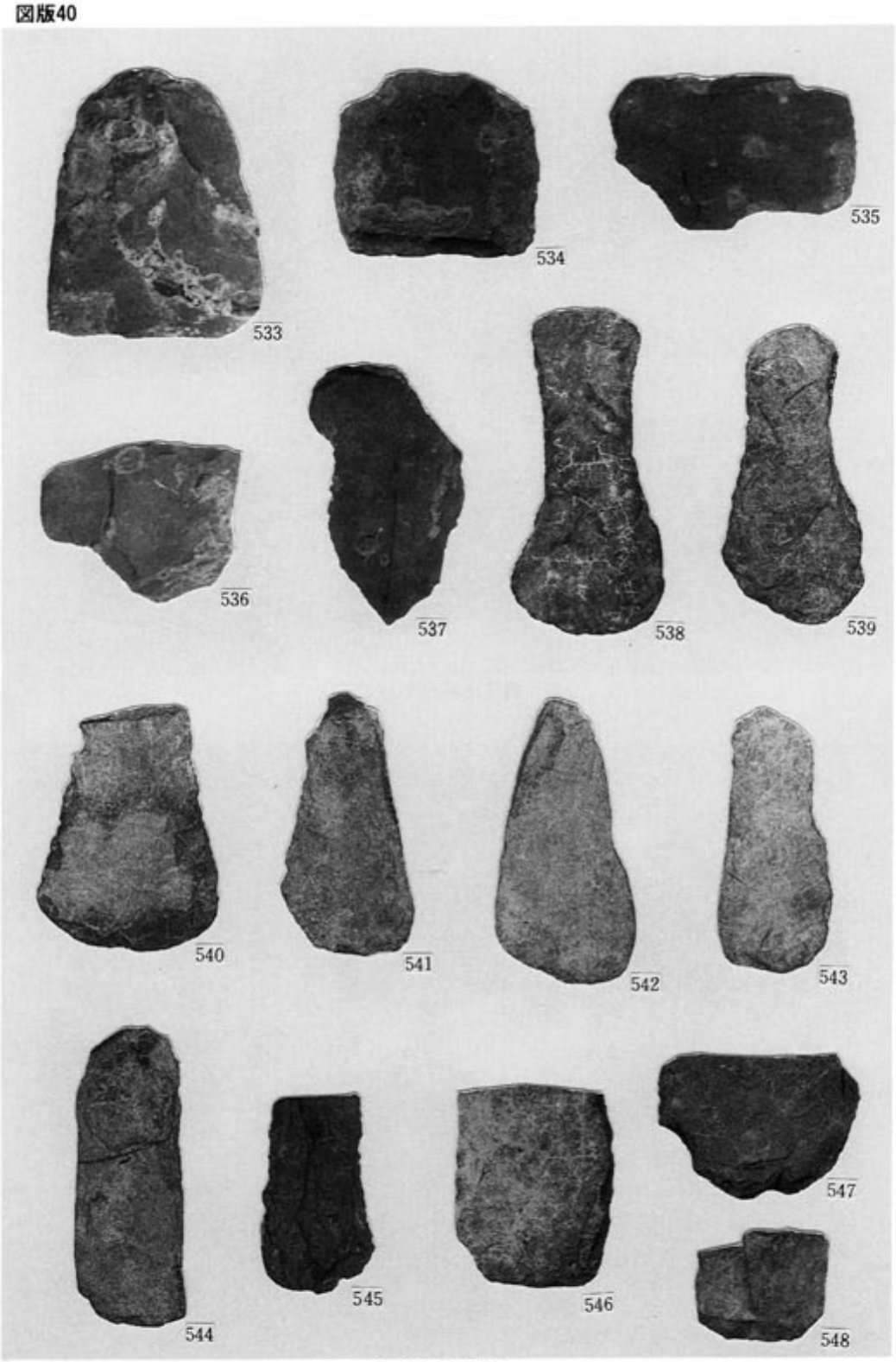
2．縄文土器（5）



1．縄文土器（6）



2．石器（1）



1．石器（2）

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48)

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書(Ⅱ)

概　　要　　編

榎　田　下　遺　跡

中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡

中　ノ　原　遺　跡(Ⅰ)

発行日　平成元年3月

発　行　鹿児島県教育委員会　〒892 鹿児島市山下町14番50号

印刷所　中央印刷株式会社　〒892 鹿児島市春日町12番16号